第三種郵便物認可

女學世界

第三巻第十六號

歐洲女子教育概觀
婦人の究極目的
婦女雜觀
貴婦人の嗜好
婦人の生理的機關
勞力に堪ゆる獻立
家庭夜話
老後の心得
婦人と實務の才
家政学の活用
米國大統領の幼時
上代の詩美人
倫理衛生食物談
家庭科學動物談
支那の婚禮
冬の衛生




地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覧被下候樣奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目

女學世界 第三巻第拾六號 目次

[illegible]



[illegible]

[illegible]

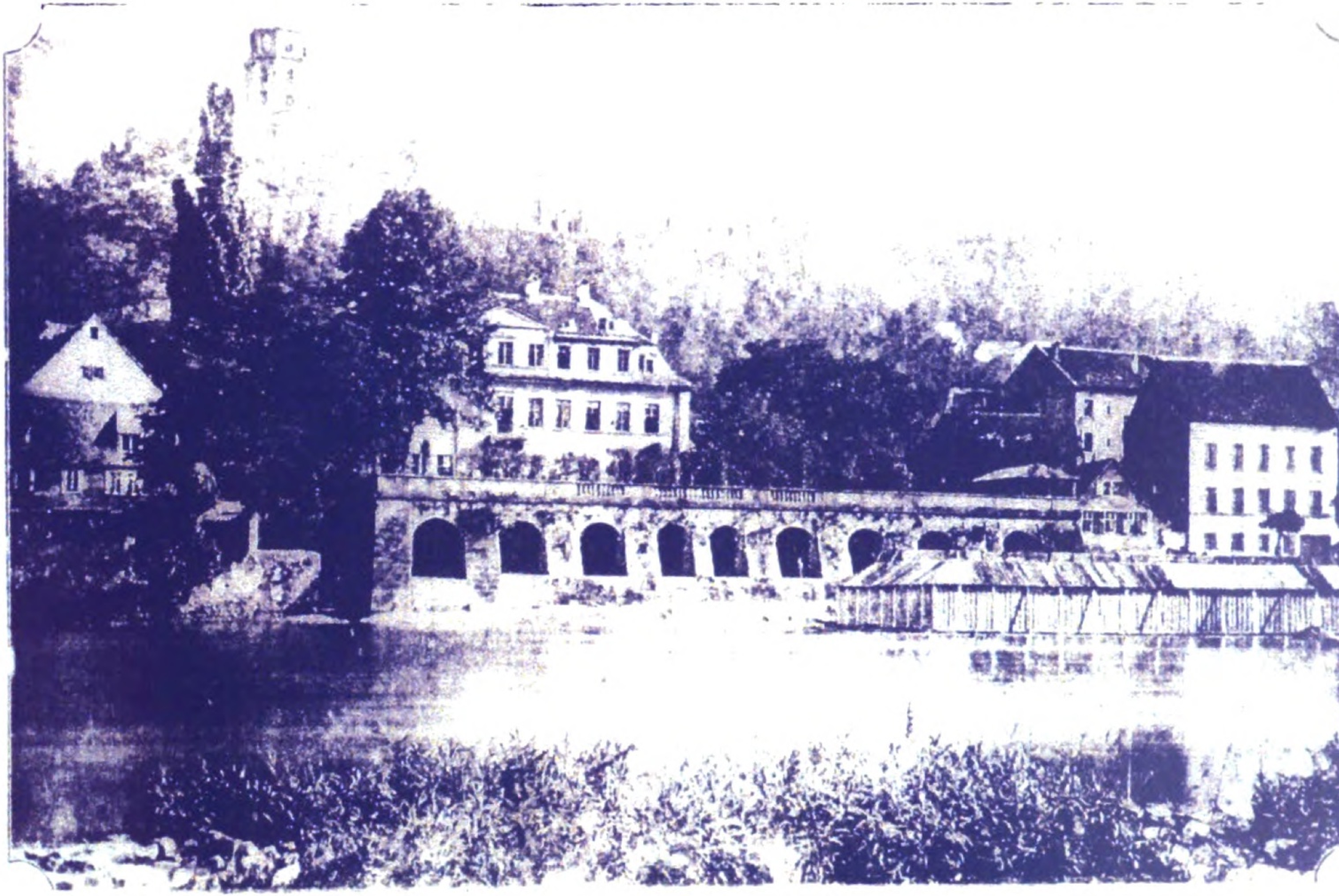


關谷十郎氏寫

[illegible]の冬

[illegible]

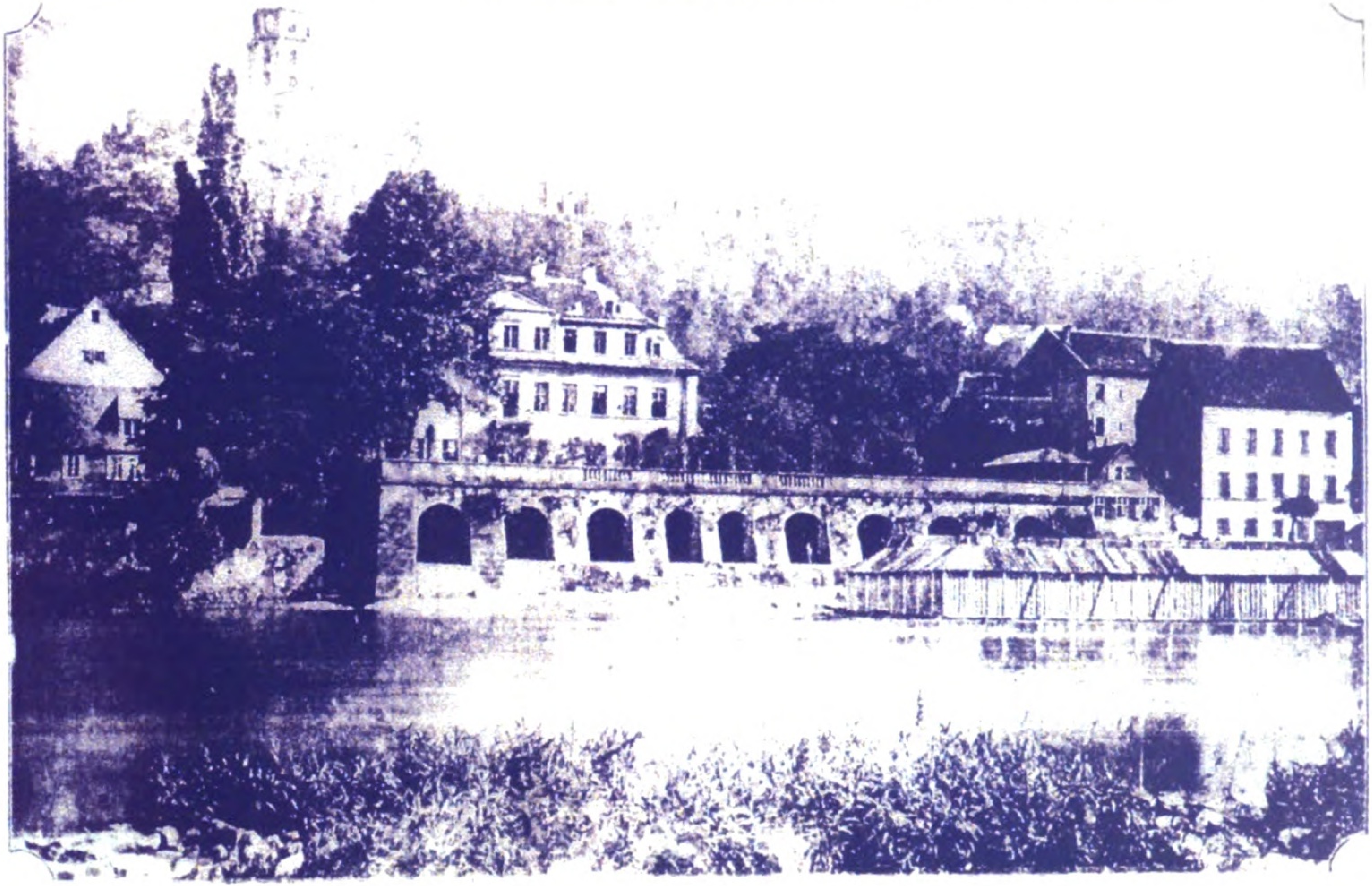
獨逸風物





岡谷十郎氏寫

歐洲風物



聖母マリア



ラフアエル畫伯筆

少年讀み物

理學博士石川千代松先生閲
少年世界主筆巖谷小波先生序
武田櫻桃君 木村小舟君 合著

少年動物畫談

十二月下旬發行
全一冊菊版約百
六十項極彩色石
版口繪挿入精密
標本畫三十六枚
定價郵稅未定

哺乳動物は固より昆蟲社會に至る迄平易簡單に説明し家庭に於ける幼少年諸君が動物研究の一助たらしめる目的で編んだのがこの書でありますす著者は永年少年文學に從事して此種の著作は手に入つて居るのですから其筆緻がよく幼少年諸君に理會し易きは固より學理に編せず高尚に流れず娛樂談笑の間知らず〳〵智識を得らるゝ樣に出來て居ますから大方の幼少年諸君お正月の讀物としてこれに越すものはありませんしまたお父樣やお兄樣には此書をお年玉につかつて戴きたいのです

川村守義君著 通俗動物學
全壹冊洋裝紙數三百頁
賣價二十錢郵稅八錢

永島辰五郎君著 通俗昆蟲學
全壹冊洋裝紙數三百頁
正價金三十錢郵稅八錢

寺崎留吉君著 新撰動植物學問答
全壹冊洋裝紙皮袖珍本
正價金二十錢郵稅四錢

(甲の一)

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

總裁 小松宮頼子殿下　副總裁 鍋島侯爵夫人

大日本女學會

新學期を開き會員を募る淑女たちとく入會あれかし

◎本會は女子教育の普及發達を圖らん爲に女子必須の諸學科を掲けたる女學の講義録を發行し種々の事情の爲に女學校に入學する事能はざる女子をして父母の許を離れず居ながらに通信教授に依て修養を積ましめ一般女子の地位を高めん事を目的とす

◎本會發行の女學講義は畏くも　皇后宮の御覧を辱うし殊に御歌下賜の光榮を擔ふ

◎本會は第一流の名家をすぐりて諸學科の擔任を囑托せり去れば其講義の有益多趣なる事已に世の定評ある所にて明治廿八年創立以來二萬五千人の講習修了者を出せり

◎本會講義録は女子素養の程度に應せんため高等と簡易との兩科に分つ月謝は簡易科金二十錢高等科金四十錢とし入會の節束脩（簡易二十錢高等四十錢）を要す束脩と月謝とを送附あれは假入會を許し直に送本すべし

◎簡易科女學講義は十一月五日に高等科女學講義は同廿五日に發行せり詳細なる會則はハガキにて請求あれ直に進呈すべし

東京市麹町區下二番町卅七番地　（電話番町千三百三十番）

大日本女學會

メエリー・エムウヰルソン女史
大町松波女史合著

三版

洋食のおけいこ

全一冊 石版刷表紙頗美本挿繪十五個 定價金廿四錢 郵税金四錢

毎日喰るものを餘分な費えをせないで甘く拵らえるのが料理をなさる方のお骨折です西洋料理の法も一家の婦人方わドウシテモ心得て居なくてわなりません此書わ餘計な費ゐをかけないて毎日の惣菜にもなる様にごく解り安く總振かなつきで又繪も澤山に入れてわりますし其に食方や御客に出し方等も書て有升から小供にもヨーク解り升西洋料理と申しても種が牛肉や豚肉にかぎりたる譯でもなし道具も可成有合で間に合せる様にしてわりますからどんな田舍に居てもわけなく出來ます何わ兎に角此様にやさしい書わこれが初めてゝ外にわわりません甘いものを安く拵らえて内の方々を喜ばせるのわ何よりの御樂みだろをと思います

●第一版の三千冊わ一週間で賣切になりましたが再版が出來ましたから御注文を願升

東京神田區小川町（電本三一五七） 寶永館
東京神田區裏神保町（電本一〇三六） 冨山房
大坂區南塩町通三丁目（電東三五九九） 修文館

臟器療法

動物性藥最新療法

神經衰弱 生殖器障害
肺病 老衰、貧血、一般衰弱諸症

本院 東京小石川區原町百廿五 植物園裏診察正午ゟ三時
分院 本郷區金助町（青木座側）診察午前八時より正午迄

（入院隨時）

狩野病院
電話番町六七二

專賣特許



安全剃剪

定價
甲 壹圓五拾錢 替及付箱納
乙 壹圓 紙函納
丙 七拾五錢

最新發明ノ特許品
柄ノ先ニ車トチヂ
アリ自在ニ回轉ス
耳鼻穴ノ他ニ思通
ニ剃レ小兒ノ頭チ
剃ルニハ至極妙陸海陸人海外移住者並ニ旅行ニハ是非必要品ナリ

發賣元 東京日本橋區本石町一丁目廿六番地 三剣商店

肺病

千葉縣安房國北條町

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券封入にて御照會あれ

川名助次郎

（甲の三）

醫學士 近藤常次郎先生著 （近刊）

續仰臥三年

一名 **養病讀本**

本書は近藤先生仰臥三年の續編にして、一名養病讀本と稱す、蓋し本書は二卷五章より成り而して養病大意一章は本書の原理論にして、病牀隨筆、俳句記鈔、枕頭玩占の三章は合して之れが方法編を成し、仰臥禪話一章は先生の經驗談なり、是れ首章と相照應して一理を構成す、寔に文拊新奇の佳編にして讀者の是非購讀せられざるべからさる珍冊なり、前著仰臥三年は出版早々讀書界の歎賞を博し版を重ぬる數次、今亦此編成らんとす、讀者一鞭を後れされ

全壹冊洋裝
菊判紙數約
二百有餘頁
正價郵稅未定

目次概要

第一卷

第壹章 養病大意

●緒論●養病の本義●智識概論●人の一生●確實なる人生觀●人生の缺陷●生死の問題●健病の二境●病的生活の要領●功名榮達の眞相●病の福音●病的生活の時期及方法●運命觀●結論

第貳章 病体隨筆

●理と實●善と惡●余が今日此頃●禪友に答ふ●運命と開悟●吾が病生涯の事を記す●學者の病を論す●病牀八景●嚴頭の感を讀む●大悟徹底●嬰濱君に答ふ●夏の病牀●夢の治療的作用●問疾の心得●諦めと慰め●看病の大要●病牀蒙求●批評の答禮……

第參章 俳句記鈔

●俳句五十餘首並ニ序

第四章 枕頭玩占

●某君の病を占ふ●紅葉山人に與ふる書●河西君を送る序●文學占話●附錄筮占批評

第二卷

第五章 仰臥禪話

第一回病氣に對する失敗並に急痴の事●第二回尿閉症發現の事●第三回病苦に對する精神上の變化の事●第四回死を諦め並に恩愛を絕つ事●第五回名譽心の斷念し難き事●第六回悟道徹底の事●第七回養病十書の事……

（甲の四）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

泰西風俗



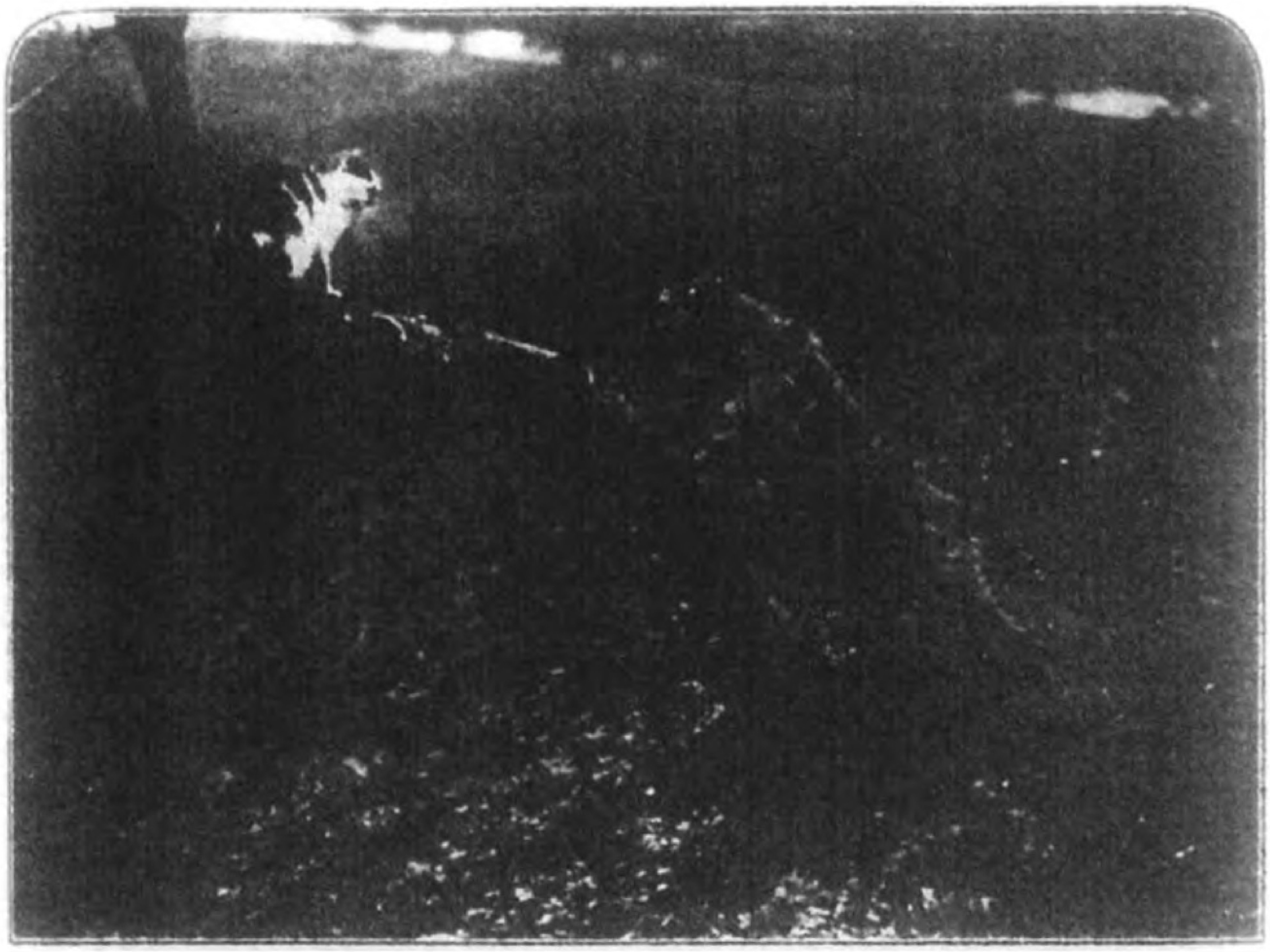
埃及の少女

大原の秋色



原在泉氏筆

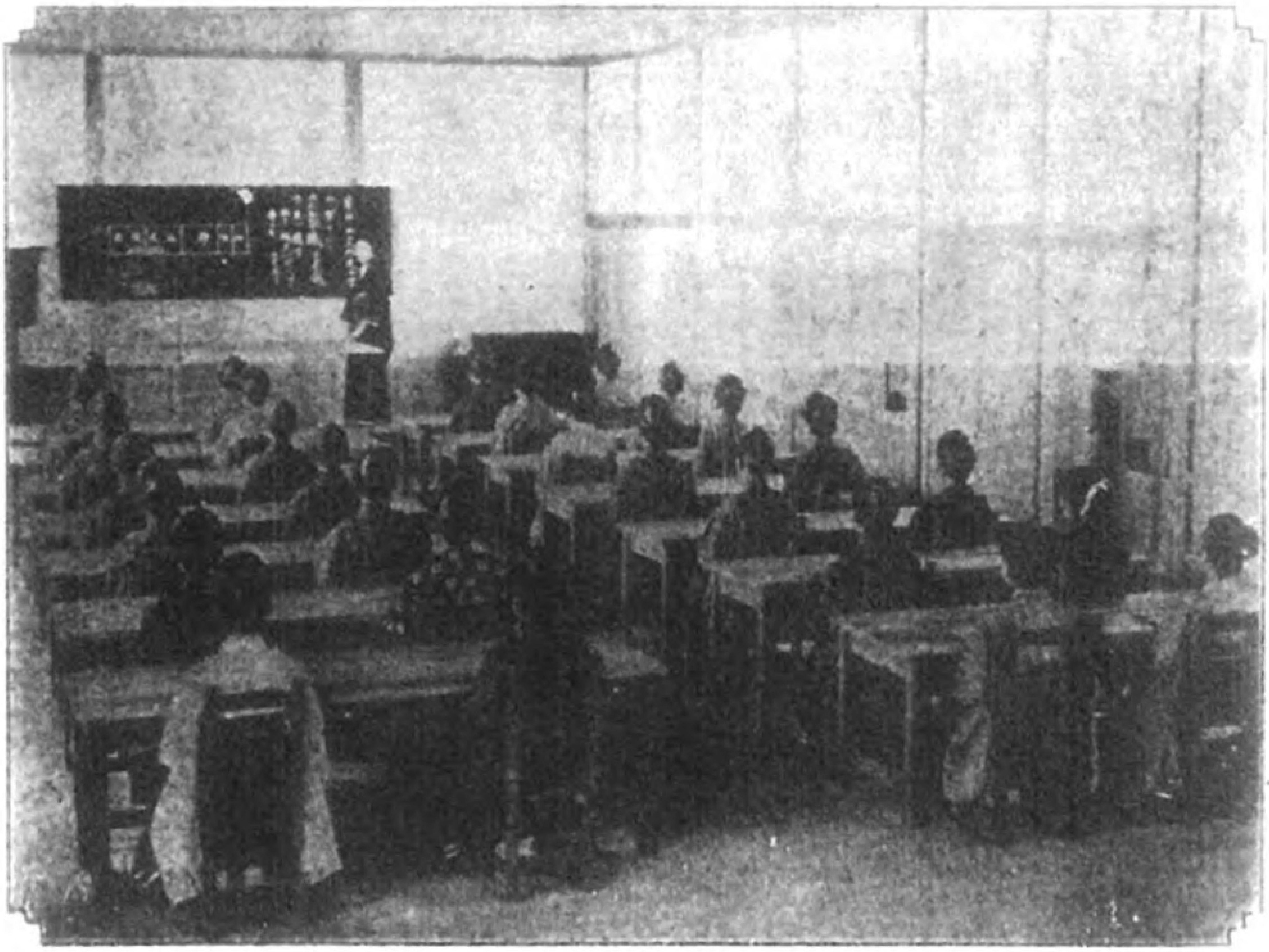
犬と猫





家鴨

裁縫教室（奈良縣女子手藝學校）





臺灣の女生徒（宜蘭公學校）

靈界の新光明

鐵禪日敎師著

（近日刊行）

活ける法華經

全壹册菊判　洋裝紙數二百五十餘頁　正價郵税未定

人間問題の解決、宇宙問題の解決、宗教問題の解決は刻下思想界の求需せる所にして、之が供給に出てたる新著近來尠からずと雖、多くは皆龍を畫て睛を點せさるの憾みなくんはあらず

著者茲に慨するあり、貳拾年來研鑽の結果、獨得造詣の意見を發表し、如上の問題を決するや快刀亂麻を斷つが如し、佛陀再び世に出つるも、復一語を加ふる所なからんか

特に其論斷の明快にして、筆法の靈活なる、縱横自在天馬空を驅り蛟龍浪を蹴るの概あり、眞に是れ近來稀有の快文字、思想界の太陽なり、既刊の論者恐らく顔色なからん

既刊類書

姉崎文學博士著　●宗教哲學　上製五十錢　郵税十錢　並製卅五錢　郵税八錢

無明居士著　●大日本教　全壹册洋裝中判　正價金卅錢　郵税六錢

釋雲照律師述　●佛教大原理　全壹册洋裝中判　正價金十錢　郵税金二錢

（乙の一）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（乙の二）

大阪高等醫學校長
兼同病院長醫學博士 佐多愛彥序

小兒養育の心得

大阪高等醫學校病院
小兒科在勤兒科專門 長濱宗佶著

全一冊 總クロース製本頗美麗
正價金五十錢郵稅金六錢
郵券代用一割增

本書は著者が多年の經驗により育兒上必要なる箇條を通俗的に記述したるものにして小兒を養育せらる丶父母の座右には缺くべからざる良書なり

本書は歲末の贈り物として尤も適當なるものなり
本書は結婚の祝物として尤も適當なるものなり
本書は出產の祝物として尤も適當なるものなり
本書は進物として尤も適當なるものなり

發賣所 東京日本橋區通三丁目 丸善株式會社
大阪東區博勞町四丁目 丸善株式會社支店
◎賣捌 全國有名書肆

新按

明治三十七年

女學日記

本書は特に女學生の爲め編纂したる者にして古今東西の婦人に關する金言俚諺和歌等を日々の紙欄に掲上し且つ日曜日の欄には特に英和對譯の一項を挿入したれば日々の出來事を記錄すると同時に知らず識らず古今の聖賢學者哲人等の名言と詩文とを諳誦し其の學識を深くし品性を高うするを得べし又卷頭には女子職業案內學校案內其他種々の事項を載せ毎月の初めには大祭祝日の唱歌古賢の訓戒及び四季折々の遊樂料理等を明細に記しあるを以て學校にあると家庭にあるとを問はず女學生は勿論一般婦人の必ず座右を放すべからざる良日記り

菊袖珍製本頗優美

上製 總クロース金文字模樣入 定價卅錢 郵稅四錢

並製 背クロース厚表紙石版刷 定價二十錢 郵稅四錢

東京市京橋區築地二丁目

株式會社 國光社 發行

全國到る所書店にあり

（乙の三）

新刊豫告

在東京高等師範學校重田勘次郎君編

世界風俗志

（近刊）

全壹册洋裝中判上製頗美本
各國風景風俗及地圖等挿入
正價郵稅未定

世界各國家間の交通は日に月に頻繁を加へ之に伴ふ經濟關係社交關係は自然に相互の人情風俗を知悉するの要あり然るに現在に於ける此等の研究は未た一般の必要とならさる爲め兎角偏見の憾あるは夙に識者の慨嘆する所なりき著者茲に見る所あり廣く群籍に渉獵し旅行家の實話に徴し世界各國の地勢氣候人種言語は素より社會の狀態敎化の程度一般の慣習等精を盡し細に亘りて詳述したれば其的確にして研究家に大なる貢献を爲せるは云ふ迄もなく其他實業家と雖も一讀して其稗益鮮少ならさるなり

書類

中野文學士著●東洋西洋教育史（全壹册） 上製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢

坂本文學士著●日本風俗史（全壹册） 上製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢

森山法學士著●政治史（全壹册） 上製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢

三浦文學士著●日本法制史（全壹册） 上製五十選 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢

加藤文學士著●世界宗教史（全壹册） 上製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢

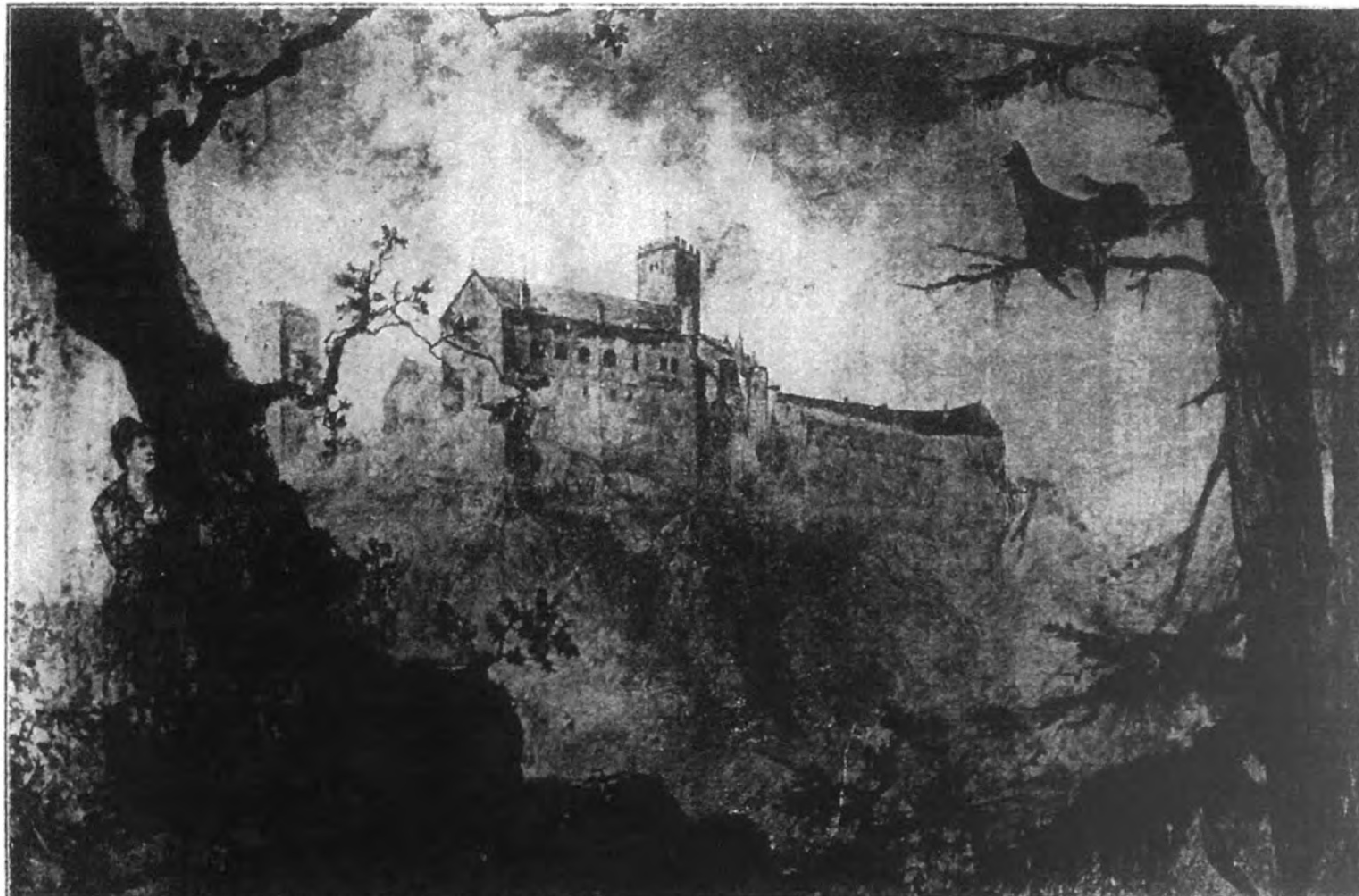
發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（乙〇四）



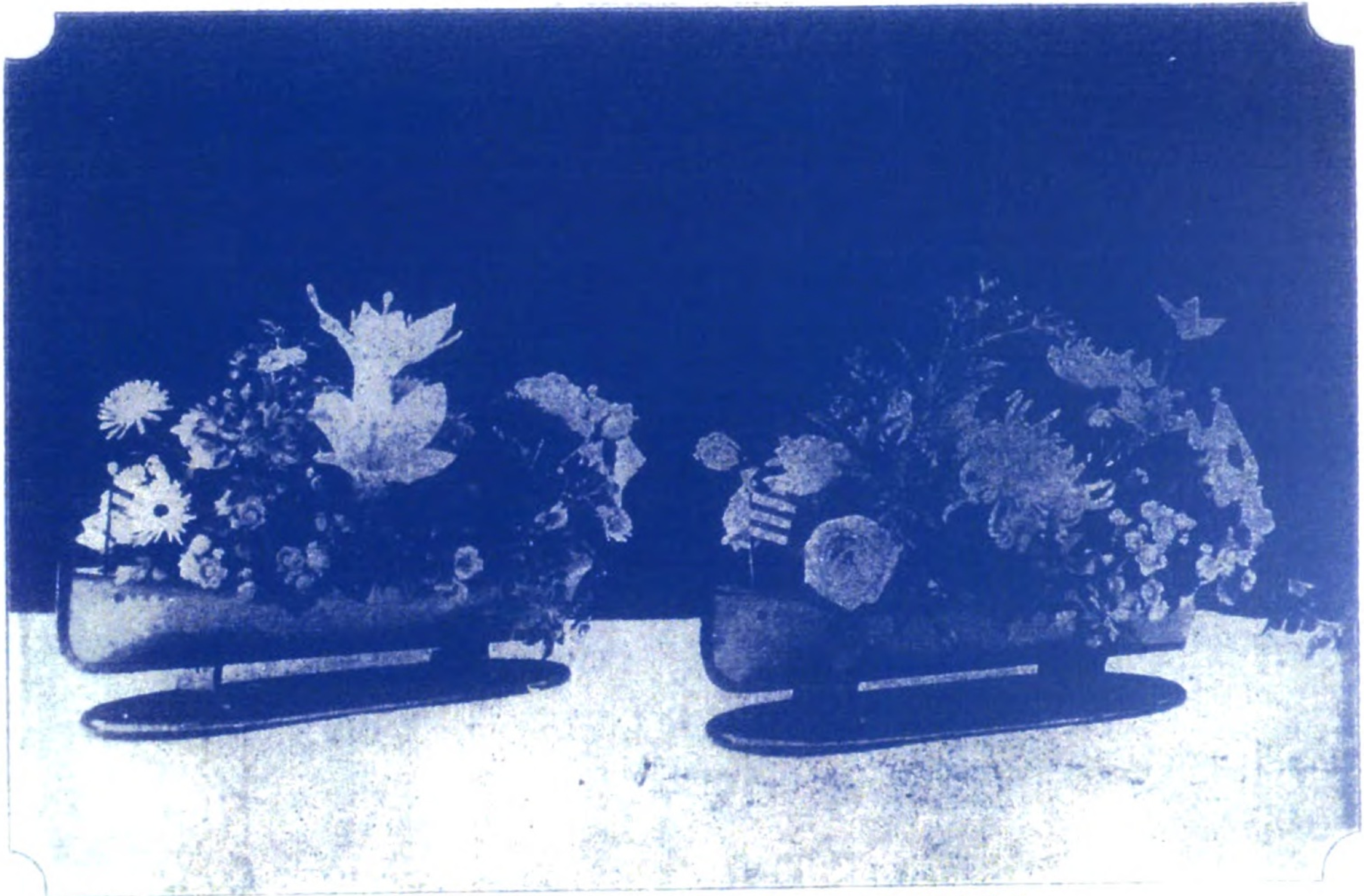
演者　伊集院夫人繁子

大　葉　子　（癸卯園遊會活人畫）



冬枯

造花



日本郵船會社より兩内親王殿下へ献納の造花



横濱フェリス女學校生徒

石橋思案外史序　加野孤雁編

新案 福引種本

附錄……一トロ噺

▲全壹冊　洋裝意匠最新優美

▲正價　金拾八錢　郵稅四錢

▲前號豫告中正價十五錢とせしは今般訂正す☞

サア／＼笑ふ門には福が來る、福引種本の新版が、いよ／＼來る十一月の中旬から出版になります。これは今までの世間にありふれたものとは事かはり、編者が苦心に苦心を重ねて、その材料を百人首やら發句やら、地理やら歷史やら、みんなお爲になるものばかりから取り集めましたので、どこまでも上品なのは申すまでもなく、天下此上なしに面白くつて、可笑くつて、そして附錄のおまけに、珍無類輕口の短編落語が數十種添へてありますから讀んで罪がなく、買つて損のないこと受合、胸が開けてお座興になつてそして値段が安いといふ三拍子揃つた上、製本までがヅツと凝つた當世流行のハイカラ式、歲暮の配物や新年のお年玉にはそれこそ持つてこいの珍本、品切れにならぬ内早く御買求めの程永當／＼、隅から隅までづらりづうと願ひあアげ奉りまアす!!!　評判

ー評判！

婦女寶典

刺繡術專門　磯村大次郎君著

實用刺繡術

（近日刊行）

全壹冊

洋裝總クロース切付
菊判美本本文四號字
挿圖數十個挿入
正價郵稅……未定

著者は從來斯術に於て經營慘憺幾多の經驗を積み現に百餘名の子弟を教導しつゝあるが故に初學者の短所何處に在るやに於て發明する所鮮なからずされは本書によりて刺繡術を修得せんとする人は其入門容易なること請合なり發行近きにあり江湖女子諸君是非購讀あれ

（丙の一）

日本千圓の

文藝倶樂部

（丙の二）

乍憚以社告奉申上候、滿天下の讀者皆々樣いよ〳〵御機嫌よく來ん初春を御迎ひ被遊候事と賀上候。偖當文藝倶樂部儀日に月に發賣部數を增加候事、全く皆々樣の御引立に依り候ものと、社中一同感謝の外は無之深く御禮申上候、御承知の如く今は早や一昔と相成候去る明治二十八年初號を擧げ候より、來る辰歲は正に十週年の紀念に相當致候まゝ、俗にも申す十年一日の如く讀者皆々樣の御最負御引立に對し、何か御禮の印として進呈致度種々考案致候末、左記の規定に從ひ候て、乍些少**金千圓**を讀者に進呈致候間、本誌の微志御諒知の上、尙永當々々御愛讀御評判の程、隅から隅までづらりづうッと奉願上候恐惶謹言

第壹條 先つ贈呈金總額千圓を左の十二等に分ち申候

第壹等	（一名）	金五百圓	（圖書の切符として）
第貳等	（一名）	金百圓	（仝上）
第參等	（一名）	金五拾圓	（仝上）
第四等	（一名）	金參拾圓	（仝上）
第五等	（一名）	金貳拾圓	（仝上）
第六等	（一名）	金拾五圓	（仝上）
第七等	（一名）	金拾圓	（仝上）
第八等	（一名）	金七圓	（仝上）

發兌元 東京市日本橋

福引未曾有

大福引規定

第九等（一名）金五圓（全上）

第拾等（一名）金參圓（全上）

第拾壹等（五十名）金貳圓宛（全上）

第拾貳等（百六十名）金壹圓宛（全上）

合計二百二十名に御座候

第二條 世間にては勸業債券を讀者に贈與し、何萬本にタッタ一本しか當らぬ割增金を麗々しく報告致候ものも有之哉に見受け候へ共、本誌はかゝる廻り諄き事は大禁物にて圖書切符として差上候ものなれば若し書籍御不用に御座候へば何時にても現金と引換へ申すべく候

第三條 福引券は明治卅七年一月一日發兌の第十卷第一號と同月十五日發兌の紀念出版定期增刊第十卷第二號『ひと昔』の二冊本文中に刷込み置き候

第四條 當籤番號發表は二月一日發兌の本誌上にて公告可致抽籤法は中止候までも無之、讀者代表者、賣捌店代表者諸氏立會の上、最も公平に、最も正確に執行可致候

第五條 分與式は春季皇靈祭三月廿一日の佳辰をトし擧行可致場所其他の詳細は逐次本誌上にて社告可致候

明治三十六年十一月 文藝俱樂部

（丙の三）

區本町三丁目 博文館

最も高評ある
最も正確なる
最も便利なる
最も經驗ある

卅七年 博文館 當用日記 懷中日記

發賣廣告（各種共製本既成）

明治三十七年 當用日記

◎紙數 中形大形共各五百五拾餘頁 小形五百卅餘頁

大形 菊判 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ◎正價金五拾錢 郵稅拾四錢

中形 四六判 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入） ◎正價金五拾錢 郵稅拾二錢

中形 四六判 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ◎正價金三拾五錢 郵稅拾錢

小形 菊判半截 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ◎正價金三拾錢 郵稅八錢

特色

用紙 何レモ海外製紙會社ヘ特ニ注文漉製セシ特別上等紙ヲ用ユ

印刷 秀英舍新規鑄造セシ活字ヲ以テ注意印刷ス頗ル鮮明ナリ

製本 弊館ガ特ニ歐洲ヨリ輸入セシ新機械ヲ以テ堅牢美麗ニ製本ス

趣向 （當用日記）日々欄ニハ過去同月日ノ重要歷史、七曜、支干等ヲ錄シ天氣、寒暖、受信、發信等ヲ記入スベキ欄ヲ設ケ、普通記入部ニハ細罫ヲ附シ秩序アル記錄タラシムルニ適セリ「附錄トシテハ紙數十二頁の補遺金錢出納

（丙の四）

明治三十七年 懷中日記

新形（卅七年創製）（舶來洋紙顛美本總クロース金文字入細長形携帶至便）●正價金貳拾錢 郵税四錢

上製（舶來洋紙顛美本總クロース金文字入紙數三百餘頁）●正價金拾八錢 郵税四錢

並製（舶來洋紙總クロース表紙金文字入紙數三百餘頁）●正價金拾貳錢 郵税四錢

體裁

表、收支一覽表、友人住所錄、最新重要統計及日常必須ノ諸規則ヲ網羅セリ

（懷中日記）毎月ノ初ニ當月ノ行事、食品月令、遊覽案内、陰暦氣節等ヲ掲ケ日々欄ニ過去同月日ノ歴史、七曜、干支、天氣、寒暖ヲ記スル等當用日記ノ如ク、卷末ニハ金錢出納錄アリ又日常有用ノ事項諸税則及最新重要ノ統計表ヲ附セリ

弊館出版の懷中當用日記の正確堅牢にして實用に適するは玆に喋々の要なし今回用紙印刷體裁製本に至るまで尚一層の改善を加へ殊に本年創製の新形懷中日記はポケット挿入に至極便利にて附錄には重要規則類あり又名刺代用の切取線付の白紙あり、又當用日記は舊に倍して一層優美に装釘し尚趣向の改良を加へて記入の便を計り小形外の四種には農學博士横井時敬君の農家年中行事及中央氣象臺技師和田雄治君の調査に成る全國氣候一斑を掲け尚は最新の統計及座右必需の重要諸規則は漏らさず收めて網羅せり之を舊年の日記に比すれば材料愈よ豊富記事愈よ精確にして江湖坊間の日記と同視すべからざるや論なし請ふ續々御愛購あらんことを

◉賣捌所は全國各地（書籍雜誌店及紙類文具店等）到る處にあり

◉取次望みの方は種類部數等御申込次第精々御便利に御相談可仕候

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

（丙の五）

此廣告は　帝國百

第百

文學士大町桂月先生著

日本文明史

（近刊）

全壹冊

上製　正價五拾五錢　郵稅拾錢

並製　正價四拾錢　郵稅八錢

帝國百科全書壹百卷、豫期の如く完成せり。是れ我が帝國出版界に於ては實に空前の大事業なりき。啻に卷帙の浩瀚なるが爲めにあらず其の內容に於ても然りとす。全編の著者は盡く當代第一流の博士學士、述作する所は皆專門の科目、政治、經濟、法律、文學、理學、工學、農學、林學に亘り、方今世界に於ける思想界と物質界とに於ける總ての最も進步發達せる理論と事實とを網羅す。大英國百科全書が世界に於て萬種の事物を最も完全に網羅せる圖書とせば、帝國百科全書は少くも日本帝國の「エンサイクロペヂヤ」なりと斷言するも誣へざるなり。而かも彼れは全部の價貳百圓許にして此れは全部壹百卷の價僅に貳拾八圓のみ。蓋し卷帙の浩瀚と內容の精選と、各學科の具備とに加へて其代價の比較的低廉なることに於て、古今無比なるべし。宜なり本書が嘖々たる世上の好評を博し每卷皆數版乃至十數版を重ぬることや。今や豫定の壹百卷を完成せりと雖、社會の進步は更に各學科の微細に入り、分類に加ふるに分類を以てし豫定の科目を以て社會の全事物を盡せりと言ふ能はざるに至りぬ。況や前に諸名流に囑托せる學科にして、其稿未だ成らず、既刊百卷の中に收むる能はざりしもの又少なきにあらず。此に於てか、更に進んで新に壹百卷を增刊し、尨大全部貳百卷以て能く二十世紀に於ける、宇宙間の森羅萬象は、盡く網羅して遺憾なからんことを期す。是れ恰かも大英國百科全書が最近に第十版を追加したると同しきなり。幸に既刊の本書を愛讀せられたる大方諸彥は更に今後增刊の本書をも併せ藏して、完全なる眞價を賞鑑し給はんことを切に祈る所なり

（丙の六）

發兌元　東京日本橋區

科全書

必ず讀め

壹編

史眼炬の如く才筆縱横吾國三千年史の人文發達の跡を尋ね來りて之を掌上に指すが如し文學や美術や宗教や道德や工藝や風俗や物質的なると精神的なるとに拘らず我國の文明の由來及び發達はすべて紙表に躍動す普通の政治史以外稀に見るの好著述なり

帝國百科全書は卅一年一月第一編を刊行せし以來茲に六星霜を經所期の壹百卷を完成致し候得共前陳の理由に依り更に進んで尚壹百卷を續行し全部貳百卷となし宇宙百般の事物を網羅して前古未曾有の大成を期し申候
本書の發行は廣く世の裨益に供するの目的に相起り候へば從來無比の低廉なる價格（並製參拾五錢特製五拾錢）を以て需用に應し候得共逐年物價騰貴の一方に傾き之を六年前の創刊當時に比すれば紙價其他の工費非常に相嵩み一兩年來不尠缺損を生し尚依然現價維持致し候事到底堪へ難き狀態と相成り候につき不得止來る卅七年一月一日より左記の如く定價改正致候間此段謹告仕候也

追て既刊部百篇迄は三十七年一月中を猶豫期間とし同期間の御註文に限り從來の價格を以て。特に御註文に應し可申候

改正定價

並製 一册金四拾錢●十册金三圓七十錢●廿五册八圓八十錢●五十册十七圓●百册三十三圓●全部二百册六十五圓●郵税一册八錢

特製 一册金五十五錢●十册五圓●二十五册十二圓●五十册二十三圓●百册四十五圓●全部二百册八十八圓●郵税一册拾錢

續刊

●害虫論……佐々木理學博士
●水產學……塚本農學士
●議院法論……工藤法學士
●進化論……十時文學士
●日本教育制度……玉木文學士
●地震學……大森理學博士
●人類學……坪井理學博士
●世界上世文學史……上田文學士
●新刑法論……島田法學士
●普通物理學……久茂理學士

（丙の七）

本町三丁目 博文館

高等商業學校教授水島鐵也先生校訂
高等商業學校卒業生濱田四郎君著述

補習教育 商業入門 卷之三

(全部三冊各册正價同一)

十一月中旬發行
正價金拾八錢
郵税金四錢

本書は著者が我國に於ける商業補習の好著なきを慨し實業補習學校規定に基き編著せられたる者にして水島教授の懇切なる校訂に係る叙事法あり繁簡宜しきを得行文平易にして流暢一讀の下商業の大意を窺ふに足るべし本書は重きを實際に置き卷中挿む所の重要書類數十葉は皆有名なる諸銀行會社の樣式により實物を摸擬せるものなり以て商業補習學校の教科書たるべく以て商業學校獨習の指南車たるべく學生と主人番頭小僧とを論せず苟も實業に關係ある者の一讀せざるべからざる好著なり卷の三近日に發行し之に由て全部完成す斯界の青年諸子是非購讀あれ本書は夙に商業教育上に最も適切なる讀本として各地方の當該學校より歡迎せらるるもの多し

●**卷之一** は商人の學問及商業の發達種類商品商業地理度量衡の制度貨幣利子送金手形交通等を叙して商業の初歩を示し……

●**卷之二** は銀行商品の陳列水産物船舶及倉庫業會社信用保險及廣告各地物産其他各種の權利書類等一として叙せさるなし……

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

多田親愛先生筆

小侍従

かきくもりあまきる雪の
ふるさとをつもらぬさき
にとふ人もかな

多田親愛先生筆

大納言隆季

あらしましや [illegible]

坂正臣先生筆

茶乃花 忘年會

はつ雪 小松 木立

冬至梅 新巻鮭

もちつき 大根

坂正臣先生筆

御令兄様の御事存
まて御出の事趣はしめつ
一つの攫取のよまて見
来中なる小高深山御ありり
下さまし御家内一同貴味佳て
此の様あつくやよく様まと無
よりし中付ひつし　こ

葉牡丹水仙



跡見花蹊女史筆

臘梅鶺鴒



跡見花蹊女史筆

雪中松竹

野口小蘋女史筆



[illegible]牡丹

野口小蘋女史筆



十洲　子爵細川潤次郎先生序　赤堀又次郎君校訂

心學叢書

全部六册
一册大約三百頁
菊判大和綴
正價郵税未定

徳川氏の中世、太平既に久しくして四民奢侈に長し、淫逸に流れ、道徳殆んと地に墜つ、石田梅巖先生深く感ずる所あり、慨然として廻瀾の志を起し、心を知るとの學問の始たるを悟り、平易の話を以て其説を講せられき、所謂心學是れなり、手島堵庵、脇坂義堂、中澤道二、奥田頼翁、柴田鳩翁等の諸家相踵きて、其道を説き一世を感起し明治の今日に及ふ本館今回の諸家遺書を捜り、其名著を校訂して發行せんとす、其卷中には心學に關する諸種の寄話を加へ傍訓を施し、句頭を正し、一讀趣味多く資益する所を全からしむ、希くは江湖諸彦其遺志を繼きて、後進の士を裨益せられんことを

最近發行

第壹編（一月發兌）

● 賣卜先生安樂傳授
● 賣卜先生糖俵
● 齊家論……石田勘平著
● 塵とり……手島宗義著
● 異俗教誡 銭湯新話……伊藤單朴著

第貳編（二月發兌）

● 民の繁榮……虚白齋著
● 松翁道話……八宮齋譯

以下第三編より逐次發行第六編に至りて完結す今や一世の人心復小康に傾き道念徳操日に漸く微ならんとす今や本書の刊行は全く無用の業にあらざるへし

（丁の一）

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

治肺新法

附錄 肺病全快實驗談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致すべし

東京下谷上根岸町百十一 (電話……二二五九番)

藥學得業士 金澤巖

轉居

日本橋區濱町二丁目十一番地より

下谷區二長町三二番地へ

內山正如

筆戰之良友

秀才文壇

◎紙面大改良

○名家文壇○特別文壇○新體詩○漢詩○和歌○傳○成功○普通文○史○俳句○青年議會○學 海一欄等

▲毎月一回一日發行◉正價一冊郵税共金拾壹錢◉六冊全六拾三錢◉十二冊全壹圓二拾錢◉郵券代用必一割增之事

●毎號材料豐富

東京小石川區 文光堂發行 指ヶ谷町百三十三

東京日本橋病院長 醫學士 岡本武次先生新發見藥

懐中新藥 太陽丹

吐瀉 下痢 船車酒の醉 頭痛眩暈 胸腹痛等に著効あり 殊に食後四五粒づゝ用ふる時は食物滯り等の患なく精神爽快口中淸淨ならしむ 時候中り 食中り

(價)千二百粒入金壹圓 五百粒入金五十錢 〜〜二百五十粒入廿五錢 百五粒入金十錢 五十粒入金五錢〜〜全國郵送料二錢宛

發賣元 東京日本橋區本石町大通り角 藥種貿易商 博愛堂本店 電話本局二八六

取次所は全國到處の藥店にあり品切の節は直接注文あれ早速發送可申上候迅速と丁寧とは弊店の特色に御座候

奏功確實

簡易複寫インキ

器械不要

謄寫版寒天版及び其他の印刷又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速卓上立ちどころに文書圖畫數十百枚を印刷し得べし 本品はすでに諸官衙及び郡區町村役場等の御用品たり

◎定價 ニオンス壜入 金四拾錢 送料共 (郵税代用 壹割増)

發賣元 東京本郷區 森川町三八 中村屋商店

(丁の二)

毛はへ藥

原名（ペグネス）乙價貳圓甲價特別製參圓五拾錢二種共送料拾四錢◎本劑を塗擦すれば皮膚は速に新陳代謝をなし**皮膚を改造し毛根を發生**せしむるを以て如何なる禿も甲價壹瓶で必毛髮發生す◎近頃流行の禿頭やけど◎できものはつぼう等のはげ◎まゆげ◎口ひげ◎はへ際うすき◎婦人こまあたりのはげ其他男女有べき所に毛なきに可驚効驗あり且拔毛を止め毛足を速む

通經新劑 月やくし

藥名 メリピルシン

子宮を痛ず如何程長き月經とまりも忽ち流下す依て二三ヶ月位迄のは一劑分も用ゆれば快通流下す又特製を用ゆれば數ヶ月以上のとまりも必ず**安全に流下**す決て後の患ひなし本劑は特に**流經藥**としての効驗の外月經不通不順より起る子宮血道を全治し古血惡血を一掃す効能極て烈强なるも毫も身體に害なし安心して服用あれ價半劑六十錢壹劑壹圓廿錢貳劑貳圓卅錢特製參圓五十錢

色白くなる藥

化學的白 藥名 パントロン 溶液

本劑は貴女紳士淑女粋客間に大に高評を博し最新流行の秘方の奇劑にして本劑を塗擦すれば主成分は皮膚のグランラド氣吼により吸收せられ**藥力**に依皮膚は次第に新陳代謝を盛ならしめ**色素**を漂白すると共に**皮膚**を改造するが故に如何程色黑きも壹瓶で**白色**に**變化**し◎にきび◎吹出物を去り秀美艶麗の容貌となるを確證す乙價貳圓甲價特製參圓五拾錢送料拾四錢

らい病 新治療藥 ダービン

ダービンは多年の研究と實驗の結果レプラ菌に就て遂に一大成効をなし本劑の發見に依り不治の癩病も必全治すべき者と斷定せらる依て弊館率先し初て患者諸君に照會す試に一劑を用い**大効**あり三劑を用ゆれば必ず**誓て全治**確證す◎壹劑參圓貳劑五圓參劑七圓郵券參錢送れ說明書進呈す

◎專賣 東京本郷湯島四丁目十四 **オリエンタル藥館**

高等女學校學科程度 初號より取揃送本の準備有

會長 子爵 **岡部長職君** 第十一號十二月三日發行

講師◎修身、篠田教授◎國語、佐方教授◎地理、林校長◎家政、下田學監◎裁縫、喜多見舍監◎禮法、小笠原講師◎兒童心理、松本文學士◎女子衛生、鷲山校長◎割烹、赤堀講師其他名家論說會員の文章和歌等趣味津々

一種獨特の 通信教授各科解釋付

女子學術講義

（目下入會の好時期）

我が教育會は女子の爲講習を開き更に講義錄を發行す講義中難解の女子には別に**註釋**を加へわれば**女子**の讀易く了解し易き**講義錄**なり◎入會金廿錢◎會費三ヶ月七十五錢六ヶ月壹圓五拾錢壹年三圓一學期間四圓五拾錢◎入會者に**會員證**卒業者に**卒業證書**を授く◎卒業期一ヶ年半

（見本郵券**卅錢**）

女學世界へ廣告中
割引券
入會金特に**拾錢**に減ず
但し十二月中

東京神田一橋通町帝國教育會内
東京府教育會附屬 **女子講學會**

時間の利用

堀江秀雄君著　富田秋香君畵　（近刊）

夜學讀本

全壹册　洋裝並製　正價未定　郵稅

いつの世にもいづくの地にも乏しいのは學問に熱心なる人と學問を奬勵する人である、其人があるならば頭に徽章制帽の光なくとも學問する方法はいくらもある、併し晝間他の業務に働いて居るものには夜間を利用するのが第一である、終日の業務が果て丶心静かなる時益友相會して燈下に書を繙き精かきり互に勉強したならばたとい貧家の子でも邊鄙の少年でもかの居睡黨の仲間に引入れられる心配なく赫々たる文明の光を受けてたしかに立派な人物になれるましして良い先生の盡力があらば猶更のとである本編の著者はかねて世の居睡黨を警醒する爲め考案を凝したる其結果として之を公にせられたので周到綿密の觀察もて學理を平易簡明に演へられたのである

村井弦齋君著

●繪入小僧讀本（全壹册）

正價金拾貳錢　郵稅金四錢

本書は弦齋居士が周到なる用意に成れるものにして小僧が日頃の心得より日常の座作行歩は勿論あらゆる行儀作法に至る迄詳記せられたる要書なり

村井弦齋君著

●繪入下女讀本（全壹册）

正價金拾五錢　郵稅金四錢

本書は下女たるもの丶主人に對する心得より行儀作法は勿論其が將來に於ける心得迄も詳記したれば主用の暇本書を讀まん人は其利益寔に尠からさるなり

東京日本橋區本町三丁目　博文館發行

（丁の四）

ハーツホーン女史著

新刊

英文 アーサー王物語

洋裝全壹册 正價金四拾錢 郵税四錢

古今を通じ世界各國に各國家的特殊の英雄を選出せられたると既に歷史に明かなれば今爰に多言を須ひず蓋し英國にては本書のアーサー王及其將士を以て理想的英雄となす爾來幾世紀間此物語が人口に膾炙して實に英國々風の一源泉とはなれり今女史の輕妙なる筆を以て平易に改作せられたるものなれば好箇の自修書として敢て我が英學生に薦む

英學新報社編纂

歲暮新年クリスマス、贈答品に適す

明治三十七年

英文懷中日記

製本優美携帶至便

正價金廿五錢 郵税四錢

紙質良好印刷鮮明

口繪（富士越雙龍之圖 帝室技藝委員橋本雅邦翁筆）（十二支之圖 十二諸伯執筆）寫眞版色刷挿入

新刊

東京外國語學校兼日本女子大學校教授 村井知至先生著

英文 對話編

洋裝全壹册 正價金卅五錢 郵税四錢

村井教授の對話集は世間既に定評あり今また此書出づ蓋し前の補遺なり、また讀まざるべからず

●英學新報社編 英文書簡（新刊發賣） 正價四十五錢 郵税六錢

（丁の五）

發兌 東京本町 博文館 東京神田 東京堂

●文武堂藏版新刊書類●

西園寺侯爵題字　小川文雄先生著（製本出来）
萬朝報記者 山縣五十雄君序

新案圖解 玉突術

由來玉突の書は、數理を解説するのみにして、之を實地に應用する法を講ぜず、是を以て著者百讀千誦すると雖も斯道の進渉に資する頗る僅少なり、小川先生夙に著あり、再版玆に五星霜再び此著あり、理論明晰、趣味森々、而して鋭敏の観察能く闘球家の通癖を指摘し、精緻の筆墨能く之か矯正の道を誨迹す、殊に學理を實地に引用するの道を説く所、斯界文籍中新たに一機軸をなしたるものと謂つべく、闘球家必讀の好著述なり。

口繪玉突姿勢之圖寫眞版刷
挿畫木版彫刻九拾餘圖挿入

正價七拾五錢
郵税八錢

西園寺侯爵題字
志賀重昂君序文
飼鳥大家川口清五郎翁著（製本出来）

實地活用 諸鳥飼養書

此書の特色は記事の正確にあり、書中片言雙語たりとも亦不確實なるなきは勿論、著者は宮内省動物園に於て、また土耳古帝室内動物園に於て、多年其を擔任實驗せしものなれば、以て本書の價値を想知すべきなり、されば書中挿入の圖畫の如きも、何れも實物の寫生彩色畫を用ひ、以て其正確を併行せしめたり、殊に附錄として鳥類の捕獵法をも添へたれは幸に本書を繙くものは、悉く鳥類飼養を知るのみならず、春郊に秋野に之を捕獵することをも修得せしむる、實に斯道に於ける良師たるに耻ぢざる有益の珍書と云ふべし、

鳥類寫生石版彩色刷四拾圖挿入
木版挿畫數十圖挿入

正價金九拾錢
郵税六錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館　東京神田表神保町　東京堂

（丁の六）

（丁の八）

故文學博士 高山林次郎先生遺稿

樗牛全集

全三冊

洋裝上製總クロース金字入美本
總紙數四百餘頁近日發行

上卷

正價未定
郵稅

故文學博士高山林次郎先生が、吾邦文藝界の發達に貢献せしと甚た多きは世人の知る處なり。其肉體は龍華寺境内、冷なる土中に横はれりと雖、言や永遠の生命を有して輝く。玆に彼れが遺文を蒐集して、彼れが思想に接して靈の泉を汲まんとする者、はた彼れが事業を研究せんとする者の便宜を計る。第一卷の納むる所は、日本美術史稿の外に、審美的論文十數篇とす。美術史稿は、彼れが後日大成せんが爲めに稿本として作りたるものなれど、觀察評論の警拔なる、吾美術發展の跡を闡明して餘蘊なし。

故高山文學博士著●近世美學

上製五拾錢 郵稅拾錢
並製卅五錢 郵稅八錢

故高山文學博士著●世界文明史

上製五拾錢 郵稅拾錢
並製卅五錢 郵稅八錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

女学世界

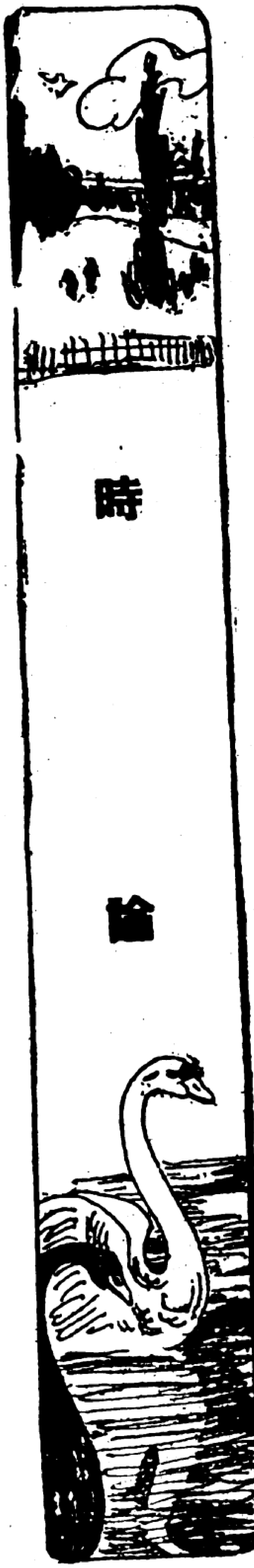
第参巻第拾六號

終刊の辭

烏兎匆々、花は落ち、水は流れて一年の星霜爰に暮れなんとす、此の時に當りて、人は、逝きて歸らぬ「時」の迅速を悲しむといへども、そは畢竟時と共に進むを得ざる無能力者の事なり。

されば、主人は主人の職分を盡し、主婦は主婦の職分を盡し、老人は老人の。小兒は小兒の職分を盡して、春の始に企てし仕事を冬の終りに成就する家庭なりせば、その一家は睦じく親しく其日其日を送り、今日の仕事を卒へ、又た明日の仕事を終へて、滞りなく一年三百六十五日を經過するが故、年末に際しても敢て悲しむ色もなければ、又た悔むべき事もなし、唯だ心靜に暮れ行く年を送りて、此の年の恩寵を感謝すると同時に、來ん年の清福を祝しつゝあるなり、斯の如きは洵に家庭の幸福なり、吾人は年末に當りて、讀者の家庭の總てが斯の如くして年を送らんことを祈る。

而して又た時と共に進歩せる我女學世界が、改りたる面目を備へて、改りたる讀者に見えんことを祈る、來るべき新年の日に於て。



歐洲女子教育概觀

獨逸協會學校長　大村仁太郎

我輩は女子教育に就ては局外者で、女學校の教壇に立つて自身に教鞭を執つた事もないから、專門的の深い御話は出來ない、併し我輩は明治三十四年より渡歐して、此頃歸朝したのであるから、此間に於て女子教育に關して見聞した事を御話ししやうと思ふ、余輩は英吉利、獨逸、佛蘭西、墺太利、西班牙、瑞西、伊太利等の國々大抵漫遊したが、觀光の旁ら、女子教育の視察を心掛て居つたので、到る所斯道に於て有名なる人に面會して女學上の話を聽いたり、又は著述物や、新聞雜誌の記事などに依て彼地に於ける女子教育の大體に通ずることが出來た。

我輩の見た所では教育機關の組織は西洋に於ても大體日本と大差がない、幼稚園も小學校も日本に在る通りのもので、其の建築の如きは日本のよりは完全であるが先づたいした違ひがない、けれども此の機關を運用する方法に至つては大層違ふのである、夫は無論日本の方が未だ進んで居ないのである、彼方は教育機關の運用が巧妙で、此點は日本よりは餘程發達してゐる。

我輩は、比較的長い期間獨逸に在たので、獨逸婦人の教育法を觀る事が出來た、先づ體育の事より御話致すと、

倣して彼方の婦人は體軀の發育が善い、手も足も肥え太つて、延び〳〵と成育してゐる、故に彼地の兒女は日本の同年齢のものに比して、二才も三才も年上に見える、畢竟是は學校のみならず家庭に於ても社會に於ても體育に重を措いて、之に力を盡すからである。

體育奬勵の好き實例は遠足會である、彼の地の婦人は日曜日には遠足會なるものを催す習慣がある、或日の事自分が散歩してゐると、背後よりゾロ〳〵地響きさして來るものがある、驚いて振り向くと、夫は窈窕たる婦人の遠足隊で在ッた、彼等は足並を揃へて、大股に歩いて往く其の歩き方は如何にも早い、然も大きな體で、兵隊でも來たかと思つた位である。

瑞西の「ユングフラウ」は海を拔く一萬三千尺許の高山で、富士の山よりは遙に登惡い、高い山である、由て登山者は腰に繩を着けて、繋り合つて、手に手に金剛杖を突いて攀ぢ上るのである、されば余輩の一行も矢張此の通りで攀躋したのであるが、かくして其山頂に登り着いた時に余輩は一驚を喫したのである、夫は雪や氷に驚いたのでも無ければ、眺望絶佳なるに膽を碎したのでもない、二三十人の若い女が頂上の岩角に腰を卸して休で居たのには、思設ない事とて自分は痛く驚かされたのである、男子ですらも容易に登る事の出來ない此の高山の嶮峻を、纖弱い女の身を以て蹈み蹂らうといふ勇氣の程は無論のこと、其の體力の强盛なるには驚かざるを得なかつたのである、そこで自分は此の娘子軍の樣子に感服して見てゐると、彼等は一向平氣なもので、蟻が塔を渡る樣な塩梅でやがてサッサと山を降りて行つた、すると又た其の後から男女の混合隊が登つて來たから、試に其人數を調べて見たら、女の數と男の數と相半してゐた、思ふに斯の如き壯擧を企てるには相當の勇氣を要し、又た冒險的の精神にも富んで居なければならぬが、之と同時に身體も强壯でなければならぬ誠に壯健なる婦人に依て壯健なる國民が造り出されるのであるから、女子の體育を奬勵するは敎育上實に必要

なることである、と言はねばならぬ、我邦の如きは衣食住の不完全より、體格の發達を阻害する事が少くないから差し詰此の方の改良からして計らなければならぬ、而して今日歐州諸國に見るやうな立派な體格を養成せんことを努めなければならぬ。

次に學校教育は如何と見るに、彼方では知識詰込みの主義を取らず専ら練習を事として居る、今日習ひ覺えた事も明日になると半分を記臆するに止り、翌々日には三分の一となるといふ様な弊は往々日本の學生間に見る所であるが、畢竟是は教授の方法が發達してゐないからである、前にも述べた如く彼國の學校の組織は男子の學校でも女子の學校でも日本と大差なけれど、日々課する所の學科は日本よりは却て平易で、生徒は少しも骨が折れない様に思はれるのであるが、結局教育の効果を收むる段になると、彼の方が餘程善い成蹟を擧げてゐるのである。

瑞西の「チューリッヒ」にある女學校は宮殿の様な體裁で、結構の宏壯なる、輪奐の美麗なる、恐らく世界に冠たるものであらう、そこで此の學校の建築費を聞くと、無慮百萬圓といふ巨額に上つてゐる、瑞西といふ國は僅か二百五十七萬の人口を有するに過ぎない小國で在て、陸海軍の備すら置いてない國柄ではあるけれど、其代り教育事業には非常に金を掛てゐるから、教育上の設備は實に至れり盡せりである、自分は此の女學校の外觀を見て先づ驚いたのであるが、進んで其内部を看るに及んで更に一層驚いたのである、即ち玄關は大理石もて敷詰められ、柱には彫刻が施してあり、天井には繪畫が貼てあり、加之も湯殿まで備設されてあつて、生徒は自由に沐浴することが出來る、午時には學校より麵包と牛乳を出して生徒に與へ、それで無月謝である、尚ほ此學校ばかりでなく瑞西に於ては總ての學校が概ね恁ういふ風である、政府が教育事業に力を入れてゐることは實に非常なものである。

瑞西には又た六個の大學校があるが、殊に目立つて見えたのは、何の大學校にも女子の學生が多い事である、此の事は直ちに女子敎育の程度を示し、智識の進歩を證據立てゝゐる、彼國女子が男子と比肩駢馳して敢て遜色なきも蓋し偶然ならざるのである。

又た瑞西其他歐州の諸國には嬰兒の保育場即ち幼稚園に入る丈ヶの年齢に達せざる嬰兒を預る場所が澤山あるこゝへ行て見ると、籃が十も二十も並べて在つて、其の中に嬰兒が入れてある、五人の小供に一人の保姆が付添つてゐて、嬰兒がこゝへ來ると先づ家から着せて寄越した衣服を、脫がして保育場備付の白衣に着換へさせる——脫がした着物は洗濯して遣て歸る時着せてかへす——而して日に牛乳何合づゝを供ひ、親に代て親切に保育してゐる、それで一日、保育料三錢より五錢、中には無料で行つてゐる所もある、夫婦共稼ぎの勞働者や職人などは、毎朝仕事に出る前こゝに子供を預けてゆくので、至極便利の機關といふべきである。此の外家政向きの仕事を敎へる女學校があり、宗敎を敎へる女學校があり、婦人許りで公益の爲めに營んで居る旅館があり、是等何れも女の手に營まるゝ事業で、夫々社會に有益なる働きを爲してゐる、是といふも畢竟女子の敎育が進歩して居る結果に外ならぬのである。

翻て獨逸婦人を見ると、是は又た獨立の精神が熾であつて、自活して居る女子が非常に多い、一つは女子の數が男子の數よりも百萬人以上も多いのだから、人口上の關係からして勢ひ女子をして獨立を餘儀なくせしめたのであらうが、獨逸の女子は早く小學校時代より獨立の精神を養成さして居る、其故學校の敎育方針も此の心を引立るやうに出來てゐるのである。

「レッテフエルアイン」は獨逸の皇后陛下が親しく統監せらるゝ一種の職業學校で、あるが、規模は實に大きなものである、此の學校の目的は女子の爲め實際社會に必要なる實務を敎授するに在るのだから、實科として刺

繪寫眞、製本、活版植字等其他種々の技術を敎へ、外に洗濯、裁縫割烹の科目なども置いてあり、兼修科目として女子に必須の學科なども置いてある、而して學ぶ所の學科により三ヶ月、六ヶ月、一ヶ年といふやうに修業年限に長短はあるけれど、卒業の上は學校で就職の媒介までも爲るから、一般の女子には最も要用なる機關である。

又た「ピクトリヤ、リツエウム」は、女子に智識を授くる一種の學校で、こゝには大學の敎授連が出席して、諸種の學科を通俗的に講述して居る此學校は矢張り獨逸皇后陛下の保護の下にあるので敎育ある女子を出すことも少くはない、例ばこゝの出身で最も有名なる「フリドレンテル」女史の如は、女囚の出獄せるものゝ爲めに仕事を與へ、專ら感化事業に盡瘁して居る、此の婦人の懺悔話に、自分は女學校一つ卒業せぬ身ではあるが、唯だ「リツエウム」で講義を聽いた御蔭で、今日の地位を得るに到つたと言ふて居る。

要するに女子敎育は、敢て獨逸風が宜敷いといふのではないが、男子に賴らないでも一人で遣てゆくといふ精神、即ち獨立の考を持たせる事が最も必要の條件である、假令好偶を得て良妻となり賢母とならうとも、獨立が出來る丈の智識は是非共修めて居て貰ひたいのである。（完）



婦人の究極目的

三輪田眞佐子

凡そ彼岸の目的を定めずして茫々たる大洋に棹すものあらば誰かその運命を憂へざるものあらん、されど人生はなどか大洋に異ならん、而して諸の教育は將に大洋に棹さんとする舟の艤装に同じ、されば教育を施すものは更なり教育を受くるものも亦自ら其究極の目的はいづ地なるかを知り、方向を誤らざるこそ最も肝要なれ。蓋しかゝる問題は人生観と名づけて學者宗教家等各その見識を定めざるはなきを以て、事既に新奇に屬せざるも如何せん百人百説共に我を聖なりとしてさながら誰か烏の雌雄を知らん諺にもれず、わきて婦人の生涯に關しては宿を定めざる鳥の天空に翔るが如し、即ち閨門を以て女子の天地と解するものあり、男子と同じく社會に出で、活動すべしとするものあり、良人を始め親又は子にさへ服從すべしと教ふるものあると共に男子も女子も等しく人なり女子とて相應の權能を有す從ひて獨立獨歩せんもなどは不可ならんと言ふものあり其の他女子教育上の形式に至りては西洋を主とするあり、東洋を主とするあり、勢ひ婦人としての理想及び行動も千差萬別あるを免れず。あはれ左すべきか右すべきか未だ適從すべき目的の定まらざる今日の世に處する婦人ばかり迷ふべきものはあらじ。

さて如何なるものが婦人の天職か將た究極目的なるかを定めんには是非とも天地の根本眞理に訴へざるべからず、思ふに天地は活物なり、而して人道はこれに融和合同するものなるを要す、易緯の繋辭傳に曰く「成性存存道義之門」とこれ萬物皆生々已まざるものにして、其の原則に適順するものばかり始めて道と名つくべきなり若し衰亡の源となり破壞の因となるものあらば以て人生の主義とするに足らず。

翻て社會の生々する所以のものを考ふるに男女相待ち相助けて家庭より國家に至るまで調和結合するを得るなり、されば家庭の基礎を作り、國家の安立を謀るに足るものにあらざれば、決して人生の主義方針とするに足らず是を以て婦女子の究極目的は適當なる教育を受け正當なる方法に由りて男子に配合し樂しき家庭を作るにありと斷言せんも可ならん。

勿論女子とて無爲にして社會に寄食するは女子たる位置を賤劣ならしむる基ならんも、自ら主要の天職を忘れ東奔西走する如きは好みすべきにあらず、況んや彼の米國婦人中には非結婚同盟會を作るものありと、聞くが如くんば社會生々の根本主義と相戻るを以て我日本帝國の婦人界にも斯る風潮の襲ひ來ることなくば幸なり。

蓋し米國婦人とて生々存々の妙理を知らざるにあらざらんも、男子の壓制に抗せんとする反動ならんか、されど他國の習慣につきて其の善惡得失を撰ぶに暇なくしてこれを模倣せんとつとむるは我が民俗の常なれば茲に弊風を未萌に防ぐ必要もあらん況んや女子教育の發達につれて高等の女學を修むるもの日に多きを加へ或は時期を失して嫁せざるものあり或は權衡を得ずして嫁せざるものあり或は自ら負ふ大任を果さんため獨身生活をせざるべからざるものありされど社會に對する任務を盡さんため、若しくは弟妹の育生を父母に代りて遂んがため等より止むを得ずして單獨生活を營むは格別なるも一般婦人の究極目的は家庭を作りて國民の母たるに過ぎざるなり、從ひて普通に於ける女子教育の目的は茲に標準を定めざるべからず。

近來男子とて晩婚甚しきは獨身のものも多からんとする傾向ありこれ社會の形勢上より來る自然の結果なり、されど男子も女子と同じく社會の生々存々する理を守らざるべからざるを以て適當なる家庭を作ることをば忘るべからず哲學者などには往々獨身生活を營むものありされどこれ固と自然にあらざるを以てかゝる人は其の品格おのづから非凡高尚の趣あるも亦一方より見れば身の不遇をかこつかの如き觀あり現に今女子なき男子

の家庭につきて試みよ母死せし後ち兒童の綻びたる衣を見ればあはれならずや否男子自ら母は世を去りしなど獨りごちつゝ緑子を懷く樣を目にせば誰か一滴の涙なからん更に初より妻を迎へざる獨身男子の塵茫々たる宿を訪へよ嘖々不自由ならんとの辭なからんと欲するも能はざるべし彼の林子平は甞て一室に端坐しつゝ「恐かにも帚木とる手の妻しあらば病の床にちりはつもらじ」と詠せしとかや、これ彼が幽囚の裡に發せし歎聲にして人情の切なるものを知るに足らん亦加賀の千代女も良人の黄泉に入りしとき「起きて見つねて見つ蚊やの廣さかな」と讀みけりとぞこれ孤立の身となりしときの如何に心細きかを推すに足らん、おのれ齢若うして良人に先んぜられけるころさながら身は大洋に漂ふ捨小舟の如き思ありき實に世の夫婦ともに長壽をたもち子孫も漸く榮ゆるばかり幸福なるものはあらじ。

要するにおのれは未だ春秋に富まざる女子の空想に驅られて獨立を企て或は男子の執務を興味多しと考へ、これを羨むが如き輕擧なきを望む從ひて特別なる頭腦と止むを得ざる境遇と適當なる歳月を有するもの丶外は其の敎育も一家の主婦として家庭を整理し知己と交情を溫むるに足る如き程度を以て標準とせざるべからず即ち婦人の究極目的は人の妻たるにあり母たるにあり唯綽々たる餘裕と閑日月あるものに限り外事にも關係して可なりと信ずるのみ。

されど婦人は決して機械にあらず亦一般動物の如きものにもあらず故に單に子孫繁殖のみを唯一の目的とすべきものならずして高尙なる性格を具へ天與の福祉を享け人として活動し人として効績を垂れざるべからず、古より婦人の目的はほゝ內事に止まると一致せしも單に男子の翫弄物と視らるゝ如きは女子の天職にあらず、これ語相近きもその趣は千里の大差あり故におのれの主張は女子の天眞を能く發揚しつゝ良妻となり賢母となれよと言ふにあり。（完）

婦女雜觀

大町桂月

◉女は迷信ふかきが常也。千駄が谷より大久保へ轉居しけるが、鬼門に當る故に惡しといふ聲、ちらほら耳に入りぬ。又家が馬の口の形をなせるが故に惡しといふ聲も聞きぬ。余云ふ、世の中に、鬼門も、馬の口の家も、あつたものに非ず、たゞこの家にて注意すべきは、二階の窓と湯殿と也。二階の窓は、てすり低ければ、或は小兒の落つるとあらむ。湯殿には、戸なくして、腰高障子なれば、或は盜賊之より入らむと。湯殿に、出刄庖丁と余の下駄とを重ねおく。曰く、これ盜賊よけのまじなひなりと。然るに、その盜賊よけのまじなひ、毫も効能なく、不幸にも、余の言が當りて、一夜、梁上の君子、湯殿より忍び入れり。家人みな知らず、翌朝おきいでゝ、はじめて知れり。盜まれたるは、少許の金と衣類と傘三四本と也。下駄は湯殿にあれど、出刄庖丁はなし。思ふに盜みゆきたるならむ。又思ふに、家の中をさがしまはるうちにも、その庖丁をもち居りて、起き出でゝ爭ふものあらば、斬りつけむとせしならむか。さらば、まじなひが、却つて仇となりける也。可笑しや。

◉雨あがりの朝、小兒をつれて、牛込の方へ用たしにゆきけるに、小兒、下駄の緒をねち切れり。すげなほしてやらむとて、袂をさぐるに、帛、緒の類なし。止むを得ず、紙にて、かんじんよりを撚り居たるに、往來の人すくなからず、令孃もゆけり、貴婦人もゆけり、最後に、身のなり、いやしげなる一老婆、たちとまりて、しきりに袂を探しけるが、終に赤き金巾の小切をさがし出して、われにくれて、かんじんよりにては、駄目なり。これにてすげよとて、立ち去れり。心やさしき人哉。

◉日本の婦女は、多く煙草をのむ。よからぬ風習也。第一、煙草は、腦を害し、のどを害す。又たゝみ、ざ

ふとん、着物などに、やけこがしをこしらへ易し。甚しきは、爲めに火事を起すこともあり。貧乏人にありては、不經濟也、煙草のみつければ、煙草なくなりたる時、もしくは病氣などにて、のめぬ時、非常に苦痛を感ず。煙草のまぬに、こし



たる事なし。殊に、女は。

●女の酒のむも、惡き事也。酒のほろ醉心地は世にも快きものなれど、さむれば、後悔あること多し。品行をはじめとし、まちがひの起るは、大抵酒にもとづく也。殊に家をとりしまる女房が、酒のみては、氣が大きくなりて、あれも買へ、これも買へとて、金をつかひすぐるもの也。古來、酒のみの女房ある家に、お金のたまつた例なし。酒の相手に面白き女は、概して家の爲には惡きものと心得ゆべし。

●酒も、煙草も、のみならはねば、飲みたくなるものに非ず。母が、うまさうに煙草のむを見て、眞似して見たくなり、こつそりのんで見た處が、さつぱり、よきものに非ず。むせんで、せきをして、却つて苦痛を感ず。されど、度かさなれば、その苦痛減じて、終にうまくなり、のまずには居られぬやうになる也、酒は、自からは飲まずとも、酒事のある時、無理に強ひられ、目をつぶつて、ぐつとのみ下し、あゝ苦しや、こんなものが、何處が、うまくて、のむ者ぞと思ふこと、たびかさなれば、ふしぎや、苦かりし酒がうまくなる也。斯く酒も、煙草も、人生れながらにして、好むものに非ず。のまなければ、のまないですむもの也。

●日本の食事、膳を別々にするは、手數もかゝれば、一家團欒の興趣をも失ふ。よろしく食臺を設けて、親子兄弟ひとしく之を圍むやうにすべし。日本にては、食事の時は、靜肅をむねとし、しやべることをもいやがる風あり。もとより食事の時にさわぐは、よからねど、快活に談話し、笑ひ興ずることは、一家の團欒に趣味を加ふるものにて、また衛生上にもよきこととなるべし。

●さき頃、さる名士をおとづれけるに、西洋料理を饗せり。曰く、これ妻の調理せる所也と。その調理のよきことをほめけるに、主人曰く、われこの妻あるによりて、浮世の不遇も苦しく思はずと。これまことの家庭の味なるべし。

●料理の事は、家庭第一の急也。人或は曰く、料理は

一切外よりとりよせるやうにすれば、家事煩雜ならずしてよしと。それもひと月や、ふた月なら、よかるべけれど、人々は食性あり。いつもおあてがひの食物には甘んせざるべし。家庭の主宰者たる細君は、何はさておき、料理の事には通じたきもの也。

●食物は、下らぬものなれど、案外、馬鹿にはならぬもの也。夫婦、食性を同じうし、一つ鍋をつゝきあはば、情味一層加はるべし。夫は柔き飯を好み、妻は硬き飯を好み、夫はしつッこきものを好み、妻はあつさりしたものを、好みて、食性相反しては、始末がつかざるべし。されど、食物のすき嫌ひは、習慣によりて變はることあり。永く住む間には、妻の食性自から夫の食性に似より、夫の食性亦自から妻の食性に似ることとなしとせず。

●子供をあまり嚴しく叱りてもよからず、餘り甘やかすも惡し。家庭教育の要は、寛嚴そのよろしきを得て、温々たる愛情こもるやうに心掛くべし。ことに注意すべきは、子を育つるものは、必ず己れの性情を抑へざるべからず。己れが腹だゝしき時は、むやみに子供をしかり、己れが悲しき時は、子供にとりあはず、己れの性情のまゝにて、子に接すれば、子は自から親を難有がる情を失ふべし。

●婦女にまづのぞましきは、身體の強壯也。顏は十人並にて、甘んずべし。餘り美なれば、幸福をうること多けれども、また災害をうくることも多かるべし。常磐も、餘り美ならずは、二夫に事ふるの恥辱をのこさざりしなるべし、楊貴妃も、餘り美ならずば、安祿山の亂は起らざりしなるべし。玉の輿にのるも、美形のいたす所なれば、この世ながらの地獄におつるも美形のいたす所也。

●婦女の通弊は、ひがみ根性、そねみ、偏狹、小量、依頼心など也。婦女に取るべきは、注意ふかきこと、手のつむこと、情のやさしきことなど也。これらの長所なくば、婦女の婦女たる所以はなくなるべし。

●女、子を生めば、子をそだつることが、第一のやくめ也。よしや、裁縫など、よそに出しても、子の爲め

に、本をよんでやつたり、話をしてやつたり、よろづ子をそだて敎ふることに、力をつくさゞるべからず。

賢女の子は、概して賢也。これ遺傳にもよれど、大半は母の敎育による也。(完)

石黒男爵の家庭談

家庭と云ふことは一寸聞くと何でも無い事のやうであるが却々六かしい、何故と云ふに只口で云ふ丼りでなく實際其事を行つて行かんければ成らぬのだから、先づ一寸一例を申すと、外から歸つて來て玄關に上る時にでも、下駄は相當い場所へ揃へて脫がんければ成らぬと云ふ位の事は心得て居りながらも、自分の上つた跡を顧ると大いに亂行に成つて居つたり何かして兎角口に云ふ通りには實行の出來惡くいものであるから困るのです。私は兎に角自分の門戸の內が一番の樂園であると云ふことが家庭の根本であると思ふ。之れは實地から繰り出した說であるが、其揆拆は私も朋友が多いので、殊に自分では療治せぬながら、醫師であるから從つて、醫者に交際が多い。此等の人々は、自分の門をガラ〳〵と出れば必ず少なくても十圓や十五圓は取つて來られるのであるから、生活も住居も派手になつて居る。若し私の家族などが、之を見て自分の家はなぜ斯う吝嗇だらうと云ふ考へを起すと、自然自分を始め家族中不滿で居なければ成らん。そこで私は一ツの家庭の原則を立て即ち、人間の樂しみは、人に求めずして自分の力に應じた丈けの事をなし、家內中滿足和合すると云ふことが樂しみの極地としてあるのでございます。借金をしたり、不義理なことをして鯛を食ふよりも、自分の畑に作つた茄子を摘んで食べることが一番の樂しみである。家族共が集合つて、互に過失ちの少ないやうに誡め合つて、金の義務と德義上の負債をせぬのが一番の樂みとして原則を立た。常々此の原則に從つて子弟を敎育して行く所が、矢張弊害がある。即ち過ぎたるは及ばざるが如しと云つて、一方には賄を喫まぬ、と云ふ高潔な思想が起ると同時に、財が向つて來ても捕へやうとはせずに、卻つて嫌惡すると云ふ風に成つて仕舞つて、つまり中庸を得やうと云ふ念慮が消滅して仕舞ふ。中庸を得ると云ふことは何事にも六ヶ敷ものであります。

一般の家庭を改良するには中以上、所謂紳士なるものが、少しく家庭を清くせねばならぬ。紳士の交際と云へば必ず藝妓が伴ふと云ふやうでは困るでありませぬか。何國へ行つても藝妓の種類がある事はあるが日本のやうに公然に市街を歩るいて居ると云ふ國は外には無いやうです。青年男子の身を誤るのは多くこれであるから、此の取締は嚴重にしたい。

日本でも此頃は追々婦人が敎育事業其他に與かるやうに成つたが、未だ小供などを預けるところがないから、お子持の方は不自由ですな。伯林あたりには小供を預かる所があつて、母親が朝外へ出る時には預けておいて、歸りには伴れ歸ると云ふやうな事が出來るから、誠に安全で都合が宜しい

社交

貴婦人の嗜好

中村鈴子

三輪田眞佐子刀自

刀自は宇田淵氏の長女、天保十四年一月、京都嵐山の麓なる嵯峨に生れ、長じて梁川星巖及び紅蘭に學ぶ、學成るや故岩倉具視公に聘せられて公爵の女子に教授し、明治元年岩倉公の媒介によつて松山藩士三輪田元綱氏に嫁す、明治十一年夏人を失ひ、其後東京に遷りて後に授く、今は三輪田女學校の校長にして女子大學の講師たり、

招魂社の裏手をだら〳〵と西へ下りて、新築の壯麗な女學校に三輪田刀自を尋ねました。刀自は白薩摩の飛白の上へ黒絽紋付の羽織を長く着流し、薄鼠の白茶がゝつた紙布織の袴を穿いて居られましたが、顔色白く髪黒く眉秀でゝ長く、老躰とは申しながら腰は少しも曲らず、五百に近き女學生を導かるゝ剛健な精神は渾身に充溢せるを認め得ました。

▲動植物

植物は何でも好きでありますが、別して花を好むので御坐います。薔薇、撫子、萩、桔梗など庭先に御坐いますが、何れも人手を借らずに手づから培養致しました。動物の方は大分好き嫌ひが御坐います、小鳥や金魚などは糞が穢いから嫌ひですが、犬は極好で犬の方でも私を慕つて附いて歩きます。知己の方から犬の畫や置物を貰ひますが、何れも大切に收藏つて居ります過日勸工場で陶製の置物を買つて參りまして、小犬の顔の無邪氣なのを愛玩して居りましたが、下女が掃除の時にツイ粗匆して足を毀しました。私は平常他の物を毀されても何とも思はぬのですが、この小犬の置物だけは惜しいとをしたと思ひまして、時々愚痴が出ます。

令息元道氏は、置戸棚の硝子戸を開けて、小犬の置物を取出し見せられましたが、粗製ながら小犬のトボけた顔が如何にも善く摸してありました。

▲新聞雜誌書籍

此處（教員詰所）へは「日本」、塾の方へは讀賣新聞と定めてあります。社會重大の出來事或は教育界の事、又は教育大家の論説など申す種類だけ、側の者に聽かせて貰ひ、三面記事と申す樣な些細な事は一切耳に入れません。婦人に關する雜誌と申しましても、ホンの女學生の讀物だけで大人の讀むべき物は殆ど無いやうですネ、先ア女學雜誌が一番價値があるかと思ます、あれは時々蕃娼妓などに關する事も書いてありますが着眼が確乎として居ります。書物はあれもこれもと雜駁に讀むことは嫌ひで、大家の傑作、志士の言行錄などを愛讀致します。

▲詩歌俳諧



三輪田刀自

詩は元來好きで、主に梁川星巖の春雷餘響や三體詩を愛讀します。和歌は小澤蘆庵の歌集など好で見ますので、凡て志氣を確かにする樣な物を取ります。戀愛にばかり流れたのや厭世がゝつたのは嫌ひで、小野小町の歌も宅にあるはありますが。氣を腐らせる歌ばかりですから、景色を詠じた方だけを見ます。俳諧は少し嚙つたことがありまして、芭蕉や其角の名句に心醉したとも御坐いましたが、近年は先ア縁遠い方で

御座います。

▲書畫骨董

書は紅蘭に學んで紅蘭の手本を澤山有つて居ります。書は今でも頼まれて書きますが、近來リョウマチスで額字だけは書けません。元から大きい字が好きでありますが、間違へるとチョット其處だけ消して側へ小さく書きます、有り難いとには、皆さんが却て飾りの無いのを喜んで下さるやうです。骨董を室に列べるとは大嫌ひで、過日も嫁が花瓶の下へ敷いて置いたレースを取除けて了ひましたので、伜に笑はれました。斯ういふ氣質ですから、座敷には何にもありません。勿論今は學校を擴げる爲に、家族の住居は極手狹で御座いますし、又何事も質素を守るのを家憲と致して居ますから……。

▲演劇

演劇は正直に申せば好きで御座いまして、昔は偶に見物致しましたが、今は實際見ると云ふ場合が御座いません。マサカ生徒を引連れて芝居へ出掛ける次第にも参りませず、教育上には餘り益する所がありませず、且つ劇場には藝娼妓など申す卑猥な人間が多く來て居ますし、劇を見ながら飲み食ひして居りますし、誠に不行儀で穢らしい、私は劇その物を好くに關らず、其見物人の不行儀と俳優の人格の卑いのを痛く嫌つて居ります。忠ならんとすれば孝ならずとか、孝ならんとすれば貞ならずとか、義理人情の板挾になつた所を、舞臺に活躍せられると覺えず同情の涙を灑ぎますので技藝の巧拙など評する餘裕が御座いません。私の樣な者は、俳優の芝居を見るのも、素人の芝居を見るのも同じ事であらうと思ひます。

▲飲食物

塾生と下女は別ですが、家族だけは麥飯で總菜も總て儉約を主として居ります。學校の爲には何でも耐ると云ふ方針でも御座いますし、食物に嫌ひと云ふは少しも御座いません。好きなのは菜の浸し物、蕗、菊味などで御座いまして、蕗は葉まで食べます、菜の浸し物は三日途切れても困ります。近來弱りまして、醫師の

勸め通り牛乳を朝一合、晩に一合五勺、スープを一合づゝ、葡萄酒をチヨコに三盃と定めて用ゐます。葡萄酒は前に甲斐産を飲みましたが、近頃は本郷靑木堂製のホルドーと云ふ醫科大學で用ゐる品ばかりで、他のは貰つたのが御坐いましても、決して用ゐません。以前は桑酒などを善く賞味致したとが御坐います。

私は一躰食のよい方で御坐いまして、滋養品の外に三椀位は食きます。それに此頃大分西洋好になりまして、食物も大分變りました。菓子はカステラ、果物は蜜柑、林檎、覆盆子、何でも食後に家族を集せて到來の果物を味ふのを家庭に於ての第一の樂みとして居ります。



教場に於ける三輪田刀自

▲髮飾

私は從來の潔癖で、毎朝行水で躰から頭を洗ひます。下女が汚れた足で緣側を通りますと、直に雜巾で拭かせます。髮は若い時分に結つたことも御坐いますが、髮結女に結はせたことは御坐いません、髮結女は喋舌の惡風が御坐いますから、嫁が髮を結ひます時は隣の森と云ふ家へ呼んで結はせます。併し生徒の頭髮は、束髮でも銀杏返でも更に頓着致しません。

▲服裝

着物は薄色が好きで御坐います、羽織は黒を着る場合が多う御坐いますが、矢張り鼠か藍鼠の方が好きで御坐います、緞子のやうな紋柄も好きで御坐いました、先達て墨畫の長襦袢を裁縫の教師に撰んで戴いて三井から買りました。

◆旅　行

旅行は好きで御坐います。山岳水邊いづれもようしく近頃は温泉場が好きになりました。熱海や道後の湯などは能く入浴りました。暇さへあれば歩く方が好きで新橋から此處まで位は何とも思ひません。

◆手　藝

手藝は何でも好きで御坐いまして、又よく人樣にもお勸め申します。今の忙しい躰でも一寸の間を偸んで仕立物を致します、一躰性急の方で御坐いますから、立ちながら縫ふことも御坐います。

刀自の御知己へ御紹介を願ひましたが、「三輪田さんの紹介では何事でも承知せねばならぬので迷惑する場合があるから餘り紹介して呉れるな」と或宴會の折、忠告を受けましたから、一應先方へ面談致した上で……と斷られました。

高田博士夫人

夫人不二子は男爵前島密氏の長女にして明治二年六月生れなり明治二十一年三月を以て今の法學博士高田早苗氏に嫁す人と爲り眞率にして客を好み政事家の配偶たるに恥ぢず

前夜の大降りに濘つてゐる關口臺町の新道を上ると、女子大學の生徒が海老茶袴の裾を褰げて三々五々寄宿舎を出て來ました、此日は日曜ですから何處へか散歩に出掛けた事と思ひます。檜の木立奥深い黒板塀について御門を入り、御女中の案內で廻り椽離つかを通り奥の瀟洒な御座敷へ導かれましたのは九時半頃でありました。幽邃なる御庭先には、赤松、黒松、杉、檜など參差交錯してゐる間から枝折戸や車井戸が少しばかり現はれ、タカボの垣根側で二人の書生さんが落葉を掃いて居るなど、却々雅趣多きを感じました。さて此御座敷は足の短い板葺の長庇を四谷丸太で支へ、靴

脫ぎ石の側に擬欄、仙人掌、小松などの盆栽が地面や棚に列べてあり、御床の間の一軸は英一蝶の墨畫の松欄間の扁額は瀧和亭の富士、違棚には軸箱が許多列べられ大抵今世大家の名が記されてありました。此他に大小の畫帖を積まれてあつたので、記者は先づ御主人の畫富なる趣味を想像しつゝ、奥深いお庭を眺め入つて居りました。

斯くて程なく緣傳ひに出で來られし夫人は、白地竪縞の單衣に匹田形を散らした小豆色の絽と黒繻子の打合帯を小さく結ばれ、鐵皮色の帯留に金具の光澤を引立たせ、前髪の程よく膨らんだ花月に卷かれ、スラリと丈の高い痩ぎすな御物越はチヨツトお弱いやうにも見受けられますが、眼元も眉毛も冴え〲として、應接振に活氣の溢るゝは先づ客心を引き着けられ、眞率で落着いたお話しに長坐の御迷惑を氣付かぬ程でありました。記者は軸箱から思ひ付いて、最初に畫の御趣味を伺ひますと――

▲畫

少さい時から一番畫が好きでしたが、兩親も好きな事なら習はせても可いと申して、小學校を卒業致すと和亭さんに就かせて呉れました。初めの内は一週に一度清書を持て參りましたが、進歩が遲いので毎日通ふ事に致しました。併し通學ではまた却々思ふやうに參りませんし、親達が少は人の家へ入つて見るのも修業になるだらうと申して、終に二年ほど塾に入りました。丁度和亭先生のお孃さん御兩人も好い位の御友達でありますし、他にもお連が御坐いまして、都合は極宜しかつたのですが、入塾致したら却つて何も出來ませんでした。一躰和亭先生は極々好い御方で、餘り鷹揚過ぎた故もありましたし、一つは交情の好いお友達と面白く遊ぶのに身が入りまして、勉强がお留守になつたので御坐います。畫を習ひました間が丁度七年間で、可なり長い様ですけれど、ホントウにお耻かしい次第で……、それに唯今では最早打捨ですから、何にも出來は致しませんが、只見ますだけは樂みで時々展覽會などへ出掛けます。高田も漸々畫に趣味が深くなりま

して、少々書幅も集めましたが、大抵當時の方のばかりで御坐います。

記者は夫人の御作を拜見致したしと願ひましたが、違棚の書帖二冊を取出だされ、

展覽會へ出しましたのは、大概人樣が持て行らつしやいまして、僅一つ此書帖の中にお恥かしいのが入つて居ります、

一冊は和亭翁の令孃香塢、青楓二女史が一葉毎に交る交る潤筆された書帖で、牡丹、櫻、波に千鳥など美しく書き出されてあり、二女史とも人物畫を川邊御楯氏に習はれたとの事で、他の書帖の和亭翁の潤筆された蓮池の圖を初めとして、高弟の合作數ある中に、紅葉に野菊を配らつて、鈴蟲一つ輕妙に描き出されたのが荷香と落款せられ、これが夫人のお筆で御坐いました。

私が荷香と申す號を貰ひました時、師匠が其號にちなんだ蓮池を書いて呉れましたので御坐います。お孃さん達は御縁付なりまして、眞正に受け繼ぐと云ふ人の無いのは、惜しい事だと思つて居ります。

▲骨董

骨董と申して、眞正の骨董的裝飾品例へば置物のやうな物は、欲しいとは存じましても却々手廻りませんし必要上から日々の道具類の方に趣味があるので御坐います。陶器類は九谷燒の樣なコッテリした物よりも、アッサリとした物の方が好きなので御坐います。

▲演劇

此方の父(早苗氏の嚴君)が芝居好きなので、善く伴を致して參りましたが、昨年の春亡くなりました、それからは全然參りません。ハイ歌舞伎へばかり……、左樣で御坐いますかネ、私は世話物は大嫌ひで、時代物の方が好きですが、時代物でも馬鹿々々しい時代物は嫌ひで御坐います。あの辨慶の荒行とか申して、七ッ道具を背負ひ顏へ隈取を致し大童になつて荒れ廻る狂言が御坐いますネ、彼樣のが嫌ひなのです。千代萩や忠臣藏、春日の局、高時天狗の舞なぞは宜いと存じますネ、所作も宜しう御坐います、勸進帳の大薩摩なぞ

氣が晴々致します事。父は菊五郎が好きでして、高田は團十郎……、私は別に誰と申すことは御坐いませんが、先ア團十郎の方で御坐います。新演劇も好いものですが、何だか物足りない様な心持が致しますよ。

（記者申す此お話は團十郎の生前でありました）

▲新聞と小説

新聞は讀賣、日々、二六、萬朝、それから婦女新聞ぐらゐで御坐いまして、大抵一通りは讀みますが讀賣が一番宜しいと存じます。小説は極好きな方ですが、餘り悲しい物は讀むなと申されますから、可笑しい物を撰んで讀みます。小説では隨分夜を更す方で、一時が二時になつても、結末まで見なければ氣が濟まない癖があつて困ります。併し翌日頭が痛む事も御坐いません。何方の作でも好きで、紅葉、露伴、柳浪など、何れも面白う御坐います。坪内さんの脚本も面白う御坐います。一葉のは一葉全集を見ました、弦齋のは何時も同じ様で興が少いと思ひます。「不如歸」ですかハイ讀みました、隨分感じの強い方で、不如歸」でも泣きました。



高田博士

▲旅行

旅行は極好きで方々へ出掛けます、主に東海道の方向ですが遠くは神戸ぐらゐ迄で御坐います。京都

には弟が居りますので、自然足が近くなります。本年は平塚へ參りました。沼津は好い處で、明治二十九年から四年ほど續けて參りました、何時も靜浦へ宿を定めます。海へも最初は入りましたが、お醫者が私の體質に海水浴は宜くないと申しましたので止めました。一體私は山より海が好きで御座います、併し御承知の通り子供が無いので、一時は欲しい〳〵と存じて殆ど狂氣の樣になりましたから、人樣に勸められて方々の温泉場へ出掛けました、伊香保、草津、鹽原、修善寺、何處でも良いと聞けば直に參つたのです。彼の伊豆の吉奈の湯は邊鄙で不自由此上なしですが、現に子供を生けた方があると云ふのを聞いて、苦しい時の神頼み何樣な不自由でも辛抱致す積りで參りましたが、大仁から六里の惡い道路を車でガタガタ揺られました爲に全然身體をいためまして懲り〳〵しました。



の點圖

▲船と釣魚

船は平氣の方で、以前京都から横濱まで汽船に乗りました時も何ともありませんでした、旅行先でも舟で釣魚になぞ出掛けるのが好きで御座います。釣魚は[illegible]

鹿馬鹿しいものだとは存じながら實に樂みで、彼の沙魚釣は面白いものですチ、先頃中川へ出掛けましたら兩手に持つた釣竿を交る〲に引き上げて休む隙がないやうに釣れました。

▲遊泳

自分で一度も泳いで見たとは御座いませんが、如何かして泳ぎの稽古を致して見たいと思つて居ります。よく馬の稽古をなさる方がありますが、私はまた泳ぎを覺えて居たら、若し誤つて水に落ちた時の用意にもなりますし、一つには運動に何のくらゐ宜いか知れないと存じますよ。

▲客好き

私は旅行好きな癖に人様が多勢御集會の場所へ出るのが嫌ひです、少しは人の中へ出なければ見聞が狹くなつて不可つて毎度嚴ましく申されますが、如何致しても出る氣になりません。元々私は學校的の敎育を受けませんからお話が下手な故で、一つはオックウになるのでしやう。但皆様が宅へ御出で下さるのばか

りが樂みで、御かへし申すのが厭で〱耐りません。チヨット初めてお目に懸る時に、何だか具合の惡いやうな氣質ですが、お馴み申すと何から何まで打明けてお話し致したくなります。お友達は極少う御座いますけれども、其代り何時までも深く御交際申すのが好きな方で……。

▲料理

父も食物に嗜好がある人で御座いましたし、高田もチヨット六ケしい方ですから、毎日のお料理に考へが亞りますが、それが又樂みで御座います。別に料理法も存じませんが、唯だチヨット油濃い品の添物には醋の物か浸し物をあしらふと云ふ風な取合を工夫致すだけです。西洋料理は以前矢來に居りました時分、寺町に明進軒と申す洋食店がありましたが、其處の主人は商賣氣を離れた感心な男で、私が稽古を賴み込んだのを大層喜こんで敎えて呉れましたか、丁度三月ほど通ひました。併し私の處では日本料理が好きで、何が氣の利いた料理を拵へて見ろと申しますから、硏究の爲に

旨い珍しい物を出す處へ伴れて行て貰ひまして、食べて見ては覺えるやうに致します。尤も口取なぞは店屋から取る方が便利だと存じて、餘り覺える氣にもなりませんが、ホンの有り合せの品でチヨツト異つた料理がして見たいと思ふのです。私自身は好き嫌ひの無い方ですが、先ア御料理では汁物が好きで御座いますし又菓子類の甘い物が好きで格別胃にも障り　ません。



高田夫人

▲舅姑は早くに没しましたが、舅は先ア長生の方で御座いましたこれは誠に淡然とした氣質で、私を實の娘のやうに愛して呉れましたから、存生中は始終側を離れず世話を致しましたが、寒い時分外出しますと血の出る病氣になりましたから、外出は夏分とばかり定め平生は籠り勝で御座いました、其様な習慣から私も自然外

出嫌ひになつたのかも知れません。

▲衣服

衣服は一向搆はない方ですけれども、矢張り昔者ですから、人樣のを見ましても洋服より日本服が宜しう御座いますネ、振袖姿なぞホントウに好いと存じますよ。尤も餘り執濃い摸樣や色取は嫌ひで、黑とか薄色とかが好きなのです。近來は西洋人にも日本服を着る者が御座いまして、先頃香港丸の船長が自分の娘に着せる爲に、善い加減なのを見計らつて呉れと賴んで寄越しましたが、私は何樣なのが好いか判らないに關はず、三井へ參つて藤色の裾摸樣の上着へ緋の紋綸子を重ね、それに赤襦珍の丸帶を配合させました。さて着樣が判るまいと存じて、人形へ其通りの衣服を着せ、其動作の見本として錦繪を參考として添え送りましたが、大層喜んで早速其服裝着用しての寫眞を送つて呉れました、けれども衽を左り前に着用致し、人形の島田髷を眞似て大きな妙な恰好の物を頭へくッ付け、誠に可笑しい姿でしたよ。

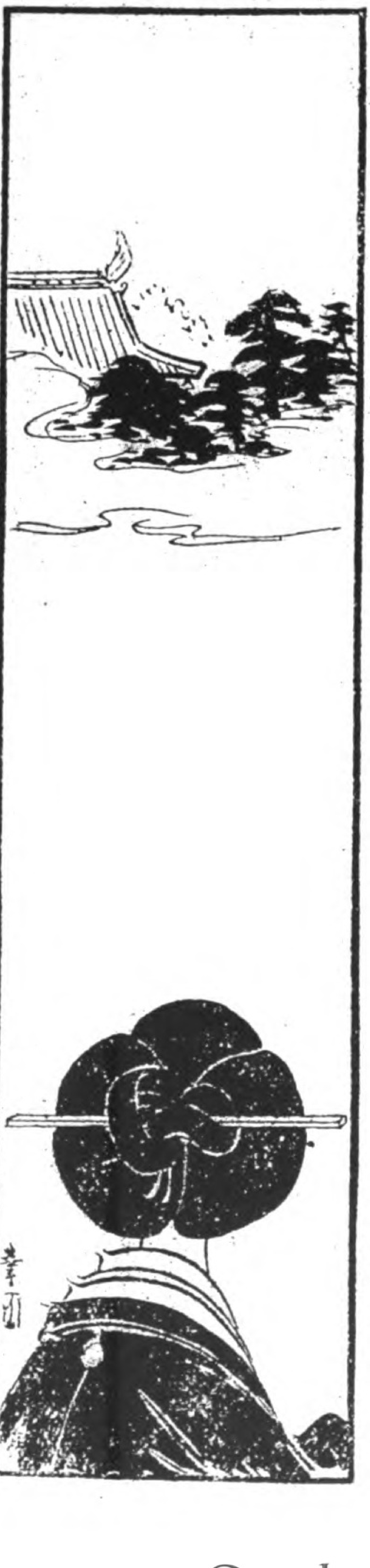
▲髮

腕が惡いので、丸髷には滅多に結びませんが、大抵銀杏返しで、時々束髮にも結びます。

▲小鼓

琴でも長唄でも義太夫でも聞くのは好きですが、自分で致すのは好みません。但だ近頃妙な稽古を始めました……。ハイ能の小鼓で當年で三年ばかりになりますが、其故か身體が大層丈夫になりました。あれは體を眞直に致して肱を張りますし、右の手は打つのに力が入りますし、又かけ聲を出すのが自然と胃の働きを助け、胸部を擴げて衞生に好いと見えますネ。併し私は謠が出來ませんので、師匠が困ると申します。ハイ高田は寶生流の方を致しますが、私は聞いて居るばかりで……、如何致しても謠が出來なければ、本式に鼓は打てないさうです。初の中は懸聲が却々出來ませんで、師匠の前に向と可笑しくつて／＼耐へ切ませんでした。

記者は小鼓を打たるゝ夫人の御姿を寫生したき希望抑へ切れず、再三辭されるのを是非にとお願ひ申し



上げましたが、夫人は終に記者の切なる願を容れられて奥より小鼓を持ち出でられ、何時も稽古の部屋でと表座敷へ導かれました。さて此お座敷の入口には河村清雄氏の例の木目利用的油畫を掲げられてありましたが、清淡瀟洒と薔薇に骨牌を描かれたものです。横手には早稲田大學開校式の夜景即ち紅提灯行列の眞景を寫された油畫を掲げられ、お床側の違棚には、象牙製棗形の香爐や青貝入笈形の置物、蒔繪の硯箱など配置好く列べられてあり、向手のお庭は蓊欝として喬木枝を交へ、折柄一重の密雲より墜ち來つた小雨に、一層の深緑を染め出しました。

夫人は此時まで木陰に箒を扱つて居た書生さんに

雨が降つて來ましたから最早お止めなさいよ。

と優しく聲かけて障子を閉められ、件の小鼓取り上げて姿勢を整へられました。記者は寫生に着手しましたが、十數分間少しも姿勢を弛されず、寫生中にも話されました。

鼓の皮は人々の手の力によつて厚い薄いが御座いますが、私は女にしては力が強いとかで、厚い皮を張つて呉れました。

斯くて記者の拙き寫生を喜ばれ、尚ほ清談に時を移され、さてお別に臨んで、又お出下さい／＼と繰返されましたのは、記者の深く感謝致す所で御座ます。

家庭

婦人の生理機關

女子高等師範教授　下田次郎

諺に命有ての物種といふことを申しますが、幾ら命が有ても始終病身では詰りませぬ、人生の本當の味は唯健康な人に分るものである、併し如何程身体に申分がなくても、精神が健康でなくては駄目です、神經質で物事が氣に懸り過ぎても、世の中は面白く渡れませぬ、それで人はみな身心共に健康でなくてはならぬ、是があらゆる働きの基てあるから、此の二つに申分がない樣に皆人は先つ務めねばなりませぬ。

▲男女健康の比較

男子と女子は健康の維持に何方が自然に都合好く出來て居るか、是は一槪には申せませぬ、一得一失がある、女の兒は良く育つ、男の兒は中々手が掛つて育ちが六かしい、生れる時死ぬるのも男が多い、又怪我でも女の方が早く直る、出血しても女の方がよく堪へる、男子の臓は胸部のもの即ち心臓、肺臓がよく發達して居る、この二つは活力の元で、男子の活力の大なるは一はこの事實に基く、夫で酸素を多く取り、炭酸瓦斯を多く吐く、血液でも、酸素を取る血球素の數が男子に多くて、血の比重も男子が大である、女の血は水く々して居る、酸素は活動の本である、夫が少くて女子はすむ、女子の活動が男子に劣る所作てある、夫で大勢集會して吐く炭酸瓦斯が溜つた時にも先ヅ困るのは男子で、窒息も男子の方が容易にする、活動の大なる丈けには食物も男子の方が肉を多く要する、女子は割合に植物を好む、大根やお薩の好きなのも一理ある、

茶漬に香の物でも男子よりは堪へられる、即ち女子は欠乏不自由に堪ふる事が男子よりは易い、境遇の變化、例令ば是迄贅澤をして居た者が、急に九尺二間の侘住居をする樣なことになつても、早く新境遇に適應する、殖民地でも女子の方が困らぬ

こんな工合に女子は生存上男子よりは或點に於て都合がよく出來て居る、女子は自然の寵兒である、自然の目的は種の保存即ち人間なら人間を代々生み次いで行くとである、之を主もにする者は婦人である、夫て自然の利害と婦人の利害は同しであるから、自然は婦人を保護する、自然は婦人に都合よく出來て居る、長命も婦人の方が多い、お爺さんよりはお婆さんの方が何處にも多い、或は孫の世話をするにしても女の方が役に立つから、自然は種の保存上お媼さんを殘して、お爺は構はぬのであるといふ人もある、

▲身体の衛生

併し又一方から見ると女子の方が身体上損なことがある、女子には月經といふ者がある、月經の時期は短い、一週間を出でぬが、是が來る迄には身体上の準備がいる、その準備が出來て、成熟した時に月經となるのであるから、其前後に身体上の波瀾がなくてはならぬ、即ち若い婦人は波狀的に生きて居る、高低のある坂道を生理上歩いて居る譯である、女子は屢々變化すると或人のいふのもこゝのことである。男子は之に反して、かゝる循環、變化がないから、生理上平坦な道を歩いて居るのである、夫でこの方では男に躓きが少ない、又女子には產といふ、大厄があつて、姙娠中又は產褥に在つて倒れる者も少くない、これが全く男子にはない現象である、即ち女子は身体上損の所はある、多くの負擔がある。

そこで女子の衛生には男子よりも余計なことが要る、月經中は身心の働きが鈍る、物事が大儀になる、其間の婦人に他の婦人と同じ事を課するのは殘酷である、婦人には同し人で出來不出來の差が大であるのは、かゝる變化があるからである、試驗の成績でも同し人で

案外の差がある、あんなに出來ぬ人ではないがと思はれる成績を出す人がある、それで女子の成績を評價するには、受驗者が月經中であつたか、何うかを計算に入れねばならぬ、學校の課業でもその間は体操を休ますが、他の仕事は同じ事をやらす、身体の負擔を輕くするな



米國女子の運動服

ら、同時に精神の負擔をも輕くするの必要はないか、獨り學校のみならず、家庭に於ても、工場に於ても、下女の働きに於ても、これを充分に顧みなければならぬ、それに關する不注意の爲め、女子の身体弱められ、精神に異狀を呈し、子

孫の繁榮を害し、家庭や社會の平和を亂すに至ること珍らしくない、されば月經は女子の私事ではない、社會の問題である、國家の問題である、否人類の運命に關する問題である、

女子の健康を進め、立派な体格となつて、强健な子孫を作ることは女子の任務である、何んな子でも構はぬ産みさへすれば女子の役目は濟むといふものではない、良い子を産まねばならぬ、女子の大手柄は良い强い子を産んだ事である、自分に學問はあるが尫弱い子を一人生んだよりは、學問は劣つても立派な子を三人生んだ方が手柄である、又自分の爲めにも健康は愉快である、人目からも發達した身体は美で心地がよい、それで女子も体育を盛んにして、体操も運動も遠足も登山もするがよい、(身体の都合がよい時に)、滿州の婦人は足を細くして、歩けぬのを、動かずとすむ、働かずとも暮せる身分で、結構であるとして居る相なが、こんな事だから振はない、石炭を焚けば船が動く汽車が動く、食物を身体につぎ込めば活動を促すのは自然ではないか、有機体は活動する爲に出來て居る、鑛物は食物を取らぬから成長も發達もない、活動するが天然なら、男も働かねばならぬ、女も働かねばならぬ、深閨に閉込めて、日蔭の植物の如く、蒼白となつたのを美人と見たは古の事である、女子の体育は大に奬勵せねばならぬ、ことに運動不足勝の東洋女子に勸むるの必要がある、自身の爲に、國家の爲めに。女が富士山に登つたとて、仰山にいふ人があるが、何か不思議か、西洋の女はアルプス山に氷河を跋渉し、ベンガルに虎を狩る者もある、富士に昇るのが珍らしい樣なことではまだ／＼前途が遠い、婦人の游泳は余り聞かぬが、是も奬勵せねばならぬ、海國の男兒を産むべき女子が海に出ると水の色の樣に靑くなる樣では不可ぬ、野外の運動も遠足もなすべしである、國家の競爭は又婦人の体格の競爭である、元は十七八にもならうものなら、女は内に許り居て、運動といふたら庭の徒歩位が山であつたが、今日はどうであるか、二十以上三十代の婦人がボールだの、ダンスだの、ロンテニスだの

といふて飛んだり、跳たりして居る、扨々世は末になつた、女のあの坐形はと熱い涙をはら〳〵と滾す老人もあろうが、何時までも其考へで居ると、日本は餘所に取られて仕舞ふ、勿論女は何處迄も女らしく、優美で、優容でなくてはならぬ、角々した、無骨なお轉婆はいかぬが、これは体育と衝突するものではない、運動と矛盾するものではない、禮儀も作法も身体の生地が出來てから、見られるので、生地を吟味すに、形を矯めたとて、良いものができる氣遣はない。

▲精神の衛生

次に婦人の精神の衛生に就て少しく申しませう、身体が精神の影響を受くるの大なるが如くに、精神はまた身体に大に左右せらるゝのである、夫で男女の身体に相違があらば、精神にもまた相違がなくてはならぬ、男女の身体を生理上、解剖學上仔細に吟味すれば、身体の全体、頭蓋、腦髓、五官、臟腑、血液、手足より毛髪の末に至るまで違つて居る、實に或人がいふように、女子は頭の先から小指の先まで女子である、胸部の内臟に付ては前に申したが、腹部の臟腑即胃、は割りに女子の方が大きい、腸も割合に長い、且子を産む機關をも有して居る、とに角腹が割りに大きい、これらの機關は精神の働き、殊に感情と大關係のあるものである、氣分といふものは重もにこれらによりて支配されて居る、腹がわるい胃が痛い等の事が、氣分に大障りになる、すべて各人の人生觀は、其人の身体の中分を參考せねばならぬ、人世は苦が多いものだと悲觀する人に腸胃病の人が多い、かゝる人生觀は公正なものではなくて、人生の腸胃病觀である、そこで、婦人は腹部の機關に支配せらるゝ事が男子よりも大で、ことに男子にない子宮といふものが感情とは余程關係がある、身体か全体に工合が違ふのであるから、婦人の氣分と男子の氣分は異なる所がなくてはならぬ、我々の氣分といふものは身体の各機關の活動から來る生理的の感覺が集合したものである、それで女の氣分は男には分らぬ、男の氣分も女には分らぬ、併し快活な

氣分を有つて居ようと思はゞ身体が健康で各機關が正順に活動して居ることが男女とも必要である、身体の機關が健康だと其れが体内にあることを知らぬ、胃病になると胃があることとか分る、脳病になると脳があることが分る、身体に申分がないといふのはこれらのあることが分ら



紐育の女學生

ぬことである、世にはかゝる申分があつて、社會と戰ひ、世界と戰ふ所ではない、生涯自分の胃や腸や脳や肺と戰ふて居る人がある、氣の毒なことである、だからどうしても健康でなくてはならぬ。

女子はまた感動性が强い、

感動性とは精神上又は身体上の刺激に反動するの度合をいふのである、例せば女は氣候の變り目がよくこたへる、狂氣や自殺と氣候の關係でも女の方が著しい、朝起きた時の天氣が氣分にこたへることも女の方が大である、女は外觀の爲に直に本城を乘取られるといふ人もある、又赤面したり、吃驚することも、女の方が容易で多い、赤面は血管運動神經の嵐で、顔に血液の寄ることである、これは人間にかぎる現象で、動物は赤面せぬが、此赤面が婦人に容易に起ることは刺激に對する反應の容易なることを示すものである、また女のよく笑ひ、よく泣くのも其れが爲めである、女は一寸の事に吃驚して動悸を打たす、或は爲めに病氣となるものもある、プロシアの學童の自殺の統計によると、罰を恐れて自殺したものは女子に多い、こんな工合に女子には一寸の事がこたへる、それは物事が大事に至らぬ中に女子は早く警告を受くる所以で、生存上、境遇に適應する上に於て都合の好い事である、男子には割りに大事に至るまで物事がこたへぬから、氣がついた段には往々遅いことがある、この點に於て婦人は得である、女の愛嬌といふものは、この物事によく反動して、一寸の事にも吃驚して、男子によりすがるといふ邊が大きにあるのであろう、男子は己れの力を自信し、婦人に依頼されるのが愉快かも分らぬ、それで婦人でツンとして餘り澄したのは、愛嬌がないとて男子は好かぬかも知れぬ。

▲男女躰力の相違

女子のこの感動性の強いことは、又疲勞の容易なることも關係がある、よく感動するからよく疲れる、それで女子に仕事をさすには一度の働きの時間を短くして、休息を長くなくとも（長ければ尚よいが）屢々することが必要である、女子は勢力の蓄積が少い、早く盡きる、その代り疲勞から戻ることも早い、男子は六ヶ敷い仕事に長く耐へる、女子の力の出し方は短くて一散である、女の方は始めに力が出る、例せば棒にぶら下つて、体を上下するにしても、すぐに腕がつか

れて、男子の樣に幾度もできぬ、女子では始めの試みが握力でも一番よくゆく、男子のは二度三度目位に強いのが出ることがある、こんな工合に力の蓄へ方、出し方、耐へ性も違ふ、だから仕事でも、男女自ら相違がなくてはならぬ、すべて女子が男子と同じ事を爲ようといふのは、自然に對する謀反で、つまりは自分の損である、併し今日我國で爲て居らぬ事で、女子に出來る仕事は幾らでもある、又教育も大に進めねばならぬが、性の區別は何處までも忘れてはならぬ、女子は纖細に出來て居るから、男子よりも多く勦らねばならぬ、女子の教育も、女子の職業も總てこゝから割出して來ねばならぬ、要するに女子は何處までも女子で、女子の最も麗はしき名は女子の外にはないのである。

勞力に堪ふる献立

溪流女史

この前食物の事を申しましてこれに關係したお献立のはなしを續ける約束でしたからこゝには勞力に堪ふる献立を少し述べましよう。勞力と申すと何か車でも牽いたり土方でもするやうに聞えますが 私がこゝで申すのは心意と身体とを働らかすといふ意味ですから、たとひ一日座りこんで横の物を竪にもせぬと思はれる者でも非常い心配でもしたり強い勉强でもなさればつまりは勞力です。殊にこの種の勞力者は食欲も少く消化力も不十分なのですから猶更食物の献立がむづかしいのです。身体を動かす方の勞力は適度ならば食欲が增進し消化力も十分ですから設令さほどよい献立と思はぬものでも多量に食べますため滋養が十分になるわけです。

さて日本人の体質と勞力とを合せて考へどれほどな營養を取つたら健全な生活が營め、且漸々と身体を壯健にし体力を増す事が出來やうかといふことはいろ〳〵な學者がお調べになりましてまづ中等の勞力を執る壯年の男子であれば一日の食量中蛋白質物が百グラム脂肪が廿グラム炭水化物が四百八十グラムほどいる

わけですが、さて何ぞの位たべればこれだけの量に達するかと申しますと、まづ普通米の御飯ならば四合軽めに食べこれに朝は汁と一寸した煮豆か鶏卵位ですまた晝は肴一切と野菜類の煮しめ晩は牛肉か鳥肉凡四半斤位に根菜類か野菜類を適度にそへたもの位でまづあらかたこの量に達せられるのです。

試みに料理の間に失ふ養分や醤油砂糖などで味をつける爲に増へる滋養分を計算にいれずに分析表によつて勘定をしますと次のやうな献立中に含む蛋白質脂肪炭水化物の量は左の通りです

▲朝 豆腐の味噌汁　二椀
　　半熟鶏卵　壹個
▲晝 鰹の煮つけ
　　砂糖煮の茄子
　　小松菜　浸物
▲晩 椎茸、百合、三ツ葉の澄し汁
　　鶏肉すきやきと葱

食品	重量	蛋白質物	脂肪	炭水化物	纖維
米飯	一三〇〇、〇（四合量）	三七、六二	〇、四〇	三七七、三四	三、二四
野菜漬	五〇、（七切位）	〇、七〇	〇、〇五	三、〇〇	〇、五五
▲朝 味噌	三五、（二杯）	五、四五	一、七九	五、九九	一、六五
豆腐	一〇〇、	六、〇〇	五、一〇	一、一〇	〇、一〇
鶏卵	五〇、（一個）	六、五〇	六、〇五	〇、三〇	—
▲晝 鰹	一〇〇、（一切）	三、〇〇	〇、八〇	—	—
茄子	一〇〇、（小二個）	一、〇〇	〇、一〇	五、一〇	一、四〇
小松菜	一〇〇、	二、五二	〇、五二	一、一八	一、七九
▲晩 椎茸	一〇、（大二個）	一、一六	〇、一七	六、七七	—
百合	五〇、（大一個）	一、六七	〇、〇六	二三、〇八	〇、七二
三ツ葉	五〇、	〇、四五	〇、〇六	一、三五	〇、六四
鶏肉	二〇〇、（四半斤）	一八、五〇	九、五〇	一、二〇	—
葱	一〇〇、	一、四七	〇、〇七	四、三五	一、〇六
合計	二、〇四五、〇〇	一〇四、〇九	二二、六七	四二五、五二	一一、三四

此の表について見ますと蛋白質物が百〇四グラム餘、脂肪が二十二グラム餘で、これは標準の營養量より多いのですが、炭水化物は四百二十五グラム餘で、よほど少いのですから、消化力さへ十分ならば、今少し芋類などを加へてもよいかも知れませぬ。併し纖維の量が多いと消化がわるくなりますから健康の度によつて斟酌せねばなりませぬ。中等の勞力を取る婦人には蛋白質物が七十七グラム脂肪が十六グラム、炭水化物が三百八十四グラムほど、入用な比例でよほど男

子よりは少いですが、やはり蛋白質も脂肪も炭水化物も夫れ〳〵入用ですから、女だからと申して儉德のつもりで、夫や小兒にたべさせたお肴の尻尾や、胡蘿蔔牛蒡ばかりではとても十分健全な生活は出來ませぬ。然るにわが國の一般の有樣を見ますと、衛生上の智識の幼稚な爲か、兩極端の弱い夫人をみます第一は

▲働きすぎて弱くなる婦人

でこれは前申したやうに、人は心意や身体をつかへばつかふだけ、其の補充をせねばならぬものであるから、小兒の養育の爲に夜中熟睡が出來なかつたり、哺乳の爲に多量の營養を分配したり、家計其の他内外の事で一通りでなく心勞でもするものは、特別に營養を取らねばなりませぬ。ところが事實は丁度反對で、一家の婦人はあまり屈托が多かつたり、格外に忙しかつたりしますと、自分の身体の營養などは注意するのも面倒になつて、つひ進まぬ御飯をお茶漬にして、香の物相手に流しこむといふ風になり、愈々營養は不足し、益々身体は弱るといふ傾があります、これらは自分の身体を大切にせぬ無智のしかたで、遂には貧血症に陷り、神經衰弱を興し、一生羸弱に終り、不治の病に罹るやうな不幸を招ぎ、良人にも迷惑をかけ、子供にも不自由をさせるやうになりますから、家をおもひ、子を思ふ賢母良妻は、まづ何事をおいても自分の身体の營養を考へねばなりませぬ。第二は

▲怠惰で弱くなる婦人

いかほどよい食物を食べましても、懶惰で運動をしませぬ時は、消化力が弱くなつて、十分の營養となる事は出來ませぬから、たとひ戸外の運動は出來難いとしても、臺所で食物の料理をしたり、戸棚の整理掃除の監督などに身体を働かして、よい食物が十分消化して身体を養ふやうに考へる事が必要です。お話は少し横道に外れますが、私の見た所では、中等生活を營む家の奥さんが、あまり尊大で、怠惰ではあるまいかと思はれます。手のかゝる小兒や、老人のない家庭では、水道を引き瓦斯でも用ひて、臺所を便利にすれば、良人と自分と一二人の家族くらゐの食事は、自分の手

一つで整へられぬ事はありませぬ。所が多くは自分は公務にも關らず、交際もせぬくせに、取次だの御飯たきだのと、種々な女中を抱へて費用の多いのを苦にして不便な生活をし運動を欠いて、食事も進まず貧血症に罹つたり、氣鬱症に陷つたりして、醫者に愚痴を訴へなど實に馬鹿げた事のやうに思ひます。

殊に身体の勞働が少くて、心力だけを過勞する人は、纖維が少くて蛋白質の多いのを望まねばなりませぬし、同じ脂肪でも豕の脂肪や揚物に用ひる胡麻の油などは、よほど消化のし難い方で、鷄卵や牛乳に含まれて居る脂肪は、消化のよいものです。まだ同じ魚類の脂肪でも、生のものは消化よく、煮たり燒いたりしたものは稍々消化がわるくなりますから、消化の不十分の人には、鮭や鱒のやうな條虫の恐れのあるものは取りのけですが、其の他の魚は生で食べさせると消化は早いです。

殊に料理の際拙に湯でこぼしたり洗ひすぎたりしますと、切角の滋養分も味も落ちる事がありますから、よほど注意すべきです。とかく日本の料理法は、あくをぬくとか洒し上げるとかいふ事が多く、爲に滋養分は水に溶解たり汁の中へ浸出されたりする事が多く、味は淡泊でお菓子のやうな、きんとんや、よせものなどの口取りと食べ合はせると、口にあはぬでもありませぬが、實際の滋養分はよほど減つて居るのです。それでどうかといへば、味の淡泊なのを、砂糖や味醂で補つて食べられるやうに調理するのですから、差引營養の價としてはよほど損をして居るのですから、早晩改良せねばならぬのです。尤も本式の料理となれば、幾分かこの點も考へて居るのですが、こゝに申したのは普通の各家で下女や何かが無暗にする手料理について述べたのです。この點から申しましても、奧さんが臺所で自身庖刀をとる事が必要です。

私は常に女子の中等教育、即ち高等女學校の科目中、料理法の實習が裁縫よりも重きをおかれて居らぬのを遺憾に思つてをるのです。無論裁縫も必要のない事はありませぬが裁縫は家庭で古風の母親に從來のしかた

を教はつて居つても、大した損があるわけではありませが、獻立や料理法は十分研究して行かねば日本人の體力が弱いとか、氣力がないとか心細い話を始終きゝますから、各家の臺所は、どうしても改良して食品の目方を量り、主人がどれほど忙しいから、どういふ營養物を食べさせやうとか、子供が試驗前だから何をいくらほど食べさせねばならぬとか、自分が何々で心配したから、どういふ食物でなくはならぬとか、一々よく考へられるやう、學校で十分の時間をかけて、よく練習の出來るやうにしたいものです。中等敎育を受けた婦人としては、畫のかける事も、ピアノの彈ける事も、花の生けかた、茶の立てかた何れが出來るのも結構には相違ありませぬが、臺所の改良を考へられる婦人は、もつと必要かと思はれます。お話がとんだ方角に向きましたが、筆の序に一寸述べました。（完）

老後の心得

水原翠香

◎我子に嫁を迎へて家政を讓り、自己隱居と成たる後は、再び家事を念頭に懸ずして、其欲する處に從ひ、樂しく餘命を送るが人として當然の事なるべし。然るを兎角に事實相違して、姑婦の間に風波たち、甚て實子の忰まで相反目するに至るが多きは、淺猿しき限也。其緣故を糺さは種々の理由互に有べしと雖、世間公平の眼より觀來れば、若夫婦も不孝の名は免れざるべし、然るも其初發の根據は尙姑の僻より生ずる物十の七八迄なるが如し。凡嫁となる者は大かた妙齡の處女假令生得いか程怜悧なりとも、又學校は優等の卒業生たりとも、家政は讀本にて社よみたらめ、實地の經驗はなき者也。姑が多年熟練の目より視て、奚か完全なるべき、欠點だらけは其筈也。姑とて若年花嫁の昔を追想見よ、然こそは有けめ、又其頃と今とは時勢の變遷殆 別世界の如く、日々の事に付ても今の昔に

優れる事多く、十九や廿の女子が我に比べては字を知り、算術を知り、物理を解し、我は聴ても合點のゆかぬ事をも克辨へ知るをや、思へは我身耻かしからずや、唯所帯の事に脱落あるは經驗なきが故なれど、無學の我だに馴ては出來る事あるを、況や我よりも學識ある婦なれば兩三年のうちには天晴の所帯持と成べしと、氣を永くして万事を宥恕し、日々の食物、衣服等、瑣細の事は人各々性質を異にし、好惡の同しからぬは親子兄弟猶且然り、況や他家に育ちて其習慣も相違せる者をや、彼は好み任し、我は我の欲する儘にして可也。家計に甚しき支障なき限りは强て同じくするの必用なし、各々自由にして咎めざれば紛儀はおこらざるなり。

◎婦を娶るは人一生の大事也、其始を愼重にして苟も輕跳に定むべからず。先尤信すべき筋を求めて聴合せに念を入べきは勿論、男子は物事大やうに屆かぬ勝と成ものなれば、母たる者十分に注意を加へ、所謂仲人口に乘事なく、能事は聽に不及、惡き方欠點を委細に糺して、其位の事は苦からずと思はゞ表向に申込むべし。我方にも欠點は必有るなれば、夫を秘さず露出して、双方得心づくにて結婚談に及ぶべき也。西洋流に先懇親を結び、本人同士は勿論、親も双方往來して克視察したる上にするが最上策なるべし。

◎扨娶りたる以上はたひと存外の欠點ありとも、家名に拘はる程の大事ならずば、所謂因緣是非なしと諦めて、陰に陽に克教へて、其欠點を決して人に語るべからず、我共皆慈愛を以て臨めば、婦も又化せられて次第によくなる者也。是を教ふる事始にあり、いかなる我儘者にても嫁したる當座は柔順に姑の言を聴者なれば、其機會を逸さず、萬事を都合宜樣に教へ習はすべき也、然るを其當座は珍らしき儘に嫁をば客の如く饗應て、何事も十分に爲さすれば、婦は次第に附上りして、漸々氣隨の本性を顯し、姑の愛は憎と變じて、忽風波穩ならず、終に仇敵の如く成行くは、婦も宜からねど、姑も又機會を逸したる脫落なり。

◎家に附屬の道具衣服より、日用品に至る迄、緣談定

りたらば婦の未來らぬ前に克考へて、所帯に付て必用品の外は取除おきて、新夫婦に讓り渡し、扨其除置たる中より折に觸れて褒賞のやうに一二品宛取出し與ふれは婦も有難く悅ぶべし、既に一度渡して後取戻すは大に人氣を損ふ上に、時に何か惠與すべきも我私房金にて求めざるべからず、然ては思ふに任せぬこと、婦のみならず我女兒孫杯への進物も同じければ、豫其準備なかるべからず。初に田も畦もと丸任せにし置て、後に是は我物也、猥に遣ふべからず杯いふは一家中母子の間にて誰が何を遣ひたり共、苦からぬやうなれど、既に是は誰が物と名がつけばソコガ人情として、然は儘ならぬ事多し、此事肉親の子女と雖、猶然り、況や婦に於をや。

○父母は父母の財產を有して別居するが最上なれど、中人以下は經濟の許さゞる爲に據なく同居するとも、其便室は必別にし、三度の食は一卓を圍みて爲を可とし、各々一身上の買物外出の費用の如きは伜の厄介とならざるを可とす、一から十迄伜の金錢を出させては、親は當然と思へども、子の身に取ては甚有難からず、老親と妻子と孰といはゞ、稀なる孝子に非ざるよりは十人は十人共に妻子に心の傾くが人情の常なれば、妻子に物を强請らるゝは當然と思ひ、又可愛き心地もすれど親は養ふべき義務有とは思へど、其餘の事は案外の心地してよき貌をせず度重れば親は腹立て、不孝者と罵り、子は親を厄介視して老の心ます〳〵僻み、母子爭論の絕間なきに至る。

◎前條の紛紜なからむが爲に、老人も私房金の貯蓄必用也とは申なり、凡人生卅才に餘らば、老後の計を慮り歲月と共に貯蓄すべき也、其額の多少は各自の腕に有り、非如少兒にても積めは必夫だけの功あり、光陰は流水の如し、十年二十年は夢中に過ぐ、紅顏の美人忽白髮の老婆と成、既に老來りて後は又如何とも詮方なければ、一日も速に思ひ立て何にもあれ手藝を學び、內職を營みて貯蓄法を講ずべし、遠き慮なき者は必近き憂ありの語を常に誦して忘るべからす、又既に老年に及びたり共、幸に若き時に習得せし

益あり、身も又無病壯健ならば其益を以小遣取すべし、爲ざるに增る事萬々なるべし。

◎俗間昔より誰も克いふ言ならが、悴に婦を迎へて世帶を譲り、隱居して左うちわの樂をして孝養を受くべしとは、扨も身勝手宜事盡しの贅言なる哉。然は問屋で卸さんや、さる言を當に爲が抑誤解の序開也。天三物をかさず、世中に二。。。。。つよき事はなし主任と成て身心を苦め、勤勞すれば、一方に自由の利事あり、隱居して閑散になれば身は易く配慮する事なき替りに、金錢に遠離るは定理也。夫が否ならば勞苦を忍びて退隱せざるに不如、然れ雖悲哉新陳代謝も世の定理なれば、心斗は猛くとも年を逐て身心共に衰へて、勤務に堪がたく成行き、止を得ず後進に譲りて老朽を養はざるべからざるに至る、或は二竪の犯す處と成て死期忽に至り、一日の安をも得ずして生涯を齷齪



の中に擧るも餘り稱賛られぬ話ならずや、若年より疾く心掛けて老後の計をなす事女子なりとて爲難き業に非ず、さばれ運命により種々の難に遭ひ財を失はゞ是非なしと諦めて、志を屈せず、新に何なりとも身に適ふ事をなし、少宛にても絶ず貯蓄して、我財を自力に造るべき也、夫すらも得せずとならば我身の活地なきを思ひ、耻て今日飢ず凍ず安眠せらるれば足れりとし、子等を恨まず、耳は遠し、目は疎し、厄介視せらるゝも是非なしと諦めて其宛行に甘んじて、現世の欲は思ひ捨て、佛に歸依して後世の淨土を願ふより外又他事有るべからず。



◎老年に及びて第一に心懸べきは人に疎外せられぬ工夫也。老ぬればとかく若人に厭ひ嫌はれ易し、我若かりし頃老人の處作を傍痛しと思ひて事、又姑に叱られて又しても懊惱と厭はしかりし事等を追想して、成べく心を廣く寛大にもち

て、瑣細の事に頓着せず、若人の邪魔にならぬ樣に常々注意するにあり、乍然當主の爲に母に相違なきなれば、當然の事を遠慮するには及ばず、夫迄異に謙遜して倅や嫁が母樣にとて態々供する食を勿體なし抔いひて喰はず、老人なれば暖に着せむとする衣服をも着ず、總ての事是に類するは折角の志を無にして人困らせと云者也、是又一の僻なり、愼むべし、其正反對に其當然を口實とし、事毎に親風を吹かせ、苟はも嫌言、猜忌、諷刺等を云ふは皆自ら進で忌嫌らるゝ種を蒔く也、いかなる孝子も斯の如きは其母の無情を歎き怖むべし。

◎老ては心の焦燥もの也、壯年に優長なりし人も老ぬれば氣短くなる、況や氣隨にくらしゝ人は怺情なく成て、暫時の猶豫も出來ぬ也、其情を察して老人に焦燥せぬ樣に爲は、嫁の勤なれど、卓絕の才女に非ざれば然整頓する者に非ず、普通は惡意にはあらで、多忙に忘れ、或は事に紛れて手遲れと成がち也、成べく早くして待てやるべし。

◎老若自然に其意相反する物にて、若者の面白く笑ひ興ずる事は、老人に悶慣老母の怡ぶ事は嫁には嬉しからぬが多きは、猶幼兒と大人の好處相違する如く、萬事に付て見ればいひ度成、聞けば腹の立つなれば、兎角みざる、聞かざるいはざるに不如、此庚申を守るには別居を上策とし、同居にても常に出かちにして友を訪ふとも、神佛に詣づとも、又は劇場寄席にもあれ、心の欲する儘に出あるき、壯健ならば旅にも出て山游の佳景に世事を忘れて、命を延る抔、在宿日を少くすれば、自己は心も紛れて面白く、嫁は氣を易くし稀に歸宅すれば、珍しきに大切に待遇する物也、然而時に嫁や孫にみやげの一も遣して、其心を悦ばしめ、又嫁の遊びに出る時は、留主居と成て互ひに娛樂を分ち、隔意なく密事なく、さら／＼として餘命を送る又樂しからずや。然有てこそ眞の樂隱居とは云ふべけれ、人も羨みて結搆といふ、然るに不可思議なるは世上の老婆輩、此樂しみの十分に爲能ふべき身にて在ながら、自好みていらざる種々の配慮をし、懸さがられて

も世話をやきたがり、又他より結構なる御隱居といはるゝを、何故にか甚忌嫌ひて、頻に其身の不運にして氣象多く、萬事不自由なる由を人に愁談て、お氣の毒といはるゝを怡ぶ人多きはいかなる心ぞ、鰥寡孤獨癈疾ならばこそ氣の毒ともいはめ、其身は無病老健にて立派なる男子在、其身安閑として在ても飢ず凍す、日を送らば決して不運の人に非ず、其上の樂と不自由は自己の心懸の如何に在り、家族の不熟も又各自の心得惡きが故のみ、詰りは不運不自由を他人に語るは自己の擅を吹聽して、暗裡の耻を明處に曝すもの也、聽者向ひては氣の毒と云ふとも背きては譏り嗤ふべきのみ、何の得る處か有る、愚も玆に至而極まれり。

◎昔より和漢の史上に載たる孝子は千萬人に勝れて珍しければこそ揭げらるゝなれ、普通に有べきに非ず、今にても稀には孝心厚くして、其妻を誡めて老母に奉仕せしめ、富にあらぬも其心の欲するまに〱些の不自由も感せざらしむるもなきには非ねど、實に是雨夜の星にて押並ては社會の交際と妻子の費用に餘裕なく、孝心なしとには非ねども、目前の必要に逐はれてツイ老母の小遣迄は行屆かぬ勝に成物也、老母たる者諒せずんば有べからず。

◎老人の子孫に疎まるゝは自然のみ、眼も耳も疎く成ぬれば動ば見誤、聞違ひし、物喰ふに齒脱たれば貌中のうごく如きを傍人嗤へば、腹立て此齡迄生存てみよ誰とて同じからむと叱り、又家族打集ひて面白氣に笑語るを何事ぞと問へば此方の事お聞に及ばぬ抔やり込るは子孫の惡きなれど、子孫とてさして惡意有るのみには非ず、只遠き耳に解る樣にいふが面倒なるより、又他聞を憚る事柄を大聲にいへば、老耳の聽とらぬ先に雇人抔の耳を欹つるが故に、ツイ云はぬ樣に爲なるを偏我に隱すと思ひ、除物に爲と僻むなり、克思ひみよ、元來隱居とは世の除物に成の謂ならずや、萬事を子孫に任して宜樣に爲るならば、今更聞にも及ばし、我耳の遠きを思はゞいはぬも尤なり、嗤はるゝも是非なしと諦めて此上に嫌言などいひては彌疎まれて身の損なるを思ふべし、畢竟餘り閑暇過るより他の話

も聞度なる也、何なり共老人相應の事を爲をれば、人言も聞暇あらず、老後の慰としては茶の湯、和歌、又琴棋書畫、好む處に心を寄れば、自然斯道の友も出來て、夏日冬夜も長きを覺えず、心高尙に成て世事を思ふの念起らず、無藝ならば物見遊山寺集りして、法話を聽もよし、（但し嫁の噂の捨處と爲べからず）斯常に娛樂て餘命を送り、天然の終を全ふすべき也。
此稿專ら愚痴に僻める老婆を諭さむが爲に殊更に子婦の方を辯護せる物なればその心して讀たまへ。

女教師の前途

博士カルヰ氏は、米國女教師の將來につきて曰く、婦人な學校教師に採用してより、女教員の數は年を追うて増加し來り、其數五十萬に達すべきは遠きに非ざるべし。今や婦人は啻に肉躰上の母たるのみならず、又知力の母たるに至れり。然れども教師となるもの漸く多く、此れが準備の修養をなすこと彌々深くなるに從ひ、の結婚すること能はずして終るものいよ／＼多きを増し來り、一大女護國の現出せんとしつゝあるは事實なり。これ寧ろ社會に取りて憂ふべきことに非ずや。殊に彼等の報酬は甚だ薄く、僅かに衣食の資を得るに止まりて、住居は尙ほ父家の一隅に籍らざるを得ず。其仕事は甚だ多忙にして晝間數時間を日課に費せる上更に夜間の大半を答案の檢閱、授業の準備に費さゞるべからず。かくて寡居と貧乏と過勞とは彼等をしていよ／＼、社會に遠からしむ、これ實に彼等に取りて不幸なると同時に社會自身も亦、大損失を招きつゝあるなり。是等は速かに救濟の方法を講せざるべからず。

家庭衞生

一日醫者（卅九）

糸左近

▲犬毒恐水病

〔原因〕狂犬に咬まれたり、或は咬まれ無いでも、其の狂犬の血液や唾液が身體の傷に着いたばかりでも本病に罹るものである。

〔病狀〕嚙まれた傷は治つても、其の病毒は體內に入り込み、何の徵候も無く潛んでゐる、其の潛んでゐる間は、短かくも二週間、長きは六ケ月間位健康者と少しも異る所は無い、けれどもイザ發病といふ二三日前になれば、治つてゐた傷の痕が紅くなり、或は破潰れ、或は膿を漏し、刺すが如く切るが如く痛む。斯うなると、精神は鬱々として此の廣い世界に何の樂みも無く殆んど鬱憂病になつた如く次第に怯懦になり、如何なる英雄豪傑或は貞女烈婦でも其の本性を失うて白痴同

樣に變り、それより引續き恐水期に移る、恐水期になれば、水を見たばかりでも、十五分間や三十分間は咽頭が强直り、非常に悶へ苦しむ、さうして涎を流し、恰も犬の魂がのり移つたかの如く、其の音聲は犬に似て、擧動さへも犬的になる、即ちボウワツと叫び、或は戸障子にかけ上るなど、えも言へぬ憐れな境界になる、之を見る親子夫婦の情は果して如何、病者其人よりも苦しいことであらう。事こゝに及べば如何なる名醫國手も手を拱き首を傾くるのみである。彼是してゐる中に所謂犬死をなすのである、實に恐ろしき病と謂はねばならぬ。

嗚呼世の紳士貴女方よ、犬を畜ふといふことは、甚だ人道に背いたことでありまする、何せと申せば、僅かの財産を保護せんが爲に、何時狂犬になつて、天地間此の上も無き貴い人命を損はぬとも限られぬ危險物を備へおくからである。倩々世上を見玉へ、犬猫を矢鱈に愛するやうな人は、人間に對しては、大抵無慈悲なものである。ペストの爲に鼠を驅り盡すは仲々困難なる事業なれど、恐水病豫防の爲に天下の犬を殺し盡すは、一日か二日で容易に出來ることである。數十數百圓の金錢を費して、我が子の樣に伴れて歩く毛唐人を見れば、歐米の文明もまだ端緒と謂はねばならぬ。

〔療法〕發病を豫防するのが、何よりの名策である。當路の人が天下に號令して犬を殺さしむれば、此の病氣も自然消滅するのである。されど此の法律が出ぬ以上は犬の絶ゆることは無論無い、犬の絶ゆること無くば此の病も亦絶えぬは自然の道理である、故に嚙まれた時の處置法を知つておかねばならぬ。それは如何なる法かといふに、嚙まるゝ否や一刻の猶豫無く、醫者の家に走るが可い。されど醫者の家遠きか、或は近くも留守であるならば、直ちに藥舖に赴き、其の傷部に

強發泡膏

を塗擦しおき、更に又醫者の治療を受くるが可い。この樣に豫防しておいても尙發病することがある、若し發病したら、直ちに室内を暗黒にし、脊中に氷嚢を載

せさうして、半身熱浴をなさしめ、左の藥を與へ、然る後醫者の治療を受けねばならぬ。

臭剝　一〇、〇　砂糖　適宜
水　一〇〇、〇（半合）
右一日間分服

◎癩病

〔原因〕癩黴菌である。この黴菌は觸接傳染或は遺傳に依りて世の中に廣まるのである。されど情交最も濃やかなる夫婦間に傳染することの極めて少ないことから考へて見るに、其の觸接傳染性の甚だ弱いものであることは確かである。此の病に罹る者の年齡は大槪鬼も十八以上に在つて小兒を襲ふことは殆んど無い。詳しく言へば、二十歲位から四十歲までの間に遺傳性に罹ることの多い病である、我が國では九州栃木及び千葉縣地方に最も多く其の種があるとのことである。魚類を主食するものは本病を特發すると昔から言ひ傳へてゐるが、これは佛者が何か方便に說いた愚論であらう。

〔病狀〕結節癩神經癩及び斑紋癩の三種あつて、結節癩は其の發らうといふ前に近づくと、精神何となく倦み易く、眠り易く、唯鬱々として來し方行末など心配してゐる中に、時々熱が出る、それから間も無く顏や四肢の關節或は手掌足蹠に赤い斑紋が出で、數月乃至一年程經つと、鼻や額或は上唇などに粟粒か豌豆程の大さの硬い結節が出で、誰が見ても癩病ではあるまいかと、疑はるゝ樣な一種の變な面貌になる、それから毛髮は脫け、眉は落ち、硬い結節は軟かになり、皮膚は黃色を帶び、結節は潰れ、如何なる美男美女も其の面影すら殘さぬやうになる。次に神經癩は又麻痺癩とも名づけて、始めは結節癩と同じく赤い斑紋が出で兼て神經の知覺が過敏になり、少しの觸りも著しく感ず、されど間も無くこれと反對に其の知覺が失せ、引き續き運動が麻痺し、足腰立たぬ憐れな態になる、これより毛髮脫け落ち、潰瘍は壞疽り、遂に骨や關節までにも及び、それが爲に指或は手足をさい失ふやうになる、斯うなれば玲瓏玉を欺きし美人もイヤハヤ汚い

姿に變るのである、斑紋癩とは赤或は紫、或は褐色の大小不同の斑紋が出で、續いて知覺脫失し、潰瘍の出ることなどは前のと能く似てゐる、畢竟するにこの三種は互に同じやうなもので、しかも合併することがある。

病に善い病は無いが、殊けて本病は長い月日惱まねばならぬ、短くも五六年長きは三十年にも瀰る、さうして其の死ぬのは癩の爲では無くて、本病に併發する他の諸病に依るのである、知らずして斯かる人の夫となり妻となり、捨て難き優しい情あらば、實に互の不幸と謂はねばならぬ、故に婚姻は始より愼重に愼重を加へねばならぬ。

〔療法〕これには古今東西の名醫も甚だ困つてゐる所であるが、余の經驗して僅か四人の中一人だけ平愈した治療談を左に記さう。

年齡は二十二の男子で、身長は五尺二寸、色白く肉太く、体質中等性質柔和、人品も卑しげならぬ風体である。一日余を訪うて曰ふには、「私は母の遺傳で此の樣になりました、悲いことには、昔から此の病で愈つた者は殆んど無いさうですが、文明の今日なれば、若やそれでもと未練が殘るのであります、人に嫌はれ天に捨てられたる此の身体なれば、何とか先生の赤誠を以て、お助け下さる道はありますまいか。」と潸然たる暗涙頬を傳ふ。余は一面識も無き人なれど、斯の樣に言はれて見ると、同情の淚に堪へぬ。「ぢや一つ余の指揮通りに從ひなさるか、若し君の資力及ばずとならば、これ天が君を憐れまぬ因緣と諦め玉へ。」これより左の方法に從はしめたが幸に中等の生計を送る人であつたから、遂に一年有餘の月日を經て、再び余が門に淚を流した、されど其の淚は歡喜に溢れた結果であつた。併し余は思ふに一時的の平癒であるかも知れぬと、其の後一年程經て、態々訪ねて行つたが廣い東京のことゝて、何れへ轉宅したものか、今に分らぬが殘念である。かゝる無駄話はさておいて其の療法は、まづ草津溫泉に入浴して一生を送る決心をなさしめ、

内服薬としては、

大楓子油　六、〇

右丸薬として一日二回に分服

外用薬としては、

撒里矢爾酸軟膏　（三十%）

右一日數回浴後塗擦

入浴は一日四五回、食物は通常で可いと命じておいたが、其の人は、入浴は一日に六七回も行つたとのことである。或は薬に左程の功は無れど草津温泉が、非常に助けたのか、それとも其の人は他人が何と勸めても一藥を續けた爲か、兎に角一人のみの經驗なれば何とも斷言は出來ぬのである。

▲花柳病

花柳病とは淋病（淋病も含む）とカカチ軟下疳及び梅毒の總稱であつて何れも花柳の巷に彷徨ふたことが、大原因となるから此の名が附いたのである。此の病程世界中到る處に蔓つてゐる病は恐らくあるまい、就中淋疾は、彼の文明國と持囃さるゝ英佛獨米の如きですら、其の住民十分の八までは、一度侵されぬ者は無いとのこと、我が國は、それよりも少いけれど、二分の一はこれに惱まさるゝのである、して見ると情慾の奴隷者が世界に満ちてゐるのである、獸行を逞しくする者が多いのである實に慨かはしい次第である。斯る奴隷者、斯る獸類が此の病苦に侵さるゝは固より其の分なれど、それとは知らずして婚姻せし清淨無垢の人が侵されたのは實に氣の毒な次第なれば、可成詳しく病狀や療法を書いておきませう。

▲淋疾

［原因］病毒はナイセル氏ゴノコッケンである、即ち此の病毒者と交接した故であるとは、實に愧かしい次第と謂はねばならぬ。

［病狀］この病者と交つた後、三日程經つて、尿道に疼痛を覺え、續いて小便を漏したいといふ念慮が頻りに起り、厠に行く毎に多少膿汁のやうなものを洩し、洩す度毎に疼痛甚しく、男子に在つては陰莖が腫れて熱をもち、女子に在つて　大小陰唇が紅く爛れ、何れ

も數日を經れば、膿汁は其の量を增し、五六週間も經てば、性質の良いのは粗治るものである。去れど其の治療が惡いと慢性に流る、慢性になれば左程に疼痛は無いが、少量の膿汁は頑固にも數月數年或は迷土の苞にまでなるのがある。

〔療法〕豫防法は女郎花を折らぬにある、折らぬ人を撰んで夫に持たねばならぬ、その他にも傳染らぬ法はあれど、素人の方は知らぬが却つて可い。併し若しこれに罹つたら、淡泊とした食物を取り、脂肪の多い物、鹹味の強い物、及び酒殊に麥酒を嚴重に禁じ、身体を靜かにし、房事を堅く止め、屢々陰部を清潔に洗ひ、同時に心も洗ふべし。内服藥としては

　骨拜波拔爾撒謨　一、五　蓽澄茄末　三、〇

　右に黄蠟(適宜)を混ぜ、大凡六十丸となし、一日三回一回二十丸宛を服むが可い。

外用藥としては

　次硝酸蒼鉛　二、〇　水一〇〇、〇(半合)

　右一日數回スポイトを以て尿道に注射するが肝要である。

▲軟下疳

〔原因〕これも花柳病の一つで、本病者と交接するか或は接吻などすることから傳染るのである。

〔病狀〕傳染つてから四五日は潜伏してゐるが、其の揚句に男ならば龜頭、女ならば小陰唇に圓い潰瘍が出るさうして其の潰瘍は疼痛を帶び、次第に周圍に蔓り、瘡底に白い色の豚脂樣のものが出で、三四週間經つと其の瘡底が奇麗になり、五六週間經てば、瘢痕を殘すこれで治れば幸であるが、治らぬとすれば、鼠蹊部に劇しい疼痛を覺え、續いて腫れ膨れ、赤く大きくなり遂に膿汁を出すやうになる、散るのは至つて稀である俗に之を横根といふ。

〔療法〕嚴重に攝生をなし、淡泊とした食物を取り、酒は一滴も用ゐぬやうにし、潰瘍は石炭酸水を以て屢々洗ひ、沃度仿謨を撒き、綿を以て包み、繃帶しておくが可い、内服藥としては、

　大黄末　一、五　重曹　二、〇

　右三包に分け一日三回一回一包宛(三四日連服)

さうすると下痢が頻りにあるやうになる。そこで左の藥に代へねばならぬ。

沃度那篤僧謨　〇、三　橙皮舍利別　八、〇
水　一〇〇、〇
右一日三回に分けて服むべし

されど横根の出來たのは醫者に就いて切開して貰はねばならぬ。

▲梅毒

〔原因〕これは花柳病中の親玉で、最も恐るべきものである。さうして矢張本病者と交接或は接吻或は本病者の烟管で烟草を吸ふなどから傳染するのである。又遺傳もある。

〔時期〕本病を潜伏期、第一期、第二期、及び第三期の四期に分つ。潜伏期は通常二三週の間を言ひ、第一期とは二三週の後硬下疳をいふ病名になる時から後を言ひ、第二期とは梅毒疹が皮膚や粘膜に發する時で、二三年間も續く、第三期とは第二期後數十年の間をいふ。

〔病状〕第一期即ち硬下疳が始まると、男ならば龜頭など、女ならば大陰唇などに、硬い結節が出來即て膿汁を出す、然る後潰瘍に汚い色の分泌物が生じ、それが殆んど六ヶ月程經て治り、これより便毒（梅毒第一期の終りの病名）に移り、其の始は鼠蹊腺が痛み無くて腫れ、間も無く頸、腋下などが腫れ、二三週間經つと惡寒がして熱を發し頭、肩及び諸關節に劇しい疼痛を發す、これより第二期になる、此の期になれば、梅毒疹とて痛みも痒みも無いところの色々なる形の疹が銅色を呈はして顔、額手掌・足蹠・關節の屈り側などに出る、この疹に(イ)薔薇疹(ロ)苔疹(ハ)膿疱疹(ニ)濕性苔疹の四種類がある。(イ)は小豆或は豌豆程の大さの紅い點が顔頸或は胸などに出る。(ロ)は顔・背・四肢などに櫻の實程の紅い點が呈はれ、其の點の中心は乾き、其の周圍は濕つてゐる。(ハ)は膿汁を含んだ小さな粒が後に乾いて凹み、さうして褐色の斑を呈はす。(ニ)は方々の粘膜に平たい肉様のものが出來て間も無く爛るゝのであるこれより病愈酣になれば、處々に胡桃大の硬い結節が續々出で、出でゝは膿汁をもち、それより様々な

眼病を惹き起す、甚しきは盲目になつて了ふ、又骨病とて四肢の骨・頭の骨・殊に鼻骨などに劇しい疼痛を發し、遂にそれ等の骨は腐らうとし、或は腐り、物を言ふにもフガ／＼と響くやうになる。尚一層重きは内臓までに影響を及ぼし其の極端は野邊一片の烟と消るのである。されど早い中に善い療治をすれば、父母より受けた身體髮膚を全うすることが出來る、出來ると共に翻然過ちを改むるに憚つてはならぬ。

〔療法〕消化し易い滋養食物を取り、飮酒と房事とは神明に誓つて斷ち、

水銀軟膏

を兩方の上膊に塗り、内服藥としては

沃度曹達　〇、三　苦丁　一、〇
白糖　適宜　水　一〇〇、〇

右一日三回食前分服(沃度曹達は一週間毎に〇、一を増さねばならぬ)

又始め龜頭或は大陰唇に何か生じた時には沃度仿謨軟膏を塗くるが可い。水銀軟膏を塗擦してゐると水銀毒を受けて、齒齦が腫れかり、涎が出たり、惡臭芬々口内より放つやうになつたりする。これを防がりといふには是非とも

鹽酸加里　十五瓦　温湯　五〇〇、〇

で一日數回含嗽をして居らねばならぬ。併し鹽酸加里は劇藥であつて、素人には賣らぬから、懇意な醫者に分けて貰ふより仕方に無い、

正々く莫ㇾ折路傍柳
堪ㇾ愛中庭一樹梅

▲讀者諸君へ

▲前々號に住所を掲げましてから、續々質問書の來たのは、及ばずながらお答へ申しました、併し中には、郵券を封入せぬのを、還されたのは、些と無理ではありますまいか。

▲「一日醫者」は、毎號掲載せよとの御手紙は、私如き者にと思へば嬉しく從ひませう。

▲態々車を飛せて、御出になつた方が、私の開業して居らぬのに、失望して「醫者か」などゝ呟きながら歸られたさうである、今五六年は開業いたしませぬが、醫者には相違ありませぬから、在宅の節は御相談を致しませう。

▲御相談と申しても、診察して方鍼は差上ませうけれど、藥の調合は致しませぬ。

庖廚

洋食 勝手道具の調整

前々號宇山夫人の料理經驗談中にありました、凡そ十五圓で調へ得られる勝手道具（直接に料理に用ゐる）は何々かとのお尋ねがありましたので、左に同夫人のお調べをのせます。

一、七輪（一尺二寸四方上に木の附いたもの、普通の七輪よりも堅實で經濟的です）　一圓七八十錢

二、てんぴ（西洋料理ストーブの代りに出來たもの、肉類でも西洋菓子でもよく燒けます）　仝上

三、唐金鍋（直徑一尺、九、八寸の者一つ宛）　八九十錢ヨリ一圓四十錢位

四、フライ鍋（大小二個）　二個一圓位

五、ソース鍋（一個）　一圓以下

六、シチウ鍋（一個、ソース鍋より大なる者）　一圓二十錢位

七、パイ皿（一枚、菓子、鳥、肉凡て燒くに用ゐ）　二十錢以下

八、てつきう（二尺のもの二本、七八分巾の平たき鐵棒なり）　二十錢以下

九、金串（二十本）　十五六錢

十、煉瓦（二個）　五錢以下

十一、ケーキ形（半ダース、西洋菓子を燒くかたなり）　十八錢以下

十二、裏漉（一個、尺一寸位）　五十錢内外

十三、きぬごし（一個）　十錢

十四、しき笊（一枚煮ざかな等のくずれぬ爲に用ゐ）　三錢位

十五、砂皿（三枚煮しめをあげるに用ゐ）　一枚七錢位

十六、鐵鍋（八寸位のもの一個、酢の氣あるものを煮るに用ゐ）　廿五錢位

注意、琺瑯鍋や唐金鍋にて酢を煮て用ゐるは衞生上に大害あり。

十七、蒸籠（三升釜にあふ者二個）　一個卅錢以下

十八、薄刀（一挺）　二十五錢位

十九、さしみ庖刀（一挺）　卅五六錢位

二十、出刃庖刀（一挺）　三十錢位

廿一、泡立て（一個、玉子の白味などを泡立てる物西洋菓子を造るに用ゐ）　二十錢以下

廿二、骨拔き（一個）　十五錢位

廿三、せり形（一個、西洋菓子のかた）　三十錢以下

廿四、壽司箱（一個）　三十錢以下

廿五、玉子燒鍋　壹圓位

廿六、珈琲煎器　七十五錢位

等でありますが、私の思ひますのに、これ丈のもの凡てを一時に要意することの出來ない場合には次の樣な順序で要意したらよからうと思ひます。

第一が七輪、唐金鍋、次にしき笊、砂皿、次がてつきう、金串、煉瓦、これは安くつて誰れにても直ぐ買はれます。そして燒魚の時に用ゐると重寶です。即ち七輪の上に右と左に煉瓦をのせ、その上にてつきうを渡して、魚に金串をして燒くのです。網で燒いた魚とは体裁も大違ひ殊に味も上等です。なほ一つ二つ實例にお



けて燒いて居ては手數もかゝり火加減もむらになり、時間にも炭にも不經濟ですしき笊がなければ魚やその外の煮つけものを、鍋から出すのに時間がかゝる斗でなく、くずれやすいので大損です。次にはフライ鍋をおとりになるがよいでせうこれはよく火に耐えるやうに出來て居る鍋でありますゆゑ、あまり西洋料理をなさらぬお家でも、西洋のまがひ料理、あげもの、油類でいためる、もの肉を煮ると、その他に用ゐて大層重寶です。油ものをいれた後では、火にかけて皿を少し

じれ、蒸籠の先きに布をつけて、掻きまわすと奇麗になります。次が蒸籠、蒸し道具がありますと、安價つて思ひつきな手のかゝらぬ料理も、時々出來ます。裏漉しに骨拔き、これも必要です。和物などでも、裏漉をしたとしないでは、隨分味の違ふもので、魚の骨拔きも同樣です。壽司箱もありますと、重寶です、おすし斗でなしに、いろ／＼のよせものや押しものにも用ゐられますゆゑ、庖刀のよいのもまた大切です。

日本料理に用めるものは、大抵以上の通りでありますが、西洋料理を追々となさらうと思召す方は、まづてんぴが必要です。それからソースパン、シチウ鍋。パイ皿泡立て、ケーキ形、ゼリ形など。なほ普通フライとかシチウ、ビーフステーキ、ライスカレー、ハムエッグス位ならフライ鍋と普通の鍋とでも出來ます。

（羽仁もと子）

料理肉の品々

近來家庭の樂しみは奧樣令孃の纖手に出來上る手輕西洋料理でお庇で食品店は中々繁昌をするよし、隨て西洋より節々品物輸入されるけれども其種々が一般に知れ渡つてゐませんのみならず其種が日本の何品何料理に相當するかも知られてゐまんでせう、一寸その道しるべとも存じましてこゝに

御料理の肉は大概は牛肉屋から定めてお取寄でせうシカシ又鑵詰物で異なのがあり升肉だからとて種類を頒ませうならコーンド肉、ロースト肉、ボイルド肉、チップト、ドライド肉、ランチャン肉、ブリスケット肉凝たものならブローンといふがあります只かく申した計では不可いコーンド肉是はその鹽煮にしてある、ロースト肉となれば燒いてあるボイルド肉といふのは茹てあります肉から見ると惡く脂濃ない味も決して尖つてゐませんチップド、ライド肉、此肉は薄く切つて乾かしてあるんでランチャン肉これはチョットの茶受になります食卓用で鑵を開たらスグ食べられますベリスケット肉といふのは牛のヒレ肉で柔かいとは齒のない方にも咬ます又此等の肉は咬で喰べなくとも大した

障にはなりません以上の肉其値段は左の通りです

コーンドビーフ一斤入三十三錢▲ローストビーフ同價▲ボ井ルドビーフ同價▲チップトドライドビーフ一斤入六十錢▲ランチヤンビーフ二斤入七十錢▲ブリスケツトビーフ二斤入七十五錢▲ブコーン一斤入三十五錢

手輕西洋料理

▲蜊のカレイ

蜊のむき身を水にてよく洗ひ湯で﹅煮汁より引上げ置き葱を細かに刻み牛の油にて煎りつけ胡蘿蔔ジヤガ芋、椎茸なども細かにきざみ、前にむき身を茹たる煮汁にて野菜類を先に煮て柔らかになりたる時むき身と葱を交ぜ麥粉を水にてとかし汁の中へ入れ鹽と砂糖にて加減なし蒸飯を皿に盛り其上にカレイを懸けて食すべし、此のカレイ飯を食するにはピツクル(西洋の漬物なり)を添へて食すれば共に味ひよし、然らざれば薤づけ味噌づけの香物又は茄子の芥漬抔にても可なり。

▲牛肉のスチウ

先づ牛の腿骨肉二斤を玉子の大さに切り之をスチウ鍋に入れその稍隱るゝ程水を注ぎ文火にて凡そ一時間半煮たる後、その煮汁の上に浮きたる滓を掬ひとり、胡蘿蔔一本を五六分位にきり馬鈴薯六個位の皮をむき之を二ツ若しくは四ツに割り(いづれも面とりにすべし)球葱五六個(日本葱を代用すれば七八本)を刻み大匙一杯の食鹽、茶匙半杯の胡椒と共に鍋に蓋をして更に一時間位文火にて煮るべし、煮へたる時少し酢を注し加減すれば夏向の料理にもなるものなり。

▲蕪菁スープ

蕪菁三四本を好き程に切り球葱一個(日本種なれば一二本)を細かに刻みて共に沸立たる煮汁牛肉、又は鷄肉の中に入れ胡椒の粉と牛酪を適宜に加へ醬汁にて鹽梅し、凡そ十分間煮たる後、漉して其蕪菁の三分の二をスープの中に戻し芹の如き香氣ある青味を入れて膳に上すべし

▲魚の蒸煮

たい、すゞき、其他何魚にても背をひらきにし、腹の外部に穴あらば糸にて縫合せ鷄卵を一つ位に、松茸新ぎくを細かにきざみ交合せて魚の腹部の中へ流し込みひらきたる魚を打合せ、魚の背の方を高くする爲め一寸大根の切口で土臺をして皿に載せて蒸すなり蒸し上りたる時牛乳にバタを入れて煮立てたる汁をかけて食すべし。

簡易支那料理の話

料理のお話をします前に、一寸御注意申して置かなければ成らないのは、御存知の如く支那は國が廣う御在ますから、從がつて料理なども

所によつて大きに違ふのです、恰然言葉の違ふのと同じなので、日本でも東京の言葉と、長崎の言葉と違ふやうに、東京の料理と長崎の料理とは全然異つて居ります、日本ですらこの如くですから支那となれば猶更の事です。

支那は元来不潔な習俗ですから、其料理の方法も日本のやうに清潔ではありませんが、併し各國の料理の中で、この支那料理ぐらゐ贅澤な料理は有りますまい、口にするのは勿體ないやうな高價な、貴重な品を、一箸の吸物にして了うのですから、實に世界中での贅澤な料理で御座ます。

然し、一方にはこの贅澤で、殆ど口に容るのは惜しい、恰で寶物にでも仕て置きたい位な物があるかと思ふと、又一方には極く無造作なまるで野蛮に近いやうな物もある、即ち非常な貴族的と、非常な平民的とを有して居る、恐らく、支那料理ほど、極端と極端を有つて居る者はありますまい。

此支那料理を大別して、北京料理、廣東料理の二つとします。

北京は、帝の在ます處の料理だけあつて、都てが高尚で、中華の料理と申しても恥る事はありません。

廣東は、世界中に出稼ぎ人を出す程の所だけあつて、都てが平民的です、且の氣質ので、極く無造作に拵へるのです、けれども夫がなかく甘いのです。

北京料理は貴族的だけに、高尚な原料と、面倒な料理法を要しますけれども、廣東料理は至極簡略で、安い原料と、平凡な、極く有々たる料理法で食膳を賑す事が出來ます、で私は、こゝに其四五種を御話し申しませう。

▲しゆまい　能く支那の小説にある村酒屋などで賣る肉饅頭です元より菓子の部類に屬する物ですから、酒の肴には少し不向でせうが三個や四個は邪魔でもありません、それに茶菓子になるから妙ですまづメリケン粉を水でとき、せんべい位の大きさの物を拵へます、これが極く薄くなければ不可ない支那人は一尺ばかりの丸い棒でのします、それから豚です、これは目分量で宜しい、細く、賽の目に切るのですが、一々庖丁で切つて居ては、面倒であつて、且甘く出來ません、これは矢張支那流に、重い鉈のやうな庖丁できざる方が宜しい、その豚の肉を、前に拵へて置きました、メリケン粉のせんべいの中に入れて、上の方へ向けて包みます、形は、恰然、花のやうに成るのです、メリケン粉の皮が、花瓣のやうに、中には花蕊のやうに豚の肉が包まれるのですこれを蒸籠で蒸すのですが、蒸籠となると事が面倒ですから、鍋に水を七分目に入れて、花瓣な目の荒い笊に一個づゝ列べて、鍋の上にのせて蒸した方が、手輕で早く出來ます、中には豚にまぜて、葱や人参を入れる事もありますが、これは葱や人参を細かく切りきざんだ上に、ざつと湯出なければ不可ません、入れるのも却々甘う御座ます、最も、豚でなくても牛でも出來ますが、豚のやうに軟らかくに出來ません、豚の嫌ひな方でもこれを、食べて、何の鳥だなぞと訊いて、豚だと云はれて

吃驚なさる方も有ります、又酒の肴にも四個や五個はなか〳〵甘いと謂ふ人もあります、御客の時に、皿に五六個な列べて出すのも面白い屹度賞翫さるゝのは受合ひです、支那人は生醤油で用ひますが、ソースの方が甘いけれども温かい中が甘いので、冷たくなつては不可ません、肉類を入れす、野菜を入れて拵へるのは、矢張支那小説に出て、居ますが、これは人参か芋が宜しい、中にも芋なぞは一番甘い、もしも廣東料理をやつて見やうと謂ふ方がありましたらば、是非この「しゆまい」はやつて御覧なさい、作るに譯は無くつて甘いのです、

▲はわかわ、これは「しゆまい」と兄弟分のやうな物です、これもメリケン粉を餅のやうにしまして、その中へ、豚とか、野菜とか入れて、恰度柏餅のやうな、物を拵へます、色は水色がゝつた白いので、支那人のは重に豚と筍を入れますが、豚は、ゆまいに入れる程細かくしなくつても良いのです、いな細かく無い方が甘いのでして、筍は矢張ずつと湯出ますが、人参の方が甘いやうです、豚でなく牛でも甘く出來ます、私の宅なぞでは、蟹や海老で拵へますが、これならば肉の嫌ひな方にも食べられて宜しい、いや未だこれでは食べられない、その白く、柏餅のやうな物を、能く湯出るのです、ですがこゝに注意して戴きたいのは、その包みやうが少しでも疎漏で、中の肉が出て居ては全然不可ません、失敗に終ります、その出で居る所から、肉の甘味が脱けて了つて、肝腎の食べる時には「ソップ」がらのやうに成つて、甘い物が甘くなく成ります、要はこの包みやうの巧拙にあるので、さて湯出ましたらば、矢張「しゆまい」のやうに、ソースをつけて食べる方が甘う御座ます、薬味は各々の好きになさるがよろしい、これは「しゆまい」よりも手が懸らない、其かはり、とも爲ると肉くさいのですが、豚で無ければさうても有りません。

▲わんたん　これは日本の「すいとん」と「つみいれ」とを混合にしたやうなもので、メリケン粉な、「しゆまい」や「はアかア」な拵へますやうに餅の軟かいのにしまして、それを一寸に二寸位の、極く〳〵薄い物にします、これは例の、豚の肉を、こまかく叩いて、普通の匙に半分程入れまして、前後を、のこして眞中へ包みます、つまり、細長く、蛇が蛙を呑んだやうに成るのでして、肉を多く入れるならば、せんべいの大きさな、三寸に四寸と謂ふやうに大きくしなければ成りません、けれども、元一口にやつて了ふ物ですから、餘り大きいのは不可ません、包みましたらばそれを、湯出ます、小形の丼に入れまして、二十位が宜しい、汁を入れます、汁は日本流の汁でも可いのですが、甘く食べるのには、入れ餘りの豚の肉で、ざつと煮だしたスープが良しい、汁には、鹽か醤油で味をつけるものにて、最うこれで出來上つたらば、丼に適當な匙を添ねてお膳に上せれば甘く食べられます、極く譯は無いのです、支那人は法螺が甘いから、この「わんたん」にも巧な名がつけて有る、曰く、雲呑、なんと上手事な謂ふでは有りませんか、丼の中に「わんたん」の浮ひて散つて居る有様は、雲のやうに見ゐるのです、そこで雲を呑むから、「雲呑」

▲わんたんの天浮羅　これは先にお話ししましたのを、油であげるのですが、日本流にあげるでは無いので、唯單に油、(豚の油「ヘツト」でも「バタ」何でも宜しい)のなかで、ざつと揚げましたので、それにどろ〳〵の汁、「しちゆう」の汁と同じのをかけるのですが、「ソース」で食べた方が甘いです。

▲和味揷燒　豚に味を塗りつけて、蒸し燒きに燒くのですが、味は私の實驗では、日本流にやるには、山葵醬油が一番宜い、淺い小丼へ盛つて、下には蓮根の酢につけたのを敷きます、酒の肴にもなりますし、

▲炒酸排骨　豚の小骨に、肉のついて居るのを、蒸籠で蒸して、酢に浸すのですが、蒸籠は面倒ですから、鍋と笊が宜い、それに骨を嚙るのも餘り有難くない、お客になぞは失禮ですから、これは肉を蒸して、酢に浸した方が宜しい、酒家には仲々結構だそうです。

▲豚の天浮羅　豚を小さく切つたのと、筍の湯出たのと、玉葱と、海鼠(これは能く煮なければ不可ません)、と椎茸とを、豚の油の中で揚して、それを亦どろ〳〵の汁でサツト煮て酢をかけて食べるのですが、手のかゝる割には甘くはありません。

▲會蚧羹　蚧は湯出ましたのを、細くむしりまして、椎茸の細くきつたのをまづ煮まして、これを豚のスープの中へ入れるのですが、丼を用ひます、散蓮華を添へて、廣東料理にも、北京料理にも、總て汁物が多いのですが、兩方とも中へ入れる品によつて、貴族的にもなり平民的にもなるのです、他にも海老と筍の汁とで、いろ〳〵の物が出來ます

ご、皆にこれと同じやりやうです。

▲炊芙蓉　これは大分西洋料理に類したものです、玉子二個に蚧か一匹の三分の一位の肉で宜しい、これには蚧と海老と二種が有ります、が、どちらにしても湯出たのを、細かくして、玉子のといた中へ入れて、「かんもどき」のやうな物を拵へます、がこれがなか〳〵纏まりませんから、多少のメリケン粉をまぜるも宜しいので、それから油で揚げる、油であげるよりも西洋料理の「オムレツ」式に、鍋に薄く油を引ひて置いてそれへ玉子と、蚧なら蚧、海老なら海老の細かくしたのをまぜて、「オムレツ」流に、そく〳〵と卷いて行く方が可いやうです、出來あがりましたらば、豚などろ〳〵に煮ました汁と、少量の酢をかけて食べるのです。

以上お話し致しましたのには、極く譯の無い、誰がやつても上手下手の無いのであります、これから追々と高尚な物の拵へやうなお話し致しませう。(へうすい生)



子供の世界

母親の會

▲教育の結果

私の知るところに太郎と申すお子がありました、活潑で可愛らしい大の學校好きで、其れに至つて、孝行でした、親御達は、何んでも學問を澤山させて、豪らいものにしたいとの一念で、學校から歸ると、直ぐに、其日の復習や、翌日の下稽古をさせて碌々遊びにもお出しになりませんでした、高等小學に移りました頃は、御兩親の注意と云ふものは、一層嚴になり、終日お机の前にちやんとして居なければならないので、太郎さんは、なか〳〵辛棒が出來ません、其れに本ばかり讀んで居らつしやつたので、目も惡ろくなつたらしひので、度度其事を御兩親に申したれど、御兩親は勉強がいやさの口實であろうと、お聽き入れになりませんでした、流石に兩親の御仕込で、太郎さんは試驗の度に一番、兩親の御悦びは中々でしたが、其結果は怖るべきもので有ました、餘り讀書に耽りました結果遂に、惡性の眼病に罹られました、折柄太郎さんの母樣が、上京して、學校に訪づれて來られ、大層驚ろかれまして「何ぜお前は眼が惡るければ惡ろいと早くお知らせでない」と、太郎さんをお叱りになりました、太郎さんは打ちしほれて、「私の眼力の惡ろい事は以前も度々申上ましたけれどお聽き入ありませんでしたから……」と答へられました、



お母樣は、直く太郎さんを學校からお下げになりまして、病院に送られましたが、既に手後くれで一眼は盲い一眼はぼんやり物影が見える丈となりました、（某高等官の妻）

▲吾が家の藏書

私は百姓の妻でございますが、數年前、夫の發意で、夫が日日の烟草錢を省はへて、其金で家庭の讀物を買ふ事に致しました、一日僅かに四錢の烟代ではありますが、一年につもりますと十圓餘になります、今ではお陰で毎月二種の雜誌と、百科全書や、工藝全書や、其他有益な面白い折り〳〵の刊行物を、澤山求めることが出來ました、私は奇麗に陳らべてある、吾が家の藏書を見ます毎に、夫の情を思ひ出てますし、又夫の情に由つて卒けます、一家の者共の利益快樂、感化の程を思ふて悅んで居ります――（農家の妻）

▲一箇一錢

自分の所持品を必ならず一定の場所に仕舞ふように、小供等を敎へ慣らす事は、容易な樣で思ひの外實行の難い事であります、私は十二を頭らに五人の子持ですから、家内の雜用から子供の世話迄一人では、届き兼ねますので、ふと斯樣な規則を設ける事に致しました、そこで先づ家族の者共と約束致しまして總ての家具は其れ〳〵の仕舞場所をきめまして、其きめた所より外には決して品物を措く事の出來ない事にしました、若し家具が置き放なしにしてあつたのを見出した人があつたなれば、誰れでも其品を或る定めの押入に入れて、錠を下ろす事にしました、此の鍵は私が保管して居まして、此の禁錮された品を、取り返へすには、一箇一錢宛の賠償金

を出さねば、決して返さない事にしました、最初は、コップ、石盤、鉛筆、手帳、糸卷、などが續々押入に拘留されました、此等の賠償に由つて得た金は、別に貯蓄しまして皆慈善の爲に、又は室内庭園の整理、裝飾の費用例へば戸障子、庭の手入、室内の用品や、植木金魚の樣な物を買ひました、益々此の規則を勵行致しましたものですから、後には部屋々々を始め台所、湯殿庭の角々迄も、何一つ散亂した物を見る事は稀れになりました――(會社員の内君)

▲病魔歡迎

子にあまき親達は子供可愛さのあまり、大事にしすぎて、返つて子供を病身にする例しが間々あるものです、私の存じて居ります奥樣は、お秘藏一人娘の方が、學校から歸へられて、お氣分のさゑないのを見られますと「お〻お歸へりかへ……お前は何んだかお疲勞かれの樣だが、氣分でも惡るくはありませんか……お床をのべさせようか……大事にせんといけません……今朝學校にお出での時、氣分がさゑない樣だとは思つた、休ませずに學校へやつたがお母樣の手落でした……頭痛はしませんか……お腹は……今日は早くお就寢すみ……そしておやすみの時にいつものお藥を一服召し上るのですよ、お口直しには、お前のお好きの「アップル」を上げましよう……あ〻甘納豆ですか、其れも上ましよう……さあ〳〵寒むくない樣にして、おやすみなされ」と、其は〳〵一通りの御心配では有ません、病氣でなくても全く病人扱ひであります、病氣の神も、斯樣に歡迎されて見ると、まんざらでもないと見ゑまして、花の樣なお孃さんは、お可愛そうに、痛々しひ御樣子で、不斷勝ぐれぬ氣色をなして居られました、處が去年の春から、お孃さんはお保養の爲め、田舍の叔父樣方へ轉地されましたが、不思議にも、忽ちの間に、元のお孃樣でない、つや〻かな目の色、淡紅かき頬の色、まことに輕快な而かも緊乎した歩調の、丸で別人の樣になられました、お母樣は全く水土のせいだと云つて居られましたが、夫ればかりで無く、全くお叔父樣はお母樣と違がつて、苦がいお藥、甘い看病よりは、戸外の運動をお進めになり、清い空氣を吸はせ、又あた〻かい衣食のかわりに心地よい日光にふれる樣にと、お躾けになりました爲めと存ます――(豪商の妻)



▲嫁入貯金

私は一家の妻として、又一男一女の母として、幸福な生涯を送つて居る者で御座ります、娘も最早や年頃になりましたし、許嫁の者も遠からず歸朝致しますから、婚禮致させまして、私も安心致しますのも近々の事と存じまして樂しんで待つて居ります、此の目出度い式を擧げます時の用意にと思ひまして、私は娘が五歳の正月から始めまして、初年は毎週一錢五十二回、嫁入貯金といふを致して遣りました、次年は毎週二錢宛、三年目からは三錢、四年目からは四錢宛と、斯樣に增しまして、娘が廿一才の今迄、十六年間の貯金が七十圓餘になりましたので、格別の骨折りも無く儀式の調度は一通り揃ふ筈で御座います、金高は多くはありませんが、私多年の心遣ひを察して娘が悦んでくれますが、何よりで御座ます、――(一男一女の母)

▲勉强よりも健康

私が高等女學校に入りました頃は十二才、級中での最年少でした、在學中は隨分勉強も致しましたが、其れが爲め、健康を害することもなかつたは、畢竟母の日頃の教の賜物であつたと、時々思出しては、今も尙ほ感謝致して居ります、私は毎夜九時をきゝますと、學校の下調らべが、出來て居りましても、居りませんでもかまはず、直ぐに就寢せります事にきめて居ました、私の母はつれ〲「勉強は必要ですが健康の更らに必要な事を忘すれてはならぬ」と、呉れ〲申聽かせてくれましたので、時には翌日の調らべを終へずに學校へ參ることもありましたが、晝間の愉快な運動と夜間充分睡眠致します事との爲に、常々身體も精神も、快活に爽やかに發はましたから、勉強も身に浸みて出來ましたし、學年の終りには、何時も惡るい成績ではありませず、卒業の時は五十三人の中で七番目で御座いました、身體が弱ふ御座いましては、如何に才藝がありましても、何程な結構な身分位地に登りましても、其の幸ひを樂しむ事が出來ません、やつぱり母の申ます通り、「勉強よりも健康と」、私は信じます――(一卒業生)

育兒の實驗

一國を形成するものは國民であります、而して第二の國民たらんものは實に現在の小兒であります、苟も國家百年の計畫をなさんとするものは此小兒の教育に最重きを置かねばなりません。



▲虛言について

少しでも兒童研究をしたる者、子供の心意發達に就て注意したるものは今の兒童の育て樣で滿足が出來ましようか實に其母たり祖母たり兒童に對する無責任なるを否そこ迄は氣付かないのでありましようが公平なる眼から見ては實に寒心することが多う御座います、小兒の時に付きたる癖は大きくなつて決して改まることはありません三ッ子の時に惡魂あるものは惡き人となるの前表だと思はなければなりません、小供なり小供なりと安心して何事も氣儘にして置きますと善い習慣は少しも付かないで却つて惡いことばかり覺へて大きくなつて後に後悔しても最早及びません其時になつて撓め直さんとしても容易ではありません終身決して改まらぬものであります。私が最之に付て感じましたのは何日でしたか、私の直ぐ近所の閻魔樣に緣日がありました。すると隣のお神さんが其子供に向ひましてサー今日は閻魔樣の緣日だから虛言をついたものは舌をぬかれると云ふことであります、私は之を只何事もなく聞過しにすることは出來ません閻魔樣に舌を拔かれると云ふことは實に跡方もなき虛言であることは如何に無教育なる親達でも知らぬとは有りませんでしように假令子供の虛言をつくのを撓め直す方便とは云へ子供に虛言はついてはならぬと云ふて置て次に自分は平氣で虛言を教へて居るのでは有りませんが幾何無邪氣なる子供でも三ッ子の魂百迄とやら終には知らず識らずの内に虛言を云ふのは惡いとではなく自分の都合の惡い時には虛言を云ふものだと思ふ樣になるのであります。斯樣な事を一々數へ上げたなら殆ど終日かゝつても盡きない

でしよう、而も之等は前にも筆間に附し去るとの出來ないところ之が正されない様では到底兒童をして正當に教育することは出來ません。

或人は云ふでしよう親の虚言を云ふのは只其子の爲の方便であると併し此方便にも善惡があります同じ子供の爲にするのなら可成善き方便を取りたいでは有りませんか之から我が本で讀んだ事を又感じた事を少し述べまして皆様の御參考にしたいと存じますのであります

▲愛に溺れざる様規律を大切に守れ

何人も子の可愛さは同じ事でありますが何も其子が眞に可愛いならば決して感情にまかせて規律なく愛すべきものでありません。併し口では斯く立派に云ひますれども實地に當つて見ては中々に行はれにくい事で有ります

此明治卅餘年間日本の女子教育は大に發達しましたとは云へ猶世間一般には無教育の人多く、又多少教育が有つても愛子の前には其効能を表はすとは誠に六ヶ敷いもので有ります。さすがに父親は可愛ゆき中にも自己を忘れるほどではなく、從つて悪い事は悪いと叱りもし怒らしもする、そんな事はしても不可ぬとか、悪いとか云ふて止めます子供は正直なるもの故恐れて成程之はしては不可ないとだなと思つて止めます。そうすると例の理性の眩まされたる母親は自分達の可愛い子を小さい内から夫程嚴重に育てなくても良さそうな者と云ふ觀念が自然に起つて止められたーもしてやりたくなる、間食は身體の爲に悪いから止めさせなければならないにも係らず子供に二度三度とせがまれるとつい與へる様になる、斯うなりますと最早子供は何處迄が善い事で何處からは悪い事と云ふ標準が解らなくなつて白糸の如き彼の心は勢自由のきく母親の方に染つて知らず識らずの内にだくなります父の命令も只目の前では行はれるが影では自分のしたい儘の氣儘放題をする様になります。

斯くて母親は日々につのる子供の我儘に少しは心を痛めても猶無明の夢醒めず猶年幼ければ仕方なし。せめて十才にもなりたらばと未だ許して置きます、已にして九ツや十は夢の間に來ましても其子の我儘は依然として猶一層の甚だしさを増すのみであります斯くて母親は終に我子を持餘すの不運に陥るのであります。併し母親の側に居る間は未だ夫でも濟で居ますがやがて成長して社會の中に出ては中々自分の思ふ通りには行きません社會の人々は母親の様に心切なる人のみではなく左程我儘いきくものではなくて、實に不自由に苦まされるのであります

此處に又注意すべきは平生は能く規律を守つて居る親達でも一朝其子が一寸した病氣にでもなると悉く此規則を破つて了供の云ふが儘にさせる人があります勿論大病の場合には規則通りには行きませんが大抵の時には矢張守れるだけの事して身體の害にならない以上は是非守らさればなりません、假令其規則を犯して氣儘にさしたからとて案外に早く病氣が全快すると云ふ譯でもなく却つて後に悪い習慣を殘して大に害になる事であります



▲兒童を懲戒すること

兒童を善習慣に導くには是非共懲戒といふ事が入ります世間

では往々之に折檻と云ふをなしますが折檻に依つて柔順にしたる子は最不幸なる子供でありまして俗に云ふイヂケヽノとなつて子供特有の活潑な處少しもなく男子で有れば有爲の人となることが出來ず何でも事毎に斯くしたら又折檻に逢ふか之をしたらば又叱られんかと思つて何をするにも實に戰々恂々として活潑の氣象を毀して果斷の行爲をすることが出來ません、常に人後に落ちて優柔不斷取るに足らざるの人となります女子は猶更此弊甚だしく躊躇き行ばかりする樣になり人の見て居る前では温順の樣に見せ掛けて蔭では其反動として惡いとばかりする樣になります又自分が斯く折檻されて育てられますと人を苦め折檻するのに當然のもの樣に思つて成長しても又其子を折檻する樣になり終に遺傳となりて到底最早直すとの出來ないものとなります。

多くの子供が集つて遊で居る處を見ますに其中でも常に懸しく折檻されて居る子は俗に云ふ子供らしき處は少しもなく、常に不安の樣子で無邪氣でなく人から話かけられても躊躇して居て活潑でなくていぢけて居ます。去らばと云ふて人の居ない所では隨分惡いこともする又盜み食ひなどもやり嫌れないと云ふ樣な實にいぢけた人に嫌はれる性質の子供がありますが之等は實に哀むべき不幸な子で有りまして其子自身の惡いのではなく實に其子を育てたる人々の罪であります。

そんなら一ッ反對して見やうか此事すにも二種類あります、即例か子供が惡いことをなした場合に目を怒らし顏を赤くして大聲を擧げて叱るのは之等すに拙さらのでありまして世の人々が容易く起つて之を斷絶はすものは初めこそ人々が畏れ、



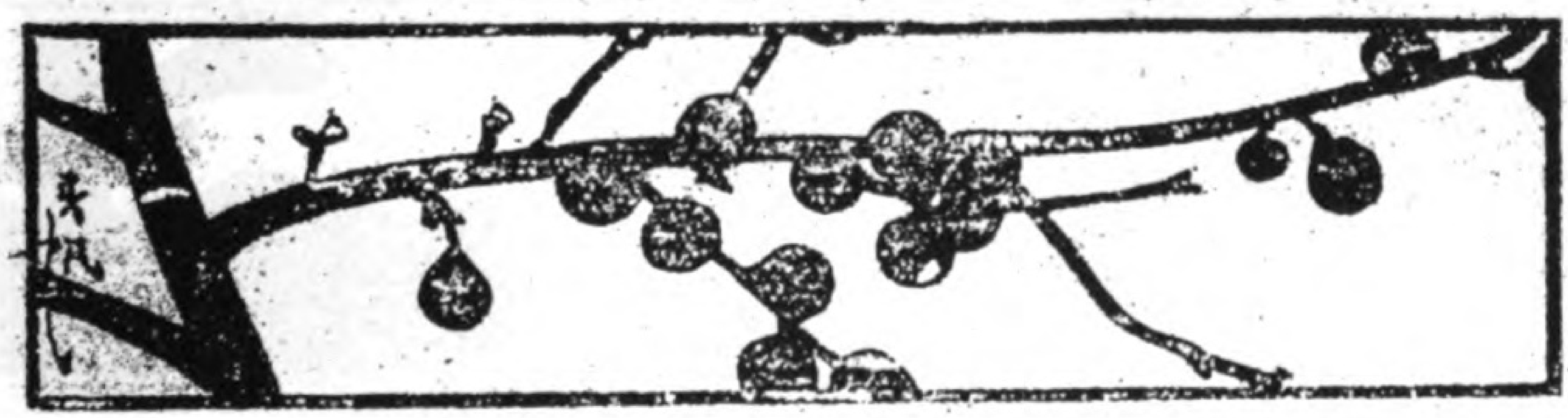
ますが漸く慣れるにつれて之は彼の人の癖なり故に恐るゝに足らずと思ふ樣になつて終には馬耳東風と聞流せられ何の効能もないものとなります子供も其通りて無闇なことにもすぐ大聲を出して叱られると初めは恐怖れて止めるが終には慣れて親を馬鹿にして上べは大人しくして居る樣でも少しも云ふことをきかなくなります之に反して平生口數も余り多くない親が何か惡いことをしたときに靜に而も重嚴に叱つた處の一言は深く子供の腦裏に印して再び同じ惡いことはしない樣になるのであります。凡そ父親の云ふことはよく聞て母親の云ふことはきかんと云ふのは一つは母親は常に口八ヶ間敷く無闇なる話嗚るものですから子供は慣れてしまつて別にこわいとは思はず叱られて居る目前に惡いことをなして居るのであります。併し子供には恩威並び行はれなければなりません只嚴しく叱るのみではいくら子供でも腹がたつ終には自棄を起して猶更云ふことをきかなくなります、嚴しくするときには能く嚴しくしても宜しいが、又可愛がるときには曾て何れの親も有する樣なる深い愛で愛するのもよし、賞めてやるのも宜いことであります、即小供に其時は如何程滿足で嬉しいか知れないのであります、併し子供と云ふものは誠に狎れ易いものでありますから少し可愛がると直につけ上て我儘を云ふものでありますから親の方も行はれなければ總もすると年長者でも恐れなくなつて終に其分を混じて皆自分の朋友の樣に思つてしまいます故に或る處ではチヤントきまり又父は父の威光、母は母の威光兄姉は兄姉の威光を保つて小供をして其威光には服しむる樣にしなければなりません。

▲父母及保姆は正直ならざるべからず

如何に頑是なき子供とて決して侮り油斷なすることは出來ません知らぬ解らぬ事と思つて個なる人が不利なる場合に虚言を云つて居るのを何日子供の心に感染してやはり虚言を云ふ樣になるのであります或る本に書てありましたとな皆樣に御紹介致しましよう如何に世の親が子供を欺し居るかの最よき例であります。

小兒が何か玩弄物を買つて呉れと求めたるときに之に對して如何なることを云ふや小兒を欺きて必ず云はん五日の水天宮樣に求め、やらんと十日の金比羅樣に買ふて與へん淺草の觀音樣に調へんと言にして五日となり十日となり或は淺草へ參詣するの日に當り小兒のよく覺え居りて促すに至れば知らざるまねして行過ぐべし若し覺え居て促すも或は繰延に其品なきの由に延引て終しと云ひ又其品あるも疵ありなど云ひて欺き他の安きを買ひ與へて紛らすこと實に今の世の父母之を讀で如何の感が出るで有りましようか斯なことは一寸したことと云へば大盗なれども小な事も見樣見眞似する子供に取りては決して輕々しいことではないので後日に大患を醸す基となるのであります。苟も子女を正直なるものとするには先自分が正直にならなければなりません決して不利な場合だからとて方便に用ふるのでも虚言を云ふことは益のない有害なことであると云ふことを忘れてはなりません。

▲小兒を過賞せざると其友を擇ぶべき事



子を見ると親に若かずの金言も時として愛の一字に蔽ひ隠されることがありますが愛の爲に至れば終に其子を見誤るの憂が無いとも云はれませんよく有ることですが小供を傍に置て頻に他の人に向つて此子は外の割合に利口だとか我子を讃めるのと可笑しい樣ですが學校でも能く出來るし家でも能く云ふことをきゝますので誠にらくでありますとか少しの長所を云ひ草に賞めそやしますと聞かされた方の人も成程と一所になつて賞めるを聞いて居る子供に何であるかと云ふと今迄は知らなかつたが自分は大程感心なものかと直に得意になつて夫からは自分程偉いものは他にない樣に思つて次第に怠る心を生じ折角將れて居た長所も漸く後退りして終には平凡のものより劣る樣になります。

已に過賞するの弊害を知つたならば務めて慢心を起させない樣にしなければなりません。其方便として常に交る處の朋友もなるべく其子供より勝つて居る子供とのみにして励ます樣にしなければなりません

▲子供の名譽心を害せざると

子供に向つてお前は何になるのかと尋ねますならば必ず男の子であれば自分は大將になるとか大閤秀吉の樣になりたいとか楠正成とか皆自分の平生聞いた話とかで理想として居る豪い人になりたいと賑やかしてニコニコと恰も其人前にあるが如くに答へるでありましよう女の子は流石に夫と明白に答へない子もあるが必ず心の内には各豪い人賢き人にならんと思ふ處は男子と少しも變らないでありましよう。恰も春の若草が緑色濃く萠け出でゝ未來に花を咲せようとして居る如く

に。
此心は實に大切なる心で有りまして此心の有無は將來の心掛に大に關係するのであります。子供は必ず此理想通りに行くものと信じて少しも疑はないものであります故にお前そんなヿをなすると大將にはなれないとか大將はそんなヿはしないものだと云ひますと直に惡いヿを止める位熱心なものでありますかく熱心に信じて居る處へお前は到底そんな立派な人にはなれないと云ひますと子供ながらも彼は非常に落膽して感情を害するヿも甚だしい。終に自分の理想は行はれないものと思つて自暴自棄して如斯なヿが一番初めの源因となつて終には將來の希望も瓦解する樣になるのであります。夫故に側に居る人は能く如斯なヿにも注意して何事でも子供の名譽心を傷付けない樣に何處迄も忍耐してすれば必ず理想通りになると云ふ觀念を得させなければなりません自暴自棄は決して成功を全くするものに非るヿを知つて居なければなりません。

英國流の家庭教育

◎子供の家庭教育はナカナカ困難なものですが自然の記臆と注意と云ふ事が尤も肝心です子供をして知らず知らず智識を啓發させるには何が關係が深いかと云ふと玩具です持たせる玩具によつて色々の注意を引き起させる事が出來ます、西洋では水彩畫を子供の遊戯として遊らせます日本でも大分小學校の生徒などが稽古するやうですが之れは趣味のある玩具か



と思ひます例へば愛に牧場の畫があつて數頭の牛が居る夫れを持具で子供は思ふまま彩る紫でも彩るだろうし黑でも赤でも黄でも必ず手當り次第に着色する此時側に侍て居る母親とか家庭教師が此牛は赤牛だとか黑牛だとか云つて教ゆれば白黑色の配合を覺へさせる事が出來る夫れに子供は同じヿを幾度も繰返す事は好まないから山水とか家屋とかサマザマの繪を彩色させて愉快の間に注意力を養成させる樣が會作られます。

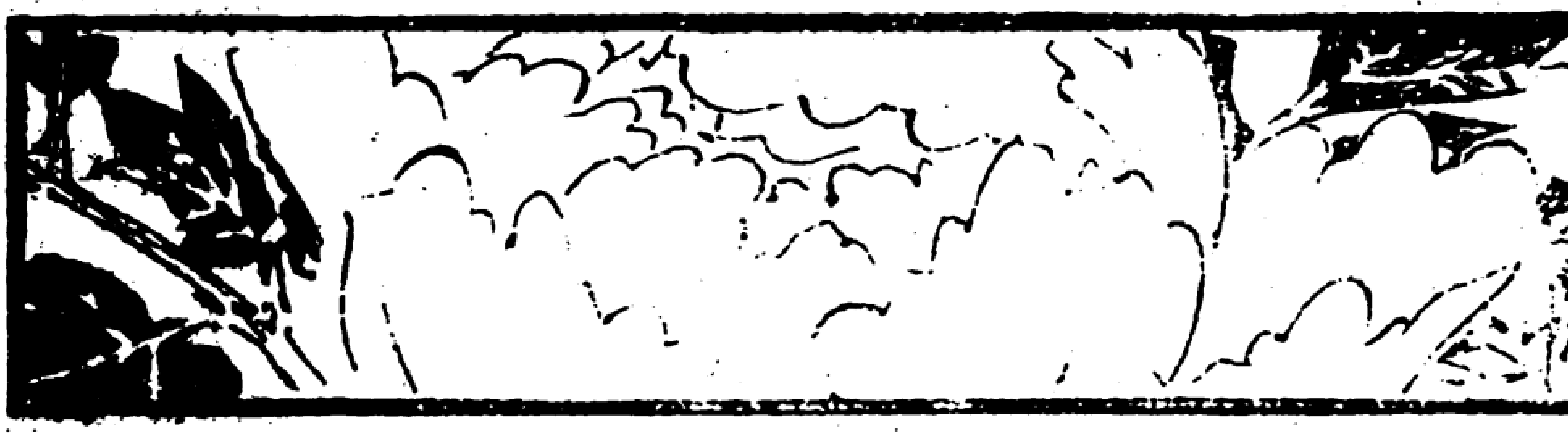
◎何事も遊び半分にさせるので特別に勉強させると云ふのではないが決して無駄には遊ばせぬ石盤へ眞直に棒を引かせるとか魚の形や鳥の形など畫かせても充し夫れ等の遊びに飽きたら音樂も面白いのです音樂ほど子供を活潑に溫順しくさせる微妙の力を持つて居るものはありません同じ子供を遊ばせるにも愉快に遊ばせるのと不愉快に遊ばせるのとは體育上の健不健に非常の影響を及ぼすものです。

◎語學思想を養成させる爲めに綴字札と云ふ玩具がある其札にはＡＢＣが一字宛記してあつて二十六字一組としてある其一組を各自の子供に渡し置き最初に母親なり家庭教師なりが其の札で一つの綴字を置く例へばＤＯＧと云ふ綴りを其處へ出したら側に居る子供達は其綴字の内のＤとかＯとかＧとか其内の一字を取つて頭字とし一番綴りの長い字を捜させるケレども小さい子供が習う澤山の字を知つて居やうもなしするから其場合には字引なり畫帖なりを見て綴らせます、さうして一番長い綴字を見出したのを優等とする斯うしてサマザマの字を繰返へさせる間には自然言葉も覺ゆるし字の綴りも覺

はる、玩具には有益なものが澤山ありますが凡て子供には一度に澤山玩具を與へるのは宜しくないと思ひます、第一粗末にする上、又々一玩具の興味を解する事が出來ないで仕舞ひますから彼一々の設題や注意を與へる事が出來ずに玩具が何にも活用をしませぬ。

㈡數學的思想の大切なる事は云ふ迄も御座いませんがそれには子供の時から注意をさせると段々規律正しい美風を養成させることが出來ます子供の玩具にも其考案から成立つたものが澤山ありますが殊に數と云ふ事を覺はさせる爲めの數學的な空氣銃ですと云ふ遊戯がありますがこれはさまざまの數字を記した板があつて其遊戯へ的が付いて居る其的へ金粒でも銀星でも向を掛けたのを狙つて空氣銃で射つのです的中ば非常に興味もあるし觀當てると同時に的の下に記してある數字も記憶するやうになる斯んな事から自然と數な覺はさせ夫れから數取り遊戯に移るのですこれは許り乘算の九々な覺はさせる爲めの玩具で九々の書いてある札を別に區じて合せさせる間時に區な起して置き夫らで合せ終ると一つの繪になる趣味のある遊戯であります。

㈢夫れから時間の事を教ゆる爲め玩具の時計がありますが親なり家庭教師なりが時計の針を廻して其針の指つた處を子供達に當てさせる、左うして一番早く夫れを言當たものが優等になります夫れで最初は極く簡易い十時とか一時とか云ふ處へ正しく針を置いて當てさせますが次第に困難しい時間を覺はるせるやうにする例令ば十時廿八分とか云ふやうに一寸考へ悪くして當てさせますので面白い話しでも仕ながら之れな



故はると子供も悦んで愉快に遊びます。

㈣併し斯ういふ玩具を持つて遊ばせるのは雨天の日とか夜のお伽にする室内遊戯です、發育盛りの子供には成可く戸外の遊戯をさせ新鮮なる空氣を呼吸するやうに仕たい、許り勉強させると云ふよりは健康が第一です子供の時に不健康であつたら充分發育する事も出來ず生涯の不幸となります戸外の遊戯も色々ありますけに競走が一番身體の爲めにもなるし子供な喜ぶのもあります、縄飛び、棒押しなどは別いて面白い遊戯です。

㈤日本の母親は餘り子供を大切に仕過ぎるかと思ひます玩具なども澤山附與ひ過ぎるし泣くと直ぐにお菓子を與る子供の機嫌を取るには何時も食物だが食事の時間の大切なことを知らないのでしやうか夫れから可笑いのは木登りです子供は兎角木登りを仕たがるものですが親達は危險がつて之を禁止る西洋では木登りは奬勵して遊らせます左うして手や顔に傷な受けたものが一等賞を得ます怪我をしても泣いたりすると一週間位輕い罰則を受けなければなりません夫れだから少し位枝で顔を引掻いても泣きません。

㈥兄弟の澤山あると云ふ事は實に愉快なものですが兄弟が澤山あると喫つて許り遊んでは居ない隨分喧嘩も仕ますが斯う云ふ場合には側に見て居る母親なり家庭教師は咎めません默つて見て居る、尤もこれは双方に理由があつて自分達の權利を主張する場合ですが一方が正當で一方が不正當な時は双方の間に立つて判決を與へて遣ります、喧嘩と云ふと人間の惡いやうに聞ゐるが頭ごなしに一概咎めべきものではありません

ケレども玩具を二人の子供が爭つて欲しがるやうな場合には雙方に與ません又屢々喧嘩をすると互に謝せられますから喧嘩を仕て居ても咎められゝば直に止める段々其習慣が付けば後には喧嘩を仕なくなるやうになる

◎大體の子供をもつて居る家族では健康と教育が一番困難です尙武教育に尤も重を置くのも其の爲なので男女に關はらず体操と云ふ事は尤も奬勵したい又遊びに倦きた時には軍人の噺しなど面白く噺して聞かせるのは尤も爲になります、又兵士の玩具を持たせるのは至極宜いが日本のは何うも子供の智識を啓發させる趣味がない之れは大なる缺點だと思ひます軍服を着た人形もあるし槍を持つた古代の武人も玩具に出來て居るが西洋のとは全く着眼處が異つて居ます西洋で軍人の玩具と云へば大尉なり中尉なりの軍服から軍帽が悉く其時の制度に法て拵へてある服裝の色から帽子の筋まで一目してこれは大尉なり中尉なりと云ふ事を子供に記臆させるやうに出來て居る中には負傷した軍人の玩具などもありすます

◎凡て戶外の遊戲に倦れた時は室內で思ひの遊びをさせます船の形を拵へるとか機械を造るとか大工の眞似をするとか何をさしても無駄な遊びをさせないやうにしまるす爾うすれば遊ぶ間に自然子供心に發明する處がありませう夫れから子供には「自分で仕た事は自分で仕末を付ける」と云ふ習慣を養させなくつてはなりません自分が出した玩具を人に取片付けさせるやうでは大人になつて物を整理する觀念が乏しくなる詰り玩具などは子供の方が秩序よく收納やうになれば結構です



◎日本人は一般に物事に敏く一度諳たり聞いたりすれば直に眞似をして遣つて見る、爾うして上手に夫れを成功させますには感服の外は御座いませんが唯惜い事は活潑の性質を缺いて居る殊に婦人は餘り靜過ぎます之れに誠に温順で結構な事だが斯うなると勢ひ交際と云ふ事に疎くなつて因循して仕舞ひます、言換へれば餘り臆病ですモー少し活潑にしたら實に世界の婦人界に立つて間然する處なき美德の婦人が出來やうと思ふ併し活潑と云つても程度がありまして男見たいでは困ります

◎日本の親達は子供を連れて音樂會へ往くが西洋にには那んな事はありません、寧ら子供が連れて往つて吳れとせがんでも母親は斷然夫れを拒む、然るに日本の習慣として所構も選ばず親の往く所へには何處へでも連れて往く之は子供の教育を誤て居ると思ふ。凡て子供は子供らしく仕て育てたいのです夫故西洋には子供の往くべき音樂會が別に設けてある、又日本の子供は客が噺しを仕て居る中で遊んで居る。之れは却つて子供の爲になりません歐羅巴では嚴しく之れを戒しめ爲一客の前へでも子供が出た事なら後で小叱を言はれる要するに大人の集る處へは子供の集らぬ方が宜しい

◎西洋では子供は嚴肅に育てますが日本では兎角あまやかして愛に溺れ過ぎます夫れ故日本の子供は間へ這入つて遊びたがる、爾うかと思もふと隅抔で一人で遊んで居る、考へて見ると譯い分らぬ事で、西洋では子供の遊ぶ時には必ず誰か附いて居て無駄に遊ばせない智識の啓發、体育上の健康と云ふ事には充分着目して居るのです

◎體育上男女共馬に乘るのは至極宜しい五歳位の子供でも馬には乘せる事は奬勵したいと思ひます、近頃日本では大分自轉車に乘るのが流行するやうですが之れは體力を消耗する事が甚しく過度に疲勞するから宜しくないのであります其他女子に花束を造らせるとか、美的の遊戲は是非お勧め申したい

◎交際社會に立つて勢力の中心點となるのは婦人ですから交際多忙の母親は子供の教育上多く家庭教師を賴んで、責任を帶びて教育して貰ひます、尤も之れは生活の程度にも依ることで中流の以下の者で家庭教師を賴む資力の無いものは從つて交際も頻繁でないから母親自身教育するが、何うも專門の家庭教師の方が教育上經驗もあろうし母親よりは上手に教育すると思ひます

◎英國では女子に必ず手藝の教育を施しますから卒業した上は夫々社會の需要に應じて働き決して何時までも親に縋つて貰ふ事を望みません夫れが嫁入の支度でも親の世話にならず自分で調達へるし中には充分の貯金もあり財產も出來て嫁入りします夫れ故一朝不幸にして良人に死別れるやうな事があつても路頭に迷ふ抔の事は滅多にありません立派に生活を立てゝ往かれるから手藝は女子に取つて尤も大切な事と思はれます日本でも近頃は女子教育に重きを置かれ手藝を教授する學校もありますが之れは誠に喜ばしい事、私は世界各國の婦人に向つて手藝の教育は熱心に御勸め申したいのであります

◎夫れに〻一つ女子の教育上大切なのは家政學です家を治める事を知らなかつたら女子は家庭に不必用なものとなりましやう嬉しき家庭を作るも不愉快な家庭に終るも多くは女子家



政の能力如何にある事ですから女子は殊に注意して研究されん事を望みます且つ一生の間には思はぬ不幸が來すことがあり何んな零落に陷らぬとも限りません此場合に當つてヨシ婦人に獨立の生活が出來る丈の手腕があつたにしろ家政の道に堪能でなかつたら一家を貧窘の淵より救出す事も出來ず從には內助の功を空しくして面白くない家庭に日を送らなければならないそれでは婦人としての天職を盡す事が出來ぬ計りでなく此上もない女子の不面目と云はなければなりません猶家政と共に是非研究して頂きたいのは手紙を書く稽古ですこれは男子の忽に出來ぬと同じく女子にも必要なことで西洋では特に練習させます、事理も分るやうに、手跡も立派に、早く認ると云事は美徳の要素です。

◎女子の手藝として料理法に重きを置しは獨立の生活を圖る爲の手段計りではない料理の趣味はナカ〳〵面白いもので殊に一家の妻君となつた時家庭に於て直ぐに必要な業になるのに料理であります、衞生上料理の關係ある事は申す迄もないが、愉快なる食事の時間を作るのは全く料理の與つて力ある所です從て家庭も面白く圓滿に斯な樂しい事は有ますまい、其他惡い事を願うのではありませんが病人のある時料理法に詳しくなかつたら非常な不都合を來すでしよう、料理と云つたつて唯旨く煮る計りが能ではない、料理に作る原料の善惡から實質の成分を研究して之れは病人に適する食物か不適當な料理かと云ふ事の立分鑑別が出來るやうでなければ料理法に詳しいとは云はれません、斯の如くして料理された食物は必ず病人の救けとなつて病の恢復も早い料理をすると云つたつて始終臺所へ入つてゐる譯ではありません。

(なにより)

家庭夜話

雪國の昔語り

藤葉女史

（熊の話）

今更事新しく書き立てる程の話でも有りませんが北海道に開墾が初まつて以來屢々惱まされた熊の話に就て申しませう。

●大熊擬臼と戰ふ

函館の近邊の海岸に一漁村が有りまして漁夫達が漁つた鰊や數の子を皆濱邊の小屋の中に入れて置きますと每晩のやうに大きな熊が出て來て粗末な戶を打毀しては中の物を無斷で食べて行きますので、漁夫達はいまいましい事に思ひまして、何かして打つてやりたいと思ひましたが、何分にも大きくて力が强そうですから誰も打取らんと云ふ人もなく、骨折つて得た魚をみすみす取られつゝ日を送て居ましたが。いつまでも打捨て置くわけに行きませんから寄集まつて會議の末熊の入る小屋の入口に太い繩で罠を拵へて熊が中へ入るには何しても此罠を脫なければならない樣にして其繩の端に大きな臼を結び付けて置く事にして熊の來るのを今か〳〵と待ち構へて居ました。そんな事とは夢にも知らず熊は又例の好物の肴に有り付うとおもつて夜の二時頃、のそ〳〵と向うの山の坂から降りて來て、例の小屋に入つて行きました物の蔭から樣子を窺つて居た漁夫や壯士達はさあ今に熊が罠に懸つて怒つて出て來るだらうと手に汗を握つて、折からの月あかりに透して待つて居ると、一向に出て來ない、幾何待つて居ても些も音沙汰がないので皆何した事かと不思議に思ひ乍ら待ち疲れてしまいました。尤も其筈此方は身体に繩の懸つたのには少しも氣が付かず、相變らず魚をたらふく食べて、やがて悠々と夜の明け放るゝ頃漸く繩を付けたまゝ出て來ました、繩の先には例の臼が付て居たのですけれ共、丁度山に登る迄の處は籠の方が少

し低くなつて居るので、格別重い事もなく、又次第に明るくなるので大方狼狽たのでしよう、臼とは心付かずにづん／＼と行きました、そこでだん／＼と山を登り初めると、初めて身体が重くなつて、後に引かれる樣な氣がするので、不思議に思つて振かへつて見ましたが、熊は歩いて居る内は、臼も動いて居ますが、熊が止まると共に臼もぢつとして居るので、獸物の事故夫が爲とは氣が付かず、別に變た事もないがと、方々見廻す内に、やつと身に付いて居る縄に氣が付いて、さてはと怒り出して其縄を手繰り寄せると、先の方に大きな黒いものが付て居る、之を見て熊は益怒つて手許迄來るのを待ち兼ねて、兩方の手を擧げて今や打たんとしますと、手を離した拍子に丁度坂の中程で有たものですから、臼はたゞかれたのではなくて、力まかせに上から押されたと同じで、大變な勢で下に轉がつて行きました。そこで熊迄引張られて殆ど踏止まる暇もなく下迄引づられてしまいました。サーこうなると熊が怒るまい事かまるで夢中になつて山に駈け上ふとしました、すると又下から引かれるので縄を引寄せては前と同じ事をして一層腹を立てました、こんな事を幾度も繰返して居ります内に、流石の熊も終に疲れて、其處に踞まつてしまいました、先程から此樣子を見て居た人達は日頃の鬱憤を晴して、皆どや／＼と一所に出て行て難なくその熊を打殺して仕舞ました。

◎熊と鉢合せ

札幌の北岩見澤の開墾地に一人の農夫が有りまして、ある年の冬雪が五六尺も積つてから畑の周圍へも有る程の木を切りにかゝりました、するとまだ半分も切らないと思ふ頃何かごそ／＼と音がする、ハテ變だなと思ひながらも、木を切るので響がするのかと思つて、猶切り出すと又がさ／＼と音がする、如何にも變だなと手を止めてぢつと考がへて居ると、何時か音が止でしまいました、そこで農夫は氣味が惡るくなつて思はず上の方を仰で見た處が、丁度雪の表面から一二間上の木の股の處に大きな洞窟がありまして、怪しい音は何でも其中から聞える樣である。そこでつい恐いもの

見度さに恐る〱上て行て其中をヒョイと見様とする
とたんにヒャッと何か冷いものが額に當りました、初
めから何だか氣味が惡い、恐いと思つて居たものです
から、何物かと詳しく見極める暇もなく、アッと仰天
して雪の中に仰向に落ちました、殆ど腰も抜けた樣で
起も上られず目ばかりパチクリさせて上を見てゐる
と、二度ビックリ、穴からは實に大きな熊が兩手を緣
にかけて下を見て居ました、モーこの男は絶体絶命で
カンヂキ（之は雪の上を埋まらない樣に鞋のまはりに
一層巾廣く輪の樣にめぐらしたもの）をはいて居るの
で進退が不自由で雪の中を轉けつ轉びつ跡をも見ずに
村に飛で歸りました、熊の方でも實際穴の中に寐て居
たから下でぎし〱やられたので何事が起たかと不思
議に思つてのこ〱と出口に這い出して來た處ろでし
た丁度其時外から覗ひた農夫と穴の入口で鉢合せをし
たので冷たかつたと思つたのは熊の鼻で有つたのでし
た。
夫から農夫は鐵砲を持つて翌日行て見ましたがもう其
處には何も居なくて雪の上に大きな足跡が明然に山の
方に着て居ましたので其跡をつけて行つてとう〱
打止めたと云ふ事です。

◎慘劇の遺品

札幌の博物館に今でも公衆の人には見せませんが小供
の右の手首から先きと、赤い筒袖の色の褪めたのとが
アルーコル漬にしてあります、此一瓶の由來を聞て誰
も哀を催さない者はないでしよう、殊に子を持てる親
は一しほ同情を寄る事であります、頃はシカと覺えま
せんがまだ移住民の數も少なく又折角移住して來て道
廳から農具や家迄與へられても寒さと恐ろしさに逃げ
て歸つた者も澤山あると云ふ仕末で人家も餘程まばら
でした其處らは猛獸の鳴聲の遠く近く聞える處でした
が、或百姓家のお神さんが三歳になる子供を一人家
に殘して裏の井戸端で餘念なく洗濯をして居ました、
其内に子供の泣き聲が聞ましたけれど又例の駄々をこ
ねるのだと思つて別に氣にも止めず猶殘りの洗濯もし
て悠々と家に歸りました、するト子供が居ない、サー

何處へ行たろう隣と云ふても一丁も二丁も離れて居るから、そんな處迄一人で行く筈がない、何處へ行つたのかと思つて廣くもない家の内や、外をさがしましたけれど一向に居ないから、意心配でたまりません、すると入口の處を能く見ると其處に血が二三滴たれて居て何か知らぬが、大きな獸の足跡が處々に付いて居ます、そこでお神さんは氣も轉倒して畑で仕事をして居た亭主の處に飛で行。



て譯を話すと、同じく亭主も驚いて夫は必定熊に取られたのだらうとの事に、お神さんは狂氣の樣になつて獵夫を頼で滴たれて居る血を目あてにして行くと、やがて半道も行つた處の例の笹藪の中に一匹の大きな熊が踞まつて何か頻に食べて居る、向ふむきで能くは分らぬが、だんだん近寄て見ると今の子供らしい、熊は一生懸命に夫に氣を取られて居るので尤分

覘を定める迄氣が付かなかつたので、難なく二發で打止めました、そこで急で傍に寄て見ると可憐さうにもう大概喚てしまつて只右の手の少しばかりが殘つて居ました、其打たれた熊は間もなく剝製にせられて其手と共に博物館に陳列されましたが、實に大きなもので立て手をのばしたなら七尺以上もありました其母親の心の内はどんなで有りましたらう、陳列館へ見に來ては泣てゐました。



◎命がけの獵

後志の國に二人のアイヌがありました、或時一所に連立ちて熊打に出掛けましたが、一向に獲物がないので失望して最早歸うとすると丁度行手に大きな足跡がありました、二人共云ひ合した樣に顏見合せて莞爾、さて注意の態度を取つてづん〳〵跡をつけて行くと、夫がすぐ前の低藪に入つて居ります、凡て熊が後から追はれて其蹤跡

を暗ます時には先笹籔に入つて其中で笹の幾らか薄くなつた處の木の蔭などで、熊の前進して來る有樣の見える處に隱れて待て居るものであります、そこでアイヌも其笹籔に入つて暫時行くと果して少し籔の薄くなつた處に出たので、此邊に居らないだらうかと四方を見廻すと、居たッ、居たッ、すぐ前のつい一間半程前の木の株の蔭に、而も早くも自分等を目掛けて身構へして今にも飛び付うとして居る處でありました、見給へ此一剎那を、モラ此方は鉄砲取直す暇もない、殆ど手の下し樣がない、イキナリ熊は飛び付て一人の持て居は鉄砲を引たくるや否や、鉄砲の砲先を二ツに捻ぢ折つてしまつたそこです、そこでこなたもさる者斯うなつたら何する事も出來ぬ、單身突進して熊が今しも鉄砲を大地に叩き付けて兩手を擧げて立ち上た其胸にしつかり抱き付た、何と大膽ではありませんか實に此一瞬の出來事に少し後れて、現場に馳せ來つた今一人は呆氣に取られて只茫然たるのみで、鐵砲を打つことも出來ない、すると熊の方でも幾ら力が有ても脇の下に抱き付かれたので手を下げる事が出來ない、幾ら叩かうとしても手が外にそれるばかりで、何する事も出來ない、がアイヌも抱き付たきりで下をはなせば一打一裂の下に殺されるに定まつて居るから、一生懸命です、さうすると熊は中々利口で、丁度二三間先に突き出た岩が有たのを見付けて、其方に後足で歩て行た、アイヌは何なる事かと氣が氣でない、處が何の事はない其岩に持て行てアイヌの脊をごつん／＼とぶつけ初めた見る／＼脊肉は破れて鮮血淋漓、實に慘酷である扨て又何する事も出來ませぬ、今一人のアイヌも鉄砲を打てば自分の友達にあたる恐がある、併し眼前の慘劇を見ては一刻も猶豫する暇はなく、とう／＼思ひ切つてすぐ側に行て漸く熊だけ打つ事が出來て、危い人の命を漸く取りとめたと云ふ事であります。

◎熊の滑稽（間拔けと才智）

北海道に未だ内地の人の餘り入込まない前は自然の天惠物は陸にも水にも滿ち充ちて居たのであります、即鮭なども實に澤山居て、卵子を擦付ける爲に河に上つ

て來る時は、河の瀬は爲に眞黒になつたとの事でありました、之を熊が見て居て河の岸に坐て最近くの處へ來たのを彼の鋭い爪で恰も猫が獲物を攫ふ樣に實に機敏に働いて何尾も取るさうであります。

けれども夫を自分の住家へ運ぶ處が實に又間拔であります、先手頭の蔓が何かを持て來て鮭の鰓を一ツ〳〵刺し透して肩にかけて後足で立て歩いて行くのであります、併し畜生の悲しさには透した蔓の先の方を鮭の拔けない樣にむすび止める事を知りませんから、だん〳〵と歩いて行く内にづる〳〵と一ツ拔け二ツ拔けして終に自分の住家迄歸るうちには一本位になつて仕舞ふのですそれを知らずに道々落して行くさうであります、夫を又目的にしてアイヌ達は拾ひに行くと言ふ事であります。

又ある漁師が數の子を澤山に小屋の中に入れて置たのを例の熊が嗅ぎ付けて夜半に人靜まりた頃、出て來て例の通りに戸を毀はして中に入つて夫を飽迄食べました所が、さてその數の子には鹽がしてあつたので、非常に咽喉が渇き出したので熊はのそ〳〵匍い出して河に行てがふ〳〵と水を飲みました、サー其後が實に滑稽です、先其時はおいしいものを澤山食べて大に滿足して山に歸つた處が、サー大變だん〳〵とお腹が張て來た、夫もその筈乾した數の子を食べて其上に水を飲だのでありますから、夫がだん〳〵ふやけて來たので、益々お腹が張て苦しくなる、水は益々飲みたくなる、熊ははや堪らなくなつて踠き出したが踠けば踠く程苦しくなつて來て終に何する事も出來なくなつて、とうとう倒れてしまつたと云ふ話があります。

又ニーカップ（新冠山）の山奥に馬が澤山野飼にしてあります、此馬の中には種馬と云ふのがありまして、之に三十匹又は二十匹の雌馬を監督、保護をさせる爲に付けて置くのであります、處が此處へも熊が時々襲うて來るのです。

此時雌馬は雌馬だけに狼へ騒ぎ出すと雄馬は夫を靜めて安全に逃がしてやると云ふ事であります、そこである時の冬、山に出て草を喰ふとしましたが愛憎雪が積

て居て何も見えませんでした、そこで雄馬は心配して雪の中に埋まつて居る笹を掘る爲に山の上から後足を屈めてすうと雪の上を辷つて下に落ちると、其跡だけ笹が出て來るのを雌馬に喰べさして居ました、其時に丁度又遙向ふに熊の來たのを雌馬の一匹は早くも之を見付けて騒ぎ出したのを、雄馬は大變だと思つて急で雌馬達を一所によせて先に逃してやつて之で安心したらしく、自分も一人後れて後から逃げて行きました、處が先刻の熊は賢くも先まはりをしてとある大きな木の陰で待ち構へて居たとも知らず雄馬は大急ぎでそこを通り過ぎ樣とする處を、矢庭に躍り出て其大きな手で馬の平首をいやと云ふほどなぐり付けました。で流石の馬も首の骨が折れて其處に倒れてしまいました。ので、熊は馬の兩足を肩にかけて引摺て行きました。

馬飼の處では俄に雌馬達があはてゝ歸つて來たので、何したのかと見ると雄馬が居ないので、何か事が有たのだと推して山の方に行て見ると、前の木の下から血がこぼれて居る、夫で足跡を付けて山の奥の方に行くと、其邊に著しく血がたれて居るが、もう馬の形はなくて其處に新しく土を掘つた樣な跡があるので、其處を掘て見ると果して馬の肉が半分以上喰ひ盡した餘りが埋めて有たと云ふ事です、之は勿論熊の所爲であつて、其才智に富で居る事中々尋常の獸類の及ばぬ處があります、而して此種馬は誠に可愛さうで職業の爲に一命を犠牲に供したものと云ふべきであります。

如斯な話を一々書き擧げましたならまだ〳〵幾らでもありますが餘り長くなりまして貴重な紙面を汚す恐れがあり子供だましの樣な事でありますから之で止める事にしましよう。（完）



英語實習

蘇生貞子

熟語用法練習

At second hand.

I received this information *at second hand.*

私は間接に此報知を聞きました。

at second hand＝他人の手を經て。

（又此熟語と同様に at first hand といへば“直接に”“人の手を經ずに”の意なりと知るべし）

At short notice.

It is very difficult to find a good teacher *at short notice.*

すぐに善い先生を見付けるといふのは餘程困難です。

at short notice＝即坐に、短時日の間に。

At sight.

The bill is to be paid *at sight.*

この書き付けは直ぐ其場で拂渡されるのです。

at sight＝一見して直に、即席に。

（after sight または at short sight といふも同じ）

At sixes and sevens.

Many books and magazines were all *at sixes and sevens.*

澤山の書物や雜誌は無茶苦茶に引き散らかしてありました。

at sixes and sevens＝排列を亂して、混亂して。

At the door.

The annual examination is *at the door.*

學年試驗は近づいて居ります。

at the door＝接近して、程なく。

At the farthest.

I shall call upon you to-morrow morning at nine o'clock *at the farthest.*

明朝遲くとも九時にはお訪ね致します。

at the farthest＝いかに遲くとも。

英文和譯（會話）

Daughter.—Mamma, will you please take me to Hibiya to-day?

娘 オツカサンどーぞ今日日比谷へつれていつてくださいな、

Mamme.—O yes, it is such a fine day, so I will take you out to Hibiya.
母 アイ、今日はまことに結構なお天氣ですからヒビヤへつれて行きましよー、

D.—Let us ride on a electric car!
娘 電車へのりましよーよ。

M.—Well, if you like to ride, we will try.
母 若しのりたければためしてみましよー、

D.—How fast the car goes!
娘 ナンテ、ハヤク行くでしよー、

M.—Now, we must get out.
母 サーでなければなりません、

D.—Here we are in the park.
娘 ホラここが公園ですよ。

M.—O, look at that beautiful flowers!
母 チヨツト、アノきれいな花を御らんなさい、

D.—They are fine chrysanthemum.
娘 あれはリツパな菊ですは、

M.—Japanese chrysanthemum are admired by many foreign.
母 日本の菊の花は外國人にほめられますよ、

D.—I think this white and that yellow one are very pretty.
娘 私は此の白とアノ黄色が大變うつくしいと思います、

和文英譯（會話）

甲 お正月のくる仕度をしなければなりません、
A. I must get ready for the coming new year!

乙 ほんとをにしーぢきにまいりますから一生けん命に仕度をしなければなりません
B. O yes, it will come soon and we must work hard to get ready.

甲 どーか兄弟私の春衣のてつだいをしてちよーだいな、
A. Will you please help me to make my new year dress?

乙 私もする事はたく山ありますけれどいくらかてつだいましよー、
B. Well I have lots of work to do but I will help you some.

甲 それは御深切様、
A. It is very kind of you to say so.

乙 暇があつたらふたりで市へいつて色々な物を買いましよー、
B. When we have time we will go to the fair and buy many things.

甲 そんならお金もうけをしなければなりません、
A. Then, I will try to get as much money as I can.

文藝倶樂部

大計畫

新刊大

□毎月一回一日發行

歳月流るゝが如く、希望の聲を以て迎へられたる癸卯の歳は、將に數旬を出でずして逝かんとす。遠き二十九年一月を以て江湖に産聲を發せし我が文藝倶樂部は年を閲すると茲に九、月を重ぬること百有八、明治三十七年の新正第一月は實に創刊十年の吉辰に當る。十年啻一と昔！…朝起暮倒、變幻極まりなき雜誌界に在りて此長壽を保ち得たるもの編者の微力にして勵精事に當り、幸に讀者に滿足を與へたるに依るべしと雖も、又江湖十萬の愛讀者ありて、本誌上に多大なる眷顧を寄與されしにあらざるよりは、奚ぞ能く今日あるを效さんや。是れ編者同人等の榮とし誇りとし、又感謝に堪へざる所なりとす。されば我等同人は如何にして讀者に酬ゐ、又如何にして本誌の改美を計らんか。同人、少しく成竹のあるあり。乞ふ以下告ぐる所を聞け。先つ**小說**は毎號大家の大作を乞ふて卷頭を飾り、加ふるに新進作家が苦心になる清新の數編を掲けて讀者の情懷を新たすると共に本年よりの新計畫に成る**懸賞**小說は明年も猶引續きて新進秀才の著作を紹介するに努力し、**雜錄**以下の諸欄は**趣味**と併せて**實益**とを兼ね備ふることを期し、讀者をして應接に遑なからしめむ。なほ本誌の裝飾としての**表紙**及び**口繪**は石版に木版に丹青界大家の揮毫を乞ふと同時に、原色版寫眞版等各妍を競ひ、艶を爭ふ、又明年より每號の各小說に**插畫**を加ふることゝし文の妙、畫の情と兩々相俟て、讀者を娯しましむべく尚ほ新春の餘興として日本未曾有の**金千圓の福引**あり苟も吾邦文學の發達普及を企圖する人々は、此勇氣ある文藝倶樂部を讀むべきなり……

正價一冊貳拾五錢●四冊九十五錢●八冊金壹圓八十錢●十六冊金三圓五十錢●郵稅一冊二錢五厘ッヽ

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

本誌を見よ

(戌の一)

新刊豫告

東京帝國大學法科大學教授 法學博士小野塚喜平治先生著

政治學大綱

近時人口を開き筆を執れば乃ち國家社會國體政體政策内閣議會立憲制等の諸語頻なり然れども其明確なる觀念に至りては之れを有する者甚だ鮮少なり是れ主として政治學の發達尚幼弱にして世に未だ良書の出版なきによれり我帝國の如き立憲制の始途にある國民に於ては殊に其書の必要あるを見る著者曩に大學院にありて斯學を專攻し又官命を奉じて歐洲に留學すること數年歸來東京帝國大學に於て**政治學講座**を擔任し教鞭を執らるゝの傍ら世に斯學の良書なきを慨し遂に其大要を著はし以て讀者をして健全なる政治思想を養はしめらる說述簡明懇到近時其比を見ざるの良書なり諸子一本を机上に備へられよ

全貳册

洋裝上製美本 下巻 近日發行
正價五十錢
郵稅六錢

尾崎行雄君序文 中島氣峰君編 （近刊）

演說活法

演說を學ぶものは先進大家の苦心せる痕跡に就て工夫を下すを最も便なりとす我國從來曾て雄辯法の著述飜譯盛に行はれしも近時は萎微として振はず且つ其說く所皆歐米の演說方法を標準とせしを以て往々我國風と相容れず且つ陳腐の說に屬するものさへあり著者は歐米演說法の飜譯によらず之に代ふるに名家の演說實驗談を以てせしは實に一種の創見といふべし讀者之に依つて研究し一定の原理を歸納したらんには頗る完全なる演說法を發見自得すべし活法の名其實質に背かざるを知るべきなり

全壹册

洋裝上製袖珍
演說大家肖像
數葉插入紙數
二百二十頁
正價郵稅未定

（戌の三）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

中學世界

文學士大町桂月君主筆

（戊の四）

明治卅七年の新計畫

每月一回十日發行

中學世界は明年に於て創刊第七號に入るに際し外形内容とも又一刷新を行ひ一層資料を精選し愈々益々中學程度學生諸氏の補習用として必須の料たらんことを期す。又大町桂月氏は自今は啻に起草のみならず編輯上にも專ら本誌の爲めに力を盡さるゝこととなりたれば其結果は歴々紙上に現るべく從來とは更に大に面目を一新するものあるべし

表紙及口繪 表紙は久しく佛國に在りて此程歸朝せられし洋畫の大家和田英作氏の揮毫に係る美麗なる石版三度刷のものなり石版口繪は玉章氏の毛筆畫手本二頁の上に更に和田氏揮毫の洋畫手本二頁を加ふることとし十二頁の寫眞版は内外人物風景美術等嶄新の資料を以て充溢すべし

内容に至りては從來と体裁を全く一變するものあり卷頭に於ける桂月氏の評論愈警拔痛切を極め修養欄は大に擴張して各方面に於ける名流訪問記を收めて大に志氣を鼓舞し又時に名流を招きて講話會を開き其筆記を收め從來の史傳地理、國語漢文、理化、軍事、數學、運動遊戲、文藝雜俎の諸項は凡べて一欄の下に混載し從來登載し來りたる種目以外にも猶万般の事に關する資料を收めて、愈々趣味を多種ならしめ、英獨語學の一欄は別に卷末より起して文字を横組とし從來の如く卷を横にして讀むの不便なからしめ、對譯解義文法等專ら中學程度必須の材を選ぶ、青年文壇は大に擴張し選評は凡て桂月氏担任し懇切なる删正を加ふる事とす

新年の本誌は上記の方針に據りて殊に材料の豐富と趣味の清新を期する上に別に約六十頁の**新年大附錄**を附し之には現時我國の軍人界七傑の傳記を諸名流に依囑して寄稿を請ふ、されば新年初刊は多趣多益の記事充滿せる約三百頁の大冊なり

定期增刊は明年亦各季に之を行ふ、而して三月に發行すべき春期增刊は近頃歸朝せる自轉車無錢世界周遊者山口縣人中村春吉氏の實歴談を冒險小説に堪能なる押川春浪氏の筆によりて紹介せんとす。

正價一册金貳拾錢 四册（三ヶ月分）七十五錢●八册（六ヶ月分）壹圓四十五錢●十六册（一ヶ年分）二圓八十錢●郵稅一册二錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

女學世界

毎月一回　五日發行

明治卅七年之新面目

初號一月一日發行

女學世界は現代の趨勢に雁行して女子必須の學問智識を供給するの目的にして其編輯上の用意は一面高等女學校並に全程度の女學生と家事を擔當する江湖一般の主婦に向つて無二の良友たる參考書たり日用品たるの必要を感せしめんと期す其大綱を家庭社會の二項に分ち家庭に於ては專ら內界の智識を網羅し社會に於ては外界の智識を採集し一般婦人をして家事を修むると同時に又社會の耳目に疎略等閑ならしめざらんことを期す

●論說●社交●家庭●談叢●史傳

●英語實習●科學の外更に**學事欄交詢欄**を增設し學事欄に於ては各學校の內容と敎授項目並に製作品を紹介し交詢欄に於ては家庭衛生に關する事項家事家政に關する事項の質疑に對し親切に解答をなし以て日常家事の活用に資せしむ

▲應用化學は今日の家庭幷に女子が世に處するに最も須要の事項たり是を以て明年度の女學世界に於ては每號應用科學に關する適切なる智識を說述し以て人事の實際に應せしむ

▲口繪は人物、景色、風俗、學校、時事に關する寫眞銅版を揭載し習畫手本は西洋畫、日本畫の兩樣に分ち何れも知名大家の揮毫になりたる寫眞石版を揭載す

家庭壽語錄　初發刊行　**新年附錄**　菊版八頁大彩色二度刷

正價金貳拾錢●四冊(三ヶ月分)七拾五錢●八冊(六ヶ月分)壹圓四拾五錢●十二冊(一ヶ年分)貳圓八十錢●郵稅壹冊貳錢

女學雜誌の先達者

(戊の五)

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

少年世界

毎月壹回　第拾年之大革新　五日發行

少年世界が初めて生れたのは今から十年前即ち明治二十八年の一月であります、爾來日に月に長足の進歩をなして、この十年間に少年雜誌界の大王となりましたも、これ偏に少年諸君が御愛顧に基くので、記者はこの位嬉しいことはありません、今年はこの少年世界も云はゞ拾歳になつたのですが、未だ肩上げをとるも早く、また兄さんに中學世界と云ふものもありますから、もう一度若返つていよ〳〵益々少年諸君の侶伴となろうといふのであります、さア〳〵いらッしやい〳〵!!!

一　口繪を精撰して、教育上有益なる資料を供し殊に毎號光攪なる着色標本を掲載す。

二　卷頭の小話教訓は國定教科書と相俟つて、幼年諸君の讀物とし、趣味と實益とを兼有せしむ。

三　少年諸君に供する讀物は主として學校の各教科目に準じ、學齡兒童に適切なる補習教材を供給すべし。

四　本年より特に專門醫の大家に乞ひ、家庭の爲に兒童衛生に關する有益なる記事を掲載すべし

五　諸學校通信の欄を設け、教育者諸君の通信を乞ひ、又少年世界讀者會を設け、全國讀者と本誌との交誼を厚からしむ。

第拾卷第壹號要領

記事には卷頭先づ幼年諸君補習の材料として小波新考案のお伽讀本を掲げ尚從來のお伽噺は同氏一層の奮勵を以て起草すべく其他の記事は凡て尋常小學程度に準じ每號文學諸大家及び記者これを擔當す少年の讀物にはまた從來の史傳地理科學遊戯參觀軍事海事を擴張し頗る平易に之を記述しそもまた高等小學科程に準ずべし。

口繪は彩色石版を以て新奇なる動物標本を掲げ寫眞銅版としては東宮殿下火佐御服裝及び帝國巡洋艦香妻以下幾四頁を挿入す。

定期增刊は一年四回として其第一回は「滿十年」と題し普て投票を以て撰定したる十大家の得意なる談話を蒐む例號及び定期增刊共定價郵税は從來のものに準ず。

正價一册拾錢　●四册（三ヶ月分）金三十八錢八册（六ヶ月分）金七拾五錢●十六册（一ヶ年分）金壹圓四拾錢●郵税一錢五厘

（氏の六）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

地方 公民の友 行政

毎月一回　明治卅七年之大刷新　十五日發行

乾坤一轉、文運は第二十世紀に於てまた一歩を轉ぜり。吾人操觚を以て業とし、世の木鐸を以て任ずるもの、豈舊態に安ずべけんや。我「公民の友」は昨三十六年一月を以て其第一聲を揚げてより、月を閲すると僅に貳、年齒を以てすれば乃ほ搖籃裡の雛兒たるを免れざるも、其將來に向つて有する處の希望は老成の人に讓らざる也。且幸に大方諸君の愛顧により、浮世の慘風にもまれながらも其發育は極めて健全なり。並に新乾坤を迎ふると共に左の新裝を以て讀者に見ゆんとす。

一名譽贊成員　內務當局は勿論、大藏、文部、司法、農商務及地方長官等諸大家を本誌の名譽贊成員に戴き、其指導監護の下に地方行政の爲めに盡さんとす。

二內容　『論說』に『訪問』に『講演』に當代知名の學者にして局に實務に當るの士に請ふて、學理上及實務上より法令の眞意を明にせんとを期す、『地方事情』は本誌の首腦たる欄にして、國內諸方面に於ける本誌の範圍內に屬する出來事を、簡潔に明了に且漏れなく報道論議すべく、『史傳』には上當局大臣より下は地方有志に至る迄、地方政務に功績ある者を捉來りて、椽大剛直の筆を以て比較論評し、瑕疵は之を指斥して憚らず、長所は之を賞揚して蔽はず、以て範を自治界裡に示さんと欲す。其他各欄皆刷新を施さゞるは無く。面目一新之に接するの讀者は舊知ながらも初對面の人に接するの想あらん也。

三新年附錄　明治二十六年度以降、明治三十三年度に至る地方費及國費膨脹の摸樣を示せる精緻明瞭なる着色石版新意匠の統計表に附するに、其筋の手に成れる簡明なる說明書を以てせんとす、讀者之れを觀て其膨脹の急激過大なるに驚くと共に其救濟の忽にすべからざるを覺るべし。

四新年の初號　『論說』には江木、岸本兩博士の俊嚴なる所說の外に水野內務參事官の雄篇あり。『訪問』に吉原地方局長及奧田博士の面影、談話は紙上に躍り、『講演』には島田、廣中兩學士の苦心洗鍊の餘に成れる讀切講義あり、而して『史傳』の清浦農相及內務高等官の比較論評には神泣き鬼哭すべきなり

正價 一冊 **拾錢** ●三冊（三ヶ月分）廿八錢●六冊（六ヶ月分）五拾五錢●十二冊（一年分）壹圓〇五錢●郵稅 壹冊壹錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（戊の七）

實業世界

太平洋

毎月二回 **大改良の要旨** 一日十五日發行

實業界の發達は年と共に新たに我が**實業世界太平洋**も又紙面の**大刷新**を施すのに臨めり此に機運於て毎月の**發行度數を月二回**とし**紙面**に大擴張を加へて**菊版二倍大**曲尺縱一尺横七寸四分の六十頁と爲し、印刷には現時**最新式輪轉機**を備へ最も迅速に印刷し變化極まり多き實業界の新消息は遺憾なく論評報導し以て實業界唯一の良師友たらんとす其改良は此の如く大にして毎月二冊分の内容を合すれば從來月刊の一冊に比して約二割を增加したるも定價は二冊分を合して却て從前の一冊よりも減ずべし

本誌特有の**口繪寫眞**は雜誌の紙面擴張に伴ふて面積を廣くし內外實業界の名士の肖像は勿論住宅庭苑商店工場家族までも一々其生地に就き新たに撮影して紹介し其他內外の市場貿易港商品風景等坐ながら世界の實物に接するの感あらしむべし

評論は當代第一流の博士學士に請ひ專門的論說の寄稿のみを掲げまた實業界諸名士を訪問して其意見を叩き又時事の問題を漏さず論評して輿論の木鐸たらんとす

新たに設くる**時代人物欄**は現代實業界に錚々たる諸名士の月旦と內外事業家の立志傳及其事業に成功せる秘訣偖は其等事業の情況をも清新奇抜に之を叙述して世の青年立志の軌範と爲すべく又**雜錄**には縱說橫說殺活自在に實業界の表裏方面を說破し或は內外各地の風俗事情等を觀察し滿紙趣味の津々たるを期す

實業界はまた從來本誌の獨擅場とする所農工商等山林水產等の各業に通し專門學者の手に成る學說實驗說を乞ひ集め加ふるに新發明の紹介親切なる農業案內の周密なる將た交詢欄は讀者の質疑に答へて如何なる問題も之を指導する等他の通信彙報商況等と相待て迅速の印刷發行度數の增加紙數の增加定價の低減と共に如何に其價値を加ふるかを想ふべし

新年大附錄には東京高等工業學校にて編纂せられたる**全國工業大地圖**を添へ一見せば能く全國各地の主要なる工業及生產額を知るを得べきなり

正價一册拾貳錢●六册六拾八錢●十二册壹圓參拾五錢●二十四册貳圓六拾錢●郵稅一册壹錢五厘ツヽ

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

（戊の八）



眼と心

内幸町井上眼科病院長　井上通泰氏

心と躰との關係に就いては既に心理學的の說明するが如く其關係は洵に密接なものでありまして譬へば手の動く處ろ足の運ぶ處ろ悉く心が命じ、精神が命ずる處であつて手足の痛みや疲れも亦直に精神に感ずると云ふ次第であります。

夫れと同じく眼と心との關係に於てもつまり其相關的の作用を免れぬことでありまず、今玆に眼と心との關係に就いてお談を要めらるゝが其區域は甚だ漠然として殆んど答辨に苦しむと云ふ次第である。何故なれば心のことは心理學者の擔當で眼のことは眼科醫の持前であると云ふ譯で、一は心理學に亘り一は生理學及び病理學に跨ると云ふことになりますから雙方兼務と云ふことになる。去りながら學問には各專門がありまして心理學者は心理學——生理學者は生理學——病理學者は病理學を擔任すると云ふ譯でありますから他の範圍內にまで闖入ると云ふことは出來ませぬ、是れは學者の德義として予輩の尤も愼まなければならぬ處ろであると思ふ。

故に私が此ことを申ますのにも成るべく心理的に亘らぬ樣に單に生理學及び病理學の範圍內にのみ限らうと思ひます。

そこで眼と心とは如何なる關係があるかと云へば其區域は甚だ漠然であるが聊か私の實驗したる處に於て陳べやうと思ふ。素人でも知つて居ることであるが視力が衰へると精神が沈むと云ふことは成程其通りである抽象的に云へば或る眼病の爲めに雙方の眼に繃帶などをして數日間に亘ると諳室症（ヒポコンデリー）を起して精神に變調を發するものがある其發するのは重もに平生酒を好む人とヒステリーのある人とであります。

私の實驗上から申げしたが岡山病院奉職中或る五十歲許りの中流の婦人であつたが不幸にして左の眼は角膜實質炎に罹つて幾くら治療を加へても漸次に視力が衰へて僅に明暗を判する位にまで進行しました（尤も此角膜實質炎と云ふ病は小兒及び少年に多い病で大人には少い而して大人は若し此病に罹つたものがあるにもせよ兩眼罹るものは割合に少い）然るに此婦人は病勢進行の結果憫むべくも兩眼に罹つて仕まつた此患者は初期の中から治療を施したのであるが遂に角膜に翳が懸ッて之れが爲めに視力も衰へる樣になりました。

そこで念に念を入れて治療を施したにも拘はらず二三ヶ月間兩眼全く視力を失ふて仕まつたそうなると座臥共に人の手を借らねばならぬ樣に

なるから神經衰弱を起して不眠症などおこし遂に精神病者となりました。

されど當時岡山病院には精神病者を容るべき病室がなかつたが爲めに已むを得ず其郷里に歸ることにしました、然かも私が其患者に向つて此病は必らず治すると云ふことを宣言して置いたことがあるから責任として其患者を毎週一回づゝ無料にて往診したる處ろ到頭其病を除き視力も進んで精神も爽になるに從ひ精神病も全に全治して仕まつた。

此等は一種の事例には過ぎないが眼と心との關係は洵に密接であつて、且つ至大であると云ふことは解る譯である。

故に精神を爽快にするには是非共眼に就いての注意及び衛生を重んぜなければならぬと云ふ觀念も喚ふ樣になる。

夫れから眼と心との關係に就いて注意すべきは近視眼の兒童である心理學的のことは精確でないから云はぬが一般に近視眼の人は智識の發達が鈍るが之れは何う云ふ譯であるかと云ふに近視眼の兒童は一體に遠方が視へぬから從つて十分の注意力が足りないからである又盲目者なども從來の智情意を其盲目の爲めに害されて居る併し盲目と智情意との關係は心理學者の範圍内であるから此位にして略して置きます。

此處に聊か注意までに一言せんか盲目は一般に癒し難きものゝ如く心得居らるゝもあるが之れは甚しき誤解である白内障の如きは十年若くは二三十年を經過したものも全癒するのである私が慶應元年に盲目になりし按摩を明治二十七年の時に治療して全癒せしめたことがある

元來白内障なるものは眼の中に視力を妨ぐるものがあるのであるから之れを除けば確かに視力が回復するものである但兒供の時分から此症に罹りたるものは多くは眼が物を視ることを忘れて居るから手術をしても十分の視力の出ぬ事がある。
手術に其例を擧ぐれば十八歳の娘であつたが、三歳か四歳の時分から此白内障に罹つて恰度十八歳の時に手術を施したて處ろ瞳(ヒトミ)が黑くなりても視力が出來なかつたのである(斯るものを不用性弱視と云ふ)然るに一週間ばかりたつと漸次に視力が出て遂に普通人の眼と同じ樣になつたのである。

次の一人のは十二三歳の男の子であつたが之れは生れながらにして白内障に罹つて居つて三味線を稽古して居つた處ろ兩親は白内障は全癒すべきものなるを信じて手術を私に求め來た其れで手術の結果白内障はなくなつたさて初めて繃帶を取りし時玉子を見せたる處ろ視へるは視へるが何だか知らぬと答へた其れから手で探らせたら直に玉子だと答へた、又其時に二錢銅貨を見せた處ろ同じく眼には視へるか何だか知らぬと答へた、そうして矢張り手で探りて二錢銅貨であると答へた。

其他眼と心とに關してのこと柄は種々あるが此位で素人には稍や其一斑を知ることが出來やうと思はれる。

寒時の衛生

三浦醫學博士

◎風邪に就ての注意　冬の衛生と云へば、第一が寒氣を防ぐ事ですが、是れには前に身體を暖かくして居て、急に寒風に當る時に、風邪を引くのです。併し前に入浴して、身體が蒟蒻の様に爲つて居る場合には、皮膚の收縮力が麻痺して、幾分か無感覺の氣味で、風邪を引く事は少ないやうです。一體風邪を引くといふ事は、身體各部が健康の平均を保つて居ない時で、恰も人が足片で立つとか、身體を曲げて立つて居れば他の人が衝突て直に轉ぶのと同じ理屈です。寒氣を防ぐ爲めに、衣服を多く着るのも好し悪しで、餘り澤山に着過ぎると汗が出る、其汗が冷かな風に吹かれると、皮膚と衣服の間で、冷たくなる爲めに、尙ほ早く風邪を引くやうな事になるから、衣服を餘り多く着る事も能く考へればなりません、

◎身體を冷す事　身體を冷して居ては體温が減て、全體の病氣に對する抵抗力が乏しくなるから、此際黴菌に侵入されると其發育力が、其れだけ強くなりますので、意外な病氣を惹起す事が度々あります。尤も生きて居る人間だから、寒い處へ急に出る事もあれば、衣服も都合によりて、され程好くばかりもして居られませんから、先づ寒氣に負けないやうに、身體を能く慣らして、抵抗力を養ふのが第一です。それは冷たい水で、身體を拭くか、水を浴るかして、急に寒風に當つても、皮膚が收縮しない様にするのですが、寒中になつて俄かに水を浴るとか、拭くとか云ふ事は出來ませんから、夏の中から行つて居て、一つの習慣を作つて、寒い時は寒くないまで位ゐの程度に衣服を着て、成べく身體を働かすやうにしなくてはなりません。

◎炬燵の利害　炬燵にあたる事抔も、寒氣の爲めに身體を冷した場句抔は、抵抗力を回復させる爲めに、身體の暖かくなるまでは無論悪からう筈はないのですが、始終あたり詰にして居ては、寒氣に慣れなくなるから、一寸外出しても、直ぐに風邪を引きます。國で云へば無事太平に慣れて、戰爭抔云ふものは夢にも見た事が無い人民は、イザ鎌倉と云ふ場合には、とても戰鬪力はありません。鐵砲の音を聞いたばかりで、腰を抜かして了ふのと同様です。

◎節食の誤解　食物は何でも多く喰べる程善いのですが、僅かに餘計喰ると、餘ひ胃を悪くする様になりますから、小兒の中から餘計喰べさせて、多食に慣れるやうにしなくつては可けません。昔は食を節すると云ふ事を誤解して、少なく喰べた方が長命でもする様に思つて居りましたが、是は大變な間違ひです、一寸した話にも、昔或る大名の料理人に、大さう長命で達者な者がありましたから、殿様が目通りへ呼び出して、養生法を聞くと、其者の云ふには、別に養生法もありませんが、私は料理番だから、鳥類を料理する時、氣を付けて見ると、鴨や家鴨は胃袋が裂ける程食物を詰め込んで居りますが、千年の壽命を保つと云ふ鶴に限つて、胃袋の中には食物が澤山ありません、其故私は鶴の眞似をして、食物を控へ目に致して居るので、斯う長生をしますと答へたなどゝ、下らない理屈を附て、成程と感心した事は、昔の子供騙し、大方食物

な情がる吝嗇坊が作つた話でありませう。鳥でも獸でも、動物は大抵秋から冬に懸けて、食物を多く食べて、脂肪を澤山に殖し、それで寒氣を防ぐやうに、自然出來て居ります。人で云へば綿入を着た上に、外套を着るやうなもので、冷氣を身體に導く事が少くなつて居ります。

◎大食と小食との利害　鳥獸は斯う自然で巧く往くやうに出來て居りますが、人間は自分が努めて秋から冬へ掛け、多く喰べる樣にしなければなりません。食物の分量は多少に限らず、習慣になれば、胃の大さが極つて了ひます、乃で小食の人が三杯喰ふも、大食の人が五杯喰ふも、滿腹の程度は同じで、身体の營養上にも相違が無いと云ふ人がありますが、是れは間違つた考へで、一家の經濟に譬へて見れば、一ヶ月百圓の收入がある人は、五十圓の收入の人に比較すれば、一體に大きく立派に遣つて往けます、尤も收入が多ければ、支出も隨つて多いから、差引勘定すれば同じだと云ひますが、一家の經濟でも一身の營養でも、大きければ大きいだけに、外來の刺戟に對する抵抗力が強い道理です。又體内の脂肪を殖やすには、蕎麥とか麵類とか云ふ、澱粉の多いものが良いのですが、食物の種類を撰む杯は抑も末の事で、何でも澤山喰べるのが宜しい、殊に冬は大食に限ります。

◎住所の心得　冬の住所は十分に暖めて置く事が必要ですが、どうも日本の家屋は不都合な構造で、室内を一体に暖める事が出來ません、其故炬燵に潜り込むやら、行火を抱え込むやら、する樣になるのです。此の點に至りますと朝鮮杯は野蠻だの何のと馬鹿にされますが、床下から室内を暖める工夫になつて、感心なものです。其代り温々暖る心持が餘り好過るので、怠惰者が多いと云ふ事であります。兎に角適度に室内を暖める事は必要で、隙間から風の吹込むのも、十分注意して防がなければなりません。西洋人は隙間の風と跣足と、頭を太陽に照り付けられるのと、此三つは大禁物にして居ります。

◎衛生の誤解　世間の人が衛生と云ふ事を誤解して、唯身體を玻璃の道具見たいな、毀れ易い物でも取扱ふやうに、大切に〳〵とばかり云つて、其實大切にする方法を誤つて居ります。飽くまで働くべき身體を持つて居ながら、眞綿へ包んで桐の二重箱へでも藏つて置くやうな考へでは可ません。種々の病氣に對して、抵抗力を強める事が肝心ですから、其心得で平生身體を鍛へて、不意の病氣に恐れないやうにすべきものです、衛生の中でも、食物には特に誤解が多い、肺病患者杯は何れも小食の者に出來易いから、胃腸で消化し得る程度までは、成るべく大食が好い、併し其程度を踰ねて暴食になつては可けません。

患者の寢床

淑德女學校講師　佐藤恒久氏

▲一般の心得　こゝに病人の寢床即ち臥床のお話を致しませう、此病人の寢床と云ふものは今お話するにも及びますまいが▲第一下に敷くところのもの之を臥褥と申します布團のことです、それから▲第二に上に掛けるもの　夜衾是は掻卷であります或は掛布團と云つて矢張布團の四

角張つたものです、それから▲第三に 覆布と云ふものは必らず入用です是は俗に上敷と申じて大概は白い切で出來て居る、或は金巾或は天竺木綿のやうなもので拵へても宜い、 或は覆布として別段に幅を廣く織つたものもあります、 此三つの物が必らず入用です其外毛布のやうなものな用ひるものもあるけれども是は敷布團或は掛ける方のものに屬します、 別段に毛布と云ふものは三つの外に加へずとも宜い、 それで寢床の出來方はどう云ふな風なのが宜いかと云ふに無論病人が其中に寐て居りまして寒く感ぜず、 又身體が痛くないやうにして置かなければならない何故寒く感じては可けないかと云ふと寢衣と云ふものは平生着て居る時の着物よりも薄い、 平生着て居るやうな着物を着て寢床の中に寢て居つては身體が不自由で困りますから是非とも平生よりも薄い着物でなければなりませぬ 其薄い着物を着て居るものでありますから寒く感じないやうな用意をして置かなければならぬ、 それから寢臺の上にしろ疊の上にしろ長く寢て居ると云ふと若し寢床の出來方が工合が惡いと身體が痛いから痛くないやうに寢床を造つて置かなければならぬ、 それから第三に其中に寢て居りまして上に掛けてある物の性質に依ては大變に重く感じることがある重くろしくては困るから重くないやうでなければ可けませぬ、 先づさう云ふ風で敷布團の方は第一に厚くなければ長く寢床に這入つて居られませぬ、 それから柔かでなければ肌觸りが惡い成るたけふく〳〵した物を用ひなければはならぬ、 又掛ける物は輕くなければ可けぬ余り綿などを澤山入ますと從つて重くなります、 けれども綿を澤山入れなけば寒いと云ふ恐もありますからこの塲合には綿を吟味して余り塊つた綿を入れないやうに柔かい輕い綿を澤山入れるやうにしなければなりませぬ、それから覆布は布團にせよ、 或は搔卷にせよ、 始終用ひて居ると汚れるからそれを汚さない爲に用ゆるので洗濯するにも手輕に濟みますけれども布團の上に直接に寢るとか或は身體の上に直接に搔卷を被けると布團も汚れる又それを洗濯しやうとするには余程手數を要しますから 其手數を省く爲に必らず覆布を布團の上に敷く又搔卷の下にもそれを被けるそうすれば何日何時汚れても洗濯が出來ると云ふ便利があるそれで 寢床と云ふものは第一に厚く又柔かでなければならぬから布團或は被ける物共に空氣を澤山含んだものでなければ可けませぬ斯樣なものなれば暖く もあるし又柔かくもある空氣を澤山含んで居る搔卷布團はどう云ふのであるかと云ふに踏りゴヤ〳〵して居らない柔かい綿の這入つた物であります 綿が固まれば從つて居らないものを始終用ひなければなりませぬ 余り長く同一物を用ひると綿が固まりますから折々は寢床は變へなければならぬ、 それでは綮くなつたのはどうするか一々洗濯をして綿を入れ替えるかと云ふに新しい 内はそれには及びませぬ度々日に乾せば宜い乾して柔かくなつたところで又用ゐる斯う云ふやうに更に角同一物を長く用ゐると云ふことは可けませぬ 先づ是が寢床の結搆─出來方であります

▲寢床の設け方 それから寢床の設け方即ち敷方是は部屋の内に敷くのでありますが病室の内にどう云ふ所に敷いたら宜いかと云ふと八疊か十疊位の部屋を病室として用ゐられました時には成るべく部屋の眞中に寢床を拵らへる眞中に拵らへて置くと四方から病人の傍に寄ることが出來る右からも左からも足の方からも頭の方にも行かれる譯でありますから廣い座敷でありましたならば成るべく眞中の所へ布團を敷いて置く若し六疊位の狹い部屋でありますと眞中では周圍の明いて居る所が狹いからして働くのに不便を感じます 殊に四疊半など云ふ小さい部屋に在つては無論のこと眞中には敷けないのであります、 さう云ふ塲合はどう云ふ風にしたら宜いかと云ふに素人方は足の方を壁に付ける是は枕元

に大が垂れると云ふ理屈からでありませうが是が一番困るさう云ふ場合には頭を壁の方に付けるやうにしなければなりませぬ、 頭の方の廣いのは病人の爲に少しも必要はない診察をするにしても足が壁の方に付いて居れば繃帶を捲らうとしても壁に支へて能く捲れない、 それが頭が壁の方に付いて居ると云ふと繃帶を捲るにも足の方が十分明いて居りますから少しも差支ありませぬ、 それでありますから頭の方は少しも明けずに置く必要はありませぬ成るべく壁の方に頭を付ける是も只今お話致しました通り 部分が狹い時は仕方がないからさうするのでありますが八疊以上の部屋であつたならば成るべく寢床は眞中に設けて置けば此上もない事であります、 それからもう一つ寢床に就ての注意は布團敷布寢臺或は枕等は何時も乾いた物を用ゐなければなりませぬ少しでも濕氣があると心持が惡い何時も乾燥した物を用ゐるやう にして少しでも濕氣があつたならば日に乾すと云ふやうに注意をしなければなりませぬ

それから夏は寢床を——譬へば壁へまして其場合に——暖めて置く必要はありませぬが 冬は寢床を暖めて置かなければなりませぬ、 それは何で暖めるかと云へば行火で暖めても宜いが成るべくは湯たんぽを中に入れるさうして病人が其中に這入りましたならば今度は湯たんぽなどは取出して仕舞ふ湯たんぽは御存知の通り色々あります銅で拵らへた小判形のものもありますが是は澤山用意して置く譯に往かない澤山要るやうなこともありますからさう云ふ場合には麥酒の瓶がありさへすれば宜い大きい瓶に湯をついで湯の漏れないやうに堅く栓をして布團の中に轉がして置くさうすれば湯たんぽの代りをします尤も硝子でありますから餘り熱い湯を入れて は割れますから割れない度合の湯を入れなければ可けませぬ、 極く手輕に出來る話であります

それから病人で以て或場所に疵があつて繃帶をして居るけれども血が繃帶の外迄にじむ或は膿が出 る小兒であると寢小便をするとか大便をするとかして布團を汚す、 さう云ふ場合に布團を汚さないやうに注意をしなければ可けませぬ、 それはどう云ふ風にするかと云ふに適當の所に油紙を敷いて置くのであります此油紙は小さい物では仕方がありませぬ又狹い物でも可けませぬ 適當の大きさで適當の油紙を敷いて置く、 小さい物だと云ふと病人が寢返りをする毎にずれますずれると云ふと折角お尻の下に置いた物が頭の 所などに行つては何にもなりませぬからそれがずれないやうにして置かなければなりませぬ そうするには十分大きなものであれば寢床の下に挿込むが左程大きい物が無かつたならば留針で四所五所位留めて置く、 さう云ふ風にして置くと云ふと皆すらない許りではありませぬ此油紙が皺になりませぬ是が若し皺になつたと云ふと其部分が高くなつてさうして身體に觸ると痛かつたり何かしますから皺にならないやうに留針で留めたり布團の下に挿込んだりしてこれを防ぐことが出來る、 此油紙を敷いて其上に晒布が來る、 晒布の上に油紙を置くと其上にじかに寢なければなりませぬから晒布だけは何時も汚すものと極めて油紙を下に敷く斯うすれば布團を汚す氣遣はありませぬ。

▲就褥患者看護法　就褥患者と云ふのは始終寢て居る病人です是は病氣に依て重いのもあり輕いのもありましてそれぐ看護法が違つて居りますがこゝにお話するには重い病人に付てのお話でない重い病人をあなた方が看護をなさると云 ふことは些と難かしからうと思ひますさう云ふ場合は看護婦の手にお任かせになつた方が病人の爲宜しうございますからさう云ふ病人はお扱ひにならないこ とゝ假定めて輕い病人のお話

丈に止めて置きます、就褥患者の重い者と云ふのは是は寐たつ切りになつて少しも身動きの出來ない者でありますが多少身動きの出來る就褥患者のお話を致しませう。

第一に褥瘡の豫防と云ふことであります是は只今油紙の時にお話致しました通り褥布と云ふもの は矢張り油紙と同じやうに隨分ずれるものでありますが從つて皺になり易い物ですからそれを引ッ張つて平らにしなければなりませぬ若し皺があると病人の脊中が當れば痛い酷くなると褥瘡が出來る、それを防ぐには何時も褥布を平らに引延ばさなければならない、それを平らにする方法であります是は毎日朝晝晩と三度位づゝたとへ皺になつて居つても居らぬでも引ッ張らなければならない一つのお役として毎日三回づゝ引ッ張るさうして布團の下に挿込む病人が寢返りが自由に出來るものであると右でも左でも一方の方を向いて貰ひさうして能く引延ばして布團の下に挿む、それから又向返へて貰つて又背中の方になつた部分を引張る、さうすれば平らになります、それから病人の寢衣でありますが是も度々引ッ張つてやりませぬとお尻が捲れたり致しますから矢張褥布も同じやうに一日に三度位は引ッ張つて足を包んでやつたり裾を掛けてやらなければ可けませぬ寢衣が皺になると褥布が皺になつたと同じやうに其部分が身體に觸ると痛たうございますから必らず平らに引延ばすやうに氣を付けなければ可けませぬ。

それから今度は身體清潔法であります病人が寢床に寐て居りましても湯に這入ることが出來ないさう云ふ人を寐床の上で洗つてやる方法です是は汗の出る者には大變必要です、第一に寐床を濡さないやうにしなければならぬそれには水の濡れさうな場所には油紙を敷いて寐床の上に水がポタ〳〵落ちないやうにする第二に部屋を閉込んで置かなければならぬ裸体になる のでありますから風の通らないやうにする第三に部屋の内の溫度が華氏の七十度以上でなければならぬ寒い時には火を置いて暖める第四に洗う湯は百十度位少し熱過ぎて手を入れられないやうでありますがさう云ふもので絞つた手拭でなければ病人は寒く冷く感じます第五は其洗う物は石鹸手拭海綿のやうな物第六は洗つて後身體を拭くにはタオルが宜い絞つた手拭は可けませぬ乾いたものでなければ可けませぬ第七に洗う順序は最初に顔から頸の部分それから胸から背中を洗う次にどちらでも一方の腕其次に腰から足と云ふ順序に洗う其洗う方法は最初に顔から頸の周圍を洗つたならばすつかり拭いて仕舞ふ迄は決して他の方に移つては可けませぬ片々づゝ始末を付けるさうしないと前に洗つた部分が能く拭けてないと云ふと水が蒸發するに從つて寒氣を感じて來るからしですつかり拭いて乾き切つた時に第二の部分を始めないと風を引きます第二の部分が拭けたならば第三の部分に移ると云ふやうにして決して始めから一時にしては可けませぬ無論寢床の中で洗ふのでありますから洒脫したやうな譯には往きませぬが兎に角多少の垢は取れますから澤山汚れた病人は折々斯う云ふ風に洗つてやらなければ可けませぬ、それから頭と口中及び手は毎日一回必らず洗つてやらなければ可けませぬ殊に爪の間には餘り垢の溜らないやうに、手は殊に清潔にしなければならぬ、と云ふものは箸を握るにしろ食物を撮むにしろ皆な手でする仕事であるから清潔にして置きませぬと病氣が治らないとも限りませぬから若し毎日洗ふことが出來なければ手拭で度々拭いてやらなければ可けませぬ。

實務

婦人と實務の才

塚本はま子

婦人の實務的才能に就いて、少しお話をして見やうかと存じますが、私はとても自分が、特別に他人様よりも、綿密である、實務的才能に長けて居ると申すことは出來ませぬが、一般の婦人方は、比較的に男子方よりも、よほど綿密で愼しみ深く、勤めにかけては勤勉で、いはゆる粗放といふ事は、少いやうに思はれますから、綿密勤勉を基とする實務的の才能は、男子方に増ればと申しても、劣る事はあるまいと深く信じて居ります、殊によりましたら他人の方よりも私が、特別に深く信じて居るのかも知れませぬと、申すのはよほど昔のお話で、明治二十三四年の頃私が大阪で婦人教育雜誌と申す、小さな講義錄やうの雜誌を書いて居りました時、しきりに自分で婦人は小學校の教員などばかりに使はずに、庶務會計といふやうな、綿密で謹直な人の必要な場所へ、用ひたらよからうと感じましたので、その事を度々雜誌に書きまして、友達などにあまり突飛な議論ではないかと、よく笑はれた事がありました、なるほどその頃は婦人の職業と申すことは看護婦と女教師とより外にはなかつた時代ですから、笑つた方が正統で、笑はれた私は實際突飛であつたかも知れませぬ。併し私は、それから後も相變らず、その說を固く執つて機會があつたら、實驗して見たいものと考へて居りましたが、物移り星かはり、そちこち十年あまりの年月を經ましたこの四五年前から、日本銀行で札などを數へさせる爲に、婦人を使用したとか鐵道局で切符の計算などにも用ひたとか、電話交換局では、交換手として專ら婦人を採用するとか、郵便局

でも婦人に一部分の仕事をさせる樣になつたとか、いふやうな氣運になりました。もとより大槪は女工のやうなもので、婦人獨特の技術を振ふといふほどな事もないやうではありましたが、また別段、婦人であつたから、こんな失策があつたと申すやうな、批難の聲は聞こえませぬ、つまり何處も何處も成効であつたやうです。その時分丁度卅三年の夏休ごろでしたが、勤儉と實着とで有名な實業界の立物安田善二郞氏の經營されて居る、保險會社で、會計課の書記として婦人を十四五人入れて見たいから、誰れぞ年輩の婦人で、監督や指導をして貰ふ人はあるまいかと、文部省へ賴みがあつたとの事で、「どうじや一つ奮發してやつて見る氣はないか」と常々お世話になる先生方から、お話がありましたので、豫ての考を實際に行つて見るのは、この時であると存じまして、親しい友達なども、あまり贊成はしてくれませんでしたけれども、物好きらしく奉職して見ました。大層前おきが長いですが、私が理想でなく、實際に婦人の實務的才能に就て經驗し得たのは、かやうな次第で、全く安田氏の保險會社のみですから、定めし見解の狹いこともありましようが、見たことや感じたことを取りませて、少々のべましよう

一体この會社で事務を執つてをる人は、外勤の者や給仕、小遣まで加へましたら、何でも百人近くもありましようが、それで會計課と申すのが、十四五人でして、私はその一部分の保險料掛と申すのを引受けます筈で、はじめ一月ほどは男子の方々と一所に其の仕事を見習つて居りましたが、少しづゝ分かつて來ましたので、使ふべき婦人の撰擇にかゝりまして、高等小學の卒業生四五人、高等女學校の卒業生二三人、其他の女學校や講習會などを終へた人を二三人、都合十人ほど第一回に入社させました。年齡は十六七歲から三十歲ぐらゐまでゝ。身分は稀には、良人に先立たれて、獨力で遺孤を愛育して行かうといふやうな、特志の方もありましたが、八九分までは公民權でもあらうといふ良家の、娘さんたちが多かつたです。それで服裝なども、若い人たちは學校で用ひ慣れた、海老色の袴、

中には筒袖に靴といふやうなのもありまして、まづみました處はいはゆる女學生でありましたらう。俸給と申しましても日給といふ工合で、最下給即ち高等小學を卒業したばかりと申す方に、一日二十錢、それから段々と上がありまして、最上は一日五十錢までゞした尤も當節は、猶其の上もありましやうが、初めはまづそんな譯でした。かやうな資格の婦人たちを、かやうな報酬で使つて、その成績がどうであるかと申しますと、勿論人によつて色々な違ひはないでもありませぬが、まづ一般に、一寸した說明をしても、早分りがして、事務の習熟の早いのは、高等女學校の卒業生でした。これは申すまでもなく、普通敎育の素養が小學校以上二年若しくは三年多いからでしようが、併し高等小學だけの卒業生も、永く居つて熟練さへ致せば、よほど役に立つのです。たゞ悲しい事には、今日の所、どうも小學校の設備が不十分で、まだ敎授がとかく實際的でない故か、地理などの事にしましても、知識が全く書物の上の知識で、實際上の觀念がない、いや實際上どころではなく、地圖上の知識もありませぬ、例へば廣島を話をしましても、「廣島は中國第一の繁華なる都會にして」と、いふやうな地理書の字句はよく諳記して居ましても、その位置は山の中に在るか、海邊に在るか、又は東京に來るが近いか、馬關に出るが近いかといふ事は全く知らないものが多い、算術にしましても、珠算の加減乘除など、珠の扱ひかたは、隨分巧みで、私などは及ばないやうなのもありますが、さて實際位取りをさせて答をいはせて見ますと、飛んでもない間違が多い、十圓代のものを七八倍して、千何百圓といふ答を得たり、千圓の一割二分が僅か一圓二十錢であつたり、隨分途方もない可笑しな事があります、又作文は巧いが習字も上手だが、半切や葉書にかゝせては、人の前に出されぬといふやうなのも少くはありませぬ、併しこれらは、決して小學校の女子卒業生にばかり、缺けて居るのではなく男女ともに在る弊でしよう。こゝになりますと、僅か二三年の事で、高等女學校を經て來たものとは、相違が起るのです。其

他年を取つた者と、若い者とを比べますと、年齢の方は、世故になれて役に立つのは當前ですが、事務の習熟などは却て十七八歳の若い者が早いかと思はれます併しつまらぬ事に笑つたり、騒いだりする傾は、若い人にありがちですから、やはり年ばえな者も入用です。

私は年取つたものは使ひ難いなどゝ思つた事はなく却て年ばえな人や、若い人があるので、調和上至極よかつたと思ひます。

さて肝心な執務上に就ての成績は何うであるかと申しますとこれはまことに良い結果を得たやうに思ひます。ことに仕事に忠實で、勤勉な點と、綿密で注意深い點とが、其の長所であらうと思ひました。時々はあまり勤勉すぎて、これでは皆の身体がつゞくまいと、心配した事もありましたし、時には綿密に過ぎて、これほどにせんでもよさゝうなものと、思つた事もありました。一例を擧げますと、男子方が一と月以上かゝらねば仕上がらなかつたといふ事を、廿日ほどに仕上げた事もありますし、今まではとても五萬人近くもある被保險人中の延滞者に、月々定つて催促をするなどゝいふ事は、出來ぬものとして居られたのを、確然と毎月延滞の照會を出して、猶餘裕に乏しくなかつたりしたのです。尤も夫れもその筈で、こゝの會社の事は燈臺もと暗しとやらで、存じませぬが他社の話をきゝますと、男子の方は朝も中々ゆるりと御出勤になり、まづしばらくは湯呑所でお茶を召上つたり、お煙草をおふかしになつたりして居られますが、婦人は朝少しでも遅刻するといふ事をひどく恥入りまして、我れ先きにと出勤し、定刻までには、筆記臺を拭いたり、戸棚をあけたり、十分準備して、直ぐに執務の出來るやうに致しますし、萬一事情があつて少しでも遅くれる人があります時には早く來たものがよく準備をしてやつて、待つて居るといふ有様で、時間に無駄と申すものがありませぬ。晝のお辨當のあとでも、少し監督を怠ると、箸を置くが否や、直ちにペンを執るといふ風ですから、これでは身体の爲にならぬと存じまして、やかましく注意を致して、漸く三十分位食休みをして

貰ふくらゐでした。男子方の執務の模樣は、あまりよく拜見した事はありませぬが、やはり聞く處によれば諸官省のお役人樣方のやうに、各々火鉢煙草盆をひかへ執務時間中、悠然と煙を吹いて居られるといふ事ですから、この點で比較しますと、高い聲では申し難いですが、男子事務員と同じ經驗や、學力のある婦人事務員が、五十人ありましたら、男子事務員百人の仕事は、らくに出來ましようと想像致されます。勿論一會社としては、社外の人と交涉談判を開く事もありましようし、綜合の才のいる事も、果斷の意志の必要もありましよう、重い物の上げ下ろしや、その外女の手際には不適當なことも澤山ありましようが、會計事務や帳簿の整理などには、十分適當すると考へます。

もともと婦人に實務的才能があるかないか、實業社會の仕事が出來るか出來ぬか、などゝ考へるのが不思議なことで、婦人の天職として居る、衣食住の世話や家事經濟や、交際育兒と申すやうな面倒な事は、丁度會社や銀行で、書記や事務員の執つて居る仕事とよく似てをるのです。◎こんな事を申しますと、何か奇矯な詞のやうですが、會社や銀行の事務を執る者は、快活で愛嬌があつて、外から來たお客をそらさぬやう、深切に取扱ひ、內に對しては手まめで綿密で、少しの間違もないやうに、機敏に事務を所理するのですから、主婦の資格の備つて居る婦人は、亦銀行會社の事務員の資格も、備はつて居ると申さねばなりませぬ。無論大會社の經營とか、大銀行の組立とか、一攫千金の仕事や投機的の大膽を資本にするやうなことこそ不得手でしようが、質着な仕事なら、必ず成功するでしようと思ひます。私は婦人の書記や事務員を使つて、萬一失敗する事があるとすれば、それは婦人自身の能力が足らぬためではなく、社會が婦人を本統に知らぬ、取扱方を全く誤るから起こる弊だらうと考へます。かやうに申しますと、我田へ水を引くやうな申分ですがとかく我國の男子方は、隨分分別のあるやうなお方でも、若い女子には途中のすれ違ひ樣にも、一寸笑談をいつたり、ひやかしたりして見たいといふ癖がある事は

私どもが物見遊散などに出て實見することですが、つまり多くの男子方は、外家の婦人に交際ふといふのは、茶屋か料理屋、そのほかそれに似たやうな場所の婦人が多いのですから、とかく婦人と申せば、一寸いたづらに惡戯つて見たいやうな氣がするのとも一つは男子のすべき仕事とばかり今まで思つて居た事を、婦人が横取りをしたやうに見え、椅子にかゝつて簿記臺にむかふのが小憎く思はれたり、ペンを持つのが生いきに見えたりしてとかく意味もない事に敵意をはさむ批評をしたり嘲つたりする傾が、まゝ世間にはあるやうです。私は幸にさる卅三年十月から、今年の三月まで、足かけ四年居りました保險會社では、かやうな弊は全くありませず、事務上で種々お世話になりました紳士がたは、皆深切にお取り扱ひ下さつたので不熟な事務ながら、愉快に働く事が出來ましたが、社會全体が皆かうとは受け合へませぬ、よほどこの點には注意せねばなりませぬ。

一言につゞめて申しますと、婦人には實務的才能は十分ある、銀行や會社の事務員としては、寧ろ男子よりも適當ではあるまいかと思はれます。併し社會がまだ婦人と机を並べて事務を執るのを、珍らしいと思ふ時代ですから、お互によほど注意を致しませぬと、この點から面白くない結果を得はしますまいかと心配いたします。

（完）

家政學の活用

女學記者

家政の學問は女學生諸子が學校に於て之を學び又、世上に有觸れたる家政教科書、幷に家事向一切の事柄を說きたる書籍に於て、既に十分知悉さるゝ事と信ずれば今是に言ふの必要なし。唯吾人が諸子に希望する處ろは「家政學の活用」即ち家政學の精神を會得して是を活用するに在り。蓋し婦人百般の學術も之を活用する事なければ、無用の長物に過ぎず、百の家政學、千の家事智識あるも一つの精神を以て之を活用するにあらざれば何の價もなきものなり。

學問智識は死物なり之を活かして働らかすは精神の力なり、精神は活眼なり、眼を活かさゞれば物を働かす事能はず、物には急所あり。急所を掴んで物を料理せざれば功を奏する事少なし、年若き婦人は物の急所か知らず、又知りても是を掴むこと能はざるを以て爲る事、成す事、兎角に手ぬるくして無駄骨多く役に立たぬものなれば、不斷心を用ゐて、物

の余所を掃むのハタラキを養ふべきなり。

家政學の實行は嫁入せるその日より直ちに手を下して行ふべきものなり。折角學びし智識を簞笥の底に埋め置くやうなる事にては學問した甲斐あらじ。良人の家は我が家なり、婚禮の盃濟みたらば、直ちに姑に就て家の習慣、家の仕來りを一と通り聞き取るべし、文明流のお嫁たるものは顔を赤くして差噛み居るべきにあらざるなり。かくてよく家の風習を聞き取りたる上にて如何なる處々に此の家の美風あるや、又如何なる處ろに家の弊害の蟠まりゐるやを十分に觀察したる上にて、若しそこに不完全なる處ろあればこれを補ひ、惡風あればこれを改め、無駄なる處ろに耗あると知りたらば、直ちに手を下してその穴を止むるだけの働らきと親切あるべし、如何にその家の家風なればとて惡しき事のあるを其儘にして置くべきものにあらず。若し姑が異議を唱へたらば宜しく物の道理を噛み砕いて說得すべし。その上にて着々と家政の改革を企てざるべからず。少くも文明流の花嫁たるものは良人の家に新內閣を組織したる意氣になりて、家制改革、冗物淘汰、經費節減を實行せざるべからず。勿論花嫁の身分にて斯く一時に實行する時は、直ちに姑舅の眼を峙つるかも知れざれど、さりとて何もビク〳〵するには及ばず。遣る丈けの事は遠慮なく遣つて退けざれば、後來家の不爲となるなり。

されば始めの內は少々目上の小言を喰ふかも知れざれど、二年三年の中には屹度嫁の技倆顯れて老人達も自然に我を折るやうになつて來るものなり。これは花嫁が家に處するの積極的方法として取るべき方針なり。

さればまづそれを爲すには第一嫁自身が身を苦しめざれば効なし、自分の一身を嚴重に堅めて掛らざれば人は承知するものにあらず。朝から長火鉢の前に座りゐて口でばかり指圖したればとて人は言ふ事を聞くものにあらず、唯に言ふ事を聞かざるのみならず、却て攻擊を受くるに至るべし。それ故自分が先に立ちて手を下し衆人に卒先して働かねばならぬなり。一體嫁が家風に會はずとて離緣を申し込まるゝは、決してその嫁が遣り過ぎるからにてはなく何事も遣り遂げざるより起ることなり。テキパキと働らく者を何人が家風に合はずとて追ひ出すものあるべき。遣り過ぎる位の嫁を姑舅の方にては却て希望するなり。元來家の爲めを思ふものは息子よりも嫁よりも、その家を長く保ち來りし處ろの姑舅なれば、その姑舅よりも一步上を行く位な嫁ならば、姑舅はその日からにても家一切を開け渡して嫁に讓ッて仕舞ひ度なるは人情の自然なり。故に花嫁たるものは眞つ先になッて家事を經營せざるべからず。

世間花嫁の風習として婚禮の當座は、御化粧に實を入れて、良人の氣嫌を取る事にばかり氣を揉んでゐるものあり、甚だ以て不見識千萬といふべし、斯かる嫁に限ッて家風問題が生じ遂には離緣沙汰を持ち上げて來るものなれば、文明流の花嫁たるものはお化粧などに實を入れて時間を空費すべからざる事と知るべし。

斯くして既に姑舅の信用を博したらばそれからの仕事は我が一存に在るべし。活眼を開いて大に家の改革を企て、無用を變じて有用となし。以て着々將來生活上の進步を圖らざるべからず。家政學の智識を活用する實に玆に在り。忍耐、決斷、實業、勤儉、玆に大に婦人の美德を發揮するの機會に遭遇すべし。

さて以上の心得はまづ相當なる家に嫁入りし時の心得なるが、不幸にして若し貧家に嫁入りし時は如何にして、その智識學問を活用すべきか。此の時にはまづ良人の地位、人物、性質をよく〳〵洞察してそれ〳〵適宜の處置を取らざるべからず。收入少額なれば、當分は忍耐して何物を

も求むる事なく、貯蓄をもして他日の活動資本を作るべし。場合に依ッては、自分も何か職業を見出して、二三年の辛棒をなし、金を蓄へて良人の資を補ふもよし。いづれにしても大に奮發心を起して事に當るべし。

次には負債のある家に嫁ぎたる時は如何にすべき。今日の女學生、誰れしも負債のある家を望んで行くものもなけれど、人間社會の事は一片の理窟を以て論ずべからず、人事は多端なり。借財家と知りつゝ行くものもあれば、又知らずして行く事あり。斯る家に行きて善後の策を施すは主婦たるものゝ務めなり。決してその責任を忌避すべからず、その心得の第一としてまづ家政上に外科的改革を行ふべし。不斷百圓の生活ならば、思ひ切ッて三十圓の暮しとすべし。世間には二十圓でも十五圓でも活計を立てゝ居るものあれば三十圓の生活出來ぬ事はなし。若しその手心を解せざれば、世間の小さき暮しをなするものに就て方法を學ぶもよし。必らず得る處あるべし。生活の難易はその人の思ひ切り一ツにあるものなれば、何程でも遁れぬ事のない筈なり。それの遁れざるの習慣の爲めなり。罪を犯して獄にでも這入ッた事と思へば實は何でもなき事なり。生活上の借財は一ツの罪惡なれば罪を犯したと思つて我慢すべし。さすれば月々七十圓の餘裕を絞り出して二年三年の中には屹度返して仕舞へるものなり努々他人にその整理方を依頼すべからず。他人に依頼すれば甘味を吸はれて、何時まで立つても浮ぶ瀬はなきものなり。猶又その負債の高額なる巨額にして中々生活費の餘剰を以て容易に濟ます事能はざるやうに考へるものなきにあらず、されども負債を償却するの方法は此の外になきものなれば、從令巨額なりとて決して失望するには及ばず。生活を縮めて負債を償ふの精神的作用だに働かば、債主の同情は必らず此の時に動きて、巨萬の負債もいつしか雲散霧消するに至らん事鏡にかけて見るがごとし。

次には新世帶を經營する心得に就ていふべし。良人は男一匹、腕一本が資本にして、他人の助けを借らず、嫁も又身に付いたる財産なく、僅かに學びたる普通の智識を以て、茲に夫婦相合し、新たに家を營まんと欲す、いづれも共に世に未だ經驗なく、世路艱難にして苦勞多し、然れども又樂み多し。此際如何にしてその家を堅固にし、その將來を樂しくすべきか、いふまでもなく信實、堅忍、勤儉の三要素にあるべし、收入は少くとも決して憂ふる事勿れ、汝が勤儉の美德を此の時期に於て養へよ、地位卑しとて決して厭ふ事勿れ御身が堅忍の美德は又此時期に於て養成さるゝなり。活きた學問を身につけるも此時なり活きた智識を手に握るも又此の時なり。世の中を活きた學校とおもひて勤め勵まば、日ならずして幸福は黃金の車を以て迎ひに來るべし。まづそれまでは、堅く心に誓つて不自由を忍べよ、勢力を蓄へて後日に備へ、金錢を貯蓄して他日の用意をなすべし。未經驗なる新世帶に限りて兎角種々の器物を購求するものなれどもこは甚だ益なきものなり。多くは後日に至りて用を爲さず、無駄に錢を失ふて後悔する事多し、單に器物のみならず口腹の慾も又之に伴ふて無駄費となりて消滅す、少壯貴重の時間を以て得たる金錢を一時の慾に消費す豈惜しからずや寧ろこれを轉じて有用に向け、二三年身に辛棒する處あらば、無駄に費ひ捨てたる千倍、萬倍ともなりて報ひ來るべし。されば一時の慾を忍びて永遠の謀をなせよ、器物は一器にても足れり、食は口腹を充たす丈にて我慢せよ、構へて衣服調度の累をなすな、箪笥は一ッ、鍋釜一ッ、夜具一と備へ、履物、雨具いづれも品物を選んで永遠に役立つべき丈夫な品をとゝのへて金を惜む勿れ、その他の飾り一切無用家の中はガランドウにてもよし、新世帶の心得この外になし。餘は銘々の活用に任すべきものなり、斷じて、世間の流行に心を動かす勿れ、流

行物は出世を妨げる惡僻なりと覺悟せよ。

此の如く吾人が可愛さかりの花嫁に向ひて世話女房的の態度を注文し、お化粧さかりの新妻に向つてこの如き世帶染みたる説法を爲すは、チト無理なる注文かも知れねど、人の覺悟は覺悟として是非かうありたきものなり。成程年の若い折りには二度となきものなり、可愛い盛りはまたとあるべきものならねば、めかすべき時には隨分めかすもよし。おつくりすべき時には隨分おつくりもすべし、併し如何に花嫁なればとて何の覺悟もなく、唯迂濶々々と髮を撫でたり、頭を撫でたりして日を送るべきものにあらず、一生の中奮發すべき機會には大に奮發して積極的に身を處せざるべからず、三十にもなり四十にもなり小兒も産み年をも取つてから始めて了簡がつくやうな事にてはもはや遲しといふべし。年の若い元氣の盛んな時に早く分別を定めて家の土臺を定めて行くの考をつけるは男子と同じく、其の青春期たる花嫁の時代に於てせざるべからず。西洋の婦人は青春の娘時代、花嫁時代には眞つ黑になりて働らき、三十過ぎて小供の二三人も出來てから、段々安樂の境界に入つて隨分お化粧もすれば、立派な衣裳も着飾るといふ。日本の習慣は全く反對なり。故に西洋にては夫婦の樂み年を取るに從ひて濃くなるに反して、日本の夫婦は僅かに、花の三月櫻の咲くまで。散つて仕舞へば愛情淡く水の如く日が經つに從ひ身につかれて、浮氣な良人は別の花を弄び、妻君は世帶にやつれ、花の面影去つて跡なく、夫婦交情の淡くして短かきこと誠に春の夜の夢のごとし。實以て歎かわしき次第といふべし、これ抑も婦人一生死活の大問題にして、家庭和樂の命運の懸かる處なれば、苟しくも新日本の女性たるものは宜しく胸に手を當てゝ、篤くりと思案すべき所ろなるべし。

(完)



史傳

米國大統領ガーフィルドの少時

日本女子大學校教授 松浦政泰

其一

一哩半を離れて此村（オハイオ州クヤホガ郡オレンジ村）に小學校が設けられんとの風聞、ちらほら傳はりしが、終に事實とはなりぬ。トマス（ガーフィルドの兄）は倘ほ年の頃十三歳の小童なれども義氣に富み孝悌の情厚かりしが、『御母様、ジムミー（ガーフィルドの名のゼームスを其幼き時には姉などが略くかへて呼びたりしなり）は、行かねばなりませんよ』僕は未だ家園の誕生さへ迎へざるジムミーの小さき胸は、如何に躍るならんと思へば、いとゞ心の嬉しくて、打ち笑みつゝ、『トム（トマスを略めていふ）汝も亦行くことが出來ればいゝに。』トマスは年齢に似氣なき思慮深き性質なれば『私も行くことが出來ればいゝですが、私が行きますれば、馬鈴薯も掘れまいし玉蜀黍も收穫まいし、又冬の裸麥も駄目でしやう。ネー御母様姉様や妹と一緒にジムミーを遣つて下さい。私は働いて皆の着物や食物の入費を設けませうから。』年齢も行かぬトマスが、姉を思ひ弟を思ふ情の熱くて、我れを忘れて働かんといふ健げな志に、母は嬉れし涙を押へかね、相好くづして『オゝいゝ子よ』とトマスを譽めそやさんとは思ひしが、母もさるもの、我れと我が情を抑へて、唯少しばかし譽めしのみ、トマスは倘も微みかけて『眞にジムミーの爲に、好き機會ですよ』といひ張りぬ。

かくて小やかなる木小舎の内は、子供等が學校へ行く爲に、上を下へと騒ぎたちぬ。此時までは學校へこそ行かね、母は兒童の教育に心を用ゐたれば、トマス始め皆々相當の教育を、母の手より受けたりけり、ゼー

ムスも之が爲に、バイブルの物語には、當時の一般の兒童よりも熟通して、あるはノアの箱船、あるはカインとアベル、將又ヨセフやイサク、ヤコブ、アブラハムなど種々の物語を、能く暗んじたり。總じて子煩惱なるは、母親の常情なり。ゼームスの母が、それいと誇りげに感せしも、無理にはあらじ。トマスは「ジムミーは道の半分も能く歩るくまい。家庭が見えなくなれば、喪膽して疲弱つてしまをう」といへば、姉のメヘタベルは「大丈夫ですよ、私が見ますから。ジムミーは疲弱りやしませんわ。」深き考へのありげなる姉の姿態を見て、トマス「見るつてどうするの」。姉「どうするつて私が背負ひますの」。しをらしい哉、十五の少女は四歳の弟を負ふて、毎日一哩半の道を通はんとは思ひしなり。トマス「ジムミーを學校へ背負つて行くて。馬鹿なこと。汝が弱わるのは、ジムミーが歩いて弱わる所ぢやない。革命の戰爭に曾祖父が負つて行きなされた荷物よりも重いよ。汝は直病氣になるよ。」姉「自分でしこ邪も、私が病氣になるのは、大事ないわ。」

やがて小學校の開校日となり、メヘタベルは弟を伴れて路與と學校へ行きぬ。ジムミーは始めて學校の敷居をまたいで、急に偉大なつた心持。嗚呼如何ばかり、幸に感せしぞや。されどオハイオ州中第一の幸なる兒童は、尙他に在り。そは餘人にあらず、トマスなり。彼れは其姉と弟とを學校に送りて、獨り田畑に出で行き、汗水流して餘念なく稼ぎ居るに、母は獨り淋しく小舍に殘りて、昇る煙のいと細く、紡ぐ糸車の音淋し今小兒の未だ學校より歸らぬ内に、少しく此の憫れなる小舍の事を語らんに、處はオハイオ州クヤホガ郡オレンジにて、小舍は間口三十呎、奥行二十呎、高さは前の方十二呎、後の方八呎に過ぎず。伐り倒したるままの丸太を積み重ねて、其透間には粘土又は泥を塗りつめたるのみ、僅に夏の暑さを凌ぎ、冬の寒さを避くるばかり、煙突は木と泥とにて造り、家根の上に金字形をなし、屋根は薄き板にて蔽ひたり、床は丸太の二つ割りにしたるを、截り口を上に並べたるのみ。戸は唯一個にて、窓は三個あれど、油紙にて張りたるとて

氣味惡るげに薄暗し。嗚呼後の大統領ゼームス、エー、ガーフイルドが、千八百三十一年十一月十九日に、呱呱の聲を擧げたるは、此の小舍の内なりしなり。

其二

父アブラハム、ガーフイルドは、荒野の中に飛び込みて、家を持ち田を拓きし程ありて、背も高く氣も強く智慧に富み又忍耐の德を備へたり。若し少しく良好なる境遇を與へんには、彼れは世に鳴り出づべき人物なれども、彼れはさる大望をも抱かずして、全く其家族の爲に草莽の間に埋もれ果てしが、思へば其子が終に共和國大統領の椅子を占むるに至りしは、事偶然に似て偶然ならざるなり。或る夏の事なりしが、例の如く精なしく業に勤しみし折柄、忽ち恐ろしき山火事起りて、黒煙の渦巻る中に、紅の焔のもえ立つさま、恐ろしとも恐ろし。ガーフイルドは頻りに模樣を視てありしが、「慥に此方に來るらし。メヘタベル汝は此斧を持ち歸つて、火斗と取りかへよといへば。」娘は驅け行き驅け戻り、早火斗は父の手にありき。夫人も出で、子供も皆出づ。ガ氏「我等は火と戰をせねばならない。左なくては日沒には我が家は灰燼とならうよ。」夫人「眞に心配でなりませぬ。實に恐ろしい森の火事ですこと。」ガ氏「メヘタベルも鄕も來い、トマスも來ひ」と言ひ棄て、炎火に向つて驅けて行く。トマスも行き。鄕も行く。早戰は始まりぬ。我れ火に勝つか、火我れに勝つか。一時は我が旗色は惡しかりしが、此方はここ一生懸命、我が家、我が田、我が家族——之を亡ばすか、之を生かすか、終に火は負けたり。否我が勢の鋭き鋒を避けて、他の方面に向ひたり。折しも烈しき風、我が援兵に出掛けたれば。其の苦戰に爛熱し力盡きて、ガーフイルドは、とある株に腰打ちかけ、折から吹き來る涼しき西風に、胸を曝して、ホッと一呼吸つきたりしが、此の快き風の中に、魔の潜みしとは、神ならぬ身の知らざりしに、其夜忽ち咽喉に充血し、發熱烈しく、刻一刻と危篤に陷りぬ扨醫者とては數里の間になく、僅かに獸醫の匙にて、發泡膏を施せしが病は却て重るのみ。心を盡し手を盡せし甲斐なくて、ガ

ーフイルドは間もなく眼をつぶりぬ。其臨終に子供を見やりて、妻に言ひける樣。「己れは此森に四株の幼樹を植ゑたが、今之を卿の保護に托せざるを得ない。」と嗚呼其の遺骸を包みたる黑き掛衣は、又此の全家族を蔽ひたり、憐れむべき哉、咄嗟の内に、世界最大の幸福の在る所は、今や世界最大の不幸の住宅となりぬ女は賴りなき寡婦となり、小供は憐むべき孤兒となりいづれも泣きの涙にくれけるに、生後僅十八ヶ月なるゼームのみ、獨り微笑を含めるも却て哀はれなり。近所の者とて十哩の内に、僅かに四五軒あるのみ。軈て各々寄り集ふて溢す同情の涙に、再び寡婦と孤兒を泣かせつ、泣く／＼死骸を荒き箱に納め、低き門口より外に運んで、小麥畑の片隅に埋めぬ。但し儀式的には說敎もなく、弔辭もなく、讃頌もなしに。されど切なる讃頌はあり、悲しき弔辭はあり、力ある說敎もありき。新寡婦と新孤兒の小さき胸の内に。

此の凶變に先だつ數日前、ガーフィルドはゼームスを其膝に乘せて、屢々プルターク の豪傑傳を讀みたりしが尙頑是なきゼームスは、唯片言交りにパパー、ママーなど口吃るのみなりしに、父は「プルターク」と之を言はしめしに、ゼームスは緩やかながら明かに之を言ひき、「今一度」とて、再び之を試させつ、尙頻りに之を繰り返へさせたり。父は之を見て、滿面に言難き微笑を含み、妻に向ひて「これエリザ。此子は偉大い學者となるであらうよ」といへり。嗚呼誰れか知らむ「プルターク」と難義そうに漸く發言したる當年の幼兒は、他日終にプルターク書中に載せて恥づかしからぬ人物とはなりしなり。

其三

冬は來れり、殊に荒野の寂びしき冬は、來れり、嗚呼何たる無情ぞやとともに、飢餓たる狼さへ伴ふて、此の杖柱を失ひたる貧づしき家庭を襲へり。卍字に降りしきる雪は、忽ち小麥畑の新墓を埋めて、枯木を渡る風も物悲しくて、心ありげなり。狼の遠吼、豹の呻聲、今年ばかりは、如何なれば、斯くも恐ろしく聞ゆるぞ去年も同じく吼えたりしものを、今年の如く眠むられ

ぬ程には、恐はからざりしに。忽ちがる〲と落葉を蹈む音のするかと思へば、窓の下に物凄く唸く豹の聲。さては女と思ひ子供と思ふて侮れるか。さるにても憾みもせず懼れもせずすや〱と眠むれるゼームスの羨ましさよ。斯くていづれも春は永しへに來らざるが如く感ぜしも、一陽茲に來復して、終に春は來れり。雪も消え氷も融け、久しく死したりし野も森も木も草も皆油然として呼吸を吹き返へして、物の見事によみかへりぬ。甦かへらざるものは唯一個――小麥畑の石の下の人のみ。嗚呼實に小舍の内には何もなし、食物もなく金もなく、唯あるものは負債のみ。寡婦は如何にして此窮境に處せんとする。曩に讀者と共に新設の小學校に送り出したる兒童は、幸にして未だ歸り來らざれば、尙少しく之を叙して、讀者が同情の熱き涙の寄附を求めむ。

進退惟れ谷りて、寡婦ガーフィルドは、兼て心頼みにする隣人ポイントンの智慧を借りたり。「四人の兒鬼もあるのに、窈窕たる女の腕で、かやうな畑がやれるものですか。此土地を賣り故郷へ歸つて、友達の世話になるより仕様はないですね」「良人を小麥畑に殘して往くのですか。決して決してそれは出來ません」。「そうと申して、何か仕方があるのでせうか」寡婦は例の智慧と勇氣を絞つて、暫く小首を傾けしが、「賣つたとて負債を拂ひ、轉住の費用を減きますれば、何程殘りませうぞ。加之に土地が一坪も無くなりましては、パンを造る爲めの玉蜀黍を收穫ることも出來ません」「あなたの友達が、助けて與れますよ」。「いや〱、決して友達の御惠に與りたくはありません。」夫人は尙一入聲を勵して「三寸呼吸の通ふ限りは、天の神は、きつと此兩個の腕で、小供等を支へさせて下さると思ひます。愛する良人は此の家の爲めに其生命を犧牲にしました。此小舍の材木は、私に取つて貴重のもの。よししても亡夫の墳墓は保存せねばなりません。」勇氣凜然、裕に革命の女傑を凌ぐに足るものなり。隣人も爲に敬禮の涙を灑しぬ。

其四

かくて夫人は小舍の一隅に坐して、沈思默㤿しつゝ、御神の聖慮果して如何ならんかと顧みて、其決心は堅きが上に益々堅くなりぬ。忽ち浮ぶ詩篇の第二十七章。「エホバはわが光、わが救なり。われ誰をか懼れん。エホバはわが生命の力なり。わが懼るべきものは誰ぞや。」トマスは年尚十一なれども、今は柱とも賴むべき唯一の人物。寡婦は此腕白盛りの小供を捕へて、恰も大人に語るが如く、刻下の問題を捉へて相談したり。「御母樣私は耕します、植ゑます、小麥も蒔きます、木も伐ります、牛乳も搾ります、汝の爲には何でもします」「汝は未だ年齒もゆかねば、そうは出來まい。が御母樣が助けたら、出來やうか。神樣は寡婦や孤兒と共に居ると約束せられたから。どう思ふても此處が動きたくない」。「ナニ動く必要はありません。私も此處に居りたいです。眞實に緊乎働きますよ。」「餘り働き過しても又心配だよ。小麥畑の隅に墓が二個出來たら、大變だからね」と、些少急込んで語り出で、又「小麥の周圍には垣を繞はねばならぬが、これが仲々骨折だ。が私が木を截つて二人でやれば、出來ぬことはあるまい」「そして私は小舍も造つてしまいませう。」蓋し父は、生前に小舍の建築に取り掛り、未だ全く落成せざりしなり。かくて母子にて、問題を解決し、愈々父が墳墓の地を守ることに、決心の臍を固め、所有地の中、二十二エークルを賣りて、忌はしき負債を悉皆償却したり。

かゝりける中に早春は來れり、三十餘りの寡婦と、十許りの小供は、田畑の整頓に取掛らざるを得ざる時とはなれり。隣りの人の親切なる、一疋の駄馬を貸し與れたれば、それを使ふて、小麥の畑、玉蜀黍の畑、馬鈴薯の畑、又野菜の畑など、次第々々に耕し行きぬ。驚くべきは十歳の腕白小僧なり。晨に殘月を浴びて出で、夕に星を戴て歸り、身を粉にし骨を碎て働きしとはいへ、唯少しく母と十二の姉に助けられたるのみにて。耕し耘り植え苅りて、終に其秋には好き收穫を得たりけり。之と同時に母は小麥畑の垣をも結ひしが、木を截ることさへ中々の骨折にて、爲に殆んど體力の

疲勞を來せしことあり、トマスの爲に慮ばかりし所は端なく己のが身の上に落ちかゝらんとせしことすらあり。

霜消え雪解け、花開き葉茂りて、早七月も近づきしに豊かなりける去年の收穫も、はや殘り少なになりて、母は私かに次の收穫時までの日子を調べしに、此儘にて押し行かんには到底一家を支ふべきにあらず。さりとて買はんには、錢なきを如何せん。即ち一切小供には之を秘して、己れは夕食を節し、毎日二食としたりけり。而かもトマスを助けて働くことは、前の夏にも彌增して、力一杯、否折りにはそれをも越えてまで稼ぎしに。週又週は過ぎゆき、玉蜀黍の櫃の底は、早現はになりかゝりぬ。再び之を算するに、何ぞ圖らん、前回の計算には錯誤ありて、猶一入節約せざるを得ざらんとは。母は之を噯にも出さず、又もや晝食を止め一日一食となせしが、小供の手前は巧に之を繕ふて、少しも知らさゞりしぞ、しほらしける。子供はいづれも生長盛りとて、パンの一片や二片は瞬く間なり。

嗚呼千八百三十四年の仲夏に於ける、エリザ、ガーフィルドの心の裡の苦痛は如何んぞや。革命時代の女傑に匹すべき彼女の精神と、一羽の雀をも護り給ふ神の恩寵となからんには、憐れ此の家族の歷史は、此年を限りにオハイオの森の中に埋れ了はりしや、火を睹るよりも明かなり。

（完）

日本上代の詩美人

栗島狭衣

小町衣通姫といへば我國で美人の標本ともなるべき婦人である事は誰しも承知して居られますが、この二美人に就ての深い研究は兎も角も、どれ程の相違が人格の上にあるかは餘り世間では知つて居りませぬ、而も衣通姫といへば小町と歌道の因緣が深く、彼の貫之が古今集の序に評論した詞の『小町はいにしへの衣通姫の流なり』とあるのを信ぜしめるのでありますが、これは甚だしい相違で、衣通姫は決して小町の流祖と謂

むべき程の歌人ではありません、否、むしろ歌人といふべき資格はないのであります、さらば如何なる人である歟、それは乃ちこゝで小町と比較して記述してみたいと思ふ事柄なのであります。

凡そ婦人といふものは姿容の美しい許りが光榮ではありませぬ、外貌の美と並んで其德を完うすべき心性の美といふものがなくては、決して光榮とするには足りぬ事で、其德を缺いてはよしや外貌の美があつたにしても、眞の美人とは申されぬので、むしろ外貌の醜いものでも心性の美しさが立優つて居れば、決して美人とはいはれない迄も、醜婦などゝいふべきものではないと信じます、簡單に考へて見ても外貌の美醜は自然の幸不幸で、今更兎角うは出來ぬものですからこれを獨鈷に取つて彼是いふといふのは、甚だ殘酷な論法といはねばなりませぬけれども、心性の美醜乃ち善惡といふものは、人爲の陶汰を施すことが出來るもので、改悛の實もあがれば、琢磨の光も發するといふわけではありません、かそとで社會を離れた人類の自然論から哲學的眼孔を以て論じたならば、謂ふまでもなく外貌の美醜は人類の重大な資格とでもいふべきものでありませうが、社會があり道德があつての上で、人類の至高なる品性論から道義的眼孔を以て論じた場合には、どうしても心性の美を重大なものとせねばなりませぬ、こゝに於ては美人としても心性の醜惡なものは遂に妖婦として、世の禍を惹起すの基とも認めねばならぬやうになります、たとへば此妖婦が國家を紊した例としては、支那に唐朝の楊貴妃もあり夫れ以前に妲妃もある、西洋にあつてはギリシャの十年戰爭をおこさせたヘレンなどゝいふ妖婦もある、我國では美福門院もあれば淀君もある、此等は畢竟外貌の美があつても心性の善美が完からぬために、婦人としての德を備ておらなかつたものと斷論しても差支はありませぬ、してみると貌の美と心の美と相協つた眞の美人といふものは、我國の歷史にもその例がすくないといつてもいゝので、小町のやうな有名な美人でも、其後世にのこされて居る傳說の多くは、不倫の談話に過ぎぬ

のではありませんか、けれども衣通姫に至つては、全く徳の備つた純日本的美人であつて、其のとされて居る正史上の事蹟は、たしかに婦人の龜鑑ともなるべきものが多いのであります、これが小町などゝは頗る相違した點で、尤も吾人の唱導したいと思ふところなのであります。

▲小野小町

小町の傳説といふものは一つとして取止めがつきませんので、所謂斷簡零帙の考證といふに過ぎませぬ、されば鴻儒ぞろひの手に成つた大日本史にすら、甚だ曖昧な事柄ばかりであります、殊に謠曲などにあらはれてゐる小町は、いふまでもなく作物語であつて、たゞ纔かに其性行の一部面をうかゞふべき資料にしかなりませぬ、さらば吾人は何によつて其傳記をつくるべきものであらうかといふ事になると、矢張り例の斷簡零帙をつゞりあはせて、不完全ながらも生涯の有様を拵へて仕舞ふ外はないと思はれます。そこで第一に考ふべき事柄は新井白蛾の書いた牛馬問といふ書物に、小町數人説といふのがある事であります、此説によると小町は當時采女に負せた普通名詞であつて、決して一個美人の固有名詞ではないのでありますが、其梗概を取次でみれば斯なのです、

仁明帝の前後に采女を諸國から召されたのが殆ど六十餘人ある、この采女を內裏の后町のうちに居らしめた因緣から何れも小町といふ通り名をつけた、そこで此等の小町が宮仕をやめて古鄕へかへり、そのところ〴〵で死去たから、諸國に小町塚といふものが多いのである

と而して更らに一歩をすゝめて、

宮方朝臣の陸奥へ下向の時髑髏の目穴から薄の生ひ出て居た其前身の小町といふのは、小野正澄の女の小町で、文屋康秀が三河掾となつて下る時誘つたのは、高雄國分が女の小町で、業平に歌などおくつたのは、小野良實の女の小町で、高野大師の逢つた玉造小町といふのは、玉造義景の女の小町である、其

のうちで良實が女の小町は美人で和歌にすぐれてゐたと謂ふて居る、これは前の釆女に落した說にくらべると牽强附會といひたくなるので、あたまから此說には信用が出來ぬのであります、併し小町歌人說といふものは、この外孝經樓漫筆兎園小說などにもつたへがきをしてある丈け、學者間にも信用のある說には違ひありません、又性格の方からわけた七小町、乃ち主觀的描寫法とも見るべきものは、これは面白い觀察であつて、小町其人の生涯をいろ〳〵にあらはしたものと思はれます、先づ一口にいつてみれば歌人としてのあらはし方には雨乞とか鸚鵡とかいふのを以てする、其淑德をあらはすには、草子洗を以てする、其戀愛をあらはすには通といふのを以てする、其光榮をあらはすには玉造といふのを以てする、其末路をあらはすには關寺卒塔婆を以てするやうなもので、作物語とはいふものゝ其あらはし方が中々おもしろい。

さて話の筋が少し混み入つたやうであるが、畢竟客觀的歌人說（牛馬問の說）によつて歌人の中から歌人たる小町乃ち小野良眞の女の小町を採り上げ、主觀的描寫法（七小町）を斟酌して、其小町へさま〴〵な生涯の出來事を與へるといふのが、やがて歌人たり美人たる小町の傳記にならうかと思はれるので、これより外にはつかまへ所もないと思はれます、そこで良實の女としての系圖しらべをすれば、小町氏系圖といふのが立派にありますから、それによれば小野篁孫といふまでがわかります、而してみた上に貞女鑑などに據てみると、判然と出生地が見えて居るので、乃ち出羽國雄勝郡字桐木田といふのがそうだといふ事でありますが、黑澤通恒の小町考には陸前國玉造郡とあります、先づどちらにしても東北の人といふ事は合點が行きませう、さて人物も確定し出生地も定まつたとすれば、あとは其性行を論ずるより外はない順序ですが、これが前にもいふ通りの想像說で、實はまことしやかにいふ丈けも異な感じが起るといふものです、併し其中でも尤も穩當に捕へるとすれば、釆女で宮中へめされたうちに、天才があらはれて歌道のほまれに一代の詩聖

となる、美人の噂は高くなつて、公達からの艶めいた言の葉も耳に繁くなつた折柄、流石に情には脆いので仇なる契に春を夢むが如き光榮の境遇は、いつしか過ぎ去づた凋落の悲み、紅顔衰へて落髪額を蔽くやうになつては、誰一人の情も身に添はず、遂に佛の敎をもとめて往生するといふのが、實傳（若し夫れが秘められてあるとすれば）それにも近いかと思はれます。蓋し小町といふものは熱情的な女詩人としては此上もない人物であるが、純然たる日本婦人の模範、單に美人としての標型としては、餘りに事蹟がおぼろげで而も餘りに性行が本能的であると思はれます、到底今日の諸孃達のまへで說くべき人物ではないと信じます。



▲衣通姫

衣通姫は允恭天皇の皇后忍坂大中津比賣の御妹で立派な皇族の姫君であります、允恭天皇といへば國史をよまれた方々は、姓氏の紊れを正したといふ御事蹟を記憶せられておいででせうが、またそれよりも記憶していたゞきたいのは、總世の美人であり、無比の淑德家である衣通姫が居られたといふ事なので、天皇の御一代はこれが爲めに歷世のうちにも輝い

て居るやうな氣がいたされます、さて姫の御姉君大中津比賣は仁德雄略の后にもまさる程の賢明な皇后で、御氣象のすぐれてゐた事は男も及ばぬ位でありました丈け、嫉妬の御心も深かつたのであります、天皇の七年十二月、新室に於て御酒宴のありました節に、姫の艶麗にまします事が、天皇の御耳に入りました、そこで天皇は早速御使を姫の御許に遣されて、是非に入内せよと詔を下されました、此時姫は御母と共に近江國坂田の郷にをられましたが、つく／＼御自分の行末を案じ、且つ姉皇后の御心をはかつて、勅令には感涙を垂れたのではありますが、入内の事は切に御免を蒙るといふので、御辭退を申上げました、ところが天皇は御きゝ入れがなくて又しても使を遣はされて、是非に／＼と御催促がありました、けれども姫は自分の入内を以て皇后の德を傷つけるものと信じ七度までも御辭退をいたしましたが、天皇も一たん仰せ出してはあとへひかれぬ、御氣象でもあり、且つ又姫程の美くしい人を草深い土地に埋もらせておく事は殘念であるとの御叡慮から、更に八度の御使を舎人中臣烏賊津といふものに仰せつけられました、此烏賊津はいたつて心の利いた男でありますから、早速お受をして近江にむかひましたが、並一通の事では姫の御心を動かす事は出來ぬと考へて、袖のうちに糒をかくし衣には斷食の覺悟と見せて、姫が御住居の庭上に七日七夜といふもの平伏し、『姫の御言葉には道理あれど、御情には餘り剛きふしあり』といふ論法、つまり感情的の論法を以て、遂には『使命を果さゞる不忠の臣は死を以て大君に應へ奉るの外なし』と例の斷食を擬たので、姫は大に驚かせられ、自分のために忠臣を害ひ、且つは斯くまでの聖旨に背くもおそれ多しと感じて、やむなく大宮の人となる事になりました、あゝ誠に這般の優しい消息は諸嬢の模範になるところであらうと思ひます、初めに姉姫の御德を傷けじとの友愛貞烈の行爲、終に感情に動かされて聖恩に應へ奉つた狀態、たしかに眞情圓なる美人と許すべきではありませんか、もし義理立の強いのを見榮に、情を抑へて途に倒れるといふやうな、

漢よりの烈婦主義は、甚だしい偽善で、日本の醇美とは申されませぬ、既に七度も御使に背いた御心は、姉姫に充分の義理立でこれは眞底からの情かと思はれます、殊に威喝のたくみに乗せられて、自ら情の中に犠牲となり終るといふのは、少しも私のない玉のやうな御心を現はしたものゝ、此處の深意を誤解せずにさとうて戴きたいのが、吾人の主眼でありまする、それでありますから姫の入内後は、果して皇后の御嫉妬は一方ならぬ有様でありましたが、この不徳をあらはしたのは、むしろ姫の罪ではなく、天皇の罪で



あらうといふもので、根本は遂に天皇に歸着するかと思はれます、併し姫の御淑徳はとのうちに、現はれて、自分が大宮のうちに居るのはいよ／＼皇后の徳を傷けるおそれが深いから、どうぞ宮居を移していたゞきたいとねがひました、これは身勝手にいひ出したのではなく、全く皇后の御身上を思ひ、自分の境遇を察して、天皇の御威徳を傷けまいとの御心に外ならぬのでありました、そこで藤原宮から移されて河内國茅渟宮に入り相變らず御寵幸を蒙りましたが、これによつて皇后の御心をやすめた事は大方でなかつたと思は

れます、併し一方の天皇から見ますれば、程遠い茅渟に移すのは甚だ勝手がわるいので、其行幸のとき／＼も大抵日根野の御獵に托して忍び御幸をせられたに過ぎませぬ、それも後には皇后のために制限せられて、天皇は忍の行幸もまゝならぬやうにならせられた事は日本紀の上でも明かに推せられます、尤も最初に於る天皇の得意は一通りでなく、姫のために御名代をこしらへて藤原部といふものを諸國におかせられた位でありました、それで風流の韻事としては、有名な『さくらがた云々』の歌もあるやうなわけで、天皇も殆ど天女を得たかのやうに愛でさせられたものと思ひやられるのであります、又何年の頃であつたか、天皇が井のほとりの櫻を見て

はなぐわし　櫻のめで　ことめでば
はやくもめでず　わかめづる子等

と櫻によそへて姫をほめたゝへられた事があります、成程これは尤な事で、淑德美容兼備つた姫の如きを召させられた御心のほこりは、正しく帝王の富を得たよりも過たものと察せられますさて。姫と小町との對比に當つて其相違の點は明瞭になつたとしても、まだ歌道の關係に就て說明せねばならぬ事があります、これは古今集序に論じてある歌道の流派問題で、小町の歌體は衣通姫の流だとある事でありますが、これは大きな間違ひで、衣通姫は歌人の籍を有しては居らぬ人です、但しこれに關しては貞丈の和歌三神考に考證がつきて居りますから、今更事あらたしくいふまでもありませぬが、姫を歌人とおもひゝがめたのは、佛家の說によつたもので、和歌浦玉津島の神靈になつて居るところから、地名の緣を其まゝ和歌の神靈とまで思ひまがへて傳へたのであります、姫の御歌は紀と記とに僅しても、二首より外はありませぬ、これを以て歌人の資格はちと無理かと思はれるので、畢竟六歌仙などゝいふものゝ中にも斯んな類が幾許もある事は旣に先輩諸學者の定說がある位であります、併し和歌の浦玉津嶋の神靈は神功皇后なりと、學說を柄にして本居翁なとは玉勝間に論せられて居りますが、これは衣通姫と

いふ説にしておく〱のもいゝではありませぬ歟、何とな
れば斯程の明媚な場處を支配せられたる神は、神功皇
后などのやうな武威の高い方々よりも、艶麗無比淑德
方正の姫の方がふさわしいかと思はれるので、敢て其
神體たる事を主張しておきたいのでありまする、又終
にのぞんで一言しておきたいのは、古事記萬葉集を讀
むと、允恭帝の時に、衣通王といふ美人があつて、不
倫の行を遂げたやうな事蹟が見えますが、これは同名
異人たる輕大郎女といふ方で、似も似つかぬ雪と墨ほ
どの相違な人物でありまする、輕大郎女は乃ち姫の御
姉姫大中津比賣の御子で、御兄輕皇子と不義を遊ばし
た言語同斷の不倫不德の御方であります、これと思ひ
混れては大變ですから一寸一言を附記しておくので、
又これ等に就て衣通姫といふ詞は小町と同じく美人の
普通名詞であるといふ事も、萩野由之氏などが如蘭社
話の一節に記されてありますから、序に書いておきた
くもありますが、それは寧ろ餘論にもわたり長文にも
渉りますから、此處には省いておきます。

裝飾用の花

公使館其他外國に諸種の集會ある每に必らず花卉を飾るを一の裝飾となすこと彼の茶席に於ける床飾の如くなれども嗜好一ならざるを以て其國自ら異るものありて存す總じて一室に他花を交へざるを歡び[illegible]の如きは白花を目出度として珍重し黃、紫之に次ぐが好適ふれども獨逸人は白花を不吉なりとして嫌ふこと甚だしく總て濃紅色のみを限りて賞美するが如し又前の露國公使は總て黃色の花のみを愛したれども是等は寧ろ異例たるに過ぎずして英國公使館佛國公使館等何も皆な白花に限られ偶ま黃花、紫花等を用ふれば意に滿たざる樣あり而て盛花となすべきのは多く季節ならざるものを珍重し一月より三月頃までは牡丹、躑躅、鐵砲百合、薔薇、カ子シレンス、大輪アマリュス、バイオレツト、フレゲヤの類を用ゐ四五月の頃はア子モ子、ヒヤシンス、チユリツプ、薔薇の類を用ゐ六月は薔薇及び紅筋、竹島など稱する百合を用ゐ七八月は花あれども何れも過暑に赴くを以て殆んど休業に近く斯て九月十月より十二月に亘りては四季咲の薔薇、シクシヤ、蓮、菊、ア子モ子、カ子シンスの類を用ゐるを常なりとす以上は概れ盛花を以て目され價格亦貴けれど安物としては直に其時々の花を用ゐ又カンナウエレニヤム、ベコンヤの類を用ゆるなり盛花は餘りに大輪なる花よりも寧ろ小輪のものを多く集めたるを歡び往々バイオレツトの盛花を注文して廉不廉を問はざるものあり又贈さしとしては直に前記の各種を用ゐる薔薇、フレデヤバイオレツト、カ子シンス等を第一なりとす。

學問

倫理衛生　食物の話

帝國大學講師文學士　村上辰午郎
糸左近

いつぞやも申した通り衛生と倫理とは、離るべからざる二大道であるが、殊に食物に至つては倫理は衛生を基として說かねばならぬし、衛生も倫理を骨髓として實踐躬行せねばならぬ。靈妙なる活力を發するものは善き食物で、この善き食物を食い、快樂幸福に此の世を過すは善き道を守る所以である。故に食物の目的を打ち忘れ、倫理の根本を打ち過り、情慾に負くるやうにならば、心身を過り、一生奈落の底に沈むのである。希臘の大賢アリストートル氏は、食慾を制するを以て、節制中の主なるものとし、論じて曰く、「法律の禁ずる所無く、又他に些少の支障なき時なりとも、敢て縱いまゝにすること無きやう、其の精神を鍛錬せねばならぬ、然るに人は聊油斷すれば、適宜の度を超え易いものであるから、常に小心翼々心を用ゐねばならぬ。」と。これは如何にも適切なる敎であつて、何人も之を守り、情慾の奴隷にならぬやう、務めて滋養の食品を撰ぶことが肝要である。

抑々滋養食品を撰んで、身体を强壯にするといふことは、古今東西を問はず、野蠻文明を論せず動かすべからざる眞理である。若し夫れ粗食をしてその体を弱くせんか、啻に己れ一人の損害になるのみならず、子孫を弱くし、遂に社會全体をも弱くするやうになるは何人にも解し得らるべき倫理ならずや。されば如何なる物が滋養食品とならうか、これ一槪にこれといふ古今東西野蠻文明に普通なる物は決して無いと云ふことを、余等は斷言するを憚らぬのである、されど之を抽象的に言へば自然に適ひたる食品は最上の滋養物であることは、又爭はれぬ事實であらう、言葉を換ふれば自然が與ふる食物はこれ吾等が取つて以て營養物とすれば善いのである、啻に食物のみならず、萬物皆自然の

法則に従はねばならぬ、自然は太陽の光線を與ふ、吾等は光線を用ねばならぬ、自然は空氣を供ふ吾等は空氣を呼吸せねばならぬ。若しこの自然に背いて太陽空氣を用ゐぬとせば、決して生存の出來るものでは無い。斯様に論ずると或る哲學派の如く何でも自然に打ち任せよといふ極端說のやうにあれど、余等の選ぶる所は賢哲カント氏の温厚なる自然說を賛成するのである。試に見給へ印度は熱帶國であるから、自然に植物が繁茂し、従つて身体を涼しくするところの美果が其の住民に食はるゝを待つてゐる様な有様である、又西比利亞或は蒙古の如き寒國に至つては斯かる植物性のものに乏しく土民は身体を暖かにするところの脂肪多き獸類の肉を食して、無上の榮養物としてゐる、これ即ち自然と自然に従うてゐるのである。故に寒暑共に劇しい大陸的の獨逸や亞米利加には獨逸や亞米利加に適したる自然の食物がある、四時共に其の氣候温和なる敷島の大和國には大和國民に適したる自然の食物が無ければならぬ。イヤ大いに有るのである、然るに近來泰西の文物を輸入するに従ひ横文字の一冊も讀めるやうになると、烏羽玉の黒髪をムザと束髪に結んで、一にも二にも碧眼者を眞似、病氣でもないのに犢牛の飲むべき牛乳を飲み、消化もせぬ鳥獸の肉を貪り、得々文明人氣取つてゐる。斯様な譯であるから、無學の田夫漁人は却つて健康長壽を保ち、紳士學者は日増に薄弱短命といふ狀態である、嗚呼慨かはしいことである。然らば我が國民の保健食物は果して如何、最上の滋養品は果して如何、これ余等の喜んで答へんとする所、今之が順番をつけて述ぶれば即ち左の通りである。

含水炭素食物	（五穀野菜の如き）	百四十匁弱
蛋白質食物	（鳥獸肉の如き物）	十八匁強
脂肪食物	（熱分に似たる物）	四匁弱
鹽類食物	（食鹽野菜等の如き）	一匁三分強

彼の獨逸人が蛋白質を以て最上の食物とし、二十九匁餘を食はねばならぬと主張したのは、今や陳腐の議論である。イヤ獨逸人には或は適當であるかも知れぬが、我等國民が之を標準とすれば胃腸を害し下痢、羸瘦、

滑弱、短命の源を斷くのである、現に之を食はしめて其の糞便を分析すれば、其の多分は消化吸收しないで、其の蛋白質も、其の脂肪も、徒らに大便の大部をなしてゐるのである、これに反して米、豆腐、鯛、鰈、或は鯖等の如きは殆んど五分の四は我等の身体に同化して、活力を生ずるのである。嗚呼日本には、自然に日本の衛生あり之を守つて以て身体を鉄壁にし、以て國民の義務を盡さねばならぬ。或る西洋心醉者即ち薄弱紳士(世に名高き讀でも能く〳〵知つてゐる弱い人なれど姓名は略す)は「我が國も佛教の傳來せぬ以前は鳥獸の肉を主食物としてゐたから、身大長壽であつたが、佛教の傳來と共に、肉食をせぬやうになり、從つて身小短命になつた。」と、是れ何たる謬りぞや、佛教の傳來せぬ以前遠く遡つて神代の時から、田畑を作つて五穀を主要食にしてゐたといふことは、少し歴史を繙けば、直ちに分ることである。第十代崇神天皇陛下も、農は國家の大本なりと宣はせ玉うたでは無いか、殊に古代は身体長大であつたとは、信ずるに足らざる臆説である。人類學者や古物學者が岐阜地方の穴居の有樣や、或は古代の遺骨を調べて見ると、今代の人と差したる相違無く、平均五尺三寸位な身長であつたらうと。又御歴代の天皇も御壽命長く、臣下武内宿禰の如きは三百六十歳生きてゐたなど〳〵いふけれど、これは神武天皇陛下から仲哀天皇の頃まで即ち書物の無い漠々たる世を支那の歴史に當嵌めた爲めに、非常に長い年月に計算せらるゝのである。若し夫れ食物の如何を以て言ふならば、中古以來の僧侶は、普通人より統計上長命であると立派な證據がある、心醉者以て如何と答ふるか、誠に聞かまほしい次第である、故に返す〳〵も我等は米を主要なる食物とし、其の他澱粉糖類野菜及び脂肪の少ない淡泊とした魚類これに次ぎ、續いて鳥肉或は少量の獸肉を食すれば善いのである。麺包と牛豚肉とを常食にしやうといふが如きは、我國古來の習慣を顧みぬところの無謀の人と許せずばなるまい、習慣を守るといふことも倫理上及び衛生上共に大切なることで又一塲の議論を述べねばならぬ。が、それは他日に讓りませう。(完)

家庭談叢 象の話

佐藤禮介

昨日まで錦を織りなした遠近の紅葉も、今日は、最早色褪せて、見る蔭もなくなり、梅櫻の如き春に誇れる木々も、今は枯葉をさへ落して、全く枯木の様な見えになりました、野山に散歩しても、秋草が、もはや霜枯れとなつて、何となく哀れな有様に見える、斯様な節だから自然の景色も餘り面白くありませぬので、休日などには、動物園などを見に行くことも良い慰みでありましやう。そういふ方々の爲めに、動物園の中での著しい動物一二のお話をしやうと思ひます。縱令動物園など見ることとの出來ない土地の方々にしても、追々、夜長にもなり、爐を圍んで家族團欒して、お話をなさる樣な時節にもなりますので、そんな時の御慰みにもなりましやうかと。

▲陸上の獸王

陸上に生とし生ける動物の中で、智慧や、其の他の性質でいつたならば、體こそ小兵であるが、猿は確かに獸の王でありましやう、勇猛の點について、云つたならば昔の人も云ふた如く、獅子は正に獸中の王でありましやう、しかし、體の大さから云へば、象は、實に獸中の王です、只、體の大さが他の獸に比べて非常に大いばかりでなく、智慧も中々侮り難い程に發達して居り、其の勇氣も、一たび怒れば虎、獅子の群をも蹂躪る程の威力を有して居ります、それ故、若し其の體格や、智慧や、勇氣を寄せ集め合計したならば、象は眞正の獸王かと思はれます。

獸王とも云ふべき此の象は、體の丈け、凡そ一丈五尺に達し、體の高さ八尺に餘る位です、又、體の重さは一千一百貫目許のものがあります、若し、體重十四貫目の大人と比べる時には、象一頭の體重は大人凡そ八十人の重さに當るのです。皮は鼠色であつて、甚だ厚くありますから、其の死體から採つた革は種々な用に使ひます、體が肥えて居るのに頸は甚だ短いので、頭を自由に上げ下げしたり、左右を顧ることが出來ま

せぬから、嘸不便であらうと思はれますが實際は中々左樣でありません、其の不便を補ふ爲に手の代りにも、觸の代りにも、働くものは即ち鼻であります、

象の鼻は、甚だ長くて、自由に動きます、鼻穴は、其の長い鼻の先端に、二つ開いて居て、鼻穴の上には、指の樣な突起がある、此の突起は非常に感覺が鋭敏なもので丁度人間の指先の樣な働きをします、象が鼻を以て針を拾ふことや、罌粟粒を拾ふことの出來るのは、斯樣に、鋭敏な突起を持つて居るからです。

▲鼻の使ひ方

象は、其の鼻を、種々な事に用ひるものです、或は樹を引き倒し、或は、食用にする草を、一と握りにして之を引き拔くことに用ひ、又或は非常に重い荷物を持ち擧げること、或は針、罌粟粒の樣な極めて小さい物をも拾ひ上げることにも用ひます、水を飲むには頸が曲らないので不便極まる樣に見えるが、實際は、さうでなくて、此鼻を用ひて、巧に、飲料を攝るのであります、即ち象の鼻先きを水中に入れ強く息を吸へば、水は多量に鼻穴の中に吸ひ上げられる、そこで鼻先きを口の中に差し入れ烈しく水を吹き込むのです、

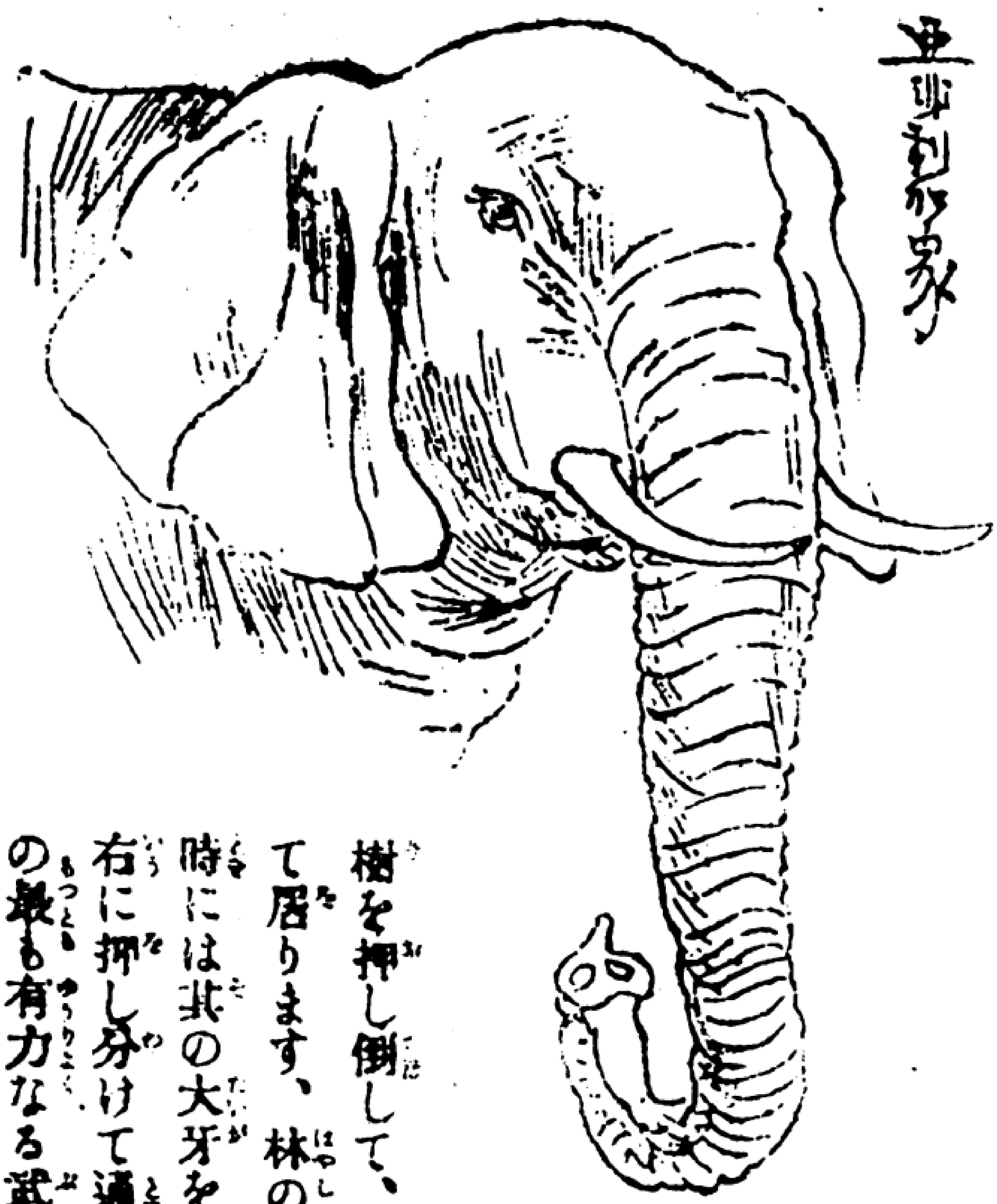
象は元來夜中に動き廻はる性質の獸であります、暗夜に森の中に居ても能く草木の葉を食するのに、決して他の毒になるものと間違ふ樣なことはありませぬ、是れ何の爲である、かと云へば、全く鼻で臭ひを嗅ぐ力の強いのと、鼻先きにある指の樣な突起の感覺が鋭い爲であります、其の嗅ぐ力の強いことは、獸類の中でも多く見ない程ですから、若し、軟風の吹く時には、其の風上に半里も隔つて居る虎、獅子などの臭ひを嗅ぎ知ることが出來ます。

▲象の牙と奥齒

象の口には二本の大きな、牙が突き出てゝあります、人は皆之を象牙と名づけて居りますが、しかし此の牙は犬猫や、虎獅子などにある牙即ち犬齒といふものとは成り立ちが異つて居ります、即ち象の牙は此の獸の上顎の前齒なのであります、犬猫などの犬齒に相當するものは全く具へて居りません、象の牙は雌のは餘程

小さくありますが、雄の牙は随分大きいものがあります、充分成長したものは長さが六尺、重さが二十四貫にも達するものがあります、

象牙は古から珍重せられたもので、西洋では今より三千年位以前から、之を装飾に用ひましたさうで、即ち此の時代に希臘国ではヂュピターと云ふ神の像を象牙に彫刻したと云ふことであります、現今では象牙を以て櫛、笄、煙管の吸口、印章、緒締珠などの様な細工物や、人物などの彫像、或は、鳥獣の形などの彫刻物を作られます、質が緻密で色澤も奇麗でありますから、價も貴く甚だ珍重せられることは、皆人の知る所であります、



象は其の大なる牙を以て、他の獣と争闘することに用ひます、彼が虎など、闘ふ時には、此の牙を以て、虎を数十尺の距離に投げ付け、或は虎の腹部を衝き貫くことがあります、又亜弗利加に居る象は、野生の薯類の澱粉多き根を捜し食する為に、其の牙で以て地を掘ることがあります、象は又ミモーサといふ樹の幼葉を好んで食するものですが、若し、高い枝に其の鼻先が届かぬ時は牙で以て、其の樹を押し倒して、其の葉を食することを知つて居ります、林の中や、荊棘の間を通り行く時には其の大牙を以て妨げとなる所の枝を左右に押し分けて通ります、それ故牙は實に象の最も有力なる武器であり、又食物を得る為の器械であります。

象は充分成長したものでも、其の奥歯は上下の顎の兩側に、只、一枚づゝある丈で、即ち象一頭に臼歯が四

べて、四枚丈けあるのみであります、其の奥歯は甚だ大きいもので、歯の表面は石臼の表面の様に凸凹がありますから、草木や、若枝を嚙み砕くのに大層都合よくあります。

▲象の二種

現今地球上に生活して居る象は亞細亞洲に一種、亞非利加洲に一種居る丈けで、其の外の大洲には一種も居りませぬ、以上の兩種とも、大体の形は類似して居りますが、亞細亞の象は額が窪んで、耳がやゝ小さく、奥歯には波形の紋があり、前足に五つ後足に四つの蹄があつて、性質も至つて温順で、人に容易く馴れます。又亞非利加の象は額が高く突き出で耳が甚だ大きく、奥歯には菱形の紋があり、前足に四つ後足に三つの蹄があつて、性質は隨分猛烈でありますから、中々人に馴れ親しむことが難かしくあります。

東京の動物園に飼つてある象は明治二十一年暹羅國の皇帝から、我が皇室に寄贈になつた、印度象であります。始めは雌と雄と二頭でありましたが、雄の象は明治二十六年に病死して今は一頭の雌象しか居りません、元來印度の象は性質温順なものであるのに、此の象はどう云ふものか、甚だ亂暴で困る處から、今は足を固く結び付けて、置くのだといふことです。

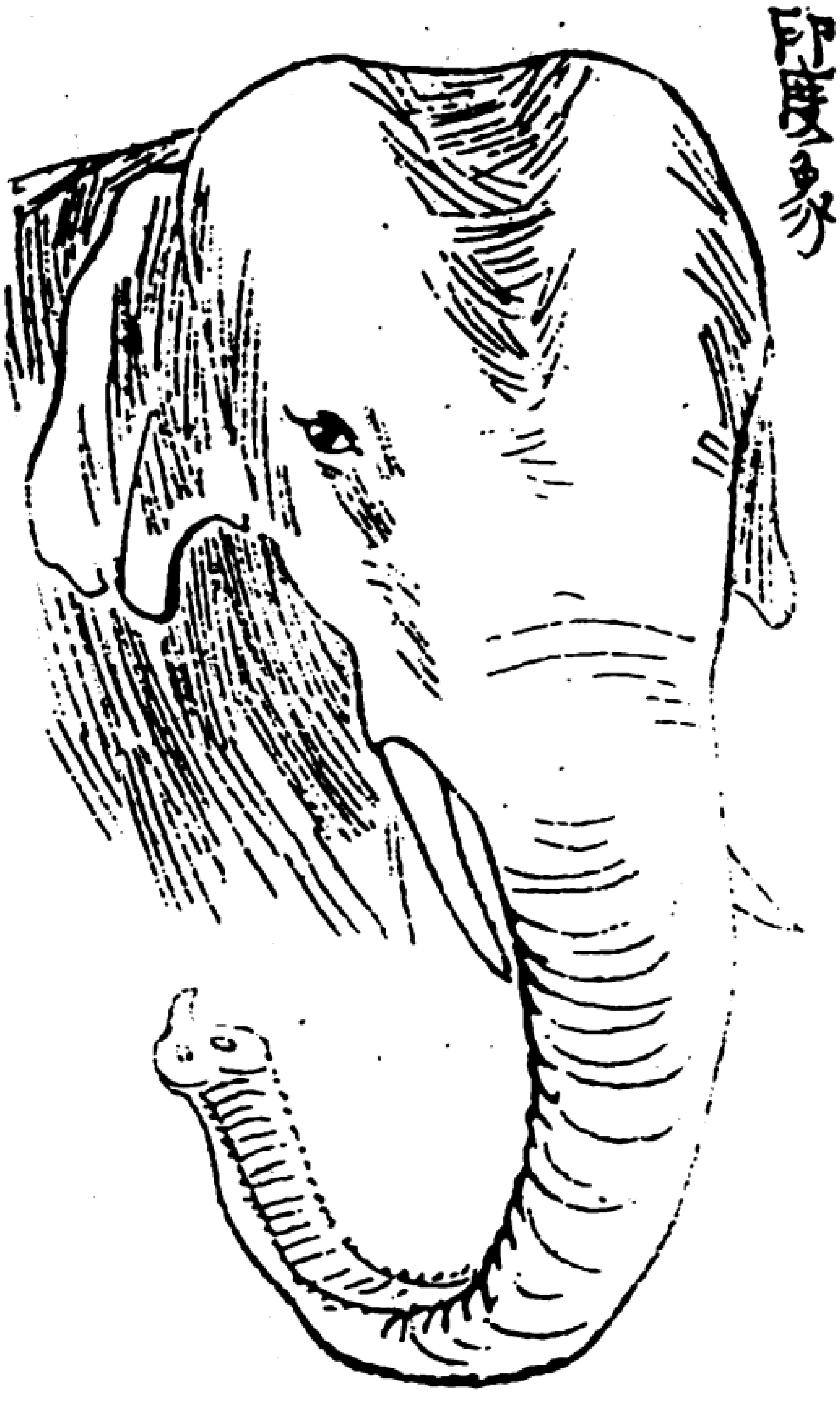
▲象は能く走り能く泳ぐ

象は平生緩々と靜かに歩み、落ち付いて働くので、其の有様を見ると如何にも、遲鈍な獸の樣に見えますが、實際は中々左樣ではありません、敵を追い駈けるか、又は危險より逃れ樣とする時は往々一時間に四里許を走ることがあります、又象に就いて世間の人は豫期しない所でありますが、象は水を泳ぐこと甚だ上手であります、印度で一群の象が水底に足を觸れないで、一時間餘り泳いだことがあるそうです。

象は又甚だ水に浸ることを好むものでありまして、時時大河を泳ぎ降ることがあるばかりでなく、池沼の中に入りて豚や水牛などの様に泥土の中をゴロ／＼と轉げ廻はり、泥で以て其の躰に粘着させ、蚊類や、針のある蟲などの攻擊を防ぐことがあります。

▲象の群

象は數十頭も群れ集つて生活するものでありますが、互の間に爭ひもなく、平和に遊び居ります、此の群は通例一家族の群でありますが、象は一雄多雌の性がありまして、一群中には只一頭の雄象があるのみです。若し他の雄象が其の群の中に入り來る時は直に之を追ひ拂ふか、或は殺して仕舞ひます、雄象の牙が雌象のに比べて甚だ長大なのは、常に他の雄象と闘つた結果かも知れません。象の群が森林や野原の中を進行する時には、雄象は眞先きに進んで前途を警戒して行き、雌象と幼き象とは後方から進みます、それ故、虎又は豹などゝ爭闘するのは、皆雄象であります。印度の雌象は、牙も短く爭闘に不適當でありますから、只雄の後に從つて居るので、雄は常に全群を保護しつゝあるものであります。


印度象

▲象の食物

象は、其の鼻を用ひて、巧みに其の食物を口に持ち運びます、印度の象は重に棕櫚や無花果の若葉を食べますが、亞非利加の象は、含羞草と同類なるミモサ樹の葉を好んで食べます、しかし最も美味として食べるのは甘蔗の稈と莖や、椰子の實であります、而して躰が大きくありますから、食物の量も中々澤山を要します、印度で飼れる象は、一日に米十三貫目づゝを食料として與へられ、なほ他の滋養物として、新しい草葉、若くは甘蔗の稈を與るといふとです、又米を與ないで藁を食べさせるならば、一日に七十

瓩以上の薬を與へなければならぬといふことです、象は

れ米を食べることが甚だ巧みであります、それは先づ鼻穴の中に米粒を吸ひ込んで然る後鼻先を口に入れて之を口の内に吹き込むのです、此の仕方で一桶の米を食ひ盡すのは實に暫時の内であります。

▲象の繁殖

母象は、深い愛情を以て其の兒を育てること他の獸に殊りありません、兒を生むのは通例一回に一頭づゝです、けれども稀



印度セイロン島の土人象を用ひて耕作せる圖

には雙兒を生むことがあります、懐胎の後二十ヶ月半を經て分娩します、嘗て亞細亞産の象が生んだ兒は其の生れた時既に二十九貫四百匁の重さがあつて、羊ほどの大さがあつたさうです、生れてから六ヶ月の間母象の乳で以て哺育せられ、其から柔軟なる草を食ひ始めます、乳を飲むには鼻を以て吸ふのでなく、其の長い鼻をば、背の上に卷き上げ其の口を以て乳房を御

へて乳汁を吸ふこと、犬猫などの哺乳の仕方とは異りません、象は高齢に達するものでありまして、稀には百二十歳に達するものもありますが通常平均の年齢は八十歳を超えません。

▲象の知識

象の眼は體の大なる割合に比して甚だ小さいものですが、物を見ることに鋭敏で、物を見分けることに細密なのは、驚くべき程です、曾て或る象が壁に近い所にある馬鈴薯を取らうとしましたけれども鼻が届きませぬ、そこで象は強い鼻息を以て壁を吹き飛ばし其の反動で塵の轉げて來たのを採りて食べたといふことです、是等は多少物體の運動の仕方を知つて居るからであらうと思はれます、飼ひ馴らされた象は、親切に取り扱はるれば、大層從順に飼主の命令に從ひますが、粗末に取り扱はるれば、深く怨んで飼主に害を加へる性があります、つまり象は自分の好む事を爲さるれば、



其の人に對して好意を以て酬ひますが、之に反して自分の好まぬ事、嫌ふことを爲さるれば、其の人に向て必ず害を加へて復讐する性質があります、

印度の象扱人が或る日象の仕事の仕方について非常に怒つて、コヽア樹の果實を其の象の頭に擲ちました、處が次の日に至つて象は其の象扱人に牽かれて市街を通ると、路傍の果物店に並べてあるコヽアの果實を見るや前日の事を思ひ出したものか、急に鼻を延ばして其の店のコヽアの果實を取り突然之を象扱人の額に打ち付けました、其の打ち方が烈しかつた爲に其の人は即死しました。

是も印度に於ての出來事であるが、一少年は毎朝頭を飼つて置いた象小屋の前に來て毎日象に戯れて居つた

が、其れは、かういふ戯です、砂糖の小塊を甲の象に與へ様としては急に手を引いて之を乙の象に與へ、又乙の象に與へ様としては突然奪つて之を甲の象に與へるなど、幾十回となく象を玩弄したので、象は深く其の騙されたのを怨んで居たと見え、或る日其の少年が象小屋の前に來るや鼻を伸して其の少年の顔面を烈しく敲き、且つ着物の一部を鼻でつかまへて引き廻はし着物を散々に引き裂いたさうです。

又蘇麻答刺の北方にアーキン――と云ふ所があります、其處に毎日象扱人に牽かれて市街を通る象があつた、此の象は歩みながら鼻を家毎の窓から挿し入れ、果物や他の食物を要求する癖があつた、土人も亦此の象に種種な食物を與へる事を一つの樂しみとして居りました、然るに、或る朝象は例によつて、或る仕立屋の窓から鼻を室内に挿し入れた、之を見たる仕立人は戯れに針で以て象の鼻を刺しました、象は隨分痛かつたと見え、直に鼻を引き出して通り過ぎました、此の出來事は、象が飼主に牽かれて、河に水浴の爲に行く途中であつたのですが、象は河に到るや前足で以て水底を攪き廻はして泥水を生ぜしめ、之を鼻穴に多量に吸ひ込んで歸つた、丁度前の仕立屋の所に來ると、象は其の鼻を窓に差し入れ吸ひ込んで來た泥水を店中一面に噴き付けたといふことであります、

象は斯様に怨みに報ゆること至つて殘酷なるものでありますが、若し親切に取扱はれると、中々柔和な獸であります、印度では象扱人の妻が二三歳の幼兒を象に委せて兒守りをさせて居ります、象は綿密に注意して幼兒を怪我させぬ様に保護をして居ります、兒供は往往象の足の間に這ひ込むことがある、けれども、決して之を踏み付けることはありません、又兒供は象が食ひつゝある草木の間を走り廻つて往々深く茂れる藪に入り込み、棘に纒はれ出ることが出來ずに苦しむことがある、象は斯様な時は鼻で以て靜に兒供の體を抱きて安全な處に持ち來ります、兒供は其の天性として一箇所に靜止することは好まんので、あちこちと跳び歩きます、象は絕えず兒供を見失はぬ様に付き從ひ、又

危いことのない様に番をして居ります、印度では是が珍しからぬ事だそうです。

▲白象

象の皮膚は通例黒色か、若くは灰色のものであるが、稀には全身の白いものがある、之を白象と申します、白象は甚だ稀に生ずる者でありますから、極めて貴ばれます、印度では佛の降誕したるものと尊重せられます、西暦千六百年代に暹羅とペーグとの兩國間に一頭の白象の所有を爭ふことから戰爭が起り、國王相繼ぐこと五代の久しきに及び、數萬の兵士を失ふに至るまで其の戰を續けたことがあります、又一千八百八十三年バルナム氏が暹羅國で買求めて亞米利加に送つた白象は其の時價二十萬弗の價があつたといふことです、白象は元來其の皮が裸かに露はれて居つて毛が少いものでありますが、しかし凡べての象が皆左様ではありません、印度の高原で年中寒い地方に產する象は、餘程毛が多くて且つ長くあります。


象が其兒に乳を飲ましむ図

△象狩り

象は種々な方法で獵り捕られます、それは生擒して農業か、又は荷物運搬に使ふ爲か、見世物にせ

らるゝか、

或は撲殺して其の象牙を得んが爲であります、

印度に於て象を捕る法は、四百人許の土民が相團結して多數の象を生擒るもので其の手順大層面倒で且つ甚だ多くの費用を要するものであります、其の法は先づ野生の象の一群を周圍から圍んで、徹夜して松火をともして驅り集めるのです、其の取卷かれたる輪はだんだんと小さく狹くせられ、最後に強い木柵と濠とで、圍まれた、圏内に追ひ込まれます、そこで圏内に入つた象は馴れた象に乘つた人の爲に一頭づゝ別々に分離せられます、此の時は不思議にも、野生の象は人の乘つた馴れたる象を攻擊しません、斯樣に分離せられた野生の象は馴れたる雌象によつて踏係で捕へらるゝか、又は陷穽に陷れらるゝのです、けれども陷穽で捕へるのは往々象の身體を傷けることがありますから、若し生擒にしやうと思ふ場合には餘り便利な方法でありません、又遊獵或は象牙を得る目的で以て狩りする時、或は田畑の耕作物を害する野生の象を狩獵する時などは、銃を以て射殺します。

亞非利加の象は昔戰爭の時に用ひられ、又觀物として馴らされましたが、今は斯樣な目的に用ひられることはありません、けれども、歐洲の市場に其の象牙を賣り出す爲に頻りに狩獵せられます、之を獵るには亞非利加の土人は徒步、又は馬上で之を追跡します、或る亞剌比亞人の如きは只劍と楯とを以て之を獵りすることがあります。

▲人類に與ふる効益

印度の象は昔から田畑の耕作に用ひられ、今も猶多く使役せられて居ります、此の獸は重荷を負ひ之を運ぶことについては極めて大な働をなします、通常の象は凡そ百八十貫目の重荷を平坦な道路で運搬する力があります、充分成長したる象は毎日多量の食物を必要とします、斯樣に飼育する爲に費用の多いとや飼育中には通常子を生まぬことなどは家畜として家に飼ふのに不適當なる點であります、亞非利加の土人は象の肉を食し殊に鼻と足の肉及び脂肪を嗜みます、又其の革は水

櫛を作るに用ひます、
象牙は更に小さい細工物に用ひることは、前に述べた通りであります、象牙の細工品は近年まで甚だ高價であつたのですが、或る方法を以て大に製造者の勞を省く様になつてから、今は著しく其の價を減ずる様になりました、其の方法はどうするかといふと、先づ象牙を其の周圍から瓜を剝る様にだん／＼とそぎ去つた後燐酸を加へて其の質を軟かにするのです、其れから之を水でよく洗ひ、強く壓迫して乾かす時は、象牙は忽ち其の元の質に復つて少しも其の質を變じない、此の方法が發見されて以來、二尺五寸四方の象牙の板が製せられる様になりました、又象牙の切り屑は、高價の膠を製する爲に用ひられます、斯様に需要が多いものですから英國に輸入する象牙の數は毎年五萬箇の多きに達します、而して之を供するが爲には毎年二萬五千頭の象を屠殺せねばならぬ譯です、此の大獸が人間に與へる功益も亦甚だ大なるものではありませんか、

（完）

通俗科學

鐵の話

淺野松琴

▲鐵の歴史

鐵が日用器具の材料として人類に用ゐらるゝ様になりましたのは、金銀や銅の夫よりも後の事であります。人類學者は、社會文化の進歩を、各時代に用ゐられました器具の材料によりまして區別して居ります。即ち石器時代、青銅時代、鐵器時代、であります。未開の時代には人類は、刀劍類には堅質な石を細工して用ゐましたもので、雷斧、石刀、石鏃は凡て此時代の遺物で御座います。夫から文明の度が進みますと青銅で武器を造る様になります、支那・春秋戰國時代には此種の武器が盛に用ゐられました。青銅で造りましたからと申して、決して鋭利でない事はありませぬ、調合の工合や燒きの入れ工合で鐵と甲乙のない堅さを生じます。

◎日本では、何れ支那朝鮮あたりから鐵が輸入されたのでありませうが、比較的早い時代から知られて居りました樣です。的射宿禰が射洞したと申します、三韓から奉りました的は鐵で御座いましたでせう、日本の古代では存外外國との交通が開けて居りましたから、早くから鐵の知られて居りましたのも無理は御座いません。

◎支那で天降類（隕鐵流星の如くなつて天から落ちたもの）で造りました、星鐵の劍と云ふのが、何時の時代でしたかありました事を歷史で見た樣に記臆して居ります。此星鐵と申しますものは性質が好良なもので西洋でも多年間かゝる鐵を人工で作らんと工夫した人があります。元來天降鐵の内には必ずニッケルとコバルトの二金屬が少量混じて居ります、此二金屬中何れにしても鐵の中に少量ありますと鐵の性質を良くします、現今ニッケル鋼と申しまして軍艦の建築材として要用な材料となつて居りますのは、天降鐵の摸造品で御座います。

◎早い時代の鐵は決して今日の樣な廉價なものではなかつたのです、又今日の樣に澤山の供給もなかつたのです、充分に工業上鐵か採用せらるゝに至りましたのは、歐羅巴で此十九世紀以降の事であります。詳しい事は考證します遑がありませんので、殘念ながら此位にして措きます。

▲鐵の類別

◎純鐵　工業上で鐵と申しますのは、決して純粹無垢の鐵を申すのではありません、純鐵は是が造りますのが困難で、從て價も貴く又用途も少ない、ピアノには純鐵の針金を用ゐます、又化學實驗用の試藥として使ひます位で、用途も狹くありますから是を措て工業上の所謂鐵に就て申しませう。

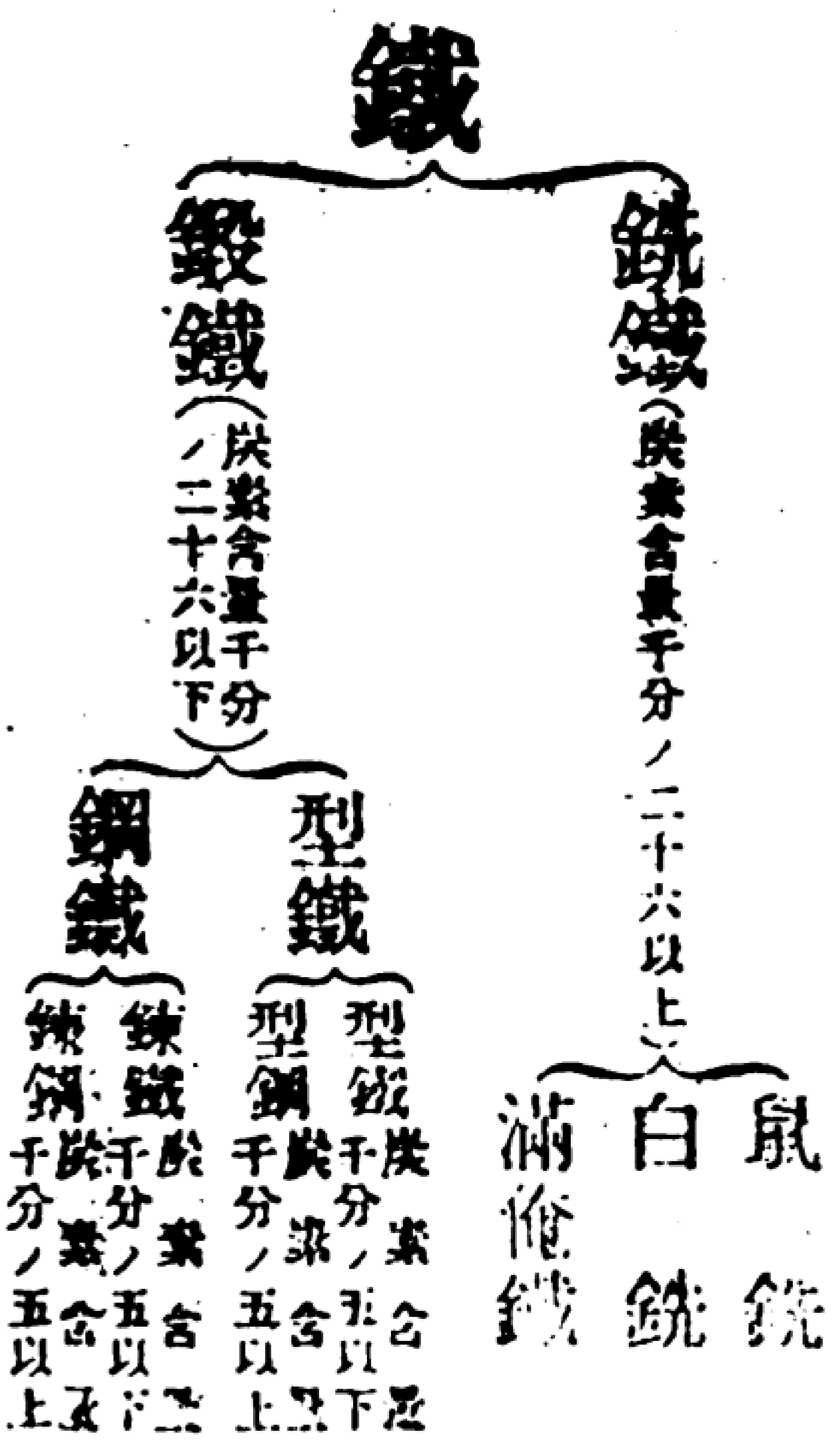
◎鑄鐵　暖爐は鐵で出來て居ります、臺所の庖刀も、ブリツキ板の地金も、鐵道のレールも、水道の鐵管も西洋釘も、針も鐵で出來て居ります。併し其間に相違のある事は誰しも疑はない所で御座います。ストーブ

を組立て、居ます鐵は鼠色で（表面は塗料を以て掩ひたるものなれば其本然の色にあらずとするも其破片の一端を見れば明かなり）脆く鑄て仕上げられたもので御座います。此種の鐵は、比較的低温度で融かす事が出來ます、之を銑鐵と申します、銑鐵の中でも鼠銑が鐵物の材料となりますので、鐵道馬車の車輪、水道の鐵管（細管を除く）其他凡て鐵の鑄物は此種の鐵から造られます。

◎型鐵　鐵道のレールになつて居る鐵は不思議なものでせう、あれは鑄物でもなく打物でもなく、併し隨分丈夫なもので御座います。私の知つて居ます鍛冶屋が嘗て話しましたに、古いレールを利用し樣と思つて赤く熱して見ましたら、飴の樣にべト〱になつてしまいまして、始末に困まつたと申しました。此種の鐵は型鐵の一種の型鋼と申しますので、日本風に鑄ます事も鍛ひます事も出來ません。器械的の操作で其形を變せしめます、鐵板や鐵橋の鐵材、鐵船の主要材は此種の鐵で造られます。

◎針金　針金は其用途に從て、或は型鋼、或は型鐵を以て造ります。是は、始めは丸い長い棒でありますのを種々な形の細い孔へ引き通して造ります。釘や針は針金から作られます。併し日本釘は一々鍛えて作りましたもので御座います。

庖刀は御案内の通り刄の部分のみ鋼で、上部は鍛鐵です、此種の鐵は錬鐵と申しまして、鐵工業の未だ十分發達致しません以前に、大に用ゐられましたもので御座います。鐵を科學的に分類して見ますと。



工業上に用ひられます鐵は、前に述べました通り純鐵

ではありません。種々の包合物があります、是等の包合物のあります爲めに、種々の重要なる性質を有つ事となりますので、つまり工業上の所謂鐵は、一種の合金と申して宜しいので御座います。此包合物の中で主要なるものは、

◎包合物　第一が炭素で、是は各種の鐵を通じて多少に拘はらずないのはありません。此炭素の含有割合の大小によりまして、鐵の性質に異同が生じます、即ち炭素の含量の多いのは鑄物にするに宜しく、質は脆くありますが、含量がズット減りますと、鑄る事は出來ませぬが、鍛ふ事が出來又性質は脆くなく通例の温度で曲げても折れぬ様になります。中位に炭素を含みますと、以上の二性質の中間の性質で、鍛ふにも十分に注意して鍛ふ事を要し、質は堅いけれども鑄鐵の様に脆くなく、併し通例の温度で自由自在に曲げる事は出來なくなります。それで炭素の含有量を標準として表の通りに類別されて居るのであります。

第二に必要な包合物は硅素、滿俺で御座います、是等は炭素と同様に鐵の物理的化學的性質に關係するもので、炭素のみの力では持たしむる事の出來ぬ性質を、是等の元素の加減により鐵に附與する事が出來ます。其他鐵の中にあつては困まる物ながら、必ず多少あるものは硫黄です。少量なれば構ひませぬが各種の鐵に付て一定量以上ありますと用ふる事が出來ませぬ。燐も硫黄と同様鐵の性質を惡くするものであります、併し鑛石中に燐の存在するを利用して、都合よく製錬し之を除きますから、硫黄程惡くは言はれません。クロミユムやニツケルは、殊更に加へて鐵の性質を改良せしめます。

◎銑鐵　是は鐵を冶金術で採取します時に一番初めに出來ます粗成品で、前に述べました種々の元素を比較的多量に含むで居る鐵合金の總名であります。他の種類の鐵よりも融解點低く、液化する瞬間は極めて短かく、融けると水の様なサラサラとした液體になります、鑄て形を與へる事が出來ます、此銑鐵の中で白銑と云ふのは、色が白く堅く、炭素は比較的少量含まれて居

ります。か或は鐵の鑄型に注ぎ込まれて造られたものであります。鼠銑と云ふのは、色が鼠色で其折れ目を見ますと黒鉛が結晶して分離されて居ります、此ものゝ中には炭素の多く含まれ、又滿俺も含まれて居ります、砂型に流し込むでなるべく黒鉛の多く分離せられて表面に出て居るのが市場で貴ばれます。

鼠銑は直ちに鑄物の材料に用ひられる事もありますが大抵異種の鼠銘を調合して湯を作りますが、又は尙一囘精製して鑄物場へ送るのが通例で御座います。

◎滿俺鐵　は、他の元素よりも殊更滿俺を多量に含みました銑の事であります。之は其儘で用ゆる事はなく滿俺の足らぬ鉄へ加えて其性質を改良する調合劑となるのであります。

◎鍛鐵　是は炭素の含量が千分の二十六以下の鐵の總名であります。銑鐵に更に特種の製煉法を加えますと此種の鐵が得られます。銑鐵と異なる點は、外部から力を加えて其形を變せしめる事が出來るのです。即ち四角の柱の形をして居る型鐵は、之を熱して置いて、ローラーと云ふ器械の間へ引き通して、レールを作り又同樣な方法で鐵板を作ります。又或種類の鍛鐵は通例の溫度で打ち伸ばして種々の器具を造ります。

一般に鍛鐵は之を急に二つに折つて見ますと、折口は粒狀をなしますが、引き切りますと、切れ口は纖維狀を顯はします。

◎型鐵　銑鐵を精製して鍛鐵としますのに二ッ法があります。一法は液體の有樣で鍛鐵を作り上げますので製錬の際に出來ます金滓は液面に浮び、決して成品中に混じません。他の法は粘體即ち飴の樣な有樣で鍛鐵に仕上げますので、自然金滓の成品中に混じます。前者を型鐵と稱し、後者を錬鐵と申します。同じ鍛鐵であり乍ら性質が違ひます。

型鐵を細工しますには熱して槌で鍛えて形を與えますのにも鍛鐵の樣に容易でなく、又他の器械的取扱ひにより複雜な品物を作り出します、又型鋼の如きは型に鑄込みまして形を與へます。

型鐵と型鋼との區別は、表に示してあります通りに、

含有した炭素の量で致しますが、實際其境界は判然とは致しません。

錬鐵。日本古來から鍛鐵鋼鐵と申して居りますのは、此種類に屬しますので、西洋でも型鐵の出來ません以前には、此種の鍛鐵が專ら勢力を有つて居たのであります。

◎錬鐵　は銑鐵から精製して作る事も出來ますが、又鑛石から直接に造る事も出來ます、日本の備中石見邊から砂鐵が產出しますが、是は直接に還元せられて錬鐵とせられて居ります。

現今日本の鍛冶屋では、主として錬鐵を取扱ふて居りますし、又數百年來因襲の久しき、一旦にして型鐵で入れ換える事は出來ますまい。併し型鐵の性質が遙かに錬鐵の上にある事は明白な事でありますから、近い將來には錬鐵は全く驅逐せられる事になりませう。錬鐵の中にて錬鋼と錬鐵との區別があります、是は含炭素量千分の五を界としてあります、是は熱して槌で打ちまして細工を致します。

坩堝鋼。是は銑鐵を坩堝の内で精製して鋼鐵に仕上げましたもので、重要な器械の部分や、金工、木工の道具等を造ります。質は鋼鐵中で最も優等のもので、從て價も貴くあります。

▲鐵の物理的性質

以上述べました各種の鐵に付きまして、一々其性質を述べましては繁雜になりますし、又其必要もありませんから、今純粹の鐵の性質を中心と致しまして、各種の鐵の性質を略述致します、

◎鐵は立方體又は八面體に結晶します。型鐵の塊の內部にある空洞に往々モミの木の葉の様な形をした結晶が現出されます、之は八面體の聚合體で御座います。併し普通の有様では鐵は結晶質でありません、是は細工をされました時に徐々に冷却せられませんから結晶しませんで、各分子が不規則に集合して居りますからであります、若し鐵を長時間或は屢々振動せしめますと、質が段々脆くなりまして遂に僅かな打撃にも破

聚せられる樣になります、是は振動の爲めに組織が結晶質になる爲めで御座います、鐵道のレールや汽車の車輪を多年使用しますと脆くなりますのは此例で御座います。

◎熟錬の鐵は銀白色で軟かく小刀で切る事が出來ます又鎚で打ち伸ばす事も出來ます、物を支える强弱の度合は金銀銅の何れよりも强くあります、一般に鐵の强弱は其是迄受けて來ました取扱方に大關係がありますので、例へば引き伸ばされた針金の樣な者、鍛はれたもの等は等しい成分の鐵でも大に强さが違います。純粹の鐵は一平方ミリメートルの切口の柱が三十キログラムの重さを吊る事が出來ます。

◎硬度に付きましても、純鐵は軟かですが、之に他の元素が加はりますに從て堅くなります。鍛鐵は稍柔かで鋼の堅いのは玻璃を傷ける事さへ出來る位です、白銑と鼠銑とは、白銑の方が堅くあります。

◎鼠鐵を攝氏温度六百度に熱しまして、急に冷水に投じて冷やしますと、强さは增しますが延性と靱性とは減じます。此性質は鍛鐵にもありますので、都合よく應用せられて居ります。例令ば鑢の目を立て直しますのに、トテモ其儘では堅くて仕方がありませんから、先づ之を軟かにせねばなりません、即ち之を一定の温度に熱しまして後徐々に冷やしますと鐵が軟かになります、之へ道具で目を刻みまして、後更に一定の温度迄熱し、急に冷水或は油の中に投じて冷やします、すると元の通りの堅い鑢が出來上ります。此軟かにする事を燒きを戻すと云ひ、堅くする事を燒きを入れると申します。此方法は鑢のみでなく、多くの鋼鐵製の物に施されます、刀劍、ナイフ、庖刀、針に至る迄此方法を通過しますので鋼の成分によりましても成品の硬度、彈性も違いますが、燒きを入れます温度、冷やす液體が水か、油か、又其温度にも關係します。日本の古の刀鍛冶が、湯加減と申しまして秘密にして居りましたのでも、此温度が刃物の出來ばえにドレ程關係するかゞ知られます。

◎鋼は熱しますと其温度に從て種々の色を顯します。

是を急に冷やしますと、其色が其儘に殘つて居ります。鍛冶屋は鋼を取扱ひますのに、此色を見て温度の高低を知ります。鋸、タガハサミ等の表面が碧色や黄色に又時として虹の樣に種々の彩色が帯をなして顯はれて居ますのは即ち之であります。

◎小刀、ナイフ、庖刀等の利器を、度々温水で研ぎ、又暖かい物を度々切りますと、其切味が漸々鈍りまして、イクラ研ぎましても元の通りにならぬものであります。是は度々暖めては冷やしましたので、燒きが戻りまして鋼が軟かになりましたからであります。故に再びよく切れる樣にするのには燒きを入れるより外はありません。

◎次に鑄物に用ゐます鐵の事でありますが、此種の鐵は銑鐵であります。先づ是を融かさねばなりません、銑を融かすには、キユホラと申しましては煉化で造りました圓筒形の爐の内へ、銑鐵と石灰石と骸炭とを互層に積み入れ、下から點火して風を吹き入れ融かし、融けた鐵を前方の窪めへ集め、此處から汲み出して鑄型に注入します。融けて居ります鐵は瓦斯を吸收しますが、鑄型の内へ流し込まれて後に此瓦斯を放ちます爲めに容積を縮收します。爲めに往々鑄物の中心に空洞が出來ます事があります。故に鑄物師は注意して此空洞が出來ぬ樣に工夫致します。

近來鑄鋼と申します物が御座います、之は型鋼を融かして型に注ぎ込みましたもので、つまり鋼の鑄物が出來るのであります。

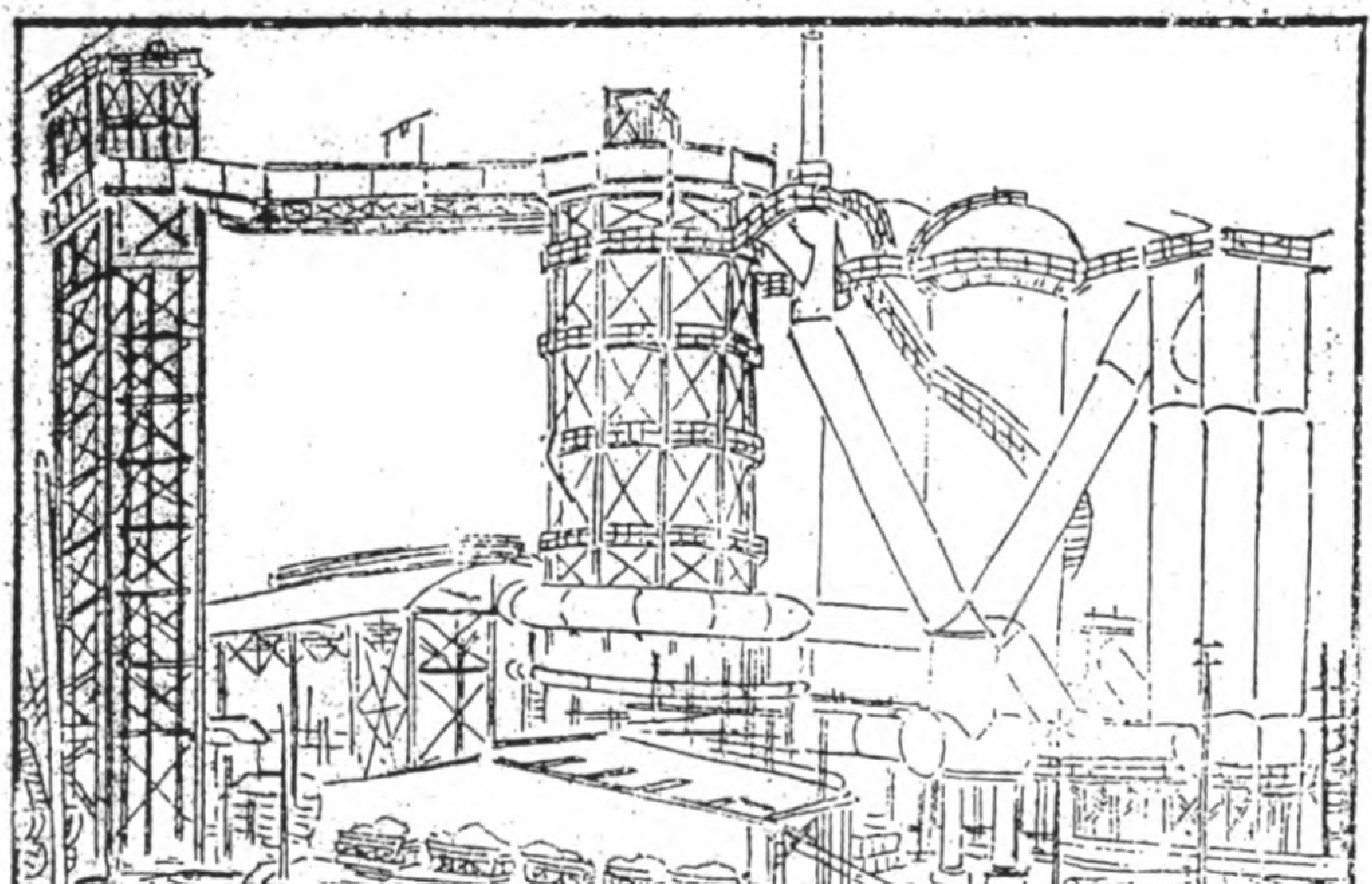
◎是迄は鐵で複雜した形のものを作りますには、鑄るより仕方がなく、そして鑄物では打ち物や鑄鋼の樣に堅牢なものは得られませんでしたが、今日では鑄鋼の術が開けましたので、複雜した器械の部分でも、巨大なものでも、鋼で作り上げられます、併し通例の鑄物の樣に容易でありませんので、價は遙かに通常の鑄物に超えて居ります。

◎何故早くから鑄鋼の術が開けませんでしたかと申しますと、鋼を解かすの困難と、冷却する時に容積の縮少が割合に大きいのと、型を作る砂の研究が十分に屆

かなかつた爲で御座います今日では大規模に行ふて居りますのは大阪の住友鑄鋼所で御座います。

▲鐵の化學的性質

◎鐵は全く濕氣の無い空氣中では銹びませぬ、空氣中で銹びるのは、炭酸瓦斯と水分の爲めに作用せられます故であります。併し乾燥した空氣でも攝氏溫度二百度以上のものは、鐵を酸化して其表面を灰色に變化せしめます。尙一層熱せられました空氣は鐵を酸化して其表面を酸化鐵で掩ひます



鍛冶屋が鐵を鍛ひます時に火花となつて散りますのは主として此種の酸化物で、第一酸化鐵と第二酸化鐵との混合物であります。

◎鐵は長時間火中に投じて置きますと、表面が酸化せられますのみならず、內部の炭素、滿俺、硅素、等も酸化せられて少なくなります。若し尙一層永く、例令五六ケ月も火に接して置きますと、鐵は變色して脆くなります、之を燒鐵と申します、ストーブのサナは此例であります。

鐵を空氣中や又他の酸化劑で包むで熱しますと、漸く

其中の炭素を失ひ、以前よりも炭素の少ない鐵が得られます。此事を利用して、鑄物を熱して鐵中の炭素を取去りまして、鍛鐵の樣な性質を有する鐵に變せしむる事が出來ます。

◎是と反對に鐵を炭素、硅素、滿俺の如きを含む物質で包みまして、長時間熱しますと、鐵の中に炭素、硅素、滿俺が竄入して鐵の性質を變します。

鐵器が空氣中で腐蝕せられると云ふ事は、表面が錆びて夫が段々内部迄侵入して行く事の謂であります。是は鐵の性質上一大缺點であります、此缺點を補ふ爲めに、鍍金や又塗料を覆ひまして、空氣との直接連絡を絕ちまして酸化を防ぎます。コールター、ペンキで塗る事、鐵板の表面を錫で鍍金する事(ブクツキ)又は亞鉛で鍍金する事(亞鉛引屋根板)は即ち此目的であります。吾々の住居の近傍には、いらくも石炭を焚いて居る工場があります。元來石炭の中には常に多少の硫黄が含まれて居りますが、是が焚かれますと亞硫酸となりまして、空氣に混入し空氣中で酸化して硫酸となります。故に空氣中には少量ながら硫酸が含まれて居ります譯であります。かゝる空氣は鐵材を蝕します原因となります。

◎如何なる種類の鐵が腐蝕せられ易いかと申しますと夫は一定の規則はありませんが、兎に角鐵の化學的成分、構造及物理的の狀態になるのであります。鍊鐵の内には幾分か金滓が混合して居りますが、之が爲めに此金滓と鐵との間に電流が起りまして其部分を腐蝕させます。又型鋼でも之を液體から固まりました時に、其冷却の度合にありました各部分の成分が多少違ひます、此異質の金屬の間に電流が起りまして、鋼を侵蝕せしめます。

◎鐵の内に含まれて居ます炭素の多少は、其腐蝕に抵抗する力に關係しません。其質の粗鬆なものは、緻密なのより腐蝕せられ易い、又銑鐵で黑鉛が大なる結晶をなして分離せられて居るのは酸の侵蝕に抵抗します或る學者は、水管を造る事に付きまして、鐵の耐酸性を調べましたが、各種の鐵を四十二時間稀硫酸及稀鹽

鹽酸中に浸して其減量を見ましたが、錬鐵の減量即ち酸に侵された額が尤も多く、他の減量の三倍であつたと申す事であります。

▲鐵の鑛石

クラーク氏によりますと、地殼即ち地球の表面の部分の岩石の平均成分は。

酸素	四七・一一、
硅素	二七・八九、
アルミニユム	八・一三、
鐵	四・七一、
カルシユム	三・五三、

であります、此表によりますと、地殼を形作つて居ります岩石土壤中百分の五は鐵であります。是が經濟上都合よく拔き取られたならば、鐵の原料は地表到る處にある譯で御座いますが、御案内の通り鐵は何分直段の高い物でありますから、今日の所では地表の土石から鐵を取る事は致しません。

鐵鑛として取扱はれますものは幾通りもありますが何れの鑛石の中にも多少の不純物が混じて居ります。硅酸、礬土、燐、石灰、硫黄、滿俺等で御座います。是等の不純物の製煉の邪魔になりますのも、又却つて都合のよいのもあります。極く都合のよい成分の鑛石では、含鐵量三十パーセント(即ち三割八分)位から用ゐられます。併し我國では含鐵五十パーセント以上でなくては用ひませぬ、之は鑛石の成分並に經濟上の都合に(鐵の分量の少いものは製煉するのに損である)關係するもので御座います。

當今鐵鑛として取扱はれますものは、鐵の酸化物、水酸化物、炭酸化物等で御座います。黄鐵鑛は直接に鐵鑛として用ふる事は出來ませんが、硫酸製造所で之を燒きまして、硫黄を取り後に殘りました酸化鐵は、之を製鐵の原料とする事が出來ます。此場合には出來た酸化鐵中に一定量以上の硫黄や銅があつては役に立ちません。

◎日本では筑前の枝光製鐵所を始めとして、釜石、仙人鐵山で鐵の製煉を行ふて居ります。枝光の製鐵所は

製鐵の原料を支那と越後の赤谷鐵山から持つて來る事になつて居ります。

◎酸化鑛としては、磁鐵鑛、赤鐵鑛が主なるもので、釜石の鑛石は磁鐵鑛で、赤谷や仙人鐵山の鑛石は赤鐵鑛であります。其外備中、岩見邊の岩石中から採集されます砂鐵は、やはり酸化鑛の一種であります。水化鑛としては褐鐵鑛で御座います。

◎皆さんが平常散歩の折田、沼又は溝の様な濕氣の多い地の表面に、キラ〳〵と光ります薄い金氣が浮いて居るのを御覽でせう。是は炭酸鐵の一種で沼鐵と呼ばれますものです、如何して出來るかと申しますと、植物の葉や莖が腐敗しまして有機酸が出來ます、此酸が土壤中の鐵を溶かしまして水中に洗ひ出します、是が更に空氣に觸れまして分解され炭酸鐵となりますので、若し此作用が廣い沼で間斷なく行はれましたならば、數百千年の後には炭酸鐵が沼底に沈澱して一の鐵鑛層を作るで御座いませう。現今鑛層をなして居ります褐鐵鑛がかゝる順序で作られましたのもあるらしいのです。實に天然の作用は廣大無邊なもので造化の力の美妙な點に驚かれます。

▲製煉法

◎鑛石は石のやうなもので直ちに細工にはなりませんから此の中から鐵を抽出すのですそうしまして成品になりまして、後尤も鐵の質を害しますのは、鐵中に燐、硫黄、銅、錫が混入する事であります。銅や錫はまづ混入する機會が少ないとしても、燐や硫黄は混入する機會が多い。夫は鑛石の内に硫黄や燐の含まれて居る事が多いのと、又石炭中に硫黄が必ずあるのと、又石灰中に燐の存在して居る事があるのとに歸因します。石炭は骸炭として用ゐられますが、硫黄の量は減じません。燐の割合に多量に含まれて居ります鑛石は特稱の製煉を行ひます。

◎鐵の製煉(即ち鑛石を溶かして鐵を造る)に用ひます材料は、石灰石、骸炭及び硅石前の化學的性質の項で述ました種々の原素がこの中に含んで居りますであ

ります。何れも重い物体でありますので、運搬の便の宜しい地でなければ製煉所は置かれません。就中石炭は種々の原動力を作るにも入用なので、石炭に不自由をしない所で製煉をしなければなりません、枝光の製鐵所が筑豊炭田に接近して置かれましたのも此點からであります。

◎鐵の鑛石は第一に是を適當の大さに砕かねばなりません。次に水分や又炭酸瓦斯等を驅逐する目的で、爐の内に入れて暗赤色（黒がゝたつ赤色）迄焼きます、之が爲めに鑛塊は粗鬆になります。

▲熔鑛爐

◎鐵をトカス爐の構造を概畧申しますと、耐火煉化火に當てゝも砕けないレンガで造られました中空（ウツロ）の圓筒であります。頂上から鑛石、骸炭、石灰石を互層（タガイチガヽ）に投入しまして、圓筒の内部で熔かし、此所で酸化鐵を還元するのでありますから、其部分は高温度になりますから耐火煉化の良質ので作り上げられます、此上に尚煉化の腐蝕せられる事を防ぐ爲めに、煉化に接して數多の鐵の函を取り付けまして、此中を水が間斷なく流通して爐壁を冷やす様にしてあります、實にその構造は巧みなものです。

◎爐の底は地面より上であります、底より少し昇りました所に爐壁の周圍に數多の孔が穿たつてあります、又底に近く上下二个の孔がありますが、上のは金滓を流し出す爲め下のは銑鐵を流し出す孔であります。扨てその風を吹き込むのは火力を強める爲めで、皆さんが團扇で七りんの下を煽るのと同じ事です。

◎風を爐内に吹き送りますのには、大仕掛のフイゴ即ち空氣壓搾機を用ゐます。そして此風は暖爐と云ふ裝置で温められ、そしてその風は熱帶國を吹く風以上で鉛の融ける温度以上となりましたのを爐内に吹き込みます。之は時として冷やかの儘の空氣を吹き込みます爐も御座います。ソーしますと爐内の骸炭は燃燒して一酸化炭素となりまして、酸化鐵を還元し、同時に鑛

石中の滿俺や珪素、燐の酸化物をも還元し、炭素とも一所に化合して一の銑と云ふ合金を作りまして爐底に溜まります。同時に鑛石中の不純物や骸炭の灰は石灰石と一所に熔けて金滓となつて爐底に下り、融けて居る銑鐵の表面を掩ひます。此融けて居ます金滓は常に爐側の孔から爐外に流れ去ります。

◎爐底に充分に銑鐵が溜まりますと、壁にある湯口を開きまして融けた銑鐵を流し出して之を砂型に入れます。さうするとナマコの樣な形の銑鐵が出來上ります。又融けて居ります銑鐵は、其儘器に受けてベセコーの爐へ送りまして、直ちに鋼鐵にする事もあります。

◎羽口即ち風を吹き込む孔から吹き込まれました空氣は、骸炭の爲めに一酸化炭素になりまして、鐵を還元し酸化鐵の酸素と結合し炭酸瓦斯となり、上行して更に上から投入されました骸炭に觸れまして再び一酸化炭素となりまして、爐を去ります、昔は爐の高さが今日のよりも低くありまして、又爐の頂が開放せられて居たものですから、爐頂から出ます瓦斯は空氣と混じまして燃燒し、凄まじい勢で炎を擧げましたさうですが、今日の爐は高さも高し頂上が密閉されて瓦斯は空氣に觸れずに管を傳ふて去りますので、かゝる事はありません。

此瓦斯はどーなりますかと申しますと、其成分の一例を擧げますと

一窒素	六十容
二酸化炭素	二十四容
三炭酸瓦斯	十二容
四水素	二容
五炭化水素	二容

(一)と(三)とは燃えませぬが他の瓦斯は皆空氣中で燃やす事が出來ます。故に徒らに空中へ開放しないで、鐵管で引きまして、其瓦斯中に混じて居ります骸炭や鑛石の粉を去りまして、更に之へ他の可燃性の瓦斯を加へまして、蒸氣鑵を熱したり、或は瓦斯發動機を動かす原料と致します。

◎鐵の金滓は色が白、鼠、青、碧等鑛石の種類により

て運ひますが、此色が冶金者に取りましては大切な事柄であります。若し平常鼠色の金滓が流出して居りましたものが、色が濃くなりますと爐の内部に變が生じました徴となります。醫者が恰も病人の排泄物を見まして投藥します樣に、爐頂からの投入物の配合分量を加減して大事に至らぬ前に治療します。

一旦爐で仕事を始めました上は、熔鑛の仕事は晝夜間斷なく續きますもので、他の事情で中止しますのは別の話でありますが、爐に損所が生じる迄は繼續します。

◎金滓と云ふ者は別に役には立ちません、唯粒狀にして道路に布くとか、又は煉化にして建築材に用ゐる位で御座います。中には大層立派な彩色を持つて居るものが出來る事があります。是等は琢磨いて飾玉や置き物に造ります。

◎出來ました銑鐵は半成品で俗にヅク鐵といつて極くわるい鐵でありますから、尚一層精製して種々のよい鐵にしなければなりません。鋏のすべ、カマのやうな鑄物に適當する銑鐵は、爐から出た儘の半成品でこれには燐や硫黄が多量にありまして、鑄物をなすに不都合でありますから、是等の有害な包合物の大部分を除かねばなりません。是には銑鐵を再び融かすか、又は爐からの融けた儘の銑を器に入れて一定の温度を保たしめ、之へ酸化劑を入れて有害な包有物と作用せしめて金滓を作らしめるのであります。

◎煉鐵を作ります主意は、銑鐵の中には煉鐵よりも多量の炭素、硅素等が混じて居りますから、銑鐵の中から炭素や硅素を引き去れば、其引き去り方の多少により、或は煉鋼或は煉鐵が出來ると云ふのであります、其手段としては、酸化鐵の床を入れてある反射爐の内で銑を融かして、其傍に燃料を焚き、酸化性の空氣の流れを生ぜしめて、之を融けて居る銑の面に送ります、と、銑の中の炭素や硅素等は燃えまして金滓となり表面に浮びます、時間が移るに從て、銑鐵は段々煉鐵となり糊狀に變じます、冶金者は適當の時を見まして、鐵の棒を爐内に入れ、かき回し手頃な丸い塊にして引き出し、鐵鎚で内に混じて居る金滓を搾り出して煉鐵

と致します。酸化の度が十分に進まぬ内に塊として引出し金滓を搾り出しますと錬鋼が得られます。

◎型鐵は錬鐵同樣銑鐵から作られますが、金滓を成品中に混じて居りませぬ。これを作ります主意は錬鐵と同じ事でありますが、其手段が違ひます。夫は液体になつて居る銑鐵の内に空氣を吹き込みまして、其中の炭素、硅素、滿俺を酸化せしめ、金滓とし同時に其燃燒熱で鐵を液体の有樣にあらしむるので、若し焙鑛爐からの銑を融けた儘で運び來りまして製鋼爐に入れ、此方法を行ひますと、製鋼に關して別に燃料を用ゐるに及びません。且僅に十分から廿分間で、五噸から廿噸の銑鐵を精製して型鐵とする事が出來ます。

他の方法はシーメンスの方法と稱へられますので、是は古い鍛鐵の屑や、釘や金物のくず廢物と銑鐵とから型鐵を作りますので、製鋼爐の容量は三噸から五十噸位迄の投入を受ける事が出來ます。此式の爐は種類、大小幾通りもありますが、近來のものは、大抵大規模のもので、燃料として瓦斯を用ゐて居ります。

◎爐の内へ鐵屑と銑とを入れまして、瓦斯を通じ爐内で盛に燃燒せしめまして鐵を熔かします。古い鍛鐵内に欠乏して居ります炭素や其他のものは銑鐵から補はれますし、從て銑鐵の内に澤山あります炭素は鍛鐵の方へ行き、或は燃燒します。餘剩の包含物は燃燒して金滓を作ります。銑の中の燐や硫黄を去ります目的で、爐内に石灰や又他の配合劑を投じて脫硫或は脫燐作用を營ましめます。爐内の化學變化が終り鋼が出來上りますと、爐から流し出して、型に注ぎ込むなり、又は液体の儘鑄物場へ送られる事もあります。

型に注ぎ込まれて柱狀になりました、所謂型鋼は、ベセコー鋼の時も同一でありますが。尙一回熱せられまして、後剪切機で頭を切り去られまして、ロール機で鐵板なり角鐵なり又レールなりに仕上げられます。

シーメンスの爐は枝光製鐵所にも、吳にも、又大阪の住友鑄鋼所にもあります。

▲鐵の產出額

千八百九十九年の統計で御座いまして

世界全体　三六、一二二、二〇〇噸（佛噸）

内

北米合衆國　一三、六二〇、七〇三噸

英國　九、三九三、〇一八噸

セルマン及レキセンブルグ　八〇、二九三、〇五噸

佛國　二五六、三八八噸

露國　二、一九三、七五〇噸（千八百九十八年）

日本　二〇、五八六噸

等

今世界全体の一ヶ年の產出額丈けの鐵で、一の立方体を作つたと想像しまして、其一邊を計算して見ますと、一町半許りの長さとなります何と夥しい額てはありませんか。

（完）

生物と体温

若溪女史

動物が生死の差別は熱を造ると否とによりて別るゝものなり、生物一般が熱を造る現象に付いては、各〻其性別（熱血生冷血性）よりて異となれども畢竟皆酸素を吸收して酸化によりて起るなり若し少さき動物を多く集るときは熱さを感ずるとあり　即　密蜂の如きものは其巢に近よれば明に熱のあることを知り得るなり。

高等なる動物に至るほど四時共に同温を保つことを得るものなり、之は甚だ不思議なる現象にして之が研究は甚だ必要なり、少しにても此熱に差異を生ずれば直に病体となる只に人体のみならず凡て生物皆然るなり。

吾人は物体を見て之は冷たし之は温かしと云ふ別を立つるに吾人の体温を本として、之を一度として定むるなり、故に此區別は實に不規則なるものにして昔は冷血体として認められたるものも決して熱を起さゞるにあらず、只熱の多少により、吾人の感覺に感ずると否

との差あるのみ、凡ての生物に於て呼吸作用即酸化作用を行ふならば常に熱は生ずるなり。

生物の體を形造る元形質は常に酸素をとり酸化により
て生活し酸化によりて熱を生ずるなり。

植物も亦酸化作用を營む、然れども植物に手を觸しとて決して温あるを感ぜす、又下等動物も然り、之は決して熱なきにあらずして我々の有する温度より低きによりてなり、一は生物が熱を生ずにしても保温の如何によりて差異を生ずるなり、最甚だしきは水中にある魚水草などは直に出來たる温度を皆周圍のものに奪はるゝ故に、恰も冷体の如くに感ずるなり。

猶細密に調ぶるときは今迄冷血動物として知られたる蛙の如きも、大氣よりは少し（一度の百分の四）の温度あり、活潑に運動するときは一度に登ることあり。魚の内にても鮪の如きは水より大に温度高く、蛇には十二度の温度を有するものあり、鳥人類の如きは最温度の発備したるものにして即三十五度より、四十度位の間にあるものなり、大西洋を横斷して飛行する燕の一種は四十四度の高熱温を有することありといふ、然れども之等の動物に皆一樣の食物を食せしむる時は其發する体温は依然として差異あるを見るべしといふ之は各其生物特有の性質によりて体中新陳代謝の働きを異にするが爲なり。

熱と云ふもの丶常に保たるゝは如何なる作用によるかと云ふに、凡て生物の細胞は一定の温度の内に於てのみ行はるゝものにして、此程度以外に冷ゆるも熱せらるゝも共に其働き止まるなり。此細胞の作用常に活潑にして變ずることなき間は一定の温を保つことを得るなり。然れども彼の野外にある草木の冬に至れば葉は皆散り果てゝ殆ど枯木にも等しく又木鼠の冬籠せる間は身体固定して一見死せるが如きは外氣の寒冷なる爲に皆体温を保つこと能はざるによりてなり、故に若し之に常の熱を與ふることを絶やさゞりせば四時毫も變すること なからん、下等の生物に至りては殆ど化學に用ふる機械の如くにして、アルコールランプを以て下より熱する間は温を生ずれども其熱を取り去れば直に冷ゆると

同様なり。

人体は熱を如何にして平均に保つかと云ふに身体に温の調節器ありて絶へず外部の寒冷に温を奪はるゝにもかゝはらず温き血液常に循環して温の調節をはかりつゝあるが故なり。

人体は僅の温度の内に生活するものにして夫れ以外に温の上下共に生活に適せず、之を保つに二つの作用あり、即適宜なる温度を作ること及び体外に去り過ぐる温を防ぐとなり、即体温は皮膚呼吸大小便、汗等と共に体外に逃れ出るなり、此内に於て廿四時間に熱の九割は皮膚より散る、此皮膚を助くるに衣服は大に効あり、然れども衣服の薄きときにも厚きときにも皮膚は常に其働きを増減して定温を保たしむるものにして、若し常に厚き衣服のみを着慣るゝときは皮膚は之に甘じて其働を減じ従つて薄弱となりて少しの温の變動にも犯れ易くなりて直に感冒などにかゝるなり、故に小供のときより餘り厚着に失するをなく皮膚をして寒暖に慣れしむること大切なり。

今其調温の機を見るに熱きときには皮膚の表面に近き血管が廣がりて太くなる、即体内にある熱餘り多く血管を廣げ温を表面に近き處に送るなり、故に熱きときには汗出づ、汗は一種の老廢物にして血液の循環盛になると共に其量多くなるなり、此水分が身体の熱を取りて蒸發し猶多ければ水となりて出づるなり、凡て水の蒸發するときには他のものゝ温を奪いて發散するもの故幾分か冷しさを感ずるなり。

之に反して寒きときには血管収縮してなるべく温を去らしめざる様に、血液は体の内部の方に向つて集合するものなり、故に皮膚は概ね蒼白色となるなり四十九度に熱が登れば筋肉凝結し十九度以下に至りても亦同様にして共に死に至る、熱の集合を防ぐに最力あるは皮膚なれとも猶其他に吾人の心付かざる内に自然に温の發散を營みつゝあるものあり、即心臓及肺臓にして熱多くなれば自然に肺臓の働きを強めて呼吸を盛にし、其中に交りて出づる身体中の水分を多くし、其發散の際に体温を奪れしむるなり、彼の犬が暑きとき又は激しく運動したるときに大口あきて舌を出し激しく呼吸するは即自然に此作用をなしつゝあるなり、又温度低くなれば心臓の働きを強くして血液の循環を盛にし、皮膚の多くに血液を送りて以て其温の欠乏を補ふなり

（完）



キジは形稍雞に似たり、山野に棲みてよく飛べども高く翔ること能はず、雄に文彩ありて尾長く、雌は文彩暗くして尾短し、肉は味美なり



鵲（カサヽギ）大きさ鳩ほどにて、頭と背は黒く、肩に白き羽あり、胸と腹は白くして少しく褐色を帯ぶ、尾は身より長くして黒緑色、七夕に牽牛と織女とが天河に行逢ふ時、その中空に橋を渡すと想像されたる鳥なり



錦雞鳥は雉子に似て、尾長く羽の美しきこと赤地の錦の如し、故ににしきどりの稱あり



啄木鳥はキツヽキと云ひ、多くは山里に住み、小きは雀の如く、大なるは鳩の如し、嘴は錐の如く鋭く、立木の皮をつゝき穿ちて虫を食ふ



角鴟は（ミヽヅク）也、大きさ鷹よりは小さく頭と、口は猫の如く、又兎にも似て耳あり、その眼は晝見えずして、夜明かなり、聲は老人の如く、小鳥を捕へて食ふ



鵁鶄（五位鷺）は水鳥にして大きさ梟の如く、頂に冠の如き紅毛あり



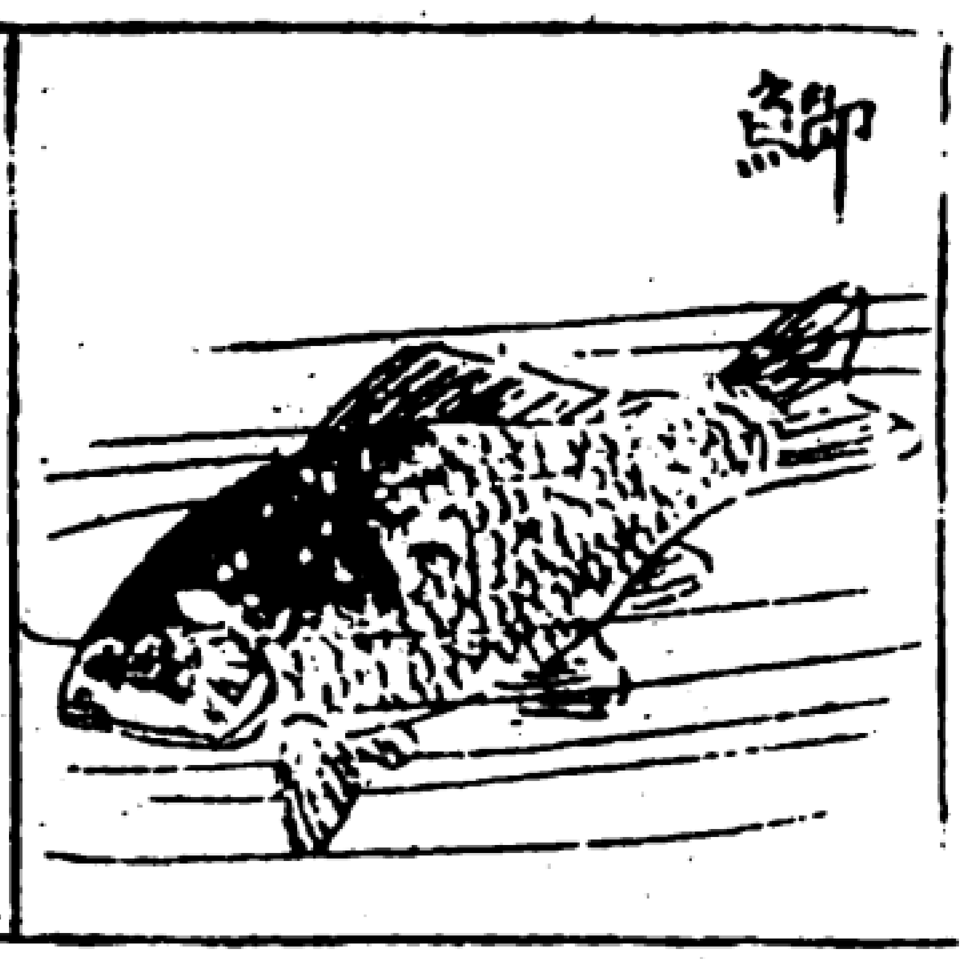
梟はミヽヅクに似て頭大きく、頭上の毛角なし、晝はかくれ、夜は出でゝ小鳥を捕ふ、泣く聲人の笑ふが如し



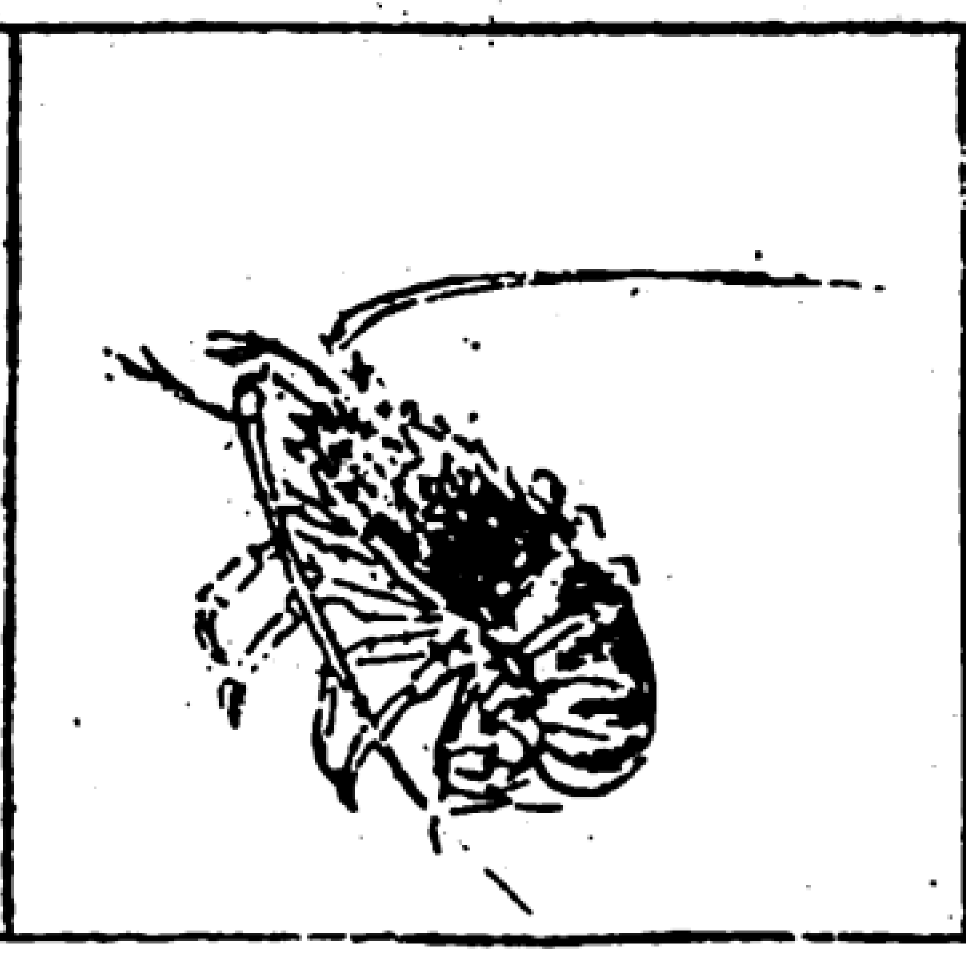
鶬鴰（マナヅル）は鶴の一種にして、形に丹鳥より小さく、黒鶴より大なり



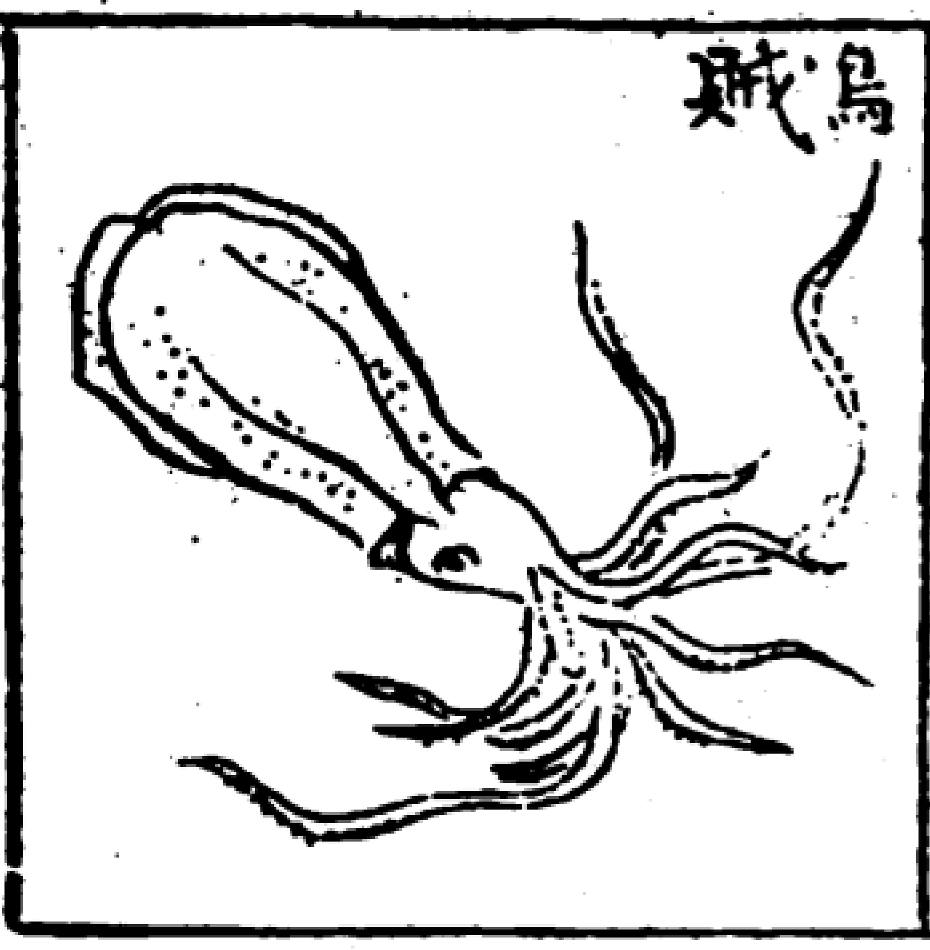
雲雀は春の末晴れたる空に高く舞ひ上りて囀る愛らしき小鳥なり、形は雀に似て其よりは少し大きく頭背に黒き斑點あり、脚細長く、爪長し、此鳥原野の地上に巣を造る



フナは淡水産鯉に似て少しく幅廣く全身淡黒なり稲田に飼育さる



エビは水産の動物全身殻にて蔽ひ背に節あり八足にてよく飛び躍る味美也



イカは海中に産す皮に白くしてやゝ鼠色を帯びその形袋に似て八本の足あり又別に二本い髯の如きものありて食物を捕ふ腹に墨汁を蓄へて若し敵にあへは之を吐きて跡なくらます



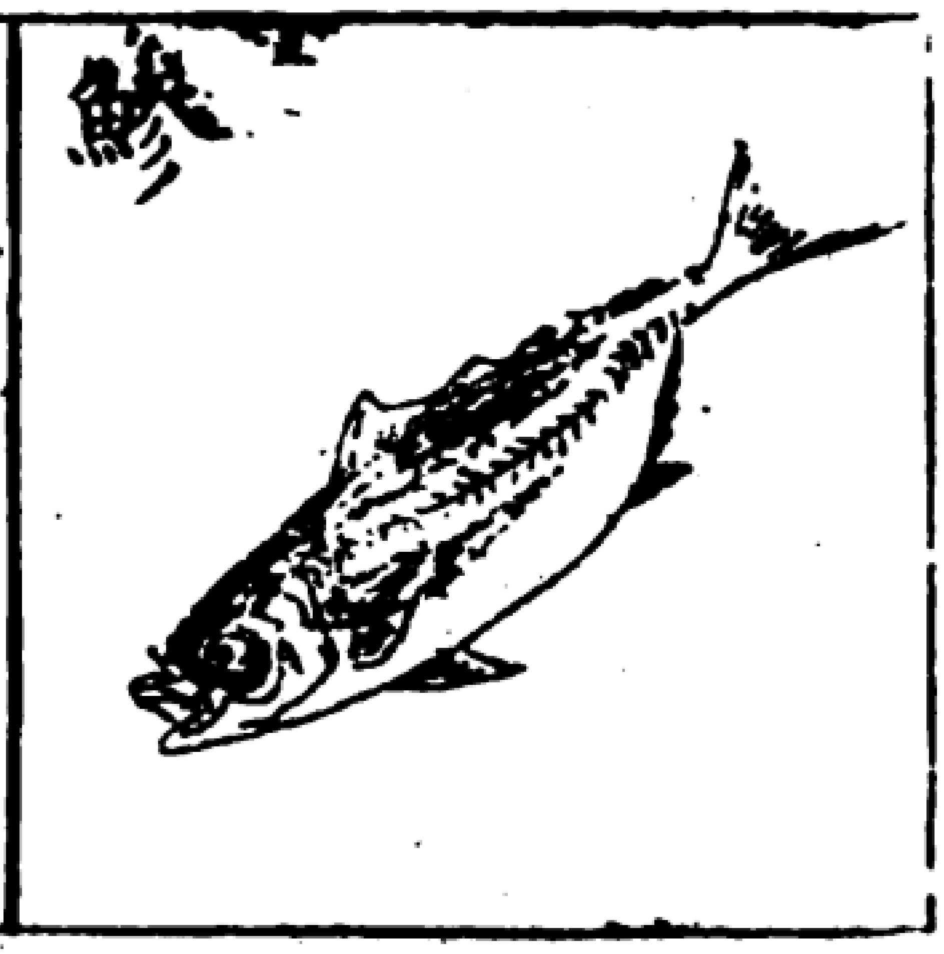
シヤチは想像の海獸なり形魚に似て頭は虎の如く勇猛の魚として傳へらる



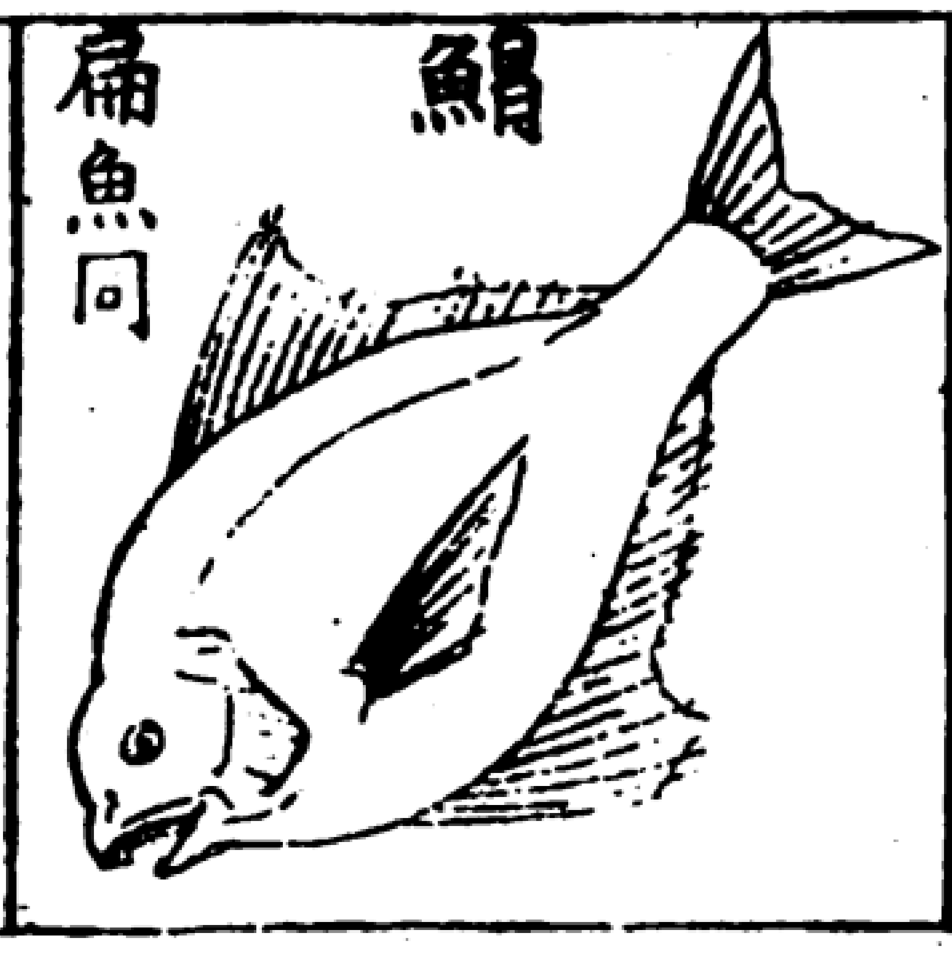
ウミウマ一名タツノオトシゴといふ、海に産す頭は馬に似て體はエビのことし全身に甲皮あり大さ三四寸に至る



フカ、水際爾様にして形ナ・ゐもりに似たり全身白き灰色にして大さ二三丈に至る



アヂは鹹水魚にして大さ二三寸より一尺に至る、鯖に似て赤色を帯び腹白しとげの如きもの鱗の下より尾まて連り生ず



マナカツヲは關西の海に多く産す頭少く身圓く平かなり



トビノウヲ大一尺ほどにして形ボラの如く兩脇の鰭は長大にして殆と翼の如くよく洋上を飛行す

雜纂

支那の婚禮

菅原雅輔

妙齢の女作達が嫁入の準備にかけては、高いの下いの相違こそあれ、何れもそれ相應に忙はしきことですが、自分の心づかひに比べてお隣の松子さんは如何であらう、お向ふの竹子さんのお婿さんがきまつたと聞ては何如なお方かと聞きたくなり、學友の梅子さんが愈お輿入りと聞けばその行裝が見たくなるなど、きまりきつたときへ、見たがり、聞たがるがなべて處女時代の常であります、されば我邦の婚禮式はそれぞれ書物に記してもあり、又は親類縁者のうちにて目前に見ることもありて、百も承知のことですら、前述べたやうに今更珍らしがらるゝ女性へ、一風かわつた支那のお婚禮などを介することゝ致しました。

▲處女

支那の婦人も子供の間は、男兒と異ることもなく共に遊び戯れて、誠に天眞爛漫頗る愛らしきもので、その頭は髪を數が三つにも四つにも分けられて、恰も蟾蜍の如き辮髪が結ばれて、一層可愛らしく見えますが、所謂「男女七才にして席を同ふせず」と云ふ譬に、今も昔にかわらで、七八才の頃よりは又この愛らしき支那少女は見ることが出來ません、即ちこれよりは、纏足を施き、爽き、嚴しき室内へ閉込められて、母親の下で針仕事、讀書、家政などの稽古をするのであります、上流社會になると化粧の外に侍女が付添ひまして、獣の喰ろうからかゝる暗黒世界のうちにおりても、多少氣の晴れることもあるそうです、此外に女子の教育とては皆無であつて、我國大臣の如き位置にある方の令嬢にして、僅に自宅へ教師を聘して三字經、百家姓、千字文、千家詩、論語、女四書、女孝經の素讀を學ぶ位であります。

▲見合

かくて深窓の下籠入娘として育つた娘が、十七八才にもならば、追ひ追ひ結婚沙汰も出て來るのであります、そこで妙齢の娘を持た兩親は如何にして結婚さすかと申すと、先づ北京で云へば大抵一ケ月に三四日乃至五六日も諸佛閣の縁日があります、此縁日には皆舊中等以上の参詣人は皆粗末なる衛兵隊の爲面を賜りて寺の門前まで遊て來ますけれども、寺内へは一切車の這入るを禁じてありますから、如何なる高貴の令嬢でも侍女に手を引かれて門内へ入り、見世物、茶屋、露店等を見廻りますから、附近の知人娘もその正體を表はさればならぬので、所で此日は貴賤貧富老若男女の別なく参詣するのですから、兩親は娘を伴ひて同じく参詣し可成よく未婚の男子に見せるのである、されば此日は果報ものが終生の好伴侶を見初むる許日でありまして、未婚の男子と女子が盛装して、右を見、左を見ぞろぞろ歩行せる有様は随分奇観である、當時未婚者の服装は、家の貧富、地位の貴賤によつて多少相違はありますなれども、的然僻に入らず尖り帯やかなるものを撰びて、幾ら柔和同様裝に誂て居るのです、實を申さば十七八歳の支那婦人は、舞の化粧か人形の稚でありまして、艶美で、温和で、無邪氣なる點に於てはなかなか我日本の京女等の及ぶ所でありません、支那婦人の優美、温和、無邪氣なるを以て、精神衰弱、肉體不健康、元氣消耗の結果にや、と云ふものもありますが、西太后の如く男勝りの婦人もある所を見れば強ち一概

に頓着すべきでもなく、研究する價値があらうと思はれます。

▲結　納

結日に於て兩家の男女が互に見初むる時は、順序として媒酌等は百方手を盡して、その家の血統、その家柄、性質、品行の[illegible]合に取りかゝるのです。充分[illegible]合をしてこれならば最早大丈夫と思ふたら、それから月下氷人が間に立つて正式に申込むのである、而て愈正式に申込で結納を遣れば、嫁の方よりは[illegible]の數に二羽の[illegible]を贈與して[illegible]ることとなつて居ります、これは[illegible]といふ鳥は奇妙な鳥で常に群を爲して遊べるに拘らず、一旦雌鳥が死するに至れば、その雄鳥は決して他の鳥と遊ばないものですから、吾々の[illegible]も[illegible]しく[illegible]ふとも必ず[illegible]を守りて、決して再婚する如き不面目なことは致しませんとの意じやそうです。

▲準　備

双方の結納とりかはせが濟めば、それ〳〵黄道吉日を撰んで婚禮の用意をするのでありますが、段々お目出度い日が近かよりて參ると、婿殿の方では宴會の準備に取掛り、嫁御の方では[illegible]調度の買入に取りかゝるのであります。

田舎の方では嫁の嫁入仕度と申さば中々大層なもので、我邦の嫁入仕度どころでなく一層念の入たものでありまして、先づ四季折り〳〵の衣服は無論、寢具、[illegible]、靴、[illegible]に至るまで苟くも女として必要なものは總て揃へればならぬのである、此仕度には頗る莫大なる費用を要せねばならぬので、[illegible]の別なく、すべて[illegible]なる品物を[illegible]で[illegible]、これは[illegible]が[illegible]は[illegible]がないからださうです。

田舎の方[illegible]の[illegible]をかへはいろ〳〵ある内にも第一は天幕と稱するものを作るのであります、而て天幕とは如何なるものかと申すと、木を柱を四方に立て〻「アンペラ」これは竹であみた席のやうなもので我邦へ[illegible]を入れて[illegible]りて來るのがある、此の「アンペラ」で天井と周圍を張りたる[illegible]でありまず、その大きさは中庭の大小によりて種々の相違はありますれども、其目的は[illegible]の[illegible]に[illegible]くて、多人數の宴會に不便なれば廣ろ〳〵した宴席を設くる爲めで、客の數に依て[illegible]の大さに拵へるのであります、結婚の當日はこの天幕内に數個の食卓を並べて、酒池肉林長夜の飲をなす所であります。

▲輿　入

いよ〳〵結婚の當日となれば、[illegible]人は早朝より禮服着用で嫁の里へ參ります、此[illegible]者は女性でありまして、[illegible]の[illegible]のものを運ぶを例としております、[illegible]が參りますと、間もなく嫁入の行列は繰り出されるのであります。

その行列の[illegible]と申したら、如何なる下等社會の貧者の行列でも二十人乃至二十五人の行列のないことはありません、さてこの行列と申すは、恐く乞食でありまして市街何處にても[illegible]とも云ふべきものがあつて、此處へ申込めば[illegible]にても乞食を集めて、[illegible]の着物を纏はしめ、太鼓、笛、[illegible]及び[illegible]などを[illegible]したる[illegible]のやうなものを持たせて、[illegible]した所へ[illegible]り出して參るのである、さてその行列の順序は先づ[illegible]を持ちたるもの[illegible]を[illegible]く先きに進み、之につゞきて笛、太鼓等の如きもの[illegible]を[illegible]しして進み行き、その後に[illegible]が[illegible]の輿に乘りて[illegible]入[illegible]人に[illegible]がれて參ります、此の輿と云ふはその狀恰も[illegible]の[illegible]る[illegible]じやうで上下周圍に金銀珠玉を鏤めたものです、四方の窓は例の如く閉ぢてあるから、花嫁が[illegible]人か、[illegible]か、若いか、としまか到底知ることが出來ないのです、この先の輿に次ぎて、又輿が二輛參ります、こ

れば左程に立派ではありません、その内には先きに迎に來た婦人と、嫁の里より附添うて參る女が乘りて居るのです、之につゞきて車輛十輛これは親戚知人が其行を壯にする爲め附添ふて參るのです、その後が荷物で所謂簞笥、長持、鏡臺、机、傘、靴、………人夫が擔いで參ります。かくて行列が婚殿の家に達しますと、豫め準備してある爆竹に火を放ちて歡迎の意を表するのです、その音がパン〳〵パッチ〳〵と至極壯快なもので、門前さながら一齊射擊を爲す樣な心地が致します、行列の乞食共は此處で錢を貰つて太鼓、笛、笙、銅鑼の類を携へて踊ります、後に殘るは花嫁の輿と親戚知人の車馬であります、

▲擧　式

扨の輿は花嫁の乘りたるまゝ門内へ舁き入れられ、結婚式の行はるゝ部屋の外まで運ばれて、今や花嫁が輿の内より出でんとするときに、花婿は禮服着用で、弓矢おつ取り部屋の入口まで出で來り、弦を滿月の如くしぼり、乾の方角に向て三本の矢を放ちます、これ花嫁と共に惡鬼の入るを防ぐ意じやそうです、そこで媒酌人に導かれ花嫁は設けの席に就き花婿もその席に就きますと、媒酌人は生饅頭を半分に割りて一半を花婿に與へ、又その一半を花嫁に與へ、聲高らかに生か、不生かと尋ねますと、花婿、花嫁共に生と答ふるのです、その意は饅頭の生か、生ならざるかを尋ねるのですけれども、其實は兒が生れるか生れざるかを尋ねたるものであつて、生即ち生れると答へて結婚の眞意を示すものとしてあるのです、式終ると媒酌人は暫く室外に立去るので、後は花嫁花婿の兩人ひとなる、四邊寂靜かに…………

▲祝　宴

暫くの後、媒酌人は再び室内に入り來りて、花婿花嫁を導きて天盤の所へ至て拜す、今や祝宴を開かんとせる來客へ紹介すると、同時に室中から白紙に紅を塗りたるものを取り出して、花嫁の處女なりしことを説明して花婿花嫁の眞操を祝するのであります、これより來客一同は宴を開き歡笑を盡くすのであります。

又媒酌人が携へ出でたるかの白紙に紅をぬりたるものは、後に門外に待て居る乞食に與へますと、乞食は件の紙を持ちて夜を犯して直に嫁の里へ持ち行き、破るゝ許りに門扉を叩き、御目出度し、御目出度し、當家の御嬢は處女にて御目出度しと申し、速かに門を開けんことを願へども、嫁の里にては成るだけ近隣へ處女なりしことを知らせん爲に、容易に門を開けません、門をあければなほ大聲に呼び、門の開くを待ちて少許りの金を貰ふて歸るのであります、所變れば品變るいろ〳〵の習慣もあるものです。

支那の婚禮も先づこんなものであります、近時ハイカラー先生が滿山出來まして西洋通は到る處にありまして珍しからねば、一つ支那通をまれて一寸御話を致して見た所であります、若し餘白があらば大に朝鮮の結婚式でも御紹介致しませう。

工女の事情

横山天涯

▲工女の故郷

予は二三ヶ月前、埼玉縣熊谷町に用事ありて、附近の某織物工場に立ち寄つた、これは予の故郷より、少女四五人其の關係に工女と爲つて來て居るので、其の實况を知らんが爲めに、特に二三十町奥の田舍に這入つたのである。

田舎迄た廻り〳〵、松木の茂つて居る杜の中に、械具を操る響が聞こゆた故、蹈入りて工場見物を申込んだ、自分の群服姿を見て、取次に出でた十六七の男が、怪訝な顔して奥に入る暫らくして此處の主人物顔れた様子で工場に導いた、十三四より十八九迄の少女が二三十人斗り、何れも機械に懸り、何やら話ひながら一生懸命に織つてゐたが、自分の入り來りしを見て、何れも申し合せたやうに手を休めて我々の方を眺めた。自分は此の工女の中に我故郷の者は居りはせすやと思ひ、案内しつゝおる主人に尋ねたれは、隣りの工場には郷中の者がゐた様ですとの事であつた。

やくて予は、隣家の工場にゆかんとする路にて、二三人の女工に出會した、其の中十六七の少女は、如何やら自分の尋ねる工女であるやうに思はれたから、突然其の女を呼びて尋ねると果してそれであつた。

此の少女は、予の故郷で最も貧民の多い裏町で、車力や人足や小商人の住んでゐる町で、此の少女の祖父は、久左衛門と言つて居る、父親といふのは、此の少女の五六歳の頃、信州長野に赴きて其れ以來故國に歸らず母親は其の跡を追うて長野に赴きしが之く其の儘、紙鳶の糸の切れたやうにぷツつり、五六年來音信が絶へて居る、故に此の少女は六七歳の頃より祖父と祖母の膝許で育つてゐたので、自分が此の少女を知つたのは、五六年前一寸歸國した時、久左衛門爺と自分の家へ屢々遊つて來たからで、親が居なくても子が育つもんだと皆の者に噂せられて居たのが、能く自分の記憶に遺こつて居る、而して此子の爲に不幸なは、丁度自分が歸つてゐた時、最も此の子を可愛がつてゐた祖母が、心臓麻痺とかで頓死した事であつた。當時は十歳位のポチャ〳〵した可愛らしい子で、男の子の間に交つてゐた故歟、女の兒に不似合な活潑な兒であつた。

一昨年再び故國に歸つた時、久左衛門爺が病歿したといふを聞いたが、別段念頭にも止めす、其の儘自分の記臆より離れてゐたが、ある新聞で工女虐待の雜報を見て之を妹に噂して居ると、傍らより母上は、彼の久左衛門爺のミロ坊は、埼玉へ工女に來て居るといふ事だが、其樣な目に會つて居られはよいが、と語られたので、初めて彼のポチャ〳〵した男のやうな久左衛門爺の孫娘が、工女となりて東京近くに來て居るのを知つたのである。埼玉縣に來たのは昨年の末で、僅か二十圓で、三年の年期で、工女に買はれたのだと母上の語に次いて妹は彼の少女の工女と爲りし次第を悉しく語つた。

今ま眼の前に會うて見れは、蘋果のやうに祖母が死んだ時、祭だと喜んでゐたポチャ〳〵した、可愛らしい様子は少しもなく、何處やら寂然とした、無愛相な子に爲つて居る。自分は此の少女の過去を追想しつゝ、私を覺へて居るか、といへは別段之に答へなかつたが、自分の母上等は東京に出て居らるゝ事を語つた時、左樣で御座いますか、となんだか考へ込んでゐた。自分は暫らく故郷の事共を語りつゝありしが、軈て別れんとする時、平日休み日には何を爲て遊んで居ると質せは、別に遊びに行く處もありませんから其處の橋の上と、彼方の四五間斗りの橋を指さし、あの橋の上で、朋輩と遊んで居るのであります、と答へたので、自分は妙に此の小女に同情せられた。

之は二三ヶ月前身自から出會した工女の實例であるが、其他自分が知つて居る工女を擧ぐれは、大抵右の如き兩親はあつても養育する者はなきか、若くは父親はありても母親のない者に多いやうで有る、最も之は自分の故郷で見る所の小實例であるから、我國の工女悉く斯うであると、固より言ふ事は出來ぬが、現に角自分の故郷より埼玉、群馬、栃木に出て居る工女は、概ね右のやうな境遇の少女が多いので。

爰に於て自分は瀧ノ川の學で園、岡山孤兒院に養はるゝ孤兒と、日本の

工業を發達しつゝある「國家の富」の供給者たる工女との境遇を比較して一種の感慨が起つて來るのである、知らず、實際□に交はるゝ愛犬下の不幸兒と、工女とは、何れが幸福なる運命にあるであらうか。

▲保護を受くる者と受けざる者

紡績工場と手工場とに論なく、自分は工場に働いて居る工女と、感化院の目的たる孤兒等とを比較して、一種の研究材料として居る者であるが、今や政府當局者が特に法案を出して、三十人以上の職工徒弟を使役せる工場者に對して干渉を試み、其の職工及徒弟に法律の保護を加へんとして居るのは、大工場の勞働者に對して誠に喜ぶべき次第であるが、法律の保護を受くる能はざる小工場の工女等は、自分等の國には、保護として養育院の孤兒等と何れが幸福なるやが疑問として遺つて居る。概略數ではあるが、統計を假りて、數の上より工場法案の保護を受くる職工と法律以外の職工との比較を取つて見やう。

日前農商務省、最も事業の分類した明治二十九年の職工統計を見ると、男工は十七萬四千人で、女工は二十六萬人、總計四十四萬六千六百十六人といふ數を示して居る、併し之は表面の概略數であるから、實際の職工數は之に幾倍して居るのは言う迄もない、而して職工三十人以上を使役して原動力を有する工場數と、其の職工數を擧ぐれば、明治二十九年には工場數は千八百〇九戸、男工は九萬七千、女工十五萬三千、總計二十五萬人に出て居る、即ち其の二十五萬有餘の職工は法律の保護を受くる者で。單に此の統計面より言へは、法律の保護を受くる能はざる制度の不運者は、十九萬六千人ある事となる。

之は例の官省の統計である、現に實の概略は、之で想像ができる、之を以て見れは、法律の保護を受けない職工數は。受くる職工より少なきと僅に五萬有餘。實際には勞働者雇下の其の例の如き背山に雇ぐが、新聞紙上には日々工女虐待の風聞が傳へられて居るにも拘らず、法律保護の恩典に與らざる多數の職工——女工が、休日には何等の娯樂も歡樂もなき味氣たる川風寒き橋の上に、情緒蒼天を眺めて、工場の苦痛を語り合うて居るのである。

▲見習工女

工場法案には、三十人以上の職工及徒弟と、特に職工の外に徒弟を加へてあるのに、流石勞働者に同情深き島田氏等の立案とて用意の周密なる只管感服に堪へない、而して小工場に於て此の徒弟——見習□〇の多いのは、自分等の眼に著しく映ずるので。

一体工女といへは、既に一人前の職工でありげに思はれるが、東京府下の八王子町や、或は埼玉縣の織物工女、若くは製糸場中の羽二重工女は實際工女として定額の賃銀を取つて居るのは、極めて少數で、多くは見習職工といふ名義で、工場に働いて居るのが多いのである、表面より言へは、女學校に通うて居る豐原式家の女學生徒と同じ位に當たる、日本の織業地と稱せられて居る桐生足利の機工場も、工場の多數は、矢張此の見習女工であるから、或人は我國の工業は見習の工業だと言つたが、職工の側より云へは實習練理とも云はれぬ、既に見習生といへは、純然たる職工と見るべからざるは固より、か弱き女の身を以て、工業の修業に身を委して居るのは甚た殊勝な譯で、大に喜むべきであるが、實際其の土地に於て工女の評判如何を見れは、實業の下女流が身の振で貧弱して居る、恰かも貧困の人が舊娼妓を飼養するやうに。

併しながら見習工女の實情を見れは、右の如く保護を受くるのも、亦た止むを得ない事もあるので、といふのは見習工女は、名義は見習工女であつて、技術修業の爲に工場に働て居る者のやうであるが、其の實三年乃至七年間、僅少の手當で實業にせんずて工業者の狀態より、特に見習〇

女の名を設けて外面を飾つて居るので、藝娼妓が數年月間身體を賣つて居ると同じく、見習工女も、見習といふ美名の下に身體を賣つて居る一種の奴隷に外ならないので、唯だ藝娼妓と異なつて居るのは、藝娼妓は多額の金員で節操を賣り、見習工女は三十圓以下の些少の金額で、勞働を賣る相違ある丈けで、數年月間全く自由を束縛せられて居るのは、藝娼妓も見習工女も其の間に何等の相違が見受けられないのである。

▲下女と工女（一）

前項には見習工女と藝娼妓とを比較して見た故、今ま爰に下女と工女とを比較して見やう。

普通の觀察より云へば、下女に比ぶれば、工女は一段階級が上であるべき筈であるのに、實際は反對にて、勞働者として最も下級であるべき筈の下女にさへ輕蔑せられて居るのである、併しながら下女と工女の今日とを比ぶれば、總ての點に於て、工女は下女に劣つて居るので、衞生足料などにて、下女が工女を輕んずるのも亦た已むを得ない次第。

（一）　先づ給料の上に工女と下女と大なる相違がある、普通機業地に見る所の女工（見習工女）は、賃銀といつて別段なく、唯だ賞與といふ事で、年給五圓乃至十圓を取るに過ぎない、下女が一ケ月一圓五十錢乃至二圓を取つて居るのに比ぶれば、非常の相違ではないか。

（二）　下女は半季奉公と、契約は幾何長くても半年乃至一年であるが見習工女は十二三歳の少女ならば七年、十四五年のは五年で、十七八歳のでも二年乃至三年である、故に工女は籠の鳥と同様、長年月自由を束縛せられて居れども、下女は、自由である丈け、工女に勝つて居る。

（三）　雇入仕度、貧家の女兒は、其の下女となる者も、工女となる者も、大抵雇入仕度の爲に工女なり下女なりに爲つて居るのは、兩者とも相似て居るが、此の目的を遂ぐるに、下女と爲つた方が捷徑である、工場所在地で下女となる者は居るが、工女となる者の少ないのを見ても、其れは判るであらう。

▲下女と工女（二）

前項に下女と工女との優劣を比較したが、爰に自分が一種妙な現象を、曾て前橋地方で見受けた事があつた故、爰に下女と工女とを比較した序に記るして置く。其れに前橋附近の村落で、座繰で生糸を繰つて居る小工場では、工業の暇である時は、使つて居る工女を遊ばせ置くのが不經濟といふ算盤玉より、市中の商屋などへ、下女働に出すのを見た事である、下女か、工女か、區別がめちやらに爲つて居る、而して其の工女が下女として得る給料は、矢張其の工場主が取つて居る。

一體群馬に來て居る生糸工女は、其の中分以上は、越後越中等の北國地方より來て居るので、中には二年も三年も前橋に居て、其れで前橋町の名さへ知らぬ者もあり、工女となつたが最期、盆と正月と、時々の物日を除いた外、年が年中工場に燻ぶつて居るのもあるかと思へば、主人（工場主）の都合で、下女に出さるゝもあるので、最も主人の煙草とか、酒肴とかいふので、臨時スケと呼ばせて居るのもあるが、又た前に舉げたやうに、大金（？）出して、平日面倒見てゐて、遊ばせて置くといふのは贅費の骨頂、米の代でも、といつて下女に出して居るのもあるので。兎に角、他國より來て居る工女は、其の契約間は純然たる奴隷で、仰山に云へば、雇主は生殺與奪の權を持つて居るとも云ひ得るであらう。

▲就業時間に就て

工場法案要領を見るに、

十六歳未滿の男女又は滿十六歳以上の女子には勅令を以て　十二時間以上の就業時間を制限することを得るとし其勅令は向十箇年を期し漸

大就業時間を短縮するの目的を以て左の如く定むることを得
（甲）十六歳未滿の男女又は十六歳以上の女子は左に掲ぐる就業時間を越に傭使するを得ざる

第一種工場　十四時間

第二種工場　十五時間

といふ條文が見ねて居る、社會主義を奉ずる硬僕連は勿論、常に議論の根底を事實に置いて居る社會學雜誌記者さへも、「今多數の工場に於て、斯く長時間勞働せしむる者あるを見ず」と記して、暗に此の規定の沒意義なるを難じて居るが、社會學雜誌記者にして若し群馬邊の座繰工場の狀況を見たならば、十五時間の制限も、見習工女に對しては一種の恩點であることを發見するであらう、特に法案の範圍外に在る小工場の生糸工場等にては、朝五時より、夜の十時頃迄、則ち十七時間働かせるのは普通で、甚しきは夜の十二時迄コキ使うて居る工場もある、故に紡績工場など、比較上規律ある工場にては、十二時間の就業は通例であるが、群馬縣などの生糸工場にては十五時間の制限も寧ろ特別の恩典となる、そうして斯くの如き長時間の就業は、三十人以下の小工場に多いのである。

▲見習工場の成績

北國地方より群馬、埼玉、栃木等の工場、特に織物工場に見習工女となりて、三年、五年、七年の年期を勤め上げ、技藝を習ひ得た工女に、修業の上は如何なるか。自分は北國地方で見聞した事實を擧げて、其の結果を示さう。

昔て中越地方では郡役所の當局者等が、勸業奬勵といふので、貧家の女兒を駆り集めて、群馬、栃木地方へ見習工女として送つた、四五年の後、各々業を覺へて歸つて來たので、農業の傍ら新奇に工場を開いた地方の工業家は、先を爭ふて雇うたが、桐生足利地方では縞紗等の巧妙なる物を織ることが出來ても、縞紗を織らない北國地方には、から間に合はない、其の餘旅の風に會ふて來た事とて、すれて／＼曩日と打つて變はつて輕薄の態作多く、工場監督に馴れない新工場者は、何れも皆な旅歸りの工女に困つて居る、のを自分は甞る處の新工場で見受けたのである。

之は郡役所等にて奬勵した見習工女の有様であるが、募集人の手で桐生足利地方に赴ける、普通一般の募集工女は、年期を終りて滿足に歸國せるものは十人に五人、あれは好成績で、多くは如何なつたのか、かいくれ分らない、或者は先方の土地で身を片附けたのもあれば、或者は前借に前借を重ねて、三年の年期で赴ける者も、五年、六年、と同一工場に眞ッ黑に鎖つて居るのもある由、之は尚ほ良い方であるが、自分の知ッて居る或工女の如きは、中途にして工場を逃け、東京へ出づる路にて悪漢の手に掛り、今は酌婦と墮つて居るといふを、つい先頃耳にした、一々事實を擧ぐれば斯くの如き類は啻に二三人であるまい。

更に機業地に就て工女の様子を見るに、見習期限を終れば、故國に歸るもあれば、或は所天を定めて家を作るものもあり、之は成績の良い方で、其他は伎倆の成りしを鼻にかけ、人力車夫に「まうらう」のある様に、氣隨氣儘に各工場を渡りあるくのが多い、職人仲間にてもワタリ職人と言へば、普通の社會よりノケ物に爲つて居る程なれば、工女の「まうらう」には婦女子である丈け其れ丈け厭ふべきは今更言ふ丈け野暮であらう。

産婆社會

S・A生

▲西科産婆

産婆――所謂西洋産婆なるもの、近頃大分殖えて來たが、まだどうも世間一般が舊式ですから昔の取上げ婆さんよりも信用が無い。相當の學科を學んで、相當の技術を得た洋式産婆の方が、無學無識の取上げ婆さんよりも、遙かによい筈である、無論如何に學識が深くても、無經驗なるは素より先づ相當に經驗あり、學識あるもので、猶且つ昔の取上げ婆さんよりも世人に信用されぬと云ふのは、全く世間の習慣感情の結果と云はなければならぬ。而うして當時の學校出の産婆に對しては、甚だ氣の毒の次第である。

それゆゑ相當の婦人であつて、將來有望な技術と學識を以てゐて、産婆として營業の看板を掛けても、とんと患者が無いそこで已むを得ず産婆の看板を取除けて看護婦となるのが多い。これは今日の社會が、まだ習慣性の　妾を脫し得ないのと、個人の衛生的思想が發達しない結果でせう。

ですから、もう少し個人の衛生思想が進んで來なければならぬ。然うすれば、當時の産婆と、從來の取上げ婆さんと何方が安全であるかと云ふことが分る。全體日本の現社會は、婦人の分娩と云ふことに就いて甚だ冷淡です。もう少し大切に思はなければ成らぬ。分娩は婦人の一大難居と云はれればならぬ。それを冷淡に思ふのは大きに不心得な話と言はなければならぬ。

抑夫婦と云ふものは、單に子孫を遺すと云ふのが決して主眼では無い男女の兩性が此の世の中に生存して行くに就いて、常に生活と戰ふところの心氣を慰めるために、互ひに温かき家庭に依つて或る快樂を求めやうとする、其の必然の結果から子供といふものが出來るのであるから從つて其の分娩法も大切にしなければ成らぬ。もし一朝過つて、分娩術の不完全なるために、肝腎の兒母を亡した日には、温かき家庭の快樂も、希望も一時に破壞されて了ふ道理です、故に家庭の快樂を永遠に保持しやうといふには、深く妻女の分娩に注意しなければ成らぬ。又產れたびの子供にしても、この世に生れて來るが早いか。直と孤兒になると云ふのは、人間の最大不幸である。

▲產事(さんじ)の重大(ぢうだい)

婦人の分娩は、其の良人の注意を待つまでも無く、分娩者自身が深く警戒しなければならぬ義務がある。其の義務を果すには、舊來の不安心なる習慣を打ち破つて、安全なる方法を取られればならぬ。乃ち一點の無理なく、單に經驗に依つて行ふ取上げ婆さんを廢して、學識と技術より成れる所謂西洋産婆に就かれればならぬ。

多くの分娩者の中には、必らずしも頑冥無識のものばかりはないが、男子は素より、婦人自身が產事の如何に危險なるものであるかと云ふことは、殆んど腦中に置いて無い。であるから危險を危險と思はず。西洋産婆に掛るのが、何となくオツクウなやうな氣がして、ツヒ從來の取上げ婆さんにこの重任を托すのである。

幸ひにして何等の故障もなければ僥倖だが、一朝間違ひのあつた際には甚だ危險極まることで、寧ろ故障のないのが不思議である。

尤も西洋産婆をオツクウがる一つの原因は、一般が西洋産婆は從來のに比較すると、頗ぶる多額な經費を要するから、普通の社會では、西洋産婆の安全なことを知るも、其の經濟に於て許すことが出來ない。けれども、生活に關するだけの手段を採れば、必らず其の經濟にかて許すこ

ともが出來る。又甚だしい實例者は、事情を打ち開けて頼めば、産婆は快く承諾するのである。若しその依頼に應じないやうな産婆があれば、社會は是れに十分なる制裁を加へて可いのである。

詰り社會一般が、自個の衛生に重きを置いて、全然舊來の習慣を打破して、文明の學識と技術を信じて、多くの高等なる産婆を要するやうになれば從つて多數の高等産婆が出來るのです。

▲産婆の修業

偖て産婆の修業は今日、普通の學生のやうに日々講習所で通ふ所謂産婆學校なるものはない。詰り大學醫院とか。赤十字社病院の若くは其他の大規模なる濱田病院。榊田病院。赤坂――櫻井等の諸病院に入つて修業するのです、

それらの諸病院へ看護婦に入つて、其の傍ら實地に就いて研究するのである。故に何事も修業中のことで、隨分苦しいこともあらう。尤も辛いと云ふのは、夜分安眠のならないことである。始終入院患者の傍に附いてゐて、其の片手間に勉强するのだから、夜の目も眠らずに勉强しなければ成らぬ。而うして一方には病人に附いてゐるのだから、夜が夜中でも患者の用を達さなければならず。又産婦が入院して居れば、其の晝夜を問はず分娩した時は、實地研究のために手傳はなければ成らぬ。それで首尾よく一二回の試驗に及第すればよし

然し首尾よく内務省の試驗に及第して、天晴れ免生となつて開業しても、産婦何時分娩するか知れないから、雷鳴甚だしい暴風雨の夜でも、冬の吹雪のする深夜にも、分娩者があれば出て行かなければ成らぬ。女子の職業として樂な方とは言へない

▲産婆の心得

修業しまだ學生時代は何と云つても單純なもので、辛い苦しいと云ふも只腹に堪へるばかりであつて、精神上の苦痛と云ふものは餘りない。それが一朝獨立して産婆を開業すると、營業上の競爭から職務以外に氣を配らなければ成らぬから、體ばかりで無く、精神上の苦痛を感ずる。所謂營業勞といふのです、で分娩者其のものは、直接苦痛を感じるのだから、少しぐらゐの費用は惜まぬとしたところで、其の家人とか、或ひは姑等は自身に苦痛を感じないから、何うしても費用を惜むのだ。から成るべく費用の掛らないやうにと云ふ掛念から、舊式の取上げ婆さんの方へお鉢が廻はりがちのところを、偶々ながら高等産婆に頼けるのだから、少しにても費用の省けるのを希望し又親切に如才なく仕業をしてくれるのを希望するであるから、それに應じて努めなければならぬ、さりとて餘り遣り過ぎると、又同業者に嫉を買ふやうになる。即ち新規開業で獨り繁昌するものがあると、他のものは決して默つてはゐない。必らず陰へ廻はつて、妨害を加へる。すると所謂人氣商賣だから、屹と影響を受ける。影響を受けては活動に差支へる

それから病家の種類である。無論上中下流の階級はあるが、理解力は又階級以外なもので、假令ば高等武官の奥方でも、舊式の取上げ婆さんと新式産婆の手術を理解し得ないのがある中には産婆を恰も召使ひの看護婦か女中でゞもあるかのやうに、ムヤミに顎で追ひ使つて、少し仕やうが惡いと怒つたがつて叱鳴るのがあるたとへば冬なら煙草の火を見ろとか。夏ならば團扇で煽いでくれろとか何とかでムシヤクシヤ紛れにさんぐの惡口を云はれる。これがまだ病院にゐる修業中なら知らぬこと。立派に看板を揚げて營業してゐる身分に取つては、忌々しくもあり、腹も立てざるを得ない。けれどもそれが職業だから怒る譯には行かぬ。

それでも物惜みしないのがまだ見つけものである丈も持あつかふの

は町狭です、何んなに評み云つて聞かしても、たゞ自信ない一點張りで、ガーゼや脱脂綿の材料や、器具を使つたり、消毒することを嫌つて、始末に終へないのがある。それを強ひて斷行すれば忽ちお斷りとなる。こゝらは産婆の大いに注意すべき點である。

◆産婦の心得

以上は産婆の心得だが、肝心の産婦自身も大いに心得てゐなければ成らぬ。何れの産家でも甚だしもの惜みしてならぬが、それは間違つてゐる。前にも云つた通り、分娩は婦人の一大事だから、成るべく危險を避けるやうに注意しなければ成らぬ。よく産婆を困らせるのは、分娩手術の際に用ゆる材料である。從來の舊式婆がするやうに、不潔な處へ用ゆるのだから不潔なボロで澤山だ。ガーゼや脱脂綿を使ふのは勿體ないと云ふのだが、これは危險極まる、無頓着も甚だしい。不潔なるボロには恐るべき黴菌が常に附着してゐる。然ういふもので不潔な個處を洗拭すると云ふのは、恐れても懼るべき亂暴手術と云はなければならぬ。幸ひにして何事もなければ無いやうなものゝ、一朝其の黴菌が或る傷口から這入つた時は肝心な命を玉無しにするやうなことが出來する。産後の不健全、若くは産褥熱を起すのは、即ち産婆の不熟練からの結果では無くて、多くは分娩者自身の罪である。尤もボロを使ふなら、十分な消毒をさせて用ゆれば可い。然うすれば決して餘計な費用は入らない。斯の如く分娩者自身も多少の心得が無くてはならぬ。されば夫れを強いる産婆も大いに手數が仕易くなる譯であります、

印刷局の女工

日本帝國政府から最も重な職を營んで、官報發行なる印刷局へ通勤する女工の職業を紹介しましやう、先づ印刷局部内で女工の職業としてあるのが印刷部の側で、之を内譯すると刷版課、調査課、印藏課である。

◎刷版課は動力に賴られる男工が多いが、また女工でなければならぬ仕事もあります、其の事業と云へば新紙幣の番號を捺印するので、之は男工では綿密に行ぬ所から、殊更に女工を要するのです、

◎刷版部で印刷の了つたのを調査課へ廻すのですが、此調査課は純粹の女工制度で、宛然女護島のやうに感じられる、偖て其の事業と云へば新紙幣、公債其の他は郵便切手の類で、印刷の可否を調めまた頁數を改めるのだが、毛髮程の汚點があつたら採用しないで、廢物に落すのであります。

◎廢物と認められた、新紙幣なり、公債證券なり、郵便端書なりを印藏課へ送るの順序であります、夫から女工等の選擇した廢物の紙幣を、器械にかけて裁斷するのである、此選擇の爲めに印藏課で女工を要するのです。

◎此女工一同の服裝は白地の筒袖に同じく行燈袴を穿ち、夫に課印しが課に據つて異にして居る、刷版課と印藏課は赤色の筋、調査課は黒色の筋である、其の筋の數で等級を定めます。

◎最下級が二本筋で夫から漸次累進し、最高級を八本筋としてある、又女工を監督するのを伍長と稱し、品行方正で勤勉なる者を選むのです、伍長に推薦される者は實に六本筋以上で、其の上役を女工取締と云ふ名目だ、其の中の女工取締山崎さはと云ふ女子は判任官の待遇である。

◎伍長と稱せられるも一ツは人望で、六本筋の方が伍長に推薦され、却つて上役と違つた八本筋が、其の指令のもとに働く事もある、乃で伍長に對しては特に徽章を與へてある、之を襟の所へぶら吊て居るから、伍長は一見して判るやうになつて居ります。

◎伍長と平女工とは事業を異にし、平女工のやる事業を總檢查と云ひ、伍長の事業を最終檢查と稱してある、總檢查は前にも述べた如く、新紙幣や債券類の汚點を調查するのだ、夫を伍長が再び調查をするのだから俗に最終檢查と云つて居ります。

◎夫から女工等の日給だが、最初は二本筋で十二錢、等しく昇級して十五錢になる、袖は腕の筋が一本宛增加する度每に增給するのだ、が、爰に面白い規定がある、女工の日給二十錢以下の裡は筋一本に就て二錢宛此日給

◎二十錢以上に超過をしたら、筋一本を增每五錢宛の增給になる、然ば實に最初十二錢の二本筋で雇はれ、漸次昇進して五本筋になつて、始めて二十錢の日給を得られるのです、之が一本筋が殖て六本筋になつたら二十五錢、最後の八本筋で三十五錢です。

◎併し女子の事業として三十五錢を得たら、多少生活の補助にもなりませう、また獨身者であれば、嫁入の調度位ゐは自身で、結構に贖ひ得られるのですから、印刷局の女工を希望するものが多い、然ど十二錢の日給から三十五錢まで、昇級するには殆んど八年間程、勤勉せねばならぬと云ふ事です。

◎女工の伍長から取締へ昇級するのですが、取締は謂はゞ女の御役人樣で、立派に月給を得られるのですから、工場服裝も伍長當時のやうに、仕替衣ではなく自辨で新調します。

◎ところで月給は最初が十二圓、夫から漸次昇進して最後に二十八圓となります、新拜命の取締は宛ら一等巡查の警部になつたと同じ樣で伍長當時と、月給に大差がなくつて、洋服の一着も新調せねばなりません、却つて散財がかゝるので、取締から見れば伍長の方が、氣樂だそうです。

◎取締の重なる事業は女工の監督と、朝夕出入る服裝檢查をする役ですが、婦當でさへ素人の眼に觸ざるやう、警官が注意をした玉の肌を、御前の身にあられもない、二布一筋で朝夕出入するのですから、馴ないうちは顏に紅葉を散すさうです。

◎醜態な話しではありますが、然うして措ないと紙幣に紛失を來すから斯る檢查をするといふ事です、此檢查場は二階に設けてありまする、夫に女工は總て二階を工場に宛てあるです、服裝檢查も儀式だけで、昔とは其の赴きが違つて來たとの話しです。

◎また普通女工が圊へ往く時が滑稽だ、一名では圊へ遣ない孰も二名宛連なつて往く、連が用を便ずる迄は外に待つのです、然うして交代に用を便させるのは、萬一紙幣を隱匿せん事を慮り、友吟味と云ふやうな方針にしてあります。

◎夫から女工の勤務時間であるが、午前七時より午後五時半迄、時としては二三時間の夜勤をする事もある、之を女工等は居殘りと稱して、定給外に一時間二錢宛增加をするのだ、夫に一日の休暇時間は晝食後三十分、二時の晝休が三十分であります。

◎定休は大祭、日曜、土曜(但し半日)である、此休日も印刷局では女工へ日給を支給するのだ、先づ大祭、土曜は日給の全額、日曜のみは其の半額に減じられる、また昇級だが年末と年度始めに舉行するのです。

◎女工の勤勉者には賞與がある、之れも年末、年度始めに舉行する、年末には取締、伍長等は月給に宛た全額位ゐ、年度始めには其の半額である、普通女工は年末、年度始め供に、平均四圓位ゐと配當されます、併しながら五本筋以上でなくては、此榮に與らぬ事になつて居ります。

◎また妊娠者は八月目から使役をしませんが、分娩までの休暇中は勤務當時と同樣に日給を支給する、夫から分娩後更に出勤するも差支はないと云ふ事です。

女學界見聞録

勝間麻軒

▲薄暮女子大學を訪ふ、既に職員生徒の退けたる後とて、構内寂寞たり、唯だ、ピアノの響と、運動場の木立の間に散見する寄宿舎生徒の影と、此の二つあるのみ、中に三四名自轉車の練習を試むるものあり、運動場の柵に沿ふて砂の上を、右手にハンドルを把り、左手にノート、ブックを開いて、車上ゆたかに讀みながら馳らせ行く、天晴の姿、夫の初野嬢を聯想せざるを得ざりき、此の光景は當校に於て見る特色の一とす。

▲高等女學校の卒業生といへば、所謂高等普通教育を受けたるものなり、女子としては讀み書きも恥づかしからぬまでに出來、常識も相應に發達してゐべき筈なり、然るに事實は之に反して、其の讀み書きなるものは覺束なく、其の裁縫なるものは仕立屋に一月通ひたる者にも及ばず、是等は尚は恕すべしとするも、普通教育の本旨たる常識の幼稚、否寧ろ缺乏なるに至つては、舌を卷いて驚かざるを得ず、堂々たる女學校を出でたる身にして尚且つ、爺婆の聲色を使ひ、卯亥は未に爪とるな、と、取るにも足らぬ迷信を語るあり、或は、寅申八日に物裁つなといふ先祖傳來の舊思想を固く守つて動かざるあり、其他此の類の事を日夕口にして恥づる色なく、人をして是でも二十世紀の新教育を受けた明治の女子たるかと疑はしむるものあり、歎はしき至りならずや、是と申すも畢竟、幼兒より養はれ來りたる老父母の家庭教育が、かゝるノーセンスを言はしむるに至りたるにて、今更餘儀なき譯ながら、二十世紀の女子たるもの、海老茶の手前に對しても、少と氣を付けて貰ひたきものなり。

▲近來、女學生の服裝の華美なる、人をして眼を側だしむるものあり、絹や、縮緬や、綸子や、綸綾や、女學生の整列する所を見れば、綾羅錦繡燦として、宛ら三井の窓飾に髣髴たり、かゝる現象は女學校に一定の制服なきより起る弊害にして、遂には之が爲め資力なき父兄は子女の就學を廢するの已を得ざるに至るこ

く、女學の發達上面白からぬ傾向といふべし。

▲學校は服裝の展覽會にあらず、故に生徒の服裝は身分相當といはんよりは、學校相當に致すべきなり、例へば土地の狀況と學校の種類により、中流以下の生徒多ければ、其の學校は綿布を以て學校相當の服裝と見做し、一般の生徒に向つて其以上を着用せしめざるが如き處置を取るは、極めて必要の事なり、然るに若し之に反して、身分により區々とならば、其の弊害の及ぶ所、啻に華美に化せられて、教育上の妨害となるのみならず、幾多恐るべき結果を見るに至らん、夫の豪富三井三郎助氏の息女の御茶の水の高等女學校に通學するや、家庭の注意により、登校の際は故に質素の物に着換へて、二子の筒袖にメリンスの袴を着用するを例とす、故に他生徒と交はるも敢て其の富を分別せられずして、其の歩調を一にするを得、斯の如きは誠に子女の修學上に取つて、有り難き用意なりといふべし、願はくは上流社會の家庭が、總て此の心もちゐで、一般の模範とならんことを、望むと某教育家はいへり。

▲本年文部省に於て執行したる中等教員檢定試驗には、家事科の受驗者も相應に多かりし由なるが、中に夫婦連の受驗者あり、一人はフロックコートを着て、一人は海老茶袴を穿いて机に向ひ、いと熱心に解釋をものせられたりと、思ふに家庭に在つては一人が飯炊く、一人が味噌摺るといふ風に、朝夕研究を共にせられたる事ならんか、近來珍らしき學界の好話なりといふべし。

▲作法は教授者の最も考慮を要する學科なり、又た取捨と斟酌を用ゐべき學科なり、然るに兎角作法といへば、之を教ふるものも長押造り二ノ間付の御坐敷にのみ用べきものと心得るが故に、數百年も前に出來た小笠原式に則るべきものとして、現社會日常の生活と合ふも合はぬも、一切關知せぬといふ風あり、此頃某所にて作法教授を看たるに、折しも日本蠟燭の心の切り方を敎ふる所とて、古風の燭臺を持ち出し、其の側に跪坐して、先づ左の手を突き、さて右の手を擧げて

心を剪るまでの順序を事細に説明し居られたり、茲に於て余は、其の法の餘りに時勢遅れなるを思ひ、今や日本蝋燭廢れて、大抵の家にては西洋蝋燭を使用する時節なれば、心の剪り方を今時覺えた所が、そを用ゆべき場合至つて少し、それよりは寧ろ洋燈の火屋の拭き方でも教へて貰つた方が、遙かに利方なりと言はざるを得ず。

▲裁縫の教授に足踏ミシンの使用法を課する所あり、專門の裁縫學校は元より論外なるも、普通の女學校にては此器を持ち出す程の必要もあるなし、襯衣、ヅボン下、タヲヤスの寢卷位の物は、手ミシンにて澤山間に合ふなり、手ミシンの方なれば取扱もらくなり、價も廉なれば、之を家庭に備へて、調法を成すべけれど、足踏の方は、よし運針法を覺えて、其を嫁入道具として持參した所が、家庭の實用と相距る遠ければ、結局無用長物視されて納戸の隅に押込らるゝ事必定なり、故に余は思ふ、かゝる無用の長物を教授し、又た練習したりとて、元錢は身體疲勞の足ブミ損なりと。假令へ文部省の指令する所とはいへ、此類の事總ての學科の上に多し、斟酌を用ゐざるべからず。

▲先頃、麻布の香蘭女學校に於ては、生徒の父母其他を招待して茶話會を催し、兼て同校附屬養老院の爲に慈善市を開きたり、階上階下に陳列したる生徒の製作品中、手藝部の刺繍と本科生の挿花とには來客一同目を留め、上級生の英語唱歌には皆な耳を傾けて感心したり、それより饗應遊戲のバスケットボール、旗送り、ホッケー、瑞典式體操等あり、就中體操は英國婦人の教師なれば、號令は總て英語を用ゆれども、音聲の清朗なる、擧動の活潑なる、姿勢の正しきなど、之を日本の男教師中に求むるとも容易に得がたかるべき良教師よとは、來看者の胸中に一樣に湧き出でたる感念なるが如し、從つて生徒の規律も嚴肅にして、一擧手一動足も活潑敏捷なる、他に多く類を見ざる所なり。

▲此の瑞典式體操といふは、歐米にて專ら行はるゝ女子體操にして、從來の徒手體操の如く手の運動を主とせずして、足の運動をも加へ、あらゆる筋肉の活動

を勉めたれば、變化多くして、見ても面白き體操なり、邦人にては彼の井口あぐり女史之を米國より齎して、女子高等師範に施したるが始にて、今は既に三四の高等女學校にて之を採用しつゝあり。

▲麻布日ヶ窪に二十萬圓の工費をかけて新築したる第三高等女學校は、先頃全部の落成を告げて、開校式を擧げたる事は、既に報ずる所なるが、去月十四日には同校構内に於て第一回運動會を催したり、開校匆々なるにも拘らず、其の成績頗る好く、ダンシングの如き亦た拙からず、取別け、手と手を組み、足と足とを躍らせつゝ、面倒臭き歩き方を以て、アーチを出で來る所は、春の野に胡蝶の群の舞ひ出でたる如くにて、奇麗なり、二十五番の運動競走の内、御手玉競走は紙貼の風船玉を用ゐたるが爲め、フワ／＼然として手に乘らず、提灯競走は本式の弓張を用ゐたるを以て、宛ら火事場に驅付るの形なり、綱引の綱は女子の爲とて故に枝綱を付けたれば、恰も百足虫の這ふが如くなるに、取綴りて曳やと引くまでの勢は凄けれど、女子の力は永持のせざるものとて、直にタヂ／＼となり、勝敗の早く決するは飽氣なし、而も袴は引摺る、襷はゆるむ、何の道女生徒にはふさはしからぬものなり、最後にタワドリールを行ひ、來賓の加入を求めたるに應じて、四人の講習生らしき婦人と、二人の小學教師らしき男子とが之に加はり、小さき生徒と共に歩調を合せて、一進一退、離れつ合ひつ、いと眞面目にものせられたるは、面白かりし。

▲新嘗祭の日、小石川の第二高等女學校にて父兄懇話會なるものを催す由聞えければ、余は往きて其の模樣を觀たり、此の會の趣旨は父兄を招いて學校の方針を告げ、家庭の要求を聞き、併せて生徒の成績を知らしむるにありと、據て、國語、習字、作文、裁縫等の諸科に於ける生徒の成績品を、三室に分つて陳列しあり、先づ圖畫室を看るに寫生畫、記憶畫、及び圖案數十種を陳列し、參考品としては佛國摸樣、古實叢書等を並ぶ、圖案は殊に此校の必要と認むる所にして特別の方法を以て教授しつゝありといへば、その成績亦た好良

にして、意匠圖樣の見るべきもの少からず、現に先頃もセントルイス萬國博覽會に出品を出願したりといふ。又た、習字科の成績は、其の力の揃ふて優れたるを以て、來觀者皆な踵を集めて停視したり、楷、行、細、大、孰れを見るも墨痕淋漓として筆力の雄健なる、男子をして後に瞠着たらしむるものあり、細字の手本は生徒の習い易きやう教師が書き改めて石版刷に附したるものゝ由、其の効果は生徒の成績に顯はれて、一枚二百字の細楷の如き別て美事なり、今の少年男女は概して字が拙く、大字なれば曲りなりにも書き得るなれど、細字となると字體崩潰して醜態百出の狀あり、是れ大字の手本をのみ習ひたるの弊害なり、細字には細字手本の修錬を要す、余は今、此の手本と成績を見るに及んで、此の必要を一層深く悟りぬ。

▲さて、定刻より講堂に於て校長の訓告兼報告演說あり、最後に「發音言語の矯正すべきもの」と題したる摺物を父兄に配布して、家庭の注意を促したり、そは今の江戸子の女學生が慣用する言葉遣の誤りを指摘したるものなれば、一般女子の參考にもならんかとて左に掲出す。

發音言語の矯正すべきもの

○野卑に聞ゆるもの	○是正
なくなッちやッた。	なくなッてしまッた。
なくなッちまう。	なくなッてしまう。
おやーだ。	おー、いやだ。
やだ。やーだ。	いや　だ。
いやよ。いやーよ。	いやですよ。いやだこと。
そーだわ。	そうです。
行くわ。	行きます。

○意義の朦朧なるもの、	○是正
問、あなた、明日(アス)、上野にいッて。(未來)	あなた、明日(アス)、上野に入らッしやいますか。或は、御出になりますか(疑問の意)
答、いッてよ。行くことよ。	まゐります。
問、あなた、明日、上野にいッて。(未來)	あなた明日、上野に御出になりませんか(誘引の意)
答、いッてよ。行くことよ。	まゐりませう。
問、あなた、昨日、上野にいッて。	あなた、昨日、上野にお出でになりましたか。(過去)或は、入らッしやいましたか。
答、いッてよ。	まゐりました。

問、あなた、明朝、そ、いッてゐ。	あなた、明朝、そー、おッしやいますか。(疑問の意、未來)
答、いッて。或は、いッてよ。	まをします。
問、あなた、そー、いッて下すッて。	あなた、そー、おッしやッて下さいますか。(希求、未來)
答、いッてよ。或は、いッて。	まをします。
問、あなた、昨日、そ、いッて。	あなた、昨日、そーおッしやいましたか。(過去、疑問)
答、そー、いッてよ。	まをしました。
問、あなた、昨日、そー、いッて、下すッて。	昨日、そー、おッしやッて下さいましたか。(希求、過去)
答、昨日、そー、いッてよ。	そー、申しました。
○敬語の用法の穏やかならぬもの。	○是正
お習字。	習字
お料理。	料理
殿様がまゐりました。	殿様が入らッしやいました。

二、左の音を取違へて、發音するもの往々あり、固より改むべきものとす。

「イ」を「エ」と誤り	(逸居をエッキョ)
「ヒ」を「シ」と誤り	(何もせずにを何しーずに)
「シ」を「ヒ」と誤り	(閑暇にをヒトナカニ)
「ヅ」を「ぢ」と誤る	(水を　ミヂ)

余輩は何時も此の様に示すが如く、机帳面に正格の詞を用ゐよとは言はず、又た圓轉珠の如く軽妙羽の如き江戸子に向つて、かゝる艱劫なる禮式的言葉を常に話せよとは強いず、然れども長上に對する時改りたる席に出でたる場合には、かくの如く言葉を正さねばならぬといふ丈の、たしなみは必要の事と信ず。



家庭と新聞

印度の風俗（伊東工學博士談 讀賣新聞）

印度に住で居る三億有餘の人民を人種の上から分けると大體が三つになります、第一はアーリアン種第二はドアビデアン種第三はモンゴール種さて其風俗もまた到る處で違ふ、それを一々御話しする時間もないが、カルカッタ孟買間で見る處の一般の人民はアーリアン種で其骨相は丈け高くして往々六尺に達し、皮膚の色は紫を帶びた褐色です、眼甚しく凹み、鼻高くして細く、四肢瘦せて細く、脚には脹脛がない足は平たく大にして時々一尺位の足を見ます、女も脂肪が無いので男と少しも異なつた處がない、只だ乳が非常に大きいのと、腰の部が廣い丈けの相違です、彼等の服裝は、男は頭を長い布で巻て帽の代りとし、身には幅三尺計り長二丈もある布二枚を上下に纏ふのが正式です、即ち彼等は裁縫を用ゐない、截り放しの布を一種の形式に纏ふ丈けです、次にこの布を腰に纏ふて、その端を頭へかぶせる、女はまた鼻、耳、腕、足に金屬の裝飾具をつけて居ります、足は一般に跣足ですが、中流以上は、一種の靴を用ゐます、印度大紳士と云ふ樣な男が正服をつけて眞黒な毛脛を露はして居る樣子は決して美しくはありません、孟買附近へ來ると女子が男子と同じ樣な犢鼻褌をして居るのが不思議です、食は御承知の通り手握みで食ふのです。一枚の盆の上に米飯を盛り、それに汁やら菜をかきまぜてあぐらをかきながら右の手で握んで食ふのです、左の手は決して使はないのです、要するに食物の幼稚なことは驚くべき程で、肉は羊の外一切食はず、多くは野菜を常食して居ります、印度の大紳士が胡座をかいて前に直徑一尺餘りの金の盃を置き身を屈めつゝ、五本の指を黄い汁に染めつゝ、握み食ひして、さて食い終るとその席で手を洗ひ口をそゝぎ痰を吐いて散々に席を汚す有樣實に太古の野蠻の風が見へる樣です、印度で女子を待遇する有樣は多少支那に似て居る。夫

人は一切社交上に出さないで家の奥に秘藏して置くのです、外出のときは駕に乘て四方を密閉する、或は布を頭からスッポリと被て人に顔を見せない様にして居る、印度の貴婦人を見ることは中々六ヶ敷いのです、夫から印度では女は十歳位で婚嫁する風習がある、併し夫れは許嫁であつて夫が自分の家に引き取て養ふまでゞす、印度人でも女は十四五男は十七八以上にならなければ眞の夫婦にはなりません、妻の夫に仕へることは非常に誠實で、往々夫に殉死するものがある、無論離婚と云ふことはないさうです、

お伽話とその時代

（女子教育談話會巖谷小波氏）

日本でも、昔行はれて居たお伽話のうちには、西洋のに似た處が隨分あつた。お伽草子の方には、幾らか西洋風の面影も見られる。ものぐさ太郎は、公卿の落し種で、信州に行つて、或る公卿に奉公して、其處のお姫様の婿様になるといふのですが、こんなのは、今日我國に行はれてをるお伽話には見られない。つまり、お伽草子のは、愛とか人情とかいふことが加はつてをる、桃太郎以下は大方脱俗とでもいはうか少しも戀愛などはいつてゐません。

西洋のお伽話には、大底戀愛といふ様な意味がはいつてゐます。しかしこれは時代の所爲である。日本の文學でも、昔のものは極端な戀愛、しかもそれを甚だ露骨に顯してある。竹取、伊勢物語を、今日の言文に書かへたならば、大變なものとなりませう。西洋では今日でも、男女の關係につゐては、甚だ自由な國風でありますから、お伽話に戀愛めゐたことが少々介まつてゐても何とも思はない。

彼の有名なブリームの作に、國王のお姫様が、毬を泉へ落してないてゐると蛙が浮んできていふにはお姫様の婿にして下さるならひろつて上げるといふ、お姫様はたゞ拾つてほしさに前後の考もなく約束をして拾つて貰つた。處が蛙がのそ／＼陸へやつてきて約束を履行しようといふ、お姫様は、いやでたまらないのをや

ひなく姉になることにした。すると、其蛙が、豈圖らんや立派な王樣となつた。それから姉もよろこんで一生幸福にくらした。日本でもしこんな話を敎へたならばさぞをかしく感ずるでせう。

日本では繼子いじめの話がよくある、有名な松山鏡は美談として語られてゐます。西洋でもこの繼母が繼子をいじめる話は隨分あります。

一體、この種の話は、お伽話として甚だよくない。なせなれば、假に繼母と繼子との中がよかつたとしても繼子いじめの話をきかせた爲に、小供は何だか繼母が恐ろしい樣に思つて疑ひはじめ、學校のお行儀の底でもぬけてはゐないかと、叩いて見るといふ樣な妙な想像が這入つて來る、隨つて繼母も氣が惡くなる。又、かねて仲の惡い繼母子であつたならば、小兒も親もひがんで、それこそ大變なことになる。よし眞の母子の間でも、その話でよい感化を受けないのであります。

で、この種の話は全然止た方がよいと思ひます。昔の人は單純であつたからそれでもよかつたかもしれんが、今の樣に人が神經質に傾いてゐる時代には、極く惡い感化を與へます。これらは餘程斟酌せねばなりません

さて、廿世紀に用ゐるお伽話は、どんなのがよいかそれは、在來のものでもよし新に作つてもよし、又輸入してもよい。要はたゞ話し方にある、我が國民の短所は、島國的で世界的でない、神經質でこせ〳〵してゐて大な考に乏しいこと、保守的で消極的である事等であります。第二の國民養成の家庭に於て、お伽話を用ゐるとならばよろしくこの缺點に陷らぬ樣に、世界的、積極的の思想を養はせるに適當なる話でなくてはなりません。

（下略）

兒童と蠻風（女子新聞三宅雪嶺氏）

獨逸皇帝は色々の事で評判になつて居る人であるが、其の皇太子の育て方についても亦話がある、自分はもとボン大學で修業したので、皇太子も亦同大學に修業させてある。皇太子が大學に這入つてをる間は、物事が極く簡便で僅に一人の下婢がついてゐる、總ての事

が普通の學生と違つて居らぬ、此の頃皇帝が其の學校を觀に往つた時も、皇后と自分と二人連れで往つてをる、さう云ふ有樣で、皇太子も他の人と何も違はず、他の人も之に遠慮會釋はせぬことになつてをる、獨逸大學の習慣として、學生は多く或るクラブに屬してをる、クラブは色々あつて、惡ひのもよいのもある、懶け者の集會も勉强家の集合もある、皇太子も亦或るクラブに這入らうとしたが、そこでは例に因てビヤを四杯飲まねばならぬ、處が飲む事ができぬ、其を飲まずに這入らうとしても許されぬ、或日父の帝の處へ往き其の話をして、どうか特別にビヤを飲まずに這入る樣に取計らひを願はうと云つたら、父の帝はそれはいかん、是非飲まねばならぬ、おれも元は飲むことはできなかつたが、强いて勉强して飲んだ、先づこゝで飲んで見よと、ビヤを取り寄せて飲ませた、どうしても飲むことはできん、半分ほど飲むと嘔き相になる、それでは仕方がないからせめて一杯だけ飲め、それで特別に許すことゝしようと云ふ事になつた、そはたゞ一つの話で其の實否の如何は姑く措いて、兎角かういふことはあり勝である。

葡萄酒飲用法 （報知新聞記者[illegible]次郎氏）

葡萄酒は滋養に富むものなりとの智識は邦人間に普及し居れるも其飲用法及び保存法等を知らざる爲め折角之れを飲用し乍ら啻に滋養に効なきのみならず却つて後害を貽すがごとき事あるは遺憾なりされば此際葡萄酒の飲用法及び保存法を紹介せん只坊間鬻ぐ處の葡萄酒なるものは所謂混成酒にして純正の葡萄酒と認め得ざるものなれば措いて問はず

佛國に於ける葡萄酒の飲料は盛んなるものにて何處の料理店も葡萄酒を添えての料理代を定め居り街路に徘徊ふ乞食の如きもパンを食ふときは必らず葡萄酒を飲み居るを見る而して其の種類は非常の多數にして甘味の料理を食ふ時には何種の葡萄酒、辛味の料理を食ふ時は何種の葡萄酒と配合な定められ立派なる宴會には客の卓上に酒杯を幾個も列べボーイは其時の料理に適

する葡萄酒を注ぎ飲るなり食卓用として通常飲用せらるゝは半瓶（二合入）一本五十サンチーム（我が廿錢）位の物にて上等となれば二フラン（我が八十錢）以上とし其上は際限なく高價のものあり大概水に延ばして飲用するを常とす

葡萄酒は醸造時期の古きを貴び孰れも地下の穴庫に貯藏せられ瓶は口を上にせずして横に臥させ置くなり料理の時には其煤まみれの瓶を横にしたるまゝ籠に容れて静かに卓上に運び客も瓶を横にせしまゝ静かに酒杯に注ぎて飲むを例とす何となれば庫中より出すとき又は注ぐとき瓶を竪にすれば瓶中の葡萄酒振盪し折角凝結物の瓶底に沈澱して上部の透明になり居るを攪拌せらるればなり是れ此透明の部分を飲むが爲にて年所を經る程香味を帯び來るを以て貴ばるゝも此香味を味ふは殆んど我が茶の味を賞鑑するが如きものなれば素人にては一寸分らぬ處なり（下略）

家庭の牧畜（　）

山羊は性質甚だ強壯にして寒熱を厭ふことなく且甚だ柔順なる動物として飼育せらるゝが其飼育には廣漠の牧場或は野生の草木を與へ乾草の如きに至るまでも喜んで之を食し唯産後にのみ少量の穀物を與ふれば能く肥滿するものなり此動物は繁殖甚だ速かにして兒の胎内に在るは五箇月なるが上に一度に數頭を分娩するを以て一箇年に牝山羊一頭の産する所は五六頭を下らず其乳質は水分八一、四二九脂肪四、二五〇蛋白質三、二四の乾酪素四、六一五乳糖五、五五九灰分〇、八〇七なれば最も人體の滋養に適し且牛乳の如く凝結核質を含有せざるを以て頗る安全なり又山羊の肉は牛肉と鷄肉の間に位し角は漁具等を製し得るが故に一本二三圓の價格を有し毛皮も亦一枚一二圓の價あり歐米にては婦人小兒等の愛翫に實用を兼ねたる家畜として盛んに飼育するは世人の知る處なるべし去れば我國の家庭に於ても山羊を飼育し毎朝其乳汁を搾取したらんには新鮮なる乳を飲用せらるゝに止まらず其面白味により自ら身體の運動を獲る等利益ありて害なかるべきなり。





才媛詞藻

（天）　落葉　　山梨　川上光子

猥の落葉か上を行く見えて
西の端山に三日月白し

荒涼凄愴の状、人をして悽然たらしむるものあり。

（地）　磯千鳥　　横濱　齋藤あい子

月影は黒木の御所に小夜更けて
隠岐の荒磯千鳥啼くなり

遠島荒宮の景、偲仰千古の情あり。

（人）　磯千鳥　　宮城　渡邊しげ子

都なる背子おもはひて衣縫ふを
夜寒なればや磯千鳥啼く

眞に是れ思婦の情、杜甫が「巳近苦寒月。況經長別心。寧辭擣衣倦。一寄塞垣深。」の詩意あり。「夜寒なればや」に想到する處、約々情思の眞なるを見る。（飛香塚　仔杯）

秀逸



落葉　　京都　三の宮露子

戦捷の紀念碑高く峙ちて
櫻か岡に散る木の葉かな

一面に散るを惜まぬ日本武士を嘆美するの意あり。一面に一将功成て万骨枯るゝを傷悲するの情あり。櫻ケ岡木の葉等の文字用ひ得て妙。

磯千鳥　　伊豆　古美ゆり子

破船の帆柱斜め月細く
落ちなんとして千鳥啼くなり

風波過ぎ去て後の夜色、沈々として物凄きこと限りなし。沈鬱なる筆力、能く斯の晴瀾の状を描けり。

落葉　　群馬　黒岩米子

恨み長く秋の風吹く五丈原
破碑さびしく木の葉亂るゝ

興亡千古の感あり。

磯千鳥　備中　大西茂子

敵守る甲板に立つ曇り夜を
左舷かすめて磯千鳥啼く

敵を望んで壯士甲板に立てば、一聲高く磯千鳥の鳴聲あり。壯絶の景躍如すべし。「左舷」の字、「曇り夜」の語、下し得て奇妙。

磯千鳥　東京　芳女

すさまじき海嘯の夜の闇を
礒にさびしく千鳥啼くなり

悽愴轉々切なるを覺ゆ。

雪中行軍　伊勢　河原なでし子

雪の荒野吹雪の高嶺踏みさくみ
益荒猛雄のをたけびするも

何等の雄壯ぞ。何等の壯觀ぞ。

雪行軍中　河内　大矢たね子

進み行く本隊見えず輜重見えず
喇叭の聲も吹雪に消えぬ

悲壯壯絶、雪中行軍の眞言外に躍如たり。

落葉　堺市　戸倉信子

錦着ていさぎよく散る木々の葉は
大和猛雄の姿なるらん

何ぞ其言の壯しき。

落葉　竹州　うた子

掃くも惜し掃かねば惡しと紅葉の
散り庭に立ち迷ふ哉

詩人の家庭は此くの如くなるべし。

磯千鳥　秋田　佐藤ちよの子

千鳥鳴く聲さやかにていそ崎の
波の穗白く夜は明けにけり

景趣如畫。

雪中行軍　岡山　横山きよ子

斥候する兵二騎三騎急ぎけり
降る白雪に見え隱れつゝ

眞に是れ壯絶の景、人をして肉躍るの感あらしむ。

磯千鳥　河内　竹内敬子

風をいたみ碎けて浪もこゆるぎの
荒磯千鳥月に啼くなり

詞句、景趣と、共に清暢。

落葉　札幌　白ゆき

昨日まで高嶺に見えしもみぢ葉の
錦を今日は踏み渡るかな

歌中に教訓あり。

落葉　備中　大西政代子

さ庭べの木立にあみし蜘蛛のゐに

落葉積りて夕風ぞ吹く
寫景の最も妙なるもの歟。

落葉　河内　櫻井[illegible]子

みだれ散る紅葉を浴ひて忍ぶかな
君と奏でし花吹雪の曲
幽韻にして情あり。

磯千鳥　石見　宮内登美子

釣船は磯邊に入りて二つ三つ
出たる星に千鳥啼くなり
[illegible]実至る所、暮色既に蒼然。

磯千鳥　明石　みどり

磯邊の寄しき眺めを寫しなば
筆添てよと千鳥飛ぶらむ
詩人自然に入るゝの所、何等の雅致ぞ。明石の産にして始めて此の趣あるを得べき歟。

落葉　[illegible]　外河花子

社の邊のいてふの大木落葉して
梢に寒き片破の月
秋夜寒月の寒見るが如し。

磯千鳥　丹波　かきつばた

小舟一つ行く荒磯に月落ちて
波の穂白く千鳥啼くなり

落葉　熊本　千代子

紅葉せる庭の櫻も一葉散り
二葉こぼれて秋暮んとす
寂として明暗の[illegible]。「散り」と云ひ「こぼれて」と云ふ、用字苟もせず。

磯千鳥　長門　飯田ふじ子

あじろもる船歌遠く月は落ちて
磯の干潟に千鳥鳴くなり
妙。

野中行軍　甲斐　安藤文子

武士が猛き心のながめかな
万里の曠野只六つの花
豪壮。

落葉　京都　岡辻清子

なにとなくたゞなにとなく悲しけれ
木の葉散り來る夕暮の窓
「何となく」に疊語すに「只何となく」の語を以てして、秋懐無き[illegible]と言ふ可し。

落葉　伊勢　岸田ちゑ子

時とふ鳥の羽風も無きものを
何にこぼるゝ木の葉なるらむ
着想凡ならず。

落葉

熊本　安田文子

栞に摘みて今日をいく日とよむ指に
折り添はりても散る紅葉かな

題言草に添ふ。

佳調

落葉、霧中行軍、磯千鳥　上野　矢島さと子

人の秋もなくこそありけれ落葉ばの昨日は錦今日は腐ひぢ
●和歌山　米田時子

五つ六つ小枝に残るしぶ柿の数顕めるまで落葉しにけり
●茨城　菊地みれ子

波寄する音だにあらで磯千鳥啼かぬ夜半こそ寂しかりけれ
●東京　なばな

いさましき喇叭の響遠くなりて吹雪に暮るゝ八甲田の山
●伊賀　服部かつ子

君待つとこほるばかりの月の夜ん磯邊に立てば千鳥啼くなり
●備中　吉田重子

霧の中を粛々しく進む兵士の心は如何に寒しからまじ
●京都　三の宮富子

砲鼓の鍵の調に揃ふ聲を勵ましあへず行きし千草はも
●神戸　濱まき

荒磯の音の絶間に啼く千鳥あまの少女の夢や覚しぞ
●神奈川　佐久間芳子

佳作

錆びたる木に取り創つかけて落葉浮べり風寒き夕
●島根　岸田濃子

須磨の浦曲病に惱む夜もすがら枕に近く千鳥鳴くなり
●東京　渡邊しき子

小夜更けて風にさはふ波の音も鳴く音もこほる磯千鳥かな
●越後　峰子

矢をおひし荒鷲の血の羽ぶるひにいかれるがごと散る紅葉かな
●下總　春野花子

見かへれば落葉散しく大原や木立乙女の霜踏みて行く
●大阪　島君代

じさ　のおもひにこもる夜半の窓うつは落葉かあはれ御兆か
●長野　山本こまつ

蜘蛛の巣にかゝれる落葉ゆらく見えて主なき窓に日は斜也
●越後　濱田仲子

訪ふ人も絶えてあらしのまつの戸を音づれ顔に散る木の葉哉
●神戸　富田登乃

風ないたみ友呼びかはす濱千鳥磯山松にゆきかへり鳴く
●東京　小山ふさ子

落武者の亂れ亂るゝ關道の落葉吹飛く山おろしの風
●陸前　村田さく子

かりそめのさすらひながら須磨の浦千鳥鳴く夜は寝られざりけり
●河内　大矢たれ子

ゆく人も絶えし見附のますかたに落散る夜月白くして
●東京　茂木眞子

大佛の膝とりまびしく落葉してはがひに白し冬の夜の月

世に出するすべもかくやと現はれて浪の上行くいそ千鳥かな

● 磐城　作山岐子

山寺の夕暮つぐる鐘冴えて落葉に暮るる黄昏の宿

● 東京　河村花子

遠草のラツメの聲し氷るばかりまた一しきり霰降り出でつ

● 豐前　もと子

明方の落葉の風を身にしめて山路をひとり君が越ゆらむ

● 栃木　哲子

秋のおもはみかささるるとみるばかりけふも木の葉の雨とちるなり

● 名古屋　池上やす子

ちゝほしとせなたなく手をすかしつゝをちはかくなり里の少女子

● 越路　露子

村雨のふるさと寒く秋たけてはゝその杜に木の葉ちりかふ

● 伊勢　本多ひろ子

ますらをがかざす御旗に霜とけてひかりまばゆき滿州の朝

● 横濱　宮木かれ子

あみ笠に紅葉の雨をふるさとのあれてみにしむ夕嵐かな

● 丹波　かきつばた

木の葉うつ時雨ひまなき峯々もなかば木の葉の散るにそありける

● 大阪　今木菊子

ふきおろす峯の嵐に木立の衰れし小笠に紅葉ちるなり

● 本郷　中村八千子

ひめたちの駅とゝのへて進行く旗竿葉はかまに霜ふりかゝる

● 冰水　山本いさむ

● 大阪　細川しづ子

陸奥の霧もろともにとはに臥すと知らでや[illegible]の聲いさましき

● 仙臺　酒井いき子

大空の翼したわむ西比利亞の吹雪を分くるみ軍の人

● 大阪　井上登美子

片破れの月はたかれにかゞやきて木の葉ちりかふ山もとの里

● 伊勢　大國あや子

落葉吹雪の中につゝまれて駒のいなゝきとほざかりゆく

● 弘前　平山ちい子

山毛欅落葉朽葉の水をせきとめて苔の音さむき深山みやしろ

● 北海　志賀由利

霜氷の秋夫にといひし我夫のにひおくつきに紅葉ちりしく

● 越後　しげ子

名古の浦波のしらべもたえまかりふけゆく月に千鳥なくなり

● 下野　やなぎ子

秋を追ひて往にし山寺の閼伽井の水に落葉ぞちたり

● 深川　遠藤鳳子

一葉だに庭の水情は寒き[illegible]いつゝより散る紅葉ならん

● 信濃　結城中子

舟はけて露すし夜鴉の聲も[illegible]浦風寒く千鳥なくなり

● 山梨　柳田[illegible]子

霜むけり秋なふかて御またまを進む剛氏のひゞき勇まし

● 越後　水澤みか子

堰くなかこみてさへし橋はかだし遠草ラッパがすでにきこゆ

● 東京　多賀そみ子

うらよする浪のまに〳〵をちこちの友よびかはす磯千鳥かな

[illegible]　第拾六回

● 大和　和田亞花
訪ふ人もなくて幾年苔むせる墳墓のみ寒し落葉の中に

● 駿河　林　すゞ子
千鳥聲遠ざかり月さへて浦の苫屋の火影かすかなり

● 足尾　いさを
夜寒のゆめひやゝかに大磯と云ふ驛宿ねて千鳥鳴くなり

◎ 神奈川　川井わさ子
霜なく雲も閉ねて木がらしゝ落葉ふき捲く夜半ぞ淋しき

● 大阪　菅發千代
枝したゞかはさし締めたる窓の面にまた散りかゝる枯葉ひとひら

● 岡山　ゆき子
落葉のとうものすごき森やみの落葉いくとせこゝに經にけむ

● 姫路　三俣千代子
かた山のかげにかくろゝ無絃庵落葉積りてとう人もなし

● 香川　前田きみ子
しば負ひていそくをとめの袖のあたりちるは時雨の紅葉なるらん

● 伊豫　岡村とめ
み遍路や獨りへん路の杖とめて空見るかほに木の葉ちるなり

● 本所　戸田榮子
しほ風に聲しくだけてあら磯の玉ちるなみに千鳥なくなり

● 大阪　近藤元子
すまの浦松風さそうあらいそに波まをはけて千鳥なくなり

● 大阪　たま子
朝霜にね堪へで落ちし木々の葉のもとの心をわけて尋れむ

● 神戸　中村榮子
ふきすさぶあらしやいかにさむからむ木葉まひたつ武藏野の原

○ 四日市　瀧子
たづねくる人とてもなき我が庵にあはれ降ふるは落葉なりけり

● 鈴木　一榮
朝霧めはてしには西にかげろふをのせたる桐の一葉落ちきぬ

● 近江　市川わさ子
月冴けて夕汐寒き枯蘆の根邊つたひに千鳥鳴くなり

◉ 伊勢　石井綠子
枯蘆の深き入江の捨小舟落葉淋しく秋の日暮れぬ

● 大和　森田はる
はら〳〵ともみぢこぼれて病む母の枕邊さむく秋暮れんとす

◎ 大分　大槻みれ子
井戸ばたで手あらひする乙女子のやぶれし袖に落葉一つ二つ

◉ 三重　船井糸子
身にあまる籠に落葉をかき入れてあはれ何のせなひこゝく〳〵

● 周防　石田ちま子
荒わしの血潮にそみし西比利亞の雪ふみわけて進むみ軍

◉ 長野　かつら
明日の空いかにかあらんつかの間にさあらぬ庭に落葉しきたる

◎ 京都　圓麗子
垣こしに隣のはゝそ落葉して我やの庭は錦なりけり

● 新潟　內藤野枝
なしかなく外山のあらし音さえて木の葉ちりくる秋の山里

● 名古屋　松原わかな
松原に乙女子三人今日もまた落葉かくなり小山田の里

○

みぞれふる[illegible]の[illegible]に千鳥むれよる夕まぐれかな　甲斐　小林まつよ

● [illegible]の兵士大刀ふる大刀の上に小蝶の如く木の葉まひ落つ　下總　石[illegible]つれ女

● なき友の[illegible]かと[illegible]けはさにはあらで窓うつ夜半の落葉なりけり　高知　西尾はる子

● [illegible]かため深[illegible]ふみわけますらをのいづ[illegible]行くらんそのいさましさ　小石川　杉浦よし子

● 木々の葉を拾ひあつめてうなひらのまゝごとすなり神の[illegible]　伊勢　森本しづ女

● おしひ[illegible]山よりおろす風さきにまづ散るものは木の葉なりけり　名古屋　白[illegible]女

● [illegible]わたり月ふけて[illegible]へに[illegible]なり　名古屋　森井ますみ

● [illegible]にゐて[illegible]のどかに[illegible]なり　[illegible]　[illegible]はつ

● [illegible]にひよけ千鳥の[illegible]くそさく　[illegible]　[illegible]子

● 小[illegible]にまゝごとすなるおとめ子のむしろの上に[illegible]一ひら　[illegible]　[illegible]なか子

● [illegible]とはさ[illegible]千鳥のひかはす[illegible]のあはれさはしるやしらすや　上[illegible]　[illegible]木とみ

● かきよせて[illegible]に知らさん我が[illegible]の[illegible]山あたり[illegible]かす〳〵　佐賀　[illegible]子

● [illegible]　[illegible]本　松岡[illegible]子

● [illegible]ねて黄金を[illegible]かす白波に松風近く千鳥なくなり　淡路　[illegible]女史

● あれはてゝ軒も傾くふる寺の鐘の音さびて紅葉ちるなり　[illegible]町　上山貞子

● 庭はきへぬさきりはこめぬ松くらきいそは千鳥の聲にあけきぬ　[illegible]山　高[illegible]久子

● 井戸にたに[illegible]ときなれは三つ五つ桶にちりこむ秋のもみち葉　上[illegible]　[illegible]せん子

● [illegible]小[illegible]のときふく風に月もれ　木の葉うつなり小川近の秋　[illegible]　秋田ゆき子

● しぐれにもまさりて[illegible]くひゞくゝる山路のこのはふるおとかな　山[illegible]　[illegible]川みつ

● 水はかれせは[illegible]れて[illegible]かげのいはは淋しき[illegible]の葉の散る　[illegible]中　芳[illegible]女史

● 乙女子が乙女[illegible]ふなる[illegible]風に[illegible]の[illegible]かへるかも　高田　小林[illegible]子

● ものゝふの君に仕へぬ[illegible]ならでわたらましやは[illegible]の花みたな　[illegible]江　[illegible]井やす子

● 十[illegible]の[illegible]に[illegible]ねて[illegible]まし三千の[illegible]　[illegible]　高[illegible]ふさ

● [illegible]して[illegible]を[illegible]じますら夫の[illegible]をみせまとす可愛の[illegible]に　三重　吉村[illegible]

● この夜半に[illegible]のゆめや[illegible]らし[illegible]の浜[illegible]に千鳥しばなく　島根　杉本[illegible]子

● 月更けて[illegible]への松に[illegible]おきた[illegible]に千鳥鳴くなり

● 大和 庵月

きよらかに掃木目たゝし此の庭に落つる木葉の三つ四つふたつ

● 神田 遠野殘花

降つもる深雪の中しふみ路へて勇みて進む外道の山

◎ 赤坂 石川孝子

風あらくすなとるふねはかへりきてあみほす磯にちどりなくなり

● 高知 岡村清子

流れくる落葉がさのけ淀む橋にまだも散りくる峯のおろしに

● 伊勢 金子さだ

雪被る嶺のふゝきに吹き出たす清き瀬川の音もかすかなり

● 和歌山 山村みゆき子

風すさみ人影だにしたからさき浪音たかく千鳥むれとぶ

● 四谷 新井いち子

田鹿木の野邊わたる雲は消ぬれども消ぬうらみの人なしぞおもふ

● 鹿兒島 佐田梅子

入船のけはひも見えず岩かげに君まつ小夜を千鳥なきよる

● 羽前 金子鶴子

山里ののきばのもみぢ散りはてゝ梢あらはに木がらしぞふく

● 尾張 小磯やす子

岸をうつ波に交げて鳴く聲のあはれにきこゆ冬の曉

● 熊本 佐藤しん子

霜やみる濱は昔のみ遊び來て磯のあたりに千鳥なくなり

● 和歌山 稲貝千代子

かれ谷に名もなき鳥の一つ飛びて夕日にうつる落葉音あり

● 津 中川ますゑ子

君を送り歸る濱路に千鳥鳴きて戀しき船は遥かすみゆく

● 岡山 岡柳子

假御所の灯おぼろ夜はふけて御枕近く磯千鳥なく

● 和歌山 西口峯子

入相の鐘のねきこゑて風あれてしくれまじりか木の葉ちりかふ

● 福岡 とも子

海人の子が夜がりのともしたへはてゝ浦風さむく千鳥なくなり

● 本所 酒井鈴

み山路に落つる木の葉に埋もれて月影さむくましらなくなり

● 上總 齋うめ子

夕まくれ牧の子かひく牛の背に落葉するなり山のふもと路

● 神戸 岩松まさ子

夕霧に淡路島山影きえて舞子の濱に千鳥なくなり

● 名古屋 鈴木鶴子

ふる雪にうきねの床やはかならむ磯の千鳥のたへずよびかな

● 白川滝子

小岡は牛木の葉に埋もれて家根の頂からすなく見ゆ

● 福井 宮川秀子

掃目のまた新らしき庭の面に二ひら三ひら散る紅葉かな

● 名古屋 靜子

島かげにこひしき妹はかけ子せて沖風さむく千鳥なくなり

● 博多 磯野いち

たび百里行きなやみたる老僧の袈裟をふき〳〵ものおもひする

● 秋田 黑粹子

入相の鐘つく音もろともに二ひら三ひら紅葉こぼるゝ

● 鳥取 さやか

朝[illegible]こゑ近くなりにけり賀露の浦にに潮やみつらん

● 大阪 天野元子

裏山の松の梢に月ならてあけかたさむく千鳥なくなり

● 熊本 つや子

きらはとてかへり行きます君か肩をかすめて落ちぬ桐のひとつ葉

● 山城 古川米子

漁火の三つ四つみへて月さむくいそに千鳥のこゑかすかなり

● 和歌山 佐々木昌子

おぼろ夜に君をゝくりてたゝすめは波のかなたに千鳥なくかな

● 長門 杉山きくの子

しらかたの浦わの千鳥聲ふ[illegible]て松原つゝみ月かたむきぬ

● 伊豫 高橋茂子

夕されはおきふく風に磯ちかくあら波わびて千鳥なくなり

● 越後 今井眞先野子

君にくだた しろ波に千鳥なく聲いとさむし舷のあら磯

● 長門 梅田[illegible]子

京な[illegible]賑の森にぬる媼子の夢をやぶりて散る落葉かな

● 八王子 中村鶴子

身[illegible]て世に無き此を思ふかな散りおろ落葉見ろにつけても

● 津 寺井照子

新たか阿部の水くむ肩の上につたの紅葉のほろ〳〵と散る

● 麹町 辻野廉子

靈験き佛師が家に[illegible]には老ひて庭もせに散る梢のもみぢ葉

● 長門 今藤鉄子

雲つゞき松原越しに見かへれは暮れゆく沖に千鳥なくなり

● 近江 弘岡ふく子

小ゆるぎの磯の松原風絶えて夜半に千鳥の聲更けわたる

● 陸中 淨森綾子

今朝ははや深雪紅見ゆるなりし深山のもみぢ散りやはてけん

● 京都 武志君子

[illegible]汽車も消にゆく夕まぐれレールの上に紅葉散るなり

● 高知 桑田石子

秋ふけて新なくつきに母を懸ふりボンにかゝる落葉一ひら

● 新潟 石黒つね子

小歇みなき吹雪にいさみ兵士の進むは國の進みなりけれ

● 靜岡 吉川文子

山路[illegible]きて歸れる牛の背に木の葉散敷く秋の夕暮

● 芝 川井喜久子

庭鳥の餌あさるとかき散らす杉戸の落葉に霜けふるなり

● 廣島 森田齡子

山寺の讀經をはりし夕まぐれ落葉を誘ふ風一陣

● 三重 佐藤りき子

立田川うきつたゝよふ木の葉船秋のにしきやのせてゆくらん

● 日向 紀藤いく子

更け行きぬ磯の松風音絶えて波に千鳥の聲かすかなり

● 丹波 三崎恭子

雲のうちに火影ににへるあまかやののきつたひしてなく千鳥かな

● 攀の浦 耕稻

松風の音も靜けき夕まくれ波打ちきわに千とり鳴くなり

小夜更けていたやの軒に音するはもらてしくるゝ木の葉なりけり

● 越後 小原みさほ

おさなごが紅葉の如き手をひろげいそのとまやの千鳥をぞよぶ

● 下野 曾鶴子

木がらしに山の紅葉落ちはてゝ袖が丹より外に音なし

● 上總 遠藤かよ子

降り積る雪のかや原ものとせす進む御國のはた勇ましき

● 駿河 篠塚武子

軒の端に紅葉かつ散る影見えて寢ざめ靜かに雨の音きく

● 麹町 宮井清子

阿漕浦ありし昔をことゝへは松風寒く千鳥なくなり

● 津 中川ます子

いまはとて力なく〱おくつきを清めしあとに落葉三つ四つ

● 小石川 天野よし子

こゝろしてはき清めたる庭の面へまたももみぢの二ッ三ッ四ッ、

● 上州 星野しげ

をしめども散りにし花のつれなさにさくらのもみぢまたならひけり

● 千葉 石橋しげ

鋤を手に田道たどれる小女子の小かさの上に紅葉ちるかな

● 岡山 野崎もと子

吹きすさぶ嵐に散りつかつまひつゆく〱へ定めぬ紅葉百ひら

● 伊勢 小林俊子

すみ川に紅染めて流れ來る一葉や秋の初たよりかな

● 下總 増田なみ子

● 叙阪 大谷津みれ子

靜かなるみのりのこゑのきこえきて紅葉かつちる山里のいほ

● 岩代 齋藤苫子

そびえたつ木立に月の影さえて落葉ふきまく冬の夜嵐

● 大阪 大道若菜

おくつきに水たむけんとくみあげしつるべにかゝるつたのこぼれ葉

● 信濃 竹鼻はる子

ゆく船は島にかくれて三日月のくらき波まに千鳥なくなり

● 仙臺 菅とみ子

ひまもあらず空かき曇り風ぞそふ八甲田山の雲の夕ぐれ

● 松村まつ子

とふ人もなき山里のあはれさは入相の鐘に紅葉ちりしく

● 下總 島梅子

おちばかく母にならひてうなひ子が吾が手に似たるもみぢ葉拾ふ

● 芝 薄なばな

岩こゆるあら磯なみの音ふけてさむき夜すがら千どりなくなり

● 兵庫 柳田のぶ子

月さゆる須磨の松原風絶へてなみにさむけくなく千鳥かな

● 三河 柳本國生

男濱女濱よせてはかへすたそがれの磯の千鳥の露にかくらふ

● 横濱 米原學

しら濱のよせてはかへすあら磯に友よびかはしなく千どりかな

● 荏原 深堀千代子

夕月のさし出の磯に聲細く友よびかはす千鳥床しも

● 長崎 中尾盛子

荒磯の松の松風音たへて濱路を遠く千鳥なくなり

● 越後　藤井いと子

吹きしなる木枯寒く身にしみて木の葉散りしく森の下道

● 長野　くに子

山かげは落葉積りてふみ分る音も身にしむ夕まぐれかな

● 播磨　中野臣子

吹おろす峯の嵐にさそはれて木の葉ちりしくみ山への里

● 伊勢　ゆき子

おくつきのあたりしつかに日はくれて夕べさびしく紅葉ちるなり

● 鈴木　響子

あら磯のなみに千鳥の聲みだれ遠山かげに眞帆かた帆見ゆ

● 前橋　小林ゆき

夜もふけぬ訪ひ來る人もなかるべき門の戸うつは桐の落葉か

● 前橋　木下むつ子

あやうくもかけたる橋に木こる女のふるもみぢばに渡りかねたり

● 茨城　高野德子

あまさがる鄙が伏屋は落葉にて門邊もわかぬ秋のくれかな

● 豐前　戸村ゆき子

吹雪吹く北のあらしは寒くとも君のためにはそびらなむかし

● 伊賀　佐々木政子

[illegible]の梢はまたもあらはれてうらさびしくも木の葉ちるなり

● 芝　正木みどり

硯の上に一葉こぼれしきりの葉にうすくしるしぬ君こふる歌

● 伊勢　岡島[illegible]子

宵の鐘ならしゝ音の影きれて鐘樓の跡に木の葉散りしく

● 越後　淡野てる子

むなくふみゆく事の惜しき枝紅葉ちりしく森の下道

● 桂原　河原よし子

網代守る漁士が篝火も影やせて嵐山近く千鳥鳴くなり

● 美作　太田加女乃

さなきだに淋しきものをさよ中にこゑもたえ〴〵磯千鳥なく

● 静岡　芹澤しん

なか〳〵になれてはまたる小夜の友とくなきれかし磯の千鳥よ

● 米澤　宮本源子

峯つゞき色こそさはへ秋風になりてはおなじ落葉ならまし

● 越後　土田その

ふる雪を散りしく花とふみわけてきくも勇まし進軍の歌

● 東京　阪西敏代

くすしさりて心細くも病む母をみとる窓邊に木の葉おちくる

● 大阪　秋水

君います御船の煙消え果てゝそむ岸に千鳥啼くなり

● 甲斐　波木井常子

降りつもる雪にすがたは見えれども進軍ラツパの高く聞ゆる

● 四日市　久米蘭子

くれてゆく空もあはれに入相の鐘のひゞきにちる木の葉哉

● 前橋　入澤芳子

かげさえて月もこぼれる荒磯に友よびかはし鳴千鳥かな

● 藤井その子

北のはていざや行くべき秋は來ぬふりつむ雪のよしふかくとも

● 東京　木下花水

須磨の浦磯打つ波の音も絶えて千鳥なくらん淡路島山

● 三原　ゆり子
淡路島沖のいさり火影きえて時雨るゝ空に千鳥なくなり

● 豊前　秋子
椎ひろひをなのこるれしひとりごのならべたしもとに落葉かゝれる

● 上野　寺内りう子
軒びさし葉もはげしくうつ音のあめと聞きしは落葉なるらん

● 岡山　北村幸子
さらさらと木々のもみぢ葉かつちりて入日さびしき山の下道

● 靜岡　黒岩ふみ子
何時のまに我が住む里も秋や深し梢の落葉道紅うせり

● 佐賀　大塚のぶ
さらぬだに夕さびしき入逢の鐘のひゞきにちる木の葉かな

● 越後　吉田梅子
今宵時雨にやならん風さえていその千鳥の鳴くこゑ悲し

● 下野　木村つゆ子
神さびし鎮守の森にふくろふの羽ばたき寒く落葉するなり

● 日暮里　畑江忍江
ゆめかそも添ひし夜は明そめて離れ小島に磯千鳥なく

● 小石川　山家梅子
小夜ふけて文なつかしみよみ居れば友やこひしと磯千鳥なく

● 下谷　菅原信子
靑山に骨を落せし人を忍べば霧の将軍何のものかは

● 水戸　菅原菊子
千早振る神の御手洗水かれて風もなき日を落葉してけり

● 越後　加藤やす子
むれ松に[illegible]千鳥なくなり

● 岡山　浅沼定子
小ゆるぎの磯の松風ひとたえて新月おほく千鳥なくなり

● 仝　長谷川芳子
志賀の浦比良のねおろし吹きおちて磯間の千鳥鳴きあかすらん

● 弘前　三宅秀子
夜嵐にみだれたる木の葉はの見えて月影高し山のへの里

● 水戸　樋口はる子
苔むせる谷の古みち風死して夕さびしく木の葉ちるなり

● 神田　高須ふさ子
落葉かく賤が少女の面やせてまとふつゞれに風ふきしく

● 名古屋　鈴木龍子
霜夜寒なは身にしむる磯のべに間なく千鳥のよびかはす聲

● 大和　森本かめの子
磯千鳥群のあなたに聲かすか水上くらく月かたむきぬ

● 大阪　今木紫子
新月は島松山に影おちて鳴く磯千鳥聲かすかなり

● 伊豆　向井ひで
風にさはふ落葉の音にゆめさめておのが年よむ冬のよはかな

● 大塚　山中しゅん子
今宵また君行きましゝ船路をばなつかしみ来れば磯千鳥なく

● 長門　原田米子
くらゝはの磯まの千鳥なきたちぬ富士のねおろし今か吹くらむ

● 相模　柳子
吹きあれて磯の千鳥のさわぐ夜を君やいづらにゆめむすぶらん

● 小石川　島村照子

鐘楼に落葉散り散る朝あらし鐘つく僧の影さむげなり

● しづ子

秋の川の鹿の聲する森かげに落葉かくのうたふ節歟

● 周防　瀧龍子

紅葉をば眺めんとこそちかひしが葉に先たちてちりし君はや

● 長野　藤岡ふさ子

フツケツトおきてやすらふ袖の上に一葉ちり來るわけのもみぢは

● 香川　高橋うか子

あしびきの山邊をたどる旅人の道まよふまで散る木の葉かな

● 神戸　山下とめ

風しづむ月を待しと磯に立ちて歎限ひ居れば千鳥なくなり

● 豊前　飯田欽

待つ夜半の簾窓か淋さに妻戸を叩く庭の落葉に

● 石見　伊り子

くさむらに給ふで迦らす乙女子の白き御顔に落葉一ひら

● 讃岐　丸山匡子

蓬萠の漁船掛りして月まてばしばし風さむく千鳥なくなり

● 三重　森脇まさ子

波の音しづかに暮れて沙干狩歸るゆふべをなく濱千鳥

● 駿河　林すゞ子

夕まぐれ濱路を猶く踏むれば千鳥三ッ四ッ友よびかわす

● 備後　修谷柏銀子

小笹原わかれにつらき月の夜に留のたゞまた濱千鳥なく

● 京都　桜井澄江

嵐山しぐるゝ松の木の間よりふるはさくらの紅葉なるらん

● 遠江　池谷京子

さびしこにある荒磯のはまの波風にふきよせられて千鳥なくなり

● 丹後　岩田ゆき子

つかれたるこまいなゝいて[illegible]すぎぬ野甲峠の野のほそみち

● 神奈川　中島きみ子

夕されば磯うつ波に月かげら千々にくだけて千鳥なくなり

● 岡山　野崎もと子

吹きよするふゞき[illegible]あらん矢玉の中もすゝむますらを

● 熊本　野尻房子

秋を深み友も訪ふやと聞けば風に落葉の戸を叩くなり

● 米澤　本間孫久子

夕風にちるや紅葉のから錦路にこそふ袖人あはれ

● 熊本　志水新

さそひ行風にしぐるゝもみぢばやくもらぬ月のくまとなりつゝ

● 津　藤井初子

山家の秋の夕暮れ來て見れば鐘のひゞきに木の葉散るなり

● 神戸　尾崎しのよ

ゆく秋のあはれを見せて西ひがし風のまにまに散る木の葉かな

● 上總　深田誠子

吹く風に庭の紅葉散り果てゝ軒端にのこる木枯の聲

● 大坂　俊子

秋ふけて深山をとへば色々の落ばぞ道にふりつもりつゝ

● 山梨　清泉

行く秋をひとり眺めて袖の上に落つる木の葉のこゑをきくかな

● 京都　野島菊江
遠くなりとほくなるなのいそちどり聲がなしとやこゑたてゝなく

● 滋賀　山元高眞子
ふれ馴れてかへらぬ人をおもひつゝたゝずむ磯に夕千鳥なく

● 神戸　山下とめ
戀しきラッパのひゞきこたましして十里の山路聲にうもれぬ

● 越後　小野わか子
沖に釣る夫のかへりを待わびてそむ磯に千鳥なくなり

● 日本橋　行形よし
野の霜を踏みわけゆけば背戸の肩に照るらむ冬枯れの月

● 京都　西澤まつ子
ふきおろす神つ汐風寒き夜に磯山がくれ千鳥なくなり

● 長野　塚田ちう子
有明の月の光は消ゆ果てゝ遠ちになりゆく磯千鳥かな

● 下野　冬子
ねざめては聲ひくゞだゝおいそのなみに聲もみだれて千どりなくなり

● 日本橋　河村かれ
常に行し道も此頃荒ばしてふみもまよはむ瀨戸の棚橋

● 信州　小林つね子
枕べの竹窓あやしくゆらめきてみとりする夜を木の葉散るなり

● 芝　鈴木花子
夢まくらむすびもあへぬ故里のゆめの末とふ磯ちどりかな

● 芝　吉田松枝
みだれちるもみぢの一葉また一葉つなぎとめたるさゝがにの糸

● 京都　高原春子
はらはらとゆらぐすだれのひまもりてのきは靜かに紅葉ちりくる

● 神奈川　川井あさ子
いわし網ひくあま聲も靜まりて千鳥なくなり磯の夕ぐれ

● 麹町　淺井清子
若松に夕日うすれて山寺の塗欄あたり木の葉散るなり

● 對馬　古川辰子
波に入る日を見送りて岸に立つ乙女の袖にもみぢ散りかゝる

● 泉　石川むつ子
讀みかけし文の栞を手にしつゝ歩む磯路に千鳥鳴なり

● 河内　ゆづり葉
しら露をふみわけすゝむものゝふの雄々しき姿みるもたのもし

● 信濃　安孫子絃
衰れし窓につらき運命を泣く夜半を桐一葉落ちて思ふ事多し

● 甲斐　矢崎富佐野
夕栄ゆ空を望みて何思ふやつれし額に桐一葉ちる

● 滋賀　森島小冬子
音高く岩うつ波のあら磯に立居定めず千鳥なくなり

● 前橋　深瀨靜子
明ぼらけ磯の松原汐見ぬて汐風寒く千鳥なくなり

● 伊賀　菊山かれ
冬枯の我山里に昨日今日時雨と見へて木の葉散るなり

● 靜岡　佐藤かつ子
枯蘆に風打ちそよぐ磯際に千鳥友よぶ冬の夕ぐれ

● 本郷　中野信子
くにのため君のためぞと武士はゆきふみわけてなほ進むなり

● 東京　渡邊すみ子
ねざことはみなれざをへでけふも赤紅葉ふみゆく朝まうでかな

● 沼津　芹澤しげ
あかつきのかねの音とほくきそひきて庭のおちばにさわぐやま風

● 山口　渡邊千代子
風すさび霰みだれてお寺のくちし軒端にいてふ葉の散る

● 常陸　馬場とし子
背の君と昔を忍ぶかきぐれ波白ふして磯千鳥なく

をさな子

新潟　石黒つね子

幼子の、
雲のやさ手開く時、
花の香ゝふ家、
胡蝶の夢も濃からん。
幼子の、
やさしき調歌ふ時、
枝とまる琴の糸、
ミューズの神も舞ひまさん。
幼子の、
かゞやく瞳に笑める時、
ほころび初むる庭の梅、
み空の月も微笑まん。
幼子の、
ちさきまなざし上ぐる時、
光り愛でたく新星の、
またゝく影や宿るらん。
幼子の、
母のかひなに眠る時、
軒端に匂ふ花静は、
睡眠の國に落つるらん。
げに幼子の、
心は長閑、濁りなく、
平和をのせて流れゆく、
春の川波それのごと。

和歌兼題

山家新年　（〆切十二月十日）
鶴
若菜　（披露三十七年一月一日）

▲家庭日記
▲寫生文　（〆切十二月十日）
▲雜文　（披露一月一日）

▲庖厨座右銘　（募集）

投書規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ケ所を紙撚に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛せらるべし▲投書原稿一切返却せず

おもかげ

土佐　小西雅子

みなの涙こそ知れ。ことしの春別れまつりし折とつゆもたがはぬやさしい御おもかげ、御につれたまへるみ子は行きへそのまゝに笑みつゝおはしたゝせ給ひて今はあゆまるゝばかりにぞなれる。おなつかしさにつとばせよればみの君はにこやかに無事なりしかとのみ言葉、あまりのうれしさにいひいでむ言の葉も知らず。師の君はなほもやさしうは、笑みたまひつゝいひはふはセントルイスの博覧会にとゆくなり、おん身も共にゆかずやとの給ふにいかでかゐなみまいらすべき。み手にすがりてうれしさに足もたゆみがち、とある外国めきにし町をたどるかと思へばふと師の君のみ姿は消ねつ、み子のかげも共に。つゞいて町のかげもやう〳〵おぼろになりゆくに、こはいかにと眼みはればまだ見なれし家の目に入り次に障子、文机、まてはともし火のかげなど皆おぼはあるやうなるにこそわりなき住みなれしわが部屋のうちなるものを。あゝ夢なりしか、あはれなつかしの夢や。こひしの御おもかげや。あゝ夢としらばいつまでもいつまでもさめずあらむを。くやしいかなればかくは早うさめけむ。さるにても師の君のみ姿よ。いるゝかもお別れの折とかはらせ給はざりし。いふばかりなき慈愛の光にかゞやけるその眼きおんひとみ、やさしのお附ことしの春さながらに……。あはれ太平洋のかなた、とつ国の空のいかになつかしうもながめらるゝかな。師の君はいかにこの冬をばむかへましけむ。み子は君は日々すこやかに生ひたちまして今はとつ国のみ詞さへあいらしうきこえ給ふとかや。星の如きお瞳、ばら色のお頬佐の習のお唇など日毎に母君がお笑みのたねとやなるらむ。

あゝ忘れもせじ、惜しき袂をわかちまゐらせしその時……あはれその時……心なくもいで行く船のうへよりこなた見かへり給ひしその御顔……とゞめむとすれどあふれくる涙のたゞに流れて……ながきお別れかと思へば……。あゝげに身もきえなむばかりなりし。霜の朔月の夕べたゞ思ひいでらるゝはその時の悲しきお別れなるよ。……あゝ……。しのびまつれば美しかりし唱歌のみこゑ、ピヤノはしるみ手、その他のありし事ども小さき胸に泉の如くわき出でゝあまりのおなつかしさにたゞかれてそと忍び泣きにぞ泣きしる 外面には木がらしの風あれにあれて板戸うつ音いや高し。あはれこの風よ。師の君のみもとにも吹くらむか。

鈍筆の筆、乱筆の文字。

妹の誕生日に

岡山　佐藤しら菊

お城山の紅葉はまぞい一色になつたでしよふネー、丁度きーちやんの秋衣の模様のよーにし

あゝ、なつかしいよ姉ちやんは、

今年の今頃だッたネー、白谷の紅葉を見に行ッたのは、あの火の様な赤い〳〵紅葉の岡から白絹の様な滝が勢よく落ちて居て其の上にひらりひらりと赤い葉や黄ろい葉が散ッて居たのは絵に書く事も出来ない、ほんとにいー景色だッた、あの時ひろッて来て本の間に入れて置いた紅葉を見る

と今でも思ひ出して目の前にちらつく様にみられるよ、ほんとにおもしろかッたネ　あの時は。
きーちやん此の菊にネー、私が暇な時に遣ッたのですがきーちやんの誕生をお祝ひする爲めに差しあげます、
思ひ出すと丁度十年の昔、私がきーちやん位の時の今日お母さんが、あなたをお生みなさつた其朝お祖母さんが大きな美しい白菊を持つておいでなさッて生れた子がこんなになる様にと申されたので其儘あなたの名にして菊子と名づけたのですよ、だから其の事をよく忘れない様に、胸に一點の曇もなく眞白であッて、そして氣高くッて美しく何とも云へぬ人を喜ばす香がして操正しく霜にもまけず能く身を守ッて千年の齡をたもつ様に片時も忘れてはなりませぬよ、此後女學校に通ふ様になッても此の花を机の上に置いて朝は此の花に習ひ夕は此の花をかへり見て行ひ正しくお年の寄ッて居るお父さんお母さんに御心配を懸けぬ様にきッとお心懸けなさいよ、唯美しいと思ふて見て居るとちりが積ッてこごれますから絶えず氣をつけてます／＼清くして頂戴よ。
大寒に寒くなりますからよく氣をつけていつもながらお父さんお母さんを大切にして下さい

評、面白き書き方なり、筆に眞情あり、文字に教訓あり、

月

越後　松永しげ

はら／＼と散りくる木の葉の音さわがしくやれ障子に月の光さやかにさしたるいと淸し

曉方起きて本を持ちつまなびやに通ひ行く頃なほ梢に色さめてのこれる月いとあはれなるよ一日まなびやに在りて文まなびさてかへらんとき里までの道遠ければ途中にしてはや月の東に赤う見ゑたるは實にうれし　されど友もなくおのれ一人なるにはやかたわれ月の西の山の端さしていりゆくいと心細し

まんまるに昇りくる月かげをほころび初めし尾花の梢の間より眺めやりたるいはん方なき風情なり

昨日も今日もふりしきり一室にのみこもりゐたらん今宵はしゐしてながめやれば四日月松の梢に見えたる限りなくうれし

千鳥の音を耳にしつ白浪に足を洗はせ汐風に心の塵をはらはせける夕べ月の細くかりいでたるまたなをかし　旅して道もしらず畑だになきを月の赤うてらして芝の露きらめくうれしさもうれし

三ケ月望月まではかけゆく月冬に秋に春夏かけてげにながめよきはこの月にこそあれ

遠げに磯の波のひゞきを耳になし目には傾く月をながめ旅勞せし足をはげまして親しらずの險を越えし折りの其の月かげ今も目には殘れるよ

木の葉に降り降りくる霰のいたく身をきるばかりの風にふかれ安塚に行く途中峠にて寒月を眺めし其の光今も目にある心地す

夕風吹き渡りてそよぐ田の面の稲青くなく蛙の聲さへあはれなる折河口湖畔に月を眺め眼間に聳ゆる富士の高根を仰ぎし月夜今も忘られ

すむに浮ぶ

夜はふけぬるに行きかふ人繁く電車馬車のきしり合ふ名古屋の大路御は風に靡く其の木かげそゞろあるきける夜 月赤くしておのが玉もいつしか

浮かれ出てゝのみし氷の味さへ舌をまらさる思ひするよ

行く川の流れも清く其水の音のおもしろき三條の大橋ふく風涼しき夕べこゝにして月をながめやりけるげによろし

慕く城の高松に昇る月南端山に傾く月いく年か眺めしを今は鶴彦山の東西川の清き流れにうつしてぞ見る 其月もし紅葉すればやながく〜てりまさるよ

婦女の文を學びて、婦女以外の若殿あり、巧者の文といふべし

雨の一日

名古屋　落葉子

しめやかに降り暮らす雨、あゝ雨の一日……

地上に散れる落葉の、一葉毎に朽ちゆくは、實に人の世のはかなさも思ひ知られて、哀とも哀なりや。日頃我が無二の友なる軒の柳も、今日は憎淋しくなりて、辛くも止れるは哀や親みし友に後れて、其まゝに朽ち果んとにや、色あせて、昔の青葉の俤だになきぞ悲しき。我が過ぐる春此の寄宿舎に入りてより、朝に夕に、文よむ折も、物かく時も、窓の戸越しに見ぬ折とてもなき此の柳、あはれ、其様のはかなげになりけるよ。

常はさやかに見ゆる名古屋城の金鯱も、今日は遠く〜、雨も朧げに見やらるゝも、はかなしや。さなきだに、哀胸にしむ初冬の空を雨に暮す此の一日、あゝ〜……

夜のふけゆくまゝに、廣き寄宿舎の中、寂として聲なく、眠れるが如き天地、しと〜と降る雨の音のみ、寂寞を破りて物凄し。眠られぬまゝに廊下の火の障子に、かすかにうつる影を見つめつゝ、思ひ起す已往の感、はた將來の想、はては身の責任、さても我は今々、あゝ……

戀しきは都の空なるかな、數年月我を教へ導き給ひし師の君たちのましますなり。なつかしきは古里なるかな、いつくしみ育て給ひし母君のおはすなるを。重なる山へだてし此の地、親族知己とては一人もなき、此の名古屋に、抑も我に何の縁ありて來れるにか。

人はいふ、世に思ふ事なきは君なるべし、活潑なる擧動、愉快らしき様子、實に羨しと、あゝ、我に情を缺けるか、人を缺けるか、されど〜こは我が胸にあらず、否、我が胸にあらず。

あゝ〜我は〜、雨の一日を軒の柳に泣き暮らすものにあらず、かすけき火影に涙そゝぐ我にもあらず、將來の務、責任、我も一個の日本國民なるものを。

食堂室の柱時計は、今しも十一時を報じぬ、折しも、雨を犯して大路を通る「甘酒　……」の一聲、また一聲。

古里離れし寄宿舍の冬を叙して、思ふ事なき身の物思ひを語る、筆力雄健、其の趣を得たり。

電話

宇都宮　島村かつ子

よびいだす鈴のおといとあざやかにきこゆれば、やをらよりて聞けば、あはれわがなつかしの友なりけり、千里をへだてゝもゐながらにしてかたみに物語らるゝはまことにあやしき器械のはたらきなり、月のけしきをこなたよりいひやれば、花のたよりをかなたよりいひおこす、其間幾重の山をへだて、いくすぢの河をひかへたれども、かたらふ言の葉はたゞひとつむしろにあるにことならず、實にひらけゆく世のたまものなめり、雲井はるかにへだつるも、此うつはだにあれば、こひしき折々は物いひかはしてなぐさむることもえつべし、されば此うつはのいできたれるより、人々のゝぞみも足らひ、雲井ゆく雁のつばさをうらやみ、水をくゞる魚の鱗なきをなげきしうらみもあとなくなりぬ、まこと世のたよりをうらやみしむかしの人に見せまほしきは此たよりなりけり。

評、言ひ足らぬ節はあれども、小品としては上乘の出來

山家の冬

岡山　小山松枝

紅葉たづれし道は落葉に埋れて今は訪ふ人もなくさくり〱と霜柱をふみしだきつゝ山賤が薪背負ひて來る山路をたどるあはれさ淋しさを常なる山里もこの頃は一層身にしみぬ

庭の木立もにしきぬぎ捨てゝ松のみどりのほこりがにたてるにすさまじく鳴るゝ木枯の音を友として何處も同じ淋しき冬の日脚の峰に明け峰にくれ行くはことに短きやうにおぼゆ 晝の間はたゞ彼よこれよと家事にをはるゝのみ夜に入りてやう〱机に向ひ好める書どもひもとくはこよなき樂になん日數ふれば寒さも一しほにて火桶のみなつかしきものに覺ゆるもをかし かけひの音もたえはてゝみ雪白う積りたる朝のけはひぞ日もはるにたゞ白かれの世界なりや日頃は心にもかけざりし冬枯の枝庭の石などもめづらかに見なされて いとうれしきにやがてさしのぼる旭のかげきら〱とかゞやきたるいもいはれずうつくし雀の群をあさるにや 倒れ伏したる竹村あたり飛びかふもあはれに見ゆはるかなる山の間に一もとの煙の上れるは秋のゆたけきしめしかほにかゝる處にも大君の惠のかゝりて住む人のあらなむとなつかしく 二三人樵夫路をたどりゆくはかりうどなるべし犬も從へり門にはわらべの雪だるまつくらんとさわぎあふ聲けなげなりあはれこの景を同じ心なる友とながめたらんにはいかに樂しくむゆくわざなるべしなどひとりごちつゝ日も暮れぬ

かくてわびしき冬も殘り少なうなりぬればやがてまたこむ春の樂しさなど心にゑがきつゝつれ〲しのびて過すはかなさよ

巧なるかき方なれど、文に切目といふものなければ、明晰を欠きて、頗る讀みづらし。

異郷の兄を思ふ

京都 新 愛子

消燈の鐘のひゞき渡りしも、早や一時間の前とはなりぬ。四隣人定まり、萬籟寂として聲なし。唯、何れの室の天井に、何を求めてか、走せまはる鼠の足音のみ、闃に寂寞を衝て耳に入る。宵より照り渡りし十五夜の月は、茲こゝに見はれ、そが皎々たる光は、硝子の窓よりさし入りて、室内を隈もなく照らせり。眞白に月光を浴びて、眠り給ふ隣の友禅子の君の、俄にあゝとさけびたまふは、如何なる夢に襲はれ給ひてか。懐かしき慕はしき三年の昔別れにし異郷の兄を思ひて、身は夜具の上に横はりつゝも、つゆまどろまざりしわれ、眼は愈々冴え渡り、思は益々胸にわだかまりぬ。かくてあらむよりは、清き月に清きこの思をうそぶかばやと、立ちて窓押しひらき、みそらを仰ぎぬ。一輪の明月は、高く天心に冲し、低く草葉に置く、白露に映じて實にや、二千里が外までも。白霜かと怪しまるばかり。夜の静は暗黙の幕を、何れに今宵はとりかくしゝ。あゝこの玲瓏玉の如き月、あゝこの透明鏡の如き月、なつかしき兄君が學びの窓を照らすも、同じこの月ならん。あゝ我が慕へる兄君や如何にながめたまふ、仲麿が三笠の月のそれならでも、思ひは同じ加茂河邊の月を忍びたまふか。はたまた未來の成功を夢みつゝ揚々[illegible]宵の樂園に逍遙し給ふか。なゝなつかしの兄君、慕はしの兄上、尋ねてまなざし閉ぜば、髣髴としてあらはるゝそが温乎たるおもかげ、あゝこの影の本になつかしの兄上ならましかば。

あゝこの清く美はしき月、嘗て一家團欒の窓の下、語りつ笑ひつながめたりしも、此月なりしを。月は永劫かはらねど人は流轉きはまりなき世の習ひ今はかくても又兄上が學成り業終げたまひて後樂しく語りながめむも此月ならんに。あゝそはまた幾年の後ならむか、あゝなつかしの兄君、したはしの兄上。如何におはす。

月はいよ／＼冴え渡り、夜はます／＼更け行きぬ。萬籟寂たり。想緒は綿々として胸中にわだかまり、解かむに由なし。あゝさてもこの天地のしづけさよ。入らむか。忍びず。

あゝ我が心は、今何處にかある。知らず。なつかしきしたわしき兄君がみもとにやかける。

聲しも寂寞を破つてひゞき渡る夜警のそれ。早やも一時となりぬるか。

　　ふくろまでひとりいもねずありしかな
　　　兄や如何にとこの月をみて

心はいとに疲れども、いつまでかくてあらむ様もなく、心ならずも床に入りぬ。

文情具し

小猫の記

名古屋　多　歌　子

けふ午少し過ぐる頃はひおのれがぞいろの君達と共々ひるげの膳に打ち向ひける折しも外の方にていとらうたげなる小猫の聲きこゆるよと思ふ間に大きる手拭程なる顔を窓の板戸の敷居際にあらはしぬ 皆々のあなやとさけびし聲に驚きけむつと出で去りぬる事のいとほしく又も來なむとゐだのめにたゆすそなた轉うちましりつゝ物たうべ居たり。父君ののたまはくあはれのものよ飼主の嘸やもとめわび居ぬめるを隣のにはあらぬか後に行きて尋ねよかしさるにてもかくさまよひては物こそほしからめとて御自ら皿とり持ちて立ちいで給ふやゝありてかへらせ給ひ又物まゐらる。かくて食事も果てにければ己れ先づ馳せいでゝこゝにやあらんかしこにかとそこらくまなくもとめたるに不圖建て物こぼちて納めつる小屋のひまに小くつぶらなる目してうづくまれるを見ぬ失せにし玉の再び己が手に入りしにも似て嬉しさいふべうもあらず。やがて小石など拾ひてこゝとよびつれば何處にかあらむいとおそろしげなる聲きこゆあはれ親の共に居たりけむをよしなきそぶる事してけりとくやみつゝ奥の方そとさしのぞけばやゝ大なる眼きらめかして見まもり居たり。そも此親猫はしも主なき野猫にていつも我が家の垣の上窓の下に眠りはした女等がうち捨つる物なみて過し居たりしに此頃は露見ゐずなどいひあへりしもむべなるかなかゝる處にひそみて小猫をおほし立て居つるなる。親の眼ずみたるに子もいとよく似て背はなべて黒くこと所は白し 清原のおもとの見給ひなばいか斗りかめで給ひなむにと思ふもいとをかし。さてもかくて日數へなば此小きものもやがて又親のごとむるもしき野猫となりて人の惡むらんあはれさよ大御代の御惠みはいかに重き罪人といへどそが子はゆるし給ふときくを親はよし物うちかすむともなどて小猫に罪やはある今少し養ひ得させていづ方へも遣はしなむ盗賊の汚名はおはせじと父君の老の御むの目に物あはれみのいやまさりゆきて夕げの膳をもわかう給ひぬ。小屋のひまもる風寒み親のかたへにうちふすらむ小猫ゆめ〳〵な大人の御なさけ忘れやりぞ。

面白し

厳島参詣

周防　中谷鳥羽子

朝とく起きいで、空打ち詠むれば嬉しや塵ばかりの雲だになく晴れ渡りたるに。急ぎ妹のすわ子ゆり起こして仕度とゝのへ停車場に赴き見れば待合の一隅に腰掛け居給ふは日頃親しき末子の君なりき。「御身はいづこへ」と尋ねれば「妾は廣島へ」との玉ふさらばよきみちづれなりと互に喜び語り合ふ程に。汽車はゴーゴーと走り來りぬ。乘客の人々は我先にと列車に打乘りぬ。幸にして客車は廣く、思ひのまゝに腰打ち下し、何くれとなく樂しく打語ろふ折しも我等の前に座したる年頃四十前後と思しき田舍の内儀らしく。身には二子縞の袷に同じ柄の羽織を引かけたるが。先頃よりしきりにこく〳〵と首うなだれて睡眠に餘念なかりしがふと目をさまし。無遠慮に大あくびして 豌豆の開帳したるもいとおかしく

窓押ひらき後に見返せば遠山の木々の梢になりかけたる紅葉の錦は立田姫がむづくしの袖も思ひやられて中々に風情ある眺めなり。見るみる數分行く山水の景色に我を忘れてありし程いつしか四つの驛を過ぎて今や宮島驛にとはつきぬ。米子の君に惜しき別れを告げ、馬車より下りて直ちに汽船に乗り海上わづか十五分にて渡す嚴島にと着しぬ。それよりまづ明神に參詣なし御使の鹿や馬に麩など買ひあたへつ、海に出でたる廻廊をめぐり、大元神社に詣す。紅葉公園を妹と共に彼方此方を散歩なし人氣すくなき山の中腹に憩ひ、走る汽船や行く舟など自然の風景を眼下に見下しつゝ用意のわりご開きし時の愉快さは何にか譬ふべき。暫く此處に時を移し、後名にし負ふ千疊敷に詣す、赤き毛と稱なこゝかしこに數ならべ茶店の女のかしましく「名物の力餅おあがりやッせ」と進むるまゝさらばと先づ大佛に拜禮なし、名物の力餅ものす、夫より又紅葉の公園に遊ぶ。清き谷川のせゝらぎはちよろちよろとさながら音樂を奏する如く。清き岩間の流れにそひて掛茶屋の數多散在したるに燃ゆるが如き紅葉の日光に輝きたる狀得も云はれず、其美くしき風景の其まゝに手にとるばかり水面に寫ろふ樣又一入の風情を增して眺め見あかぬ景色なるに、人なれたる鹿の二三匹いと心地よげに紅葉の下に休ろふ狀恰も一幅の活畫に似たり。餘りの美くしき眺に忍はず畫中の人となりぬ。折しも暮れ早き秋の日のはや山の端に傾き初めしに驚き妹を促して歸途に向ひぬ。

嚴島參詣

中谷すわ子

すわ子〳〵と母上のみ室に、惜しき夢破られ、今ぞ床をはなれ天氣如何にと眺むれば空には一點の雲だになき嬉しさ、姉上と共に廿日市驛へ停車場に驅けば、早ぼーぼーと汽車は來りぬ、直ちに打乘り何くれとなく語りつゝ窓押開らき見渡せば。微笑む如き野菊の背に黃に色どれる田畝の見る〳〵過り行く窓外の景色に餘念なく眺め居たる間にいつしか宮島驛に着しぬ。夫より汽船に乘らんとて行けば意外に乘客多くして甚だ困難せり。女學校の一ひれ或は洋服姿の紳士もあり或は又中學生の二三人。其後ろにつゞきて、連れの女に奧樣と呼ばるゝ二十二三の女、身には紋縮緬の着物に縫紋の長羽織を大ゆきまげに引掛け、金の指環を兩手にはめ何かきや〳〵と語ふは何となく卑しく見ゆ定めし藝者上りの奧樣にやあらん、つんとすまし顏にて押分け先に行かれしが人ごみにて押したをされしいと氣の毒なりし、やう〳〵にして汽船に乘れば僅か十五分にて嚴島へ着しぬ、先づ神社に參詣なし御使の鹿や馬よく人になれて、おじぎなす其愛らしさに麩などあたへつゝ廻廊をめぐり大元神社に詣で下の公園には大きなる瀧あり噴水一丈餘も吹き上げ金魚のユサユサと泳ぐ樣いと愛らし、彼方此方と步みし果て。小高き山によぢ登りぬ。島廻りは小さき汽船舟の浪ふて如く走るもあり或は「ボート」の同じ方角に走るは我先にやあらん、又彼方を見下せば谷間より清き水のシヨビシヨビと流れ出で其谷間より木の葉の色し出でたる暇より色づき初めし紅葉の水面に寫ろふ樣さながら水底より紅の花の咲きいでし心地して何とも云はれず、しばし此處に時をうつし後名高き千疊敷に詣す、赤きモトーの客待顏なるに茶店のうばのすがるが如く、大國さんの力餅お上りやせ」と進むるまゝに先づ大佛に拜禮をなし、名物の力餅ものす、それより紅葉の公園に遊ぶ、いづこもおとらぬ美くしき眺めなり。

あまりの美くしき景色に、名所の写真など求め又父上母上の土産物買ひ求めんとどれかこれかと見合すほどにいつしか日は西山に没せんとせしに、急ぎ買ひ物とゝのへ帰路にむかひぬ、

前回二葉を見るに、諸君の文はまゝすたる所あり惜しく。拙者の文はあどなき所ありて面白し、共に筆もよく文もよくものせらる、末樹惜しき閲覧と申すべし。

書寫山に登る

姫路　三俣千代子

過ぎし頃毎月の中頃の事なりき、親戚の中にても、いたく佛教にかたむけし人、數人神戸より態々書寫詣思ひ付きぬと云ひて来りしに、妾もかねて一度は登山を試みたしと思ひ居りし際とて早速案内の人をたのみ其夜は早く打ふして翌日早朝に起き出見ればきのふに変らぬ好天氣なるより急ぎ支度なし具しかるべくと案内の人に伴はれて家を出ぬ、此書寫山は昔時女人の登山を禁じたる山にて白鷺城下を離る事二里あまり有る上に山路は纔十八丁も有る事なれば急がではといふにさらば近道を行かんとて當師團の練兵場内を横に朝露をふみしめ、白鷺城を右に見て、大手前より車門筋を辿り、船場に出で左に折れて野路に出ぬ道は嶮しからねども只一筋の書寫道にして右には男山の森林をながめ左には景福山の紀念碑、景福寺山なども見へたり空は青く晴れ渡り秋氣満ち、日光は黄金色に熟する田の穂に映じ道の両側には今を盛りと秋草のいろいろ乱れ咲ける風情ゆかしくわけて野菊の花しほらしきが妾等の一行を迎へ顔なるも哀らし帰りには是非に手折らん等いひ合ひて行く程にとある一軒の茶屋ある家につき妾等は此所にて草鞋とかへたり少しく足の疲れたるより妾は案内せる人にむかひ未だ頂迄は幾程にやと尋ぬれば然り未だ一里もあらんといふに打驚きぬ是よりは嗚呼妾うたひ足をはげまし行くに松並木ある川端に出たり此の日は恰も日曜日なる上毎月此十八日は観世音菩薩の會日なる由にて美しき衣等持ちし老人あるは若き人の三々五々笑ひ語り来るもありていとにぎわし、やうやうに麓の村に入りて女人堂の前に至り着きぬ女人堂は誰れも知る如く昔時女人は此の所より参詣して帰りしなり堂の前に一軒の茶店あり妾等の一行は此店にて足をやすめ登山にかゝりぬ其の日は殊に登山する人多く中には勇しく馳せ上る学生もあれば紳士令嬢とも思はるゝ人の車夫伴ひて登るもあり或は年たけたる老人の杖にすがりて苦げに登り行くもあれば已に下山する軍人もあり、あるは旅よい旅に草枕重ねし一行の登り行くもありて其模様中々に筆には盡し難しされど皆一様に一丁毎にある丁石をたよりで登るものゝ如し始の二三丁はさして苦しからざりしが追々四丁五丁と登るに秋の漏からぬ日光も道石のけわしきを上る身にはいとあつく覚へ背の汗は襦衣を通じ額には汗の玉流れ呼吸せわしく動悸のみはげしく胸くるしきが上に足さへいたむに堪へ兼て暫は十丁程の路傍に腰し休みたりまだ中にも至らぬにかく打疲りてはと妾儀にかなしくなりぬ暫時にして少し元に復したれば勇を鼓してあへぎあへぎ十町目の立石迄至りしに、此所には、休堂ありて、妾の只一人茶をたきて、わりしに、妾は苦しきまゝ物もいはず走り入りて茶を請ひ只一口に呑み干し少しく胸もしづまりて、と見れば先に行きし人の此所に休み居て妾等の様を見てゐるにいと恥かしく思ひたり後より来

りし一行も着きぬ見れば此人々と妾等と同じく鼻息のみ荒く恰かも手おへる獅子のうなれる如く其中には双の肌打ぬぎて來るなどいとおかし。殘りの八丁にさして苦しからずといふに打よろこびまたも登山につきたり曲り／＼し山路を上りつ下りつして行程に、十六丁迄至り着きぬげにこの邊に到り易く頰を吹く風の心持よきに肌の汗もかわき人心地になり始めてあたりの景色目につきたり流石深山の事なれば落葉は道に敷き滿ちて裾を渡る風の外はさへて音もなく其淋しきはたとものなし されど其中に「はぜ」等の紅葉せが松のみどりと共を交へ其木のもとには山萩野菊彩らしく咲けるも見ゐて其美しき事いはん方なく木々の間よりは遙に遠き村々の 人家も見ね此方には海の上遙に淡路島ならんと思はる島かげ見ゆる等實に一幅の畫中のものゝ如し、此等を眞に 自然の美とやいふならん。やゝ行程に一ッの門に着きぬ其門の兩傍には二王と我王とおり門を入りては程なく本堂の石段の前に着きたり石段の前には一軒の茶店あるに 妾等はいたく喜びいざ足を休めんと、見れば、先に來し人數多話ち居に、誰なくならば、先づ本堂に行かんと。其石段を登り左に曲りて本堂に至れり、堂はやゝ 古びたれど高壯にしてそゞろに昔時の建築の樣思ひ出されぬ、此堂のまわりの扉は彼の名高き左甚五郞の作なる由、又當山の觀世音に三十三番の札所なる由 なれど佛道を知ぬ我等に只默して拜せしのみ、此堂には諸國より奉納せる數多の額あるを見る此額には皆一樣に文字若しくは繪にて 行者又は巡者を以て筆跡美しく「はる／＼と登れば紀州の山おろし松のひゞきもみのりなるらん」といふ和歌のしたゝめられたり此の和歌は三十三番の詠歌の中にて當山の詠歌なる由妾等の同行者は此所にて「おいづる」とかいふものを取出し僧に頼み「お手判」とかいふものを頂へり兎角して堂を下り茶店に入りて晝食をなしぬ此茶店の後に辨慶の手まり石といふ石二ッ（但し同じ樣なる石なり）あるを見たり足も少し休まりし後此茶店を出でゝ奥の院へと志し又左の山へ上り初めたり、此邊より奥は次第／＼と松杉などの大樹道の兩側におひ茂りて日の影さへ洩さず折／＼小鳥の鳴く音と梢吹く風の木玉にひゞく音より外に聞ゆるもの無く物すごき事言葉なしされど大樹の根下に只一本野菊の亂れて咲けるなどいと「いぢらし」昔時は此山中に百ヶ寺程寺院ありし由なれど今は其影なくたま／＼殘れるものは無住あるは狐狸などの住所となりはて 其なかば崩れし白壁に鬼蔦のかゝれる或は軒端かたむき落葉積りて昔の哀々とせる古堂の樣など見へて思はず心を寒からしむ先に來し人にも逢はゞと思へど 如何にしけん一人にもあはず妾等の一行は心淋しく覺ゐたり此邊の杉は皆幹太く丈高きもののみにて 彼の古へ源の義經の幼時牛若丸と云ひし折り京都鞍馬山にありて夜な／＼太刀使ふ稽を練習せしといふはかゝる處なりしならんと思ひ浮ばれたり、 それより二三の古き堂に詣で奥の院に 着きたり此堂も高壯なれど本堂よりは小さし正面には本尊ありて あはれなる位牌一ッあるを見る其前には數多經机置かれたり本堂の前に「辨慶の机」なりといふ古き机の足とれたるが其足と共に置きあるを見たりまた外に探らば古跡もある由なれど 案內せる人知らずといふより本意なくも下山の途に付たり此折先に茶店にありし人來りて逢ひぬ、げに上りし時に比しては下る道の早さよなど云ひ、笑ひ興じつゝやゝ下り行く程にまだ年若き尼の白衣に墨染の衣着たるが、只一人上り來るに逢ひぬ、妾は何處如何なる 世捨人にやと、いとあはれに思ひ、誰れにもあらで、後ふり向きたり、本堂の前の茶店の傍もいつか過ぎ、ふと立石を見れば、はや殘り何程もあらぬにいさみ、足にまかせて、走り下るに、早くも女人堂の前の茶店に着きたり、此折遙々山を下り來る人影かなたこなたの木間より見ゐたり 此店にて家土產にと松茸、栗、等買求めしばし足を休むる中秋の日の短

むくてに一日もかたむき初めたるに驚き、急ぎ家路に足を出で、麓岳村に来りしに妾は心得るみしためか、はた山を下るおり走り下りし故か足の痛む事甚しく最はや一足も進む事出来ぬ様になりしを引づり〳〵元と来し家路をたどりしにおひ〳〵日は暮かゝり農夫は家路いそがしげに行き烏は「ねぐら」に急ぎ夕風物を揺ふ頃彼方に白き白鼠紙見て其が一歩〳〵と近くなるに 彼に心細しく勇み立ちて行きて市中なる病院に入りたりあまり足の痛みしとむせきしに花折る事も打忘れ病院に来りし時は早や人顔も見へず なりき家につきて後は最はや一歩も引事出来ず「妾の足は恰も棒の如くなれり」とつぶやき「今後は再び斯る所に思ひたゝじ」といひしに皆打笑ひ給ひぬ

願はくは閨秀諸姉よ、此の君の如くおしまめにて、時々かゝる行を企てられんことを。

玉あられを讀みて

大阪　落葉

まちに待つた女學世界の増刊玉あられが發行になりましたので急いで書籍屋へ下女を遣りまして取り寄せました自分がなしたまでを愚痴なく申述へる事といたしますから御紙に觸れる方が御座いましたなら御免下さい、口繪の貴婦人の小集流石は名聲赫々たる貴婦人方ばかり中には恐れ多いお様の御息所もいらせられる所為で御座いませうか何となく尊く拜見いたされました、それから光琳式の扉畫様に結構で御座いましたいくら見ましても見飽きがいたしませんその他皆まらしい物許り、それから最初の目次を見ましたら自分の拙ない小説が記せられて有ますので何だか恥かしい様にも存じまして早速それを繰りひろげました是は何誰でも同じであろうと存じます、私のは何時でも思いついたら直ぐと筆を執つてすら〳〵と書き流しつちまつて清書する時に誤字を直したりする丈けで訂正などちつともいたしませんのですから後に見ますとほんに冷汗が出るやうに御座います「小萩はら」は實に凄婉の想幽妙の筆とでも申ませうか私にいく度讀んだか知れませんそして讀むたびにうら悲しくなり自分が三蓋子その人でゞもあるかの様な感がいたしまして無限の愁にうたれるので御座います、才媛小説では鳴瀬恒子女史の「木がらし」も誠に面白う御座いました愛學女史の「旋線の旋風」は特に感じました、こゝで一言申たいのは、はつきりとは申せませんが池田きん子女史の「木がらし」誠に面白う拜見にいたしましたが何だか一度讀んだ小說の様に思はれます慥か文藝倶樂部と思いますが題も作者も忘れました尤も全文そのまゝでは御座いませんが筋は全く同じです是は藝者卿のは女丈夫で御座いました然しきん子女史にに御存じなくつて偶然に符節いたしましたのならば誠に失敬で御座いました、隨筆欄の、釣床、末秋の日記、農家の秋、みなとり〳〵に結構でした國の花月の夢、風吹隣、婦人演説会評判、さすが名家の御筆執れになるかは御座いませぬ殊に國の花月の夢は面白う御座いました、何しろこの度のは今年中の増刊中で一番趣味の有るやうに存じます

私は何故新體すくないませんかつたのでせうこれ丈け何だか淋しいやうに感じました

新年の女

卅七年一月一日發行

女子教育は全世界交通の要衝たる我が日本現時の問題なり、家庭の改良は總て進歩的なる日本朝下の急務なり、我が女學世界は此の必要に應じて婦か婦人社會智識と啓發に資せんと欲す、創刊以來年を閲すること茲に三年、年所淺しと雖も、主婦の務をなすべき家庭と、將來の覺性を造るべき學窓とに對して多少の貢獻ありしを信ず、新に來る一月より更に誌面に改たを施し、内容を豐富にし、材料を新たにし、以て將來我が女學界の明星たらんことを期す。

▲畫手本　本誌の卷頭に掲ぐる幽艷なる畫帖は繪畫の石版六頁を、三宅花圃、多田親愛の兩先生に分ち、日本畫には見花蹊女史に、西洋畫には三宅克己氏に囑托し、以て雲濱雅能の筆法、山水、草花、禽島に各家獨特の妙技を揮灑すべし。

▲口繪寫眞　書畫手本に次で掲ぐべき寫眞口繪は世界各國の風景、人物、内外の風俗、好尙、社會上の出來事、模範的活家庭の活畫、女學校の内容、生徒の製作品等、新たなる社會の要求に應じ婦人智識の啓發に資すべき材料を網羅す。

▲論說　論說は時代の風潮に伴ひて家庭學校、並に時事の問題を說くを主とし當途專門の大家、斯界の名流に囑托す。

▲家庭　家政の學問をして實際に適應せしむるは本欄の主張にして、家事經濟、家庭衛生、家庭教育、家門の樂事庖厨百事、室内裝飾、其他日常醫藥生活の上に必要なる事項を網羅し、世の主婦をして居家處世の務を完うせしむるを期す。

▲社交　交際社會に聲名ある貴婦人、江湖名流の内助者、特種の技能ある我が巾幗社會の先覺に就てその平生、嗜好生活の概要を紹介し、以て趣味教育の端緒を開く。

女學世界 第四卷第壹號記事要目

記事要目

學世界

來年初刊本誌の豫告

▲談叢 教育社會、醫學社會、藝術社會、其他あらゆる方面の大家を訪問してその談話、口述、筆蹟を筆記し、現代思想の潮流を我が誌上に紹介して以て讀者の智識を啓發し、充實すべし。

▲實務 婦人世に立ちて如何に活動し、如何に精勵し、如何に成功し以て如何に我が一生の天職を全ふし、以て如何に我が人生の義務を完うすべきかに就て、その方法、指針を示さんと欲す。

▲史傳 東西古今に傑出せる賢婦烈女の傳記閲歴を掲ぐるを主とし、又時に英雄豪傑、偉人傑士の事歴を募れ、以て優美なる婦人の特性と剛毅なる兒童の天性を陶冶せんと欲す。

▲科學 専ら學術上の利益を與ふるを主とし、理化、博物の解説を主とし、自然界の現象に就て極めて興味ある部分の說示をなし、以て讀者に科學的智識を與へ、その才能を啓發するの料に供す。

▲文苑 文壇の名家が特に本誌の爲めに材を選み、想を凝へて淡錄されたる作品を掲ぐ、蓋し一面娛樂に供し、一面人情の機微を悟了せしむるにあり。

▲手藝 婦人の習得すべき各種の技藝、意匠圖案、繪畫、彫刻、裁縫、造花等に就く實習手引を掲げ、以て我が婦人に獨自獨立の地歩を作らしむ。

▲衞生顧問 育兒、看護、衞生百般の質疑應答を掲ぐ。

▲家事顧問 衣食住、家事家政家事一切の質疑應答を掲ぐ。

▲學校消息 各女學校の教授意見、成績、教育事項等を紹介す。

▲雜錄 家庭以外社會百般の事項を充し趣味ある筆を以て記し、以て世界の風俗習慣、生活の巨細を知るの料に供し從來家居的風習に馴れたる婦人の智見を開發せしむ。

にくきもの

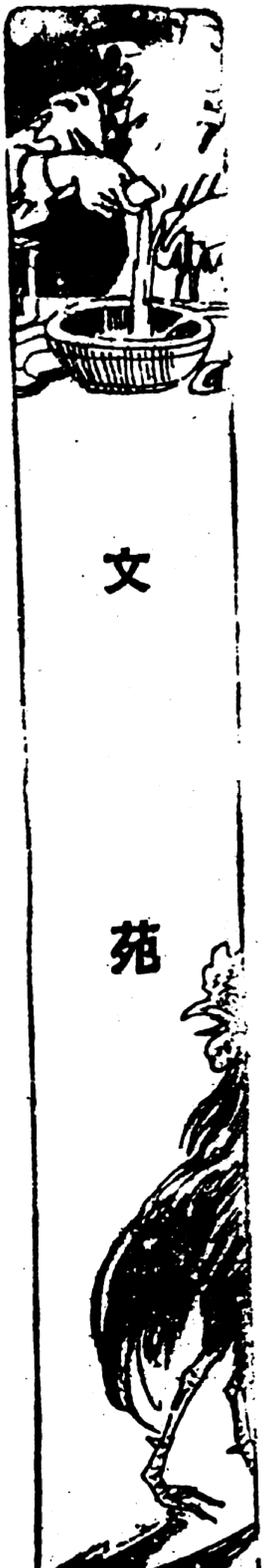
芝區 正木みどり

月いとさやかなる夜、虫のありかたづれむと、しのびて行に、ふと石などにつまつきてあやしうも音たてたるいとにくし。おそとくゆかむとふます處ありて、ますがに刺籠などとゝのへて、ふしどに入るに、明かたちかうなりて、雨のしと〳〵と降り出たる、起出むむかまへも失て、日一日にくゝおぼゆる。この衣夕へまでにぬひおへむと、ひとり心あせる折しも、なか〳〵糸の針の目に通らざる、はた糸のこぢたきまでもつれあひたる、いつれもにくし。わかまつ人ある折勢ある車の音に、こたびこそはと、門のかたうち見やるに、これもまたおひなくゆきすぎたる、その主さへもにくゝおぼゆるものぞ。文などまたるゝ折もまた同し思ひよ、いそぎもの取いてむとするに、いつもある處になきつ、客人あまたある前にていざ筆かなでむと心がまへしつゝある折いかにせしか糸のきれたるいつれ〳〵もにくきわざよ。

嬉しき事

新潟 石黒つね子

○兄妹競ひて貯金に心懸け、父母より受けし切手の許多集ひければ、銀行にと持ち行く折、弟のたまらざるとて泣き出すも可笑し。
○昇校前に生花せんと疾く起きて、庭前の萩や薄或は南天松が枝など取り來つ、好く出來しかなと己れと賞し居るに、父君の起床し玉ひて、おゝ美しと仰せ玉ふ時。
○慕ひながらも用事に隔てられ、疎濶音に過ぎける親友が許へ、たまさかの閑を得て文ども綴り、自らポストに赴く途中。
○女子は國家の中堅なり安ぞ下すべけんやと、諸々の雑誌などに見ゆけるを、讀み行きながらも文明具備の御代を祝し來り、當時の婦人に生ひ至りて胸襟欣然。
○學事の餘暇詩歌などつれ〳〵と案じ居るに、突然思ひ懸けざる奥妙の一節を捻き得たる一刹那。
○父母兄と妾の四人、各席に在りて思ひ〳〵に務め、九時の至れば茶の間に集ひて、拾時に臥戸へ入るの習慣なるに、為す事進まず凛氣頻りに至る夜など、九時の鳴りのいと嬉しく聞こゆ。
○姉君の我家に參り玉ふ折、或は路傍にて不斗出逢ふ際など、愛子の伯母ちやんと呼びつ、他愛もなく笑み縋る時。
○投書したる詩文の掲載に當る雑誌の到着す可き折など發行の翌日より早や取次店に催促し、二度三度も無駄足運ぶ事あり。掲さては嬉しきも嬉しきもあり。
○弟の山雀夕暮近くなりて、喋々と鳴きつ垣根に止まり籠に這入る時の嬉しさ。鳥籠にも這入らず他家の籠にも入らず無事に戻りしかと、いつもの事ながら女の心弱きに、歸り來るまでは何となく氣支はるゝなり。
○幼き妹の衣物など縫ひやるに、之を着けたる儘、嬉然として姉さんの御仕立よと、皆人に見る〳〵見せ行く顔の、罪もなくいと愛でたきに、妾は學びを外にして縫ひやる事さへあり。



霜夜

堀内新泉

(上)

「おい」

呼聲諸共表の格子ががら〳〵開いた。

「はい、只今」

雪のやうな障子を開けて、顔色美しく迎へたのは、二十八九の優しい細君。

格子を締めて、我が家ながらも整然と正しく下駄を揃へて、甲斐絹裏の外套の音ザハリと上にあがつたのに、三十五六の大兵肥滿。

「先づ今日は豫算通りに事が運んだ」

力の入つた聲で云ひ〳〵、まだ新しさうな外套の頭巾をぱいと後に撥ねると、眼の鋭い、苦味走つた、獅子鼻の下膨れ、鼻下八字の髭を蓄す顔は如何にも硬さうに見える。

味方をしても美人とは云へないが、色も白く、目元も優しい。いや〳〵それより女はまだ、何處とは無しに暖かい情ありげな細君は、燈を持つて先に立ち、氣もいそ〳〵と主人を居間に導きつゝ、

「今夜は嘸お寒かつたでせう」

お待ち申して居りました、と云ふやうに慰めた。

主人は早くも室内に入つて、外套を柱に懸け、向直

つて立つた儘、

「何アに、これさへあれば、寒の中でも汗が出る。さ、大切に仕舞つておきな――人の生命だ」

成程謹嚴によく纏まつて居る一包を受取つて、艶光して居る箪笥の抽斗に細君が納うと倶に、その上の置時計は、主人の勝利を祝する如く厳かに八時を點つた。

居間は豊な八疊で、柱は白く、疊は青い。主人は「一錢是膽」の一幅を懸けた床の間を背後にして、蠅も辷り落ちさうに拭込んだ長火鉢の前に、態度ゆたかに徐々然と胡座を掻いて、世の中は面白いと云ふやうに、肉の豊な頬を撫でつゝ、氣持の好い程清潔に掃除の行届いた洋燈を凝然と眺めて居ると、細君は仕かけた仕事を片付けて、

「良人御飯は――」

火鉢の向ふに手を突いて、我が答へを待つて居る。

「イヤ最う濟んだ――飯も食へば、酒も今夜は充分飲んだ――」

「ぢや、お茶でも一つ」

「あ、茶をくれ――大分喉が渇いて來た」

細君は、手早く湯呑に山吹色を。主人は取つて吹き吹き呑みつゝ、今夜は太く機嫌が好い。その一口々々に目を見張つて、優しい人の顔を見つゝ、

「お前は何んだと云ふと乃公の商賣――金貸を厭がるやうな氣味があるが、世の中は兎角金さへ備かれば、何んでも好いと仕なければ成らぬ。今夜も一つ此處に血の出る例がある。彼の三百圓の口だ。此奴は悪くすると、長く引張られるかも知れんな。乃公にも似合はぬ拙いことをやつた、と實は内々案じて居たが、ナニ世の中は、此方の智慧の使ひ方次第で、右にも左にも成るもので、今度は一番流儀を變へて、何うだ、と急所を突いて見ると、流石の彼奴もウンと参つて、今日を期日に元利悉皆――安く無い手數料や利息まで揃つた上に、假令や芝居にも仕ろ、男が幾度か兩手を突いて、まだその上に御馳走までして機嫌を取つた。世は金さへ握つて居らうならば、何方に向いても大手を振つて歩けるが、若しこれが無かつて見ろ、梅川忠兵衛

の贅澤ぢやないが、金の切目は命の切目で、お互いに何んな辛い思ひを毎日爲なければ成らぬか知れぬ。若し乃公の身が今日と反對で、彼奴等を見たやうに、高い利の出る物でも借りる身分の者であつて見ろ、ソレ執達吏が來はせぬか、ヤレ裁判沙汰に成りはせぬかとそれこそ眞個に毎日のやうに、お前だつて好い氣持はしやすまい。その辛さを思つたならば、少しは乃公に勢ひを付けてくれても宜いでは無いか。イヤ、それは話が横道に入る。此方の云ふのは其處ぢや無い。イヤ、そうぢや無い。まあ聞け、聞いてくれ！イヤ、左樣ぢや無い、乃公の云ふのは左樣ぢや無い、宜しいか。先ア最う一杯お前の手で茶をくれろ、ハヽヽヽヽ」

人の生血を吸つて來て、頻りに渇する主人は又茶呑を取つて二口三口、跡は猫板の上において、毛だらけの善く肥つた手を火鉢の上で揉みながら、他人には鋭い目の光も、我が氣に入つた細君の、前では鈍も光も無く成り、

「お前は、……家の爲に善く稼いでくれる。その外糸屑一つ粗末にもせぬほどに、萬事儉約しくしてくれる――左樣無くては家は立たぬ――いくら乃公一人で稼いだからとて、内にお前のやうな善く守る福の神が居なくては、中々斯う運びに繁昌はせぬ。一家の妻としては、お前は最う實に一點の申分なしだ。この上に若し最一歩お前が前に進んでくれて、彼の落次目の細君を見たやうに、イヤ彼樣までしてくれんでも宜いが、偶には氣輕く催促の一度位には、イヤそれにも及ばん――たゞその商業を默つてさへくれなければ、乃公は何なに氣が弱んで、金の伸び方もグツと違う。家事向の事は何にかけても、お前は實に又と得がたい女だが、何うも其の邊が、此方と少し了簡が違う。ハヽ可惜いもんだ、斯うして樂す、夫婦の間柄でもな――」

細君は默つて悄然と俯向いて居る。

短氣な主人は、聲を激つて、今にも一喝するかと思へば、左樣でも無い。イヤそんな活氣は少しも無く、でれりと被つて細君の、雪の額をたゞじろ〳〵。怪むなかれ善男善女！おなじく東から出て西に入る太陽さ

までも、夏は赫々、春はぽか〳〵、人情も亦この外には走らない。——人の生血を啜るが家業の高利貸でも生きた閻魔の檢事殿でも、或る物に對する或る場合には、男はまるで豆腐のやうだ。この怖るしい力を自由に活用して、男を惡に導く女子は、世に決して少いとは云へないが、善に導くそれは又甚だ多いと吾人は確言す可き證據を有たぬ。但しそれは獨り我が國ばかりとは言はぬ。今日世界の女子は若し此の點において、或ひは女子の最も大切な天職を空うしては居るまいか

話を本の軌道に返して、人の生身を切取るやうな事ばかりする男の妻は、「アヽ情ない。他に正しい商賣も無いことか」と、心窃に泣いては居るが、まだ〳〵何うもふッつりと思ひ切らせる時機が來ぬ。但し決して善く無い事に味方はせぬ。「何時か一度は」と胸を据ゑて、別に變つた顏もせず、內に眞個温かい赤心があれば、自然と外に見はれる天女のやうな面をあげて、何んにも言はず嫣然笑つて、凝然と主人の顏を見た。

主人も伴れて莞爾し、火鉢の緣に行儀よく揃へて出した眞白な、善く肥つた手甲を輕く指頭で打さつヽ、

「春やお前は、金は熟々嫌ひだと見えるな」

主人の言葉は櫻の花に光る日よりも和かい。

この時何うやら裏口に、凍つた地を踏む足音が聞えたやうだ。

(中)

細君が顏を上げて、凝然と耳を濟すと倶に、主人も同じやうに仕た。

「姉さん、最うお寢みですか」

忍び〳〵に訪うのは、低い女の聲である。

「あ、入らッしやい」

答へながら細君は起ちかヽる。

主人は忽地血色を變へた。

「いヽ、投つておけ、關はん」

「でも良人——」

「宜いと云ふに——癖になる」

主人の目色は、その本性を見はして來た。細君は善

くその氣性を知つて居るので、往くには往かれず間に立つて、向ふを見たり此方を見たり、生命も爲に縮まる思ひ。裏面の樣子を知らぬので、表で今夜の北風に冷え切つて居る人は、寒さに泣く兒を揺りながら、
「姉さん、おそれ入りますが」
忍び〳〵に呼んだ。
「はい、只今まゐります」
答へるのを打消して、
「誰だい？物貰ひなら最う出ないよ」
主人は乾度裏口の方を睨んで一喝した。
「まあ、酷い――」
細君は涙含んだ。
主人の氣焔は愈々あらく、
「何が酷い？乞食ぢや無いか。――默つて居れば好氣に成つて、米をくれろ、イヤ炭が無い。ズウ〳〵しいにも程がある」
無論表に聞えたのだ。何うやら會はずに歸るらしい跫音が聞えるので、細君は最う堪らず、忙いで臺所に往つて、主人の制する言葉を聞かず、水口の戸を開けて見たが、はや其の人の姿は見えぬ。
「お里さん」
呼んで見ても返事は無い。
「まあ、行つてお仕舞成さつたわ」
「邪」
主人は大きな聲で呼ぶ。
「何か餘程の用事がおあり成さればこそ、この寒いのに彼の兒を伴れて、態々お出で成さつたのに」
戸締を仕て悄々と居間に歸つて障子を閉めた。
「ナニ追拂つても關はない」
主人の色は俄に解けた。けれども細君のは左樣で無い。おもひ縺れて火鉢に手を出し、凝然と主人の顔を視て、
「良人餘りお酷いですね――唯た一人の御兄妹ぢやありませんか」
「彼んな奴が幾人あれば何になる」
「左樣おッしやれば其切ですが――」

「何アに世の中は金さへあれば、親も要らんければ子もホヽヽヽヽ併し卿丈は無くては困る」

云ひつゝ主人は苦笑した。細君は見て見ぬ振。

それは最うお金さへあれば、大抵な事は思ひ通りに成りませうが、親子兄弟の間の愛情ばかりは、お金では買へますまい」

「そんな物は此方は要らん」

「そりやお金のある間は要りますまいが、若しやの事でもあつた時には身の悲みに集まるのは、それこそ眞個に親子か兄弟、従兄弟とに成りましてはね」

「そんな取越苦勞はするに及ばん——金さへ銀行に預けておけば」



「でも生身には、何時何んなことが無いとも限りませんわ。昔は隨分世に榮えて居らした方でも、今日は酷くお困り成すつて居らッしやる方も世には隨分ありますからね」

「そんな人は、不斷の行状が惡いからだ」

「ナニ左樣ばかりでもありますまい

よ。いくら大切にして在る花でも、時節が來れば散りますからね」

「止してくれ――緣起の惡い」

　道理に窮して主人は睨んだ。

「ですから良人、何うにかしてお進げなさいな」

　主人は聲に力を入れて、

「誰に何うして遣れと云ふのだ」

「良人のお身寄と仰やッては、彼のお里さんが唯お一人ぢやありませんか」

「あんな乞食見たやうな奴は、乃公は最う疾うから妹などゝは思つて居らん。お前も何うか左樣思つて、これから相手に成つてくれるな。今夜乾度言ひ渡しておくぞ」

「左樣おッしやれば、何うも致方はございませんが、肝腎なお仁は、彼樣して長く病ッて居らッしやるし、兄弟の子供は今が何方も手のかゝる最中だし、眞個にお懸然さうですわ」

細君の目には淚が光つて居る。

「さあ、最う寢やう」



主人は起つて便所に往つた。

その間に納と細君は、我が針箱の抽斗から、何やら出して帯の間に潜ませた。

時計は此の時丁度九時。

（下）

菊に名高い團子坂を上つて、右に曲れば春は櫻の雲白く、秋は紅葉や山茶花など、行々見られる廣い通り右は一面去る茶商の所有地で、左は御用のあり次第、電話で都の人を呼ぶ、豊な生活の家ばかりが列んで居る。

此處邊に住んで居る人は、最う何時の昔やら、表は太く寒いさうなで、うき世を他所に寝たであらう冬の夜の。最早十時に近い頃、林町の方から杉の生垣に沿ひながら、今この通りに出て來たのは、まだ何うやら若さうな婦人。見れば幼ない兒を負つて、さのみ重くは無さそうな包を片手に抱いて居る。

「アヽ寒い」

南に向つて、往々凝然と見上ぐれば、師走の天は星だらけで、道は厳しく霜に凍つて、背后の方からピイピイと酷い北風が吹ッかける。婦人はぞッと見廻して振返り、

「坊や寒いね。さあ、お目を閉つて、じつと母さんの背中に寝して居らッしやい。おゝ左様ぢや、お怜悧お怜悧」

若き母は涙含み、

「アヽ、こんな辛い思ひをする時は、子供の可哀さも亦一層だ」

實に血の出る言葉であるが、實際一度世に泣いた人でなければ味が分らぬ。

此方は暫く往く中に、向ふからも亦一人若い婦人がやつて來た。

何方も急ぐ夜の道、二人は一旦行違つたが、振向き合つて立止つた。

「お里さんぢやありませんか」

「おや、まあ、姉さん――」

「おわびかた〜〜今私は往く所――」
「アレまあ飛んだことを仰やる」
「お湯に往くと云つてね、私は大急で來たのですから
お目にかゝれば今夜は此處で失禮仕ますが、これから
何方へ行らッしやるの」
「はい、島渡、その邊まで――」
情ある娘は、四邊を見廻し、小さい聲で、
若しお米か、薪材ならば、直に持つて來るやうに、
今私が左様云つておきました。炭も一俵一緒にね――」
「姉さん毎度濟みません」
義理ある間の妹は、手を合せて拜まぬばかりだ。
「ナニ最うこれはお互ひさま――今日は此方の身が好
くても、明日は何うなることですやら――」
「何時もお世話に成るばかりで――」
「ナニあなた、私の身で叶うことなら――」
「何とお禮の申しやうもありません」
「實を云へば兄さんがね、こんな時には何んとかお世
話をして、お進げ申さなくちや成らないのですが、同
じ夫婦の間柄でも、心は各自異ひますので、何うも仕
方がありません。それは左様と御病人は如何です。つ
いこの四五日は御不沙汰をして居ますが」
「はい、お蔭さまで病人はね、おひ〜と宜い方でご
ざいます」
「それは先ア何よりのお悦びです。肝腎な仁さへ[illegible]
お治り成されば、跡は又直に元のやうにお成りです。
人はあなた正直にさへして居れば、何時まで惡い事ば
かりが續くものですか。最う一ト息の所ですから、そ
れも此の世の修業だと思つて、じつと怺へて居らつし
やい。その中には最う間も無く年も改まつて、またい
う日が屹度あります。それからこれはね、ほんの當座
かりですが、こゝ四五日のお小遣ひに成さい。その中
には私が島渡生家に往つて、少し纏まつた物を持て來さ
ますから、萬事は決して心配成さるな。アレ最う向ふ
に米屋が來ました。ぢやア彼の光に付いて、お氣を付
けて入らつしやい。まあ、今夜のお寒さは何うでせう
ね。さ、それぢや此處でお別れに致しませうかね――

「はい」
「坊やは好くまあお寢ねして、嘸まあ寒いことだらう
早く歸つて暖かに抱いて寢てお遣りなさい――まあ、
ほんとに傷々しい」
提灯下げて、袋を肩に米屋が來た。
「あ、米屋さん、御苦勞ですね――ぢや私も一緒に參
りませう」
米屋は不審と氣が付いて、
「あゝ、今夜は――」

重い物を擔げて居るのに、腰さへ屈めやうと仕た。
便利な物さへ潔く出せば、世間の人は會釋は惜まぬ。
「ぢやア、姉さん、左樣なら――」
「子供にお氣をお付けなさいよ」
「はい、有がたう！」
一人は米屋に付いて行く。
一人は悄然と北風に向つてそれを可哀さうに見送
つて居る。
上野の鐘は、今が丁度十時である。
（終）



新刊紹介

▲明治少年節用（小波校閲 小舟共編）

太陽の光が六合に普く照るやうに、人の智識を廣く全般に行き渡らしむるには、小供の内から其の支度をせねばならぬ、夫にはあらゆる智識の概觀を簡易に書き集めた小百科字典やうの物が必要であるとは、獨り我々ばかりでなく、兒童教育者の一般に認むる所であつた。本書は實に此要求に應じて出版されたもので、諸種目科の學術技藝、其他必須の智識の大體を網羅してゐるから、少年の爲に學科の補習ともなり、傍ら學の參考書とも成つて　是非なくてはならぬ寶典である、其の内容を紹介すれば、口繪には東宮殿下及び兩親王殿下の　御寫影を掲げ、各國國旗、日本陸海軍の軍服、陸海軍の服裝等の彩色石版刷を挿み、本文には修身、皇族系譜一覽を始め、天文、地文、地理、理化、動植礦物、農工商業、簿記、國文、漢文、英語、事物起原、格言、遊戯、詩歌、學校案内、郵便案内、内外形勢要覽、和漢洋一覽、等を類別し、議政概略には日本歴史、偉人傳、イソップ物語、世界歴史、立志談等を收めて、現代智識の大要を盡して居る、殊に其の記事は小波山人一派の趣味ある筆で、加ふるに印紙大、背綿大の挿圖が殆んど頁毎に入れてあるから、全部五百五十頁の内何處を開けて見ても面白く讀まれるのである、裝訂も亦た最新式の意匠になつた美麗なものであるから、書架の裝飾としても好い、少年少女諸君は一本を備へて、國語の字引や、英語の字書と共に、此書の利益を併せ享けんことを望むのである。（定價七拾五錢　[illegible]發行）

東京　[illegible]六番、

▲通俗料理化學

この書は料理献立を科學的すに述したるものなり、さればとて無味乾燥なる化學書にはあらずして理論と實際とをよく調和し食品の科學上の性質、價値、を説明し、以て日常廚房を司どる者に通般の智識を會得せしむ。さればこの書を實際に應用せば一家の經濟上に又健康上に益する事少からざるべし。著者は陸軍薬劑士にして文章は簡潔明亮なり（定價參拾八錢　富山房發行　小林増作氏著）

▲女生日記

卷頭に各女學校案内、職業案内等を列記し、日の欄に格言を挿み每月の始終りに年中行事と計算表とを挿入したる小形の袖珍本にして携帶には頗る便利なるべし　定價參拾錢　國光社發行

▲福引種本

福の神を引き入れて、年中笑ふて暮すは、家門繁昌の頭、延いては富國强兵の本ならん、本書は實に此の趣意を以て、加納孤舟氏の編する所、其の種を百人首、發句、地理歴史等より取り集めて、之を題と解とに分ち、とりどりに面白味をなし味あり、家庭の一口噺、これが又た時の皮を縫らすべきものなり、新年の餘興用として、もつて來い、買つて來いの珍本とや申すべし（價拾八錢　博文館發行）

▲女子用教育書

本書の特色は家庭教育及び幼稚園教育に重きを置きて編述したれば、教員の教師用として適切なるのみならず、家庭教育の決議を欲ふる世の人の一讀すべき良書なり、編を分つて、緒論、必須の談話、家庭教育、幼稚園保育、學校教育の事とし、叙述亦た簡明なれば、女子の教科用、師

[illegible]形式して逐號になり[illegible]
[illegible]

▲萬葉集短歌抄

[illegible]集中の短歌六百餘首を拔抄して、之に簡明なる註釋を施せるもの、[illegible]に[illegible]して[illegible]の變遷に[illegible]

▲新家庭訓（一名家計の話）

[illegible]の人を本として、家成すたに一番に[illegible]が家計を記載せ……[illegible]家成さぬ人達には[illegible]が入用小冊子な、[illegible]一身一家の[illegible]を、正しく整す新案には、[illegible]の[illegible]、[illegible]の[illegible]なり[illegible]なりと、起むる本著者が[illegible]に於て[illegible]所、[illegible]の趣旨に基いて一日一家の豫定を新しき仕組に依つて[illegible]明[illegible]記載する新、閑睱一刻一服の[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]、[illegible]一[illegible]に[illegible]て[illegible]の[illegible]を示したるなど、[illegible]書なり、又[illegible]に[illegible]に[illegible]に[illegible]なるものといふべし、[illegible]

▲鬼大名

[illegible]ベルト[illegible]して[illegible]のオペラにも[illegible]
士民、鬼ロウベルトが山賊の親方となつたり[illegible]の爲にたゝたり犬の眞似をしたり[illegible]で[illegible]しい武勇を現はしたりしてとう／＼羅馬の王様の[illegible]になるといふ面白いお話なしで世界お伽噺[illegible]二編として出版されるものです、巖谷小波君著博文館發行[illegible]

毎月五日發行

定價表

一册	（紙數二百八頁）	金二十錢
四册	（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册	（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册	（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内（定刊號……十二册／増刊四回……三、六、九、十一月 價格同一）

郵税 一册 二錢

廣告料

	二十四字詰一行	中頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等			割引三十三圓
第一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
第二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
第三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〻切日等御照會次第御報可致候

注文規約

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢郵券相添申込あれ

不許複製

明治卅六年十二月五日發行 第參卷第拾六號

編輯兼發行人 松原岩五郎
印刷人 水谷景長
印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地 合資會社 博進社工場
發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

電話 本局 三百三番 千十八番 二千六百二十番

發兌元　年始歳暮贈答書類　博文館

井上淑夫君著　●頭註插畫詳類新撰 **作文錦嚢**（全壹冊洋裝）正價三十五錢：郵税六錢

石川鴻齋君校訂　●音釋頭註 **康熙字典**（銅刻全六冊）箱入五圓五十錢小包九百匁　箱入四圓五十錢小包六百匁

石川鴻齋君校訂　●漢文詳註 **日本大玉篇**（全二冊）正價二圓六十錢小包四百匁

石川鴻齋君校訂　●**新撰日本字典**（全貳冊）正價二圓：郵税八錢

月田峯香君著　●**文章字典**（全壹冊）正價七十錢：郵税六錢

大田建樹君著　●新撰 **歴史字典**（全壹冊）正價六十錢：郵税六錢

大和田建樹君著　●**日本大辭典**（全壹冊）正價二圓廿五錢小包四百匁

大宮宗司君編著　●**日本小辭典**（全壹冊）正價七十五錢：郵税六錢

若松賤子女史遺稿

忘れがたみ

櫻井鷗村君著

全壹冊上製正價壹圓郵税十錢

若松賤子女史異材を抱いて白玉樓中の人となりしより春風秋雨既に七星霜文界落寞の今日女史を追懐する無き能はず生前の述作今にして編纂せずんば散逸に歸せんことを憂へ即ち忘れがたみ、雛嫁♪我宿の花等彼の『小公子』と共に永く我文學史上の珍たるべきもの十數篇を收む、裝釘美麗優尙

樋口一葉女史著

一葉全集

全壹冊正價四十錢郵税十錢

一葉女史の才筆婉麗暢達にして其絢繍の美は當時明治の紫女を以て呼はる本書は其遺編二十四編を纂む

●にごり江　●大つごもり　●闇櫻　●雪の日　●うらむらさき　●うらせみ　●十三夜　●われから　●經つくゑ　●玉襷　●琴の音　●そゞろごと　●わかれ道　●ゆく雲　●曉月夜　●五月雨　●花ごもり　●ほとゝぎす　●やみ夜　●うもれ木　●わかれ霜　●軒もる月　●この子　●たけくらべ

發兌元　年始歳暮贈

五乳人釣雪君編
俳諧提要
全壹冊和裝　正價五拾錢　郵税八錢

老鼠堂永機宗匠編
俳諧自在
全壹冊洋裝　正價壹圓　郵税拾貳錢

竹冷飯人酒竹三君校
蕪翁句集
全三冊和裝　正價壹圓　郵税拾錢

下田歌子女史著
詠歌の栞
全壹冊洋裝　正價卅五錢　郵税八錢

佐々木信綱君著
詠歌自在
全壹冊洋裝　正價壹圓　郵税拾貳錢

黒田子爵税所刀自共撰
庭の摘草
全壹冊和裝　正價參拾五錢　郵税六錢

大和田建樹君著
歌まなび
全壹冊洋裝　正價壹圓五拾錢　小包六百匁

佐々木信綱君校註
加茂眞淵翁全集
全二冊洋裝　正價一冊五拾錢　郵税一冊八錢

酒道樂
村井弦齋居士著

●全貳冊洋裝上製
●正價各冊五拾五錢
●郵税各冊六錢

酒を飲む者多し、酒の効用と弊害とを知て而して飲む者幾人かある、我小説を讀む者多し、我小説の精神を知て而して讀む者幾人かある、惟ふに知るは易く悟るは難し悟るは易く行ふは倫は難し千萬人中幸に我精神を知悟して而して行ふ者ありや否や

雨江羽衣桂月合著
花紅葉
全壹冊洋裝　正價卅錢　郵税六錢

文學士大町桂月君著
黄菊白菊
全壹冊　正價廿五錢　郵税六錢

大和田建樹君著
雪月花
全壹冊洋裝　正價卅五錢　郵税六錢

鶴澤四丁君校訂
俳諧逸話全集
全壹冊洋裝　正價參拾錢　郵税八錢

大和田建樹君著
謠曲通解
全壹冊洋裝　正價壹圓八拾錢　小包六百匁

大和田建樹君編
謠曲文粹
全壹冊洋裝　正價參拾五錢　郵税六錢

山本馬九亭編
淨瑠璃通解
全拾貳冊洋裝　正價一冊參拾五錢　郵税六錢

饗庭篁村君校訂
近世時代淨瑠璃
全壹冊洋裝　正價六拾錢　郵税拾六錢

鶯亭金升君校訂
俗曲大全
全壹冊洋裝　正價六拾錢　郵税拾六錢

博文館編輯局校訂
聲曲自在
全壹冊洋裝　正價貳拾五錢　郵税六錢

答好適書類　博文館

永機雪人兩宗匠校訂
芭蕉全集
全壹冊洋裝正價卅五錢郵稅八錢

永機雪人兩君校訂
其角全集
全壹冊洋裝正價卅五錢郵稅八錢

竹村酒竹君編
明治俳句
全壹冊洋裝正價卅五錢郵稅六錢

三宅青軒君著
俳諧獨學
全壹冊洋裝正價卅五錢郵稅六錢

中村秋香君著
新體詩歌自在
全壹冊洋裝正價金壹圓郵稅拾貳錢

佐々木信綱君校訂
百人一首講義
全壹冊洋裝正價貳拾錢郵稅四錢

佐々木信綱君校訂
本居宣長翁全集
全壹冊洋裝正價壹拾五錢郵稅八錢

佐々木信綱君校訂
近世名家集
全壹冊洋裝正價壹拾五錢郵稅六錢

佐々木信綱君編
竹柏園集
第一編第二編共壹冊卅五錢郵稅六錢

文學士土井晚翠君著
天地有情
全壹冊洋裝正價卅錢郵稅四錢

佐々木信綱君校註
明治名家句集
全二冊洋裝正價一冊卅五錢郵稅一冊八錢

幸田露伴君著
狂言全集
全三冊正價一冊五十錢郵稅拾錢

大和田建樹君著
能の栞
全六冊正價一冊四拾錢郵稅六錢

村井弦齋居士新著
女道樂
全一冊洋裝正價八十錢郵稅十錢

茲に悖逆汚行の人物を假作し配するに婦德正しき妻、孝操厚き娘を以てし、以て此人物の破倫より延て上流社會内政の腐敗を諷刺し遂に女道樂の行末如何を警結す其間の千變萬化讀者をして悲喜哀怒に耐へざらしむと

水谷不倒君校訂
義太夫百番
全二冊洋裝正價壹圓郵稅貳拾錢

博文館編輯局校訂
近松世話淨瑠璃
全壹冊洋裝正價六拾錢郵稅拾六錢

大和田建樹君著
日本歌謠類聚
全二冊洋裝正價一冊六拾錢郵稅拾錢

幸堂得知君著
忠臣藏淨瑠璃集
全壹冊洋裝正價六拾錢郵稅拾六錢

發兌元　年始歳暮贈

福地櫻痴居士作
山中平九郎
全壹冊正價三十錢郵稅六錢

福地櫻痴居士作
花盛劇楓葉
全壹冊
正價廿五錢
郵稅四錢

高安月郊君作
江戸城明渡
全壹冊
正價廿三錢郵稅四錢

川崎紫山著
▲西南戰史（全壹冊洋裝）賣價八十錢小包六百匁

蒔野房次郎君著
▲平壤包圍攻擊（全壹冊洋裝）正價七十錢郵稅十八錢

平田勝馬著
▲黃海大海戰（全壹冊洋裝）正價九十錢郵稅二十錢

博文館校訂編
▲眞書太閤記（全壹冊洋裝）正價六十錢郵稅十六錢

博文館校訂編
▲繪本太閤記（全壹冊洋裝）正價六十錢郵稅十六錢

博文館校訂編
▲眞田三代記（全壹冊洋裝）正價六十錢郵稅十六錢

博文館校訂編
▲通俗三國誌（全壹冊洋裝）正價六十錢郵稅十六錢

岡政談（全壹冊洋裝）正價六十錢郵稅十六錢

傳（全壹冊洋裝）正價六十錢郵稅十六錢

冊）正價六十錢郵稅十六錢

長井金升著

高安月郊君譯
イプセン氏作
社會劇
全壹冊
上製正價壹圓
郵稅十二錢
並製八十錢
郵稅十錢

水谷不倒君校訂
脚本傑作集 下卷
全壹冊洋裝
正價六十錢
郵稅十六錢

松林伯圓君講演
中山大納言
全壹冊洋裝
正價廿五錢
郵稅四錢

巖谷小波君著
笑

(裁付〇六)

答好適書類　博文館

福
全壹冊
正價卅錢
郵稅六錢

初子集
大橋乙羽著
全壹冊洋裝
正價四十錢
郵稅六錢

若菜籠
大橋乙羽著
全壹冊　洋裝
正價二十八錢
郵稅四錢

女波男
巖谷小波君著
全壹冊　洋裝
正價四十錢
郵稅八錢

編輯局 ▲大

博文館編輯局校訂 ▲水滸

博文館編輯局校訂 ▲四大奇書（全壹冊洋裝）郵

博文館編輯局校訂 ▲南總里見八犬傳（全二冊洋裝）一冊六十錢 郵稅十六錢

大町桂月君著 ▲日露戰爭未來記（全壹冊洋裝）正價十八錢 郵稅四錢

博文館編輯局校訂 ▲源平盛衰記（全壹冊洋裝）正價六十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂 ▲東海奥羽木曾江島道中膝栗毛（全壹冊洋裝）正價六十錢 郵稅十六錢

幸堂得知君校訂 ▲黄表紙百種（全壹冊洋裝）正價六十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂 ▲馬琴傑作集（全壹冊洋裝）正價六十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂 ▲修紫田舍源氏（全壹冊洋裝）正價六十錢 郵稅十六錢

全壹冊洋裝
正價卅五錢
郵稅六錢

戀
江見水蔭氏著
全壹冊
正價卅錢
郵稅四錢

筆と紙
石橋思案外史著
全壹冊
洋裝上製美本
正價廿五錢郵稅六錢

十五少年
幸田露伴君著
全壹冊洋裝
正價三十五錢
郵稅八錢

愛と心
戸澤姑射君譯
全壹冊洋裝
正價二十五錢郵稅六錢

發兌元　**年始歳暮贈答書類**　博文館

著者	書名	體裁	價
山崎理學士 佐藤理學士 著	大日本地誌 關東	全壹冊洋裝	正價金二圓五十錢 小包目方四百匁
志賀重昂君著	日本風景論	全壹冊洋裝	正價金九十錢 郵税金十二錢
志賀重昂君著	河及湖澤	全壹冊洋裝	正價金四十錢 郵税金六錢
大橋乙羽君著	千山萬水	全壹冊洋裝	正價金五十錢 郵税金十錢
大橋乙羽君著	續千山萬水	全壹冊洋裝	正價金五十錢 郵税金十錢
大橋乙羽君著	耶馬溪	全壹冊洋裝	正價金四十錢 郵税金四錢
大橋乙羽君著	紀行文集	全壹冊洋裝	正價金六十錢 郵税金十六錢
巖谷漣君著	洋行土産	全二冊洋裝	正價一册壹圓廿錢 郵税一册十二錢

大橋乙羽君著

花鳥集

全壹冊洋裝總クロース製　正價金壹圓郵税金十八錢

- おもひ川　● 狐の聟入
- さくら山　● かたみ薄
- 露小袖　● 捨身經
- 高利貸　● 霜夜の虫
- 出世奴　● 人間一生大福帳
- 小夜衣　● 近衛老公
- 當世錦の裏　● 菅公畫像辨
- 赤十字　● 加藤清正公畫像と
- 男の腕　● 元祿時代英一蝶
- 夏の虫　● 大石良雄
- 女畫師　● 松壽軒西鶴
- 忠孝二筋道　● 鷹山公
- 貧の病　● 人品五十題
- 一番槍　● 衣食住
- 鬼の涙　● 晴好雨奇

發兌元　東京本町　博文館

（後付の貳）

理學士 蘆野敬三郎先生著

（洋裝菊判美本）

科學藝術 純正寫眞術

全壹册

正價金壹圓
特價金八拾五錢（十一月十二月中の御高需に限り）
郵稅金拾錢

寫眞の效用近來大に進み實物に據る講究は多く之を利用するを以て實見に次くの效ありとせらる然れども從來此術が一般人に知られさるが爲め僅に斯業者及嗜好者に弄はれ實用上の技術として多數に認められざるは識者の夙に慨歎たる所なりき蘆野理學士之を以て科學講究上の一欠點として其豐富なる蘊蓄を傾けて學理技術の兩方面より斯術を講明して廣く一般社會に紹介せらるゝもの即ち本書なり出版の期も遠きにあらざれば是非講讀あれ一度此書に由て寫眞術を知られたらんには其效用に於て興味に於て娛樂實益兩ながら一擧せらるゝものといふも誣言にあらず

發端
一寫眞術と科學及び藝術との關係……
一純正寫眞術と應用寫眞術との關係……

學理
一寫眞術の根本原理……
一透鏡の作用に關する學理……
一藥品の反應に關する學理……
一陰畫と陽畫との關係……
一藥品材料の性狀……
一寫眞手術一々の原理……

技術
一寫眞の撰擇、暗室の整頓……
一コロヂオン濕板法……
一乾板製法及寫映術……
一各種陽畫製法（白金、炭粉、ゴム印畫、
一撒粉諸法……

補遺
複寫、逆轉、正色、人工光、X線、幻燈、畫藥及應急處理、溶解表、浮秤使用表、現像劑、量衡表、用語字彙、索引目錄

金澤嚴君著 ●寫眞及幻燈 正價廿五錢 郵稅六錢

橋本奇策君著 ●實驗應用寫眞術 正價十錢 郵稅二錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

女學世界
毎月壹回五日發行
第參卷第拾六號
（明治參拾六年十二月五日發行）
（明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可）



（定價金貳拾錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

じょがくせかい
女学世界 明治期復刻版㉔
明治36年11月（第3巻第15号）、12月（第3巻第16号）

2006年12月10日　第1刷発行　　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-3053-5　C3321